遺　物　床面から土師器が出土している。口縁部が直立する坏（1）、体部外面がケズリ調整の深い器形の坏（2）があり、内黒坏は小形（3）と大形（4）に分かれている。また甕は外面ハケ目調整の長胴甕（5）と外面ヘラケズリ調整の長胴甕（6）があり、いずれも肩が張らず、口縁部に最大径を持つ。この他羽口が出土している。

時　期　土器の様相から7世紀中葉～8世紀初頭とする。

431号住居跡（B114）　　位置　V－16

検　出　Ⅳ層上面にて、検出する。426・432住を切り、4529坑に切られる。覆土は暗褐色のシルト質土の単層で、少量のⅣ層ブロックを含んでいる。

構　造　横長の長方形を呈する。壁は急角度に掘り込まれ、深さ30cmを測る。床は地山を平坦に掘り均されいる。あまり堅緻ではない。西壁付近に焼土が分布する。ピットは6基確認され、位置から壁際のP1・2・5・6辺りが柱穴の可能性があるが、いずれも浅い。またP3は南壁中央下にあり、入口施設に伴うピットと判断する。

カマド　北壁の中央に1基付設される。燃焼部が方形の土坑状に壁から張り出してる。その中央に火床部があり、強く被熱している。また張り出した部分の壁も焼土化している。右袖と壁の境界部分にカマドの芯材として河原礫が埋置されている。芯材の周りは砂質シルトの構築土（6層）で固められている。燃焼部を覆うように炭化物層（4層）がある。

遺　物　土器片が覆土から出土している。須恵器の擬宝珠ツマミの付く坏蓋（1）と、高台が小さく底部の中心側にある高台坏（2）がある。石器には紡錘車（4）が出土する。

時　期　土器の様相から、9世紀初頭～前葉とする。

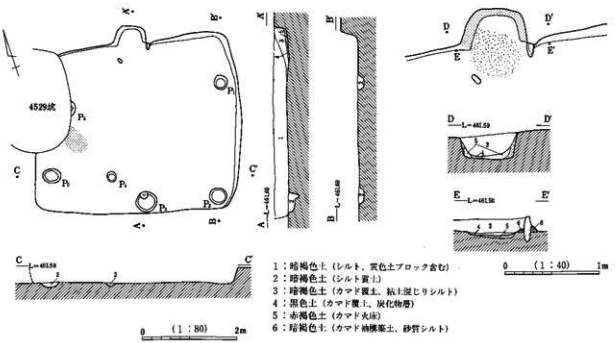


図114　431号住居跡

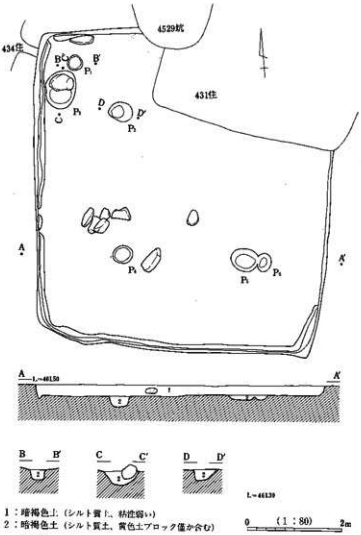


図115 432号・433号住居跡

432号住居跡（図115） 位置 V－16

検 出 Ⅳ層上面にて検出。433住を切り、431・434住、4529坑に切られる。覆土は暗褐色の締まり悪く、粘性の弱いシルト質土の単層である。

構 造 北東隅が431住に床まで切られるが、残る部分から方形の平面形態と分かる。壁の深さは24cm程で、急角度に掘り込まれている。床は残りが悪く、部分的に堅い範囲があるが、全体に軟弱である。周溝が西壁と南壁直下に確認される。深さは10cm程で、北西隅と西隅中央辺りで部分的に途切れる。ピットは6基確認され、主柱穴はP3・4・5（6）と考えられる。P5・6は隣接して浅いが、配置から4本柱の一つがどちらかに立っていたと考える。北東隅の柱穴は431住に切られて消失している。住居北西隅にはP1・2があるが、性格は不明である。P2は楕円形の比較的大型のピットで、覆土内に自然礫が入る。

カマド 正確に確認できないが、北壁中央に焼土が分布するため、431住や4529坑に切られる部分に所在したと思われる。

遺 物 覆土内から土師器が出土している。1は内黒坏で、浅い椀状を呈する。2は甕で、外面がよく磨かれている。3は球形の鉢である。石器には軽石製品(56)がある。

時 期 重複関係と土器から古墳時代後期7世紀代と考える。

433号住居跡（図115） 位置 U－25

検 出 Ⅳ層上面にて検出。363・432住に、いずれも床下まで切られる。覆土は暗褐色の粘性弱く、しまりの悪いシルト質土の単層である。

構 造 他遺構に大きく切られるが、残りの良い西側の形状から、平面形態は方

形と考える。壁は浅く、深さ8cm程である。床は地山を掘り均した状態で、全体に軟弱である。ピットはいずれも浅く、性格は不明である。残存する部分にはカマドはない。

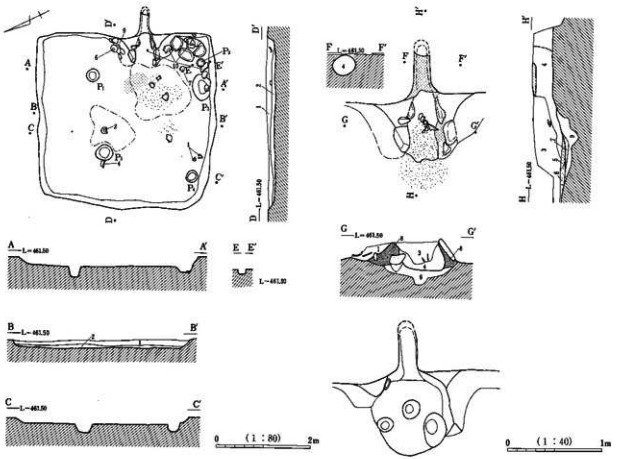
遺　物　覆土が浅く遺物量は少ないが、口唇部が強く屈曲、外反する坏（1・2）が2点出土している。

時　期　土器と重複関係から、5世紀後半～6世紀前半と考える。

434号住居跡（図116）　　位置　U－20

検　出　Ⅳ層上面で、方形の暗褐色の陥ち込みを確認する。432住、4537・4538坑を切る。覆土は2層に分かれ、調査当初暗褐色の1層土下に灰の分布する堅緻な面があり、床面と考えた。ところがその面はさほど平坦ではなく、更に下位から大型の土器の破片が出土したため、掘り方と認識していた2層の黒褐色土も覆土と確認し、その下に床面を検出することになる。

構　造　平面形態は方形を呈する。壁は緩やかに掘り込まれ、深さは18cm程ある。床の一部には堅緻な部分や灰・焼土が広がる。ピットは5基あり、そのうち主柱穴としてP1・3～5を考える。歪んだ方形配列の4本柱で、配置も住居中央から南側に大きくずれている。床下は僅かに土壌化した部分は存在するが、掘り方はない。



1：暗褐色土（砂混じりシルト、炭・焼土僅かあり）
2：黒褐色土（砂混じりシルト、1層土との間に炭・焼土あり）
3：黒褐色土（カマド覆土、粘土質シルト、炭粒かあり）
4：黒褐色土（カマド覆土、粘土質シルト、炭・焼土多く含む）
5：　　（カマド覆土、焼土層）
6：　　（カマド覆土、炭・灰層）
7：　　（カマド火床）
8：暗褐色土（カマド袖構築土、砂混じりの粘土質シルト）
9：暗褐色土（カマド掘り方埋土、8層土に似る、炭・焼土多く含む）

図116　434号住居跡

カマド 南東壁中央やや右寄りに1基付設される。比較的遺存状態は良く、両袖は河原礫を芯材として、構築土（8層）で補強して作られている。燃焼部には被熱した天井の構築土が崩落している。火床部は左袖際に略楕円形に広がる。煙道部は掘り抜き式で、調査段階でもトンネル状に残る。火床面から20cm程高い位置から水平に伸びている。内部上面の地山は被熱している。煙出口は削られていて不明である。また芯材となったと考えられる河原礫がカマド右隅にまとめて廃棄されている。掘り方は袖部を掘り残し、燃焼部は円形に掘り窪めて、袖芯材と支脚石を据える小ピットも設けられている。

遺 物 土器がカマド付近と床面から出土している。坏は内黒土器（2～7）が主体で、法量は2分化する。小形は径14cm、大形は16cm前後にまとまる。また内外面が黒色処理された高台皿（8）も出土している。甕は2個体（9・10）あり、所謂北信型のロクロ調整の施された砲弾状の器形のものである。いずれも口縁部に最大径を持っている。

時 期 土器の様相から9世紀後葉と考える。

435号住居跡（図117、PL26） 位置 P－24

検 出 調査区北東壁沿いで、Ⅳ層上面にて413・415住に切られる状態で検出される。また本跡床面下調査で、同軸でやや横幅の狭い440住が検出されている。その構造が似るため、本跡は440号住の拡張住居と思われる。

構 造 北東の大半は調査地区外に出るが、現状で方形あるいは長方形と判断する。壁は残る西壁では急角度に掘り込まれ、深さ24cm程を測る。西壁直下、南壁の東側に浅い周溝があり、西壁周溝からP2へ向かって、間仕切り状に伸びている。床は平坦であるが、440住覆土辺りは軟弱である。また西側床には炭化粒と焼土が広がっている。ピットは大小10基あり、そのうち柱穴はP1・7辺りと思われるが、配置は整然としていない。

カマド 調査地区内にはない。

遺 物 出土土器は少量である。大形浅鉢（1）、厚手で口縁部に最大径を持つ長胴甕（2）などがある。

化学分析 床面にある炭化物のうち、炭化材を同定して、ケヤキと判明した（付章第1節参照）。

時 期 土器の様相からははっきりしないが、重複関係も加味して、7世紀代と考える。

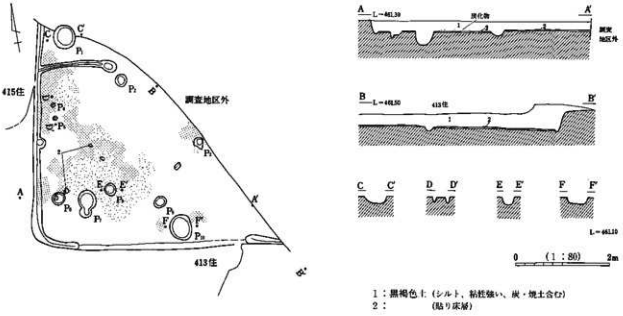


図117 435号住居跡

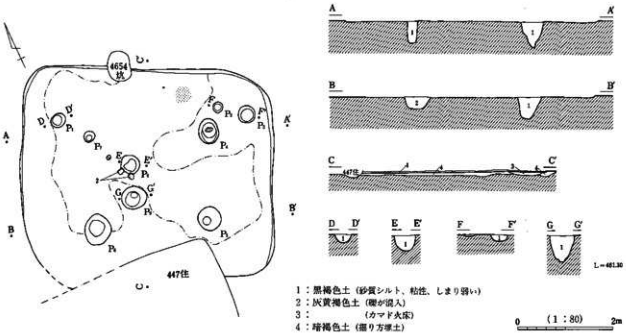


図118　436号住居跡

436号住居跡（図118）　　位置　U－14

検　出　Ⅳ層上面で検出。447住、4654坑に切られる。覆土は暗褐色のシルト質土の単層である。

構　造　横長の方形で、隅がやや丸みを帯びる平面形態である。壁は浅く４cm程残るだけである。床は中央部を中心に貼り床面が残る。非常に堅緻である。ピットは９基あり、主柱穴はＰ４～７の４本柱の方形配列と考える。また住居中央付近にあるＰ８・９も比較的深さがあり、柱穴の可能性がある。浅いが平坦な掘り方が確認されている。

カマド　北壁中央に１基付設されが、強く削平され、円形に強く被熱する火床部だけ認められる。

遺　物　遺物は少ない。床面から球胴形の甕（２）の底部が出土している。２は底部がやや突出し、内外面が良く磨かれている。また高坏（１）の脚部が出土している。

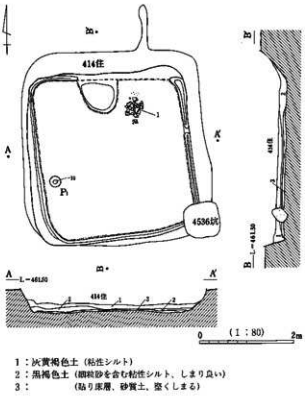
時　期　はっきりしないが、土器と重複関係から５世紀後半頃と考える。

437号住居跡（図119、ＰＬ27）　　位置　U－８

検　出　414住の床下調査で、20cm下に別の床面を検出する。また床面に伴う周溝も見つかり、414住規模内に収まる同形状の住居跡と確認する。覆土は粘性シルトで２層に分けられる。覆土からは埋没過程ははっきりしない。

構　造　平面長方形を呈する。壁は斜めに掘り込まれる。その上部は414住の壁とほとんど接するが、東壁と北壁ではその間に平坦部がある。周溝は北壁中央と東壁の一部で途切れるが、それ以外は壁直下に巡る。深さは５cm程で、断面は逆三角形である。床には砂質シルトが薄く貼られて締まっている貼り床が全体に広がる。ピットは西壁際に１基だけある。

カマド　北壁中央に略半円形の深さ10cm程度の浅い掘り込みがある。これは上部の414住の構築に向けて、完全に破壊、整理されたカマドの痕跡と理解する。



1：灰黄褐色土（粘性シルト）
2：黒褐色土（細粒砂を含む粘性シルト、しまり良い）
3：　　（貼り床層、砂質土、堅くしまる）

図119 437号住居跡

遺 物 カマド痕跡右側の床面より焼土の分布とともに、長胴甕（1）が潰れた状態で出土する。1は短く外反する口縁部に最大径をもつ器形である。他に編物石（96～105）が出土している。

所 見 414住の調査と合わせてみると、本跡を整然と片付けた後、時間差を持たずに414住を再構築したと考える。

時 期 土器の様相と414住の時期から6世紀後葉と位置づける。

438号住居跡（図120） 位置 U－5

検 出 Ⅳ層上面で検出する。412・413住、4522・4532坑に切られる。覆土は床面に炭化物や焼土を含む黒褐色土（2層）が薄く堆積して、その上に黒褐色のシルト（1層）が厚く覆う。

構 造 平面形態は方形を呈する。壁は急角度に掘り込まれて、深さは30cm程ある。周溝は北隅と南隅にそれぞれLの字状に残る。深さは僅かである。床は中央に堅緻な貼り床面が認められ、その上面には炭化物層が薄く広がる。ピットは1基だけで、カマド側と反対の南西壁際中央にあることから、入口施設に関わると思われる。

カマド 北東壁中央やや右寄りに1基付設される。しかし残りは悪く、焼土の分布と僅かに壁から張り出す煙道部だけ認められる。

遺 物 床面から高坏（1）や浅鉢状の甑（2）が出土している。

時 期 土器が少ないため、はっきりしないが古墳時代後期と思われる。

439号住居跡（図120） 位置 U－4

検 出 411住と412住の調査後の床下調査で、ほぼ412住の下に入る、小型の住居跡として確認する。412住に切られることは明確であったが、411住とは壁が接する程度ではっきりしなかったが、土器様相から本跡が411住を切ると判断した。覆土は締まりのよい黒褐色シルトが全体を覆い、一部床面上に粘性の強いシルトが広がる。

構 造 平面形態は不整な方形を呈する。壁は深さ10cm程で緩やかに掘り込まれる。床は平坦で、ほぼ全体に貼り床が残る。掘り方は浅く底面がほぼ平坦に残る。ピットはない。

カマド 北東隅に火床部の被熱した硬化面と焼土を含んだシルト層（3層）が残る。

遺 物 床面から須恵坏（1）が出土している。1は底部ヘラ切り調整で、ヘラ記号がある。

時 期 重複関係と遺物から奈良時代とする。

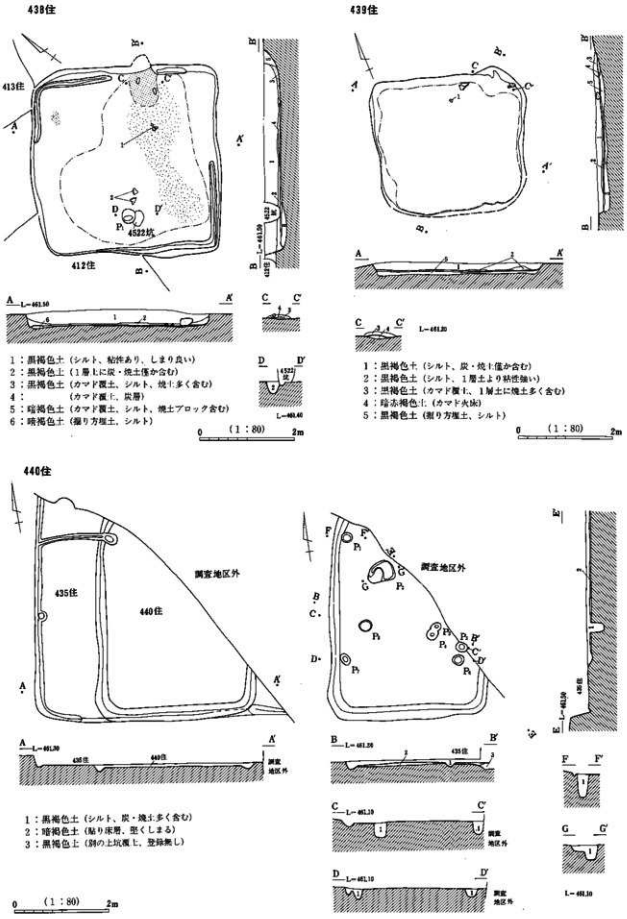


図120　438号・439号・440号住居跡

440号住居跡（図120）　　位置　P－24

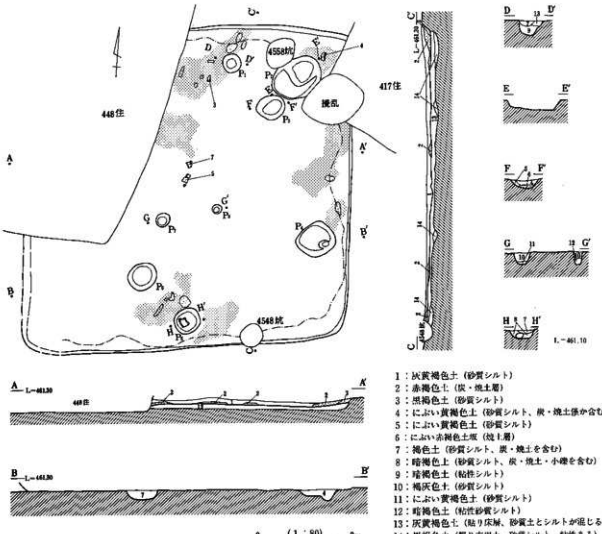
検　出　435住の床下調査で、別の床面と周溝などを確認する。435住と本跡は同軸で南壁が同一であることから、435住は本跡を東西に拡張した建て替え住居と考える。覆土は炭化物や焼土を多く含む黒褐色のシルト質土の単層である。

構　造　北側が調査地区外に出るが、現状から平面形態は長方形と判断する。壁は浅く残るだけである。南壁は435住と重なる。ピットは8基認められ、P1・7・5辺りが主柱穴と思われ、調査地区外に1基あるとして4本柱の方形配列が組める。ほかのピットも円柱状に掘り込まれ、柱穴の可能性がある。

カマド　調査地区内にはない。

遺　物　土器の小片しかない。

時　期　拡張された435住と時間差が少ないとすれば、同じ7世紀代としたい。



1：灰黄褐色土（砂質シルト）
2：赤褐色土（灰・焼土層）
3：黒褐色土（砂質シルト）
4：にぶい黄褐色土（砂質シルト、炭・焼土塊か含む）
5：にぶい黄褐色土（砂質シルト）
6：にぶい赤褐色土塊（焼土層）
7：褐色土（砂質シルト、炭・焼土を含む）
8：暗褐色土（砂質シルト、炭・焼土・小礫を含む）
9：暗褐色土（粘性シルト）
10：褐灰色土（砂質シルト）
11：にぶい黄褐色土（砂質シルト）
12：暗褐色土（粘性砂質シルト）
13：灰黄褐色土（粘り床層、砂質土とシルトが混じる）
14：黒褐色土（張り方埋土、砂質シルト、粘性ある）

図121　441号住居跡

441号住居跡（図121）　　位置　U－13

検　出　調査は平成6・7年度の2回に分かれる。6年度に北東側を調査して、次年度に残る範囲を継続調査して全体を把握した。Ⅳ層上面で確認する。417・448住に切られる。また近世の円形の墓壙にも切られている。覆土は自然堆積の黒褐色の砂質シルトが全体を覆うが、床面上には広い範囲で焼土と燃えかすの炭化材が広がる。その範囲は限定されず、散逸しているため焼失した可能性が高い。床面上であることから住居廃絶後間もないと考える。

構　造　平面形態は方形を呈する。壁は非常に浅く10cm程度残る。床は壁際以外に堅緻な貼り床が認められる。貼り床層には砂質土とシルトと混在した土を用いている。ピットは8基あり、そのうちP1は北壁際にあり、深さ30cmの円柱形で、断面観察では貼り床土が覆土上面の一部を覆っている。柱穴として利用して、周囲の床土で固めたものなのか。

カマド　全く検出されていない。448住に切られる部分に存在していたと考える。

遺　物　床面から土器片が出土している。また土製紡錘車（4）も出土する。

時　期　重複関係と土器から7世紀前半頃と考える。

442号住居跡（図122、P L27）　位置　U－24

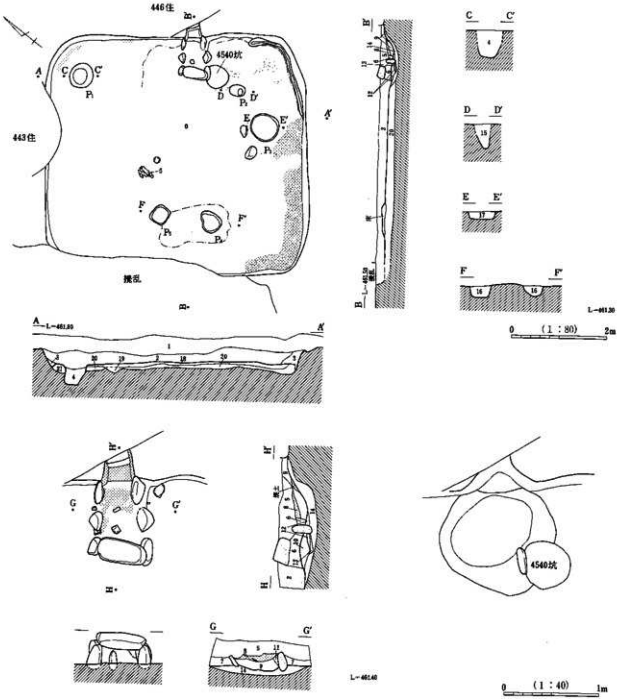
検　出　平成6・7年度継続調査。6年度にはカマドを含む北東壁際、7年度に残る南西側の大半を調査する。Ⅳ層上面にて検出する。443・446住、4540坑に切られる。また南西壁が攪乱を受けている。覆土はⅢb層に似る1層土が遺構上部を覆い、住居内には1層土に黄褐色砂質土が混じる2層土が主体で、壁際や周溝に炭化物の含む3層土が堆積する。基本的に自然埋没である。

構　造　平面形態は、横軸がやや長い長方形を呈する。壁は土層観察面では深さ30cm程あり、やや外傾して掘り込まれている。周溝は東隅付近にLの字状にあって、幅10cm、深さ10cm程である。土層観察では北西壁にもそれらしい部分が確認されたが、平面形では認められなかった。床は堅緻な貼り床が平面観察では東側と南西側に残る。特に南西部分では周囲床高より10cm程高い貼り床が確認される。また土層断面観察にも明瞭に貼り床層が残っていることから、生活時には床全体が貼り床構造であったと思われる。ピットは5基あって、主柱穴としてはP1が考えられ、P4・5は入口施設に伴うピットと思われる。床下は10cm程粗堀りして、粘性シルトと砂質土を埋め（20層）、床層（18層）を貼っている。

カマド　北東壁の中央やや右寄りに1基付設される。燃焼部には天井構築土と考えられる砂質シルト土（6・8層）が壁際に焼土化して落ちている。袖部は両側共に壁から直角に3点の河原礫が長さ75cmにわたって並列に埋置されている。また両袖の河原礫の最も内側の1対に、偏平で長大な河原礫の天井石が架けられたまま残る。支脚石も円柱状の河原礫で、火床部中央奥に直立して埋置されている。火床部は天井石直下に円形に残る。上部は平坦で、断面では浅い擂り鉢状に被熱している。また火床部下には間層（12層）を挟んでもう1面被熱面（13層）がある。煙道部は北東壁から直角に伸び、先端側が446住に切られる。煙道口は横幅30cm程に広く開口している。内部は全体に被熱して、特に上部の焼土化が顕著である。上半部は検出時に削られているが、構築方法は掘り抜き式と思われる。カマド南床には灰の分布がある。カマド掘り方は径120cm程の略円形の穴を掘り、そこへ袖芯材を据えて埋土している。煙道部付近の壁も予め30cm程張り出すように掘られている。

遺　物　床面中央に長胴甕（5）が、カマド周辺から土師器の破片が出土している。土師器坏（1～3）は口唇部が屈曲して外反する丸底の器形で、4の高坏は裾が屈曲する脚部を持つ。5の長胴甕もまだ体部中央に最大径を持つ古い様相を示している。また土錘（12）、砥石（129）、鍛冶滓（25・26）がある。

時　期　土器の様相から古墳時代中期中葉、5世紀中頃といえる。



1：黒褐色土（砂質シルト、粘性強い）
2：暗褐色土（1層土に黄褐色砂質土混じる）
3：黒褐色土（2層土に炭入る）
4：灰黄褐色土（砂質シルト、均質）
5：黒褐色土（カマド覆土、1層土に炭・焼土僅か含む）
6：暗褐色土（カマド覆土、粘土質シルト、細粒砂混焼土ブロック含む）
7：黒褐色土（カマド覆土、袖の周側に堆積、炭・焼土多）
8：暗赤褐色土（カマド覆土、焼土）
9：暗褐色土（カマド覆土、5層土に焼土多く含む）
10：明赤褐色土（カマド火床、堅く被熱する）
11：明赤褐色土（カマド袖内部燃焼範囲）
12：灰褐色土（カマド火床下、砂質シルト）
13：にぶい赤褐色土（カマド火床下、薄く被熱している）
14：（カマド掘り方埋土）
15：黒褐色土（砂質シルト、粘性あり、均質）
16：黄褐色土（砂質シルト）
17：黒褐色土（砂質シルト、しまり悪い）
18：黒褐色土（貼り床層、黄褐色砂質土と黒色シルト混在）
19：褐灰色土（掘り方埋土、粘性あり、しまり悪い）
20：にぶい黄褐色土（掘り方埋土、粘性シルトと砂質土混在）

図122 442号住居跡

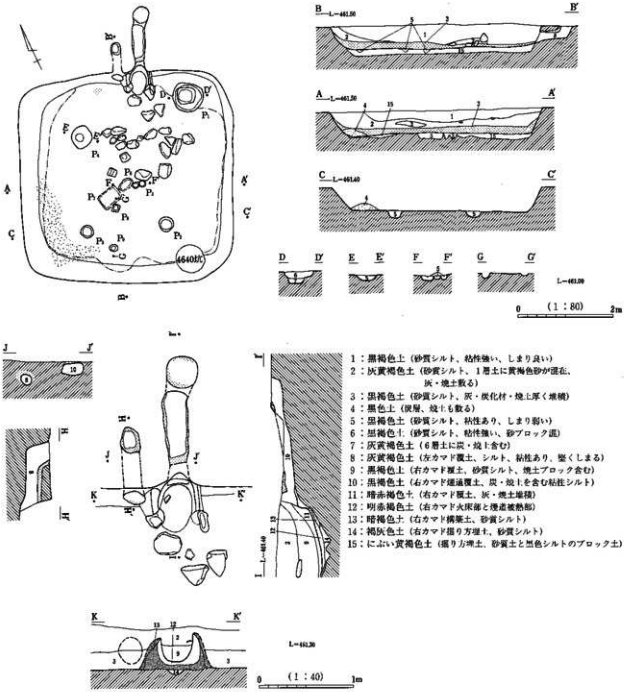


図123　443号住居跡

443号住居跡（図123、ＰＬ27）　位置　Ｕ－18

検　出　平成６・７年度継続調査。６年度にカマドを含む北壁付近、７年度に残る大半を調査する。Ⅳ層上面で検出。442・447住を切り、4640坑に切られる。覆土は床上を河原礫や灰、炭化物、焼土を含む黒褐色土（３層）が覆い、その上に灰黄褐色土（２層）、黒褐色土（１層）が堆積する。その堆積状況から、住居廃絶直後に焼失して、河原礫が投棄され、その後自然埋没していったと思われる。

構　造　平面形態は方形で、南隅と東隅がやや丸みを持つ。壁は急角度に掘り込まれ、深さ54cmを測る。床は全体に貼り床である。砂質土と黒色シルトの混入土を掘り方に敷いて敲いている。ピットは９基確認され、そのうちＰ２～４が主柱穴と考えられ、Ｐ１はカマド右にあり、カマドに関連すると思われる。そ

の他の小ピットの性格は不明である。床下は浅く粗掘りして、貼り床層を貼っている。

カマド 北東壁に2基付設されている。調査の結果、壁中央にある左カマドを使用後に片付けて、その右横に隣接してカマドを設けていると判断する。

左カマド 北東壁中央に付設される。燃焼部は全く残っていない。煙道は壁に直角方向に掘り抜かれている。煙道口は床面から10cm程の高さにあり、煙道はそこから水平に伸びて、煙出口付近で上向きに屈曲させている。現存長74cm。煙道の横断面は径24cmの円形で、煙出口は不整な楕円形で径18cm程である。煙道内部は上部程良く被熱して、煙出口は周囲が良く焼けている。

右カマド 北東壁中央やや右寄り、左カマドに隣接して設けられる。両袖手前には1対の河原礫がやや内傾して埋置されている。また河原礫から壁に向かって、粘性のある砂質シルトで構築されている。左袖の構築土が左カマドの煙道を一部塞いでいる。火床部は焚き口から壁まで楕円形に広がり、両袖内面を含めて強く被熱している。煙道は壁から直角に伸びている。現存長は140cmで、左カマドの倍程度ある。煙道底面は煙出口に向かって上向きに緩やかに傾斜し、煙出口で屈曲して直立する。煙道の断面は横長の長方形で、煙出口は径25cm程の不整円形である。煙道内部は上部が赤色化して、煙出口は周囲が強く焼けている。またカマド周囲の河原礫の一部は、芯材の廃棄と思われる。

遺 物 土器の出土量は少ない。いずれも覆土から出土していて、1は稜が僅かに残り、口縁端部が内傾する段を成す須恵器坏蓋で、2は内弯する深い器形の土師器坏、3は須恵器模倣の土師器鉢の口縁部と思われる。他に土製の管玉（9）がある。

時 期 土器の様相は6世紀前葉であるが、住居跡との時間差が考えられる。

444号住居跡（図124） 位置 U－24

検 出 Ⅳ層上面で検出する。北壁のみ検出し、大半は攪乱を受けている。468住との重複関係は不明である。覆土はカマド以外は黒褐色土の単層である。

構 造 平面形態は、残る部分から方形と思われる。壁は急角度に掘り込まれ、深さは15cm程である。床は平坦であるが、堅緻ではない。ピットは確認できない。

カマド 北東壁に1基付設される。火床部と煙道部の一部が残る。火床部は略円形でその上に炭化物が堆積している。煙道部は短く、火床から斜め上向きに傾斜している。現存長44cm。

遺 物 須恵坏には底部静止糸切り未調整（1）と回転糸切り未調整（2）があり、短脚で柱状の高坏（3）がある。

時 期 土器の様相から奈良時代と考えられる。

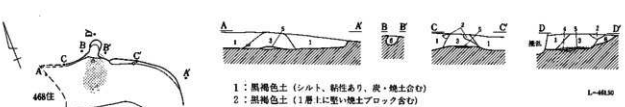


図124 444号住居跡

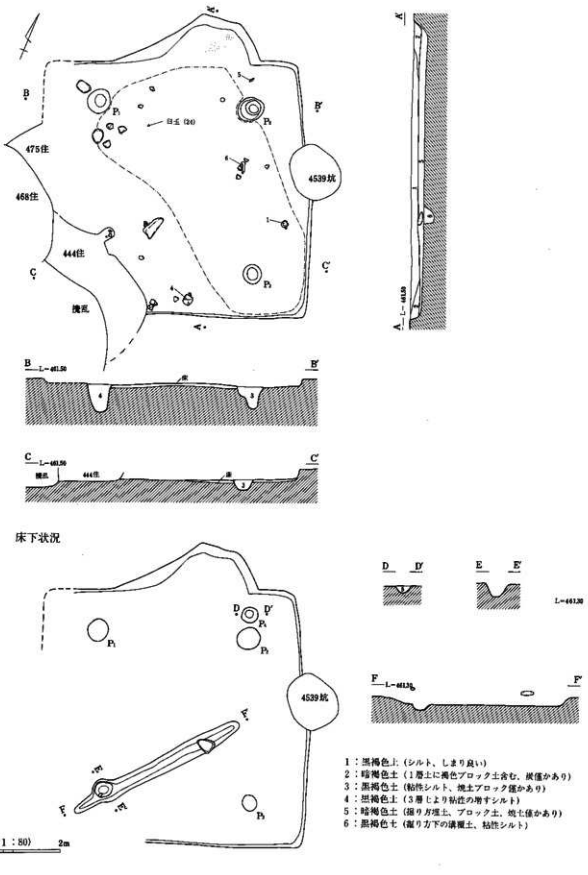


図125　445号住居跡

445号住居跡（図125）　　位置　U－24

検　出　Ⅳ層上面で検出。6年度に大半を調査し、7年度に西壁際を調査する予定であったが、上部の攪乱などで検出できていない。444・475住、4539坑に切られる。覆土は2層に分けられ、壁際の2層土はブロック土が混ざり、2層土堆積後に住居全体を均質な1層土が覆っている。自然埋没と考えられる。

構　造　平面形態は方形を呈している。壁は垂直に近い角度に掘り込まれている。深さは20cm程を測る。床には中央から東側に堅緻な貼り床が残る。ピットは3基あり、いずれも主柱穴と思われる。また本跡を切る444住下にもう一つあると考えられ、本来4本柱の方形配列を呈していたと推測する。P1・3は円柱状で、P2は有段状を成している。

カマド　明確ではないが、北壁中央やや右側の不整形な張り出し部分がカマドの残存部と思われる。張り出し部の底面は住居床面と同水準である。僅かに焼土や炭化物が分布するが、他にカマドに伴う施設は残らない。廃絶時に片付けていった結果だろうか。

床下施設　掘り方は平坦に掘り均され、南側に溝状の陥ち込みが確認されている。主軸から斜めに傾いて直線的に伸びる。南隅にあるピットは住居主柱穴の一つであろう。長さ400cm、幅40cm程の規模で、黒褐色の粘性シルト土が堆積している。

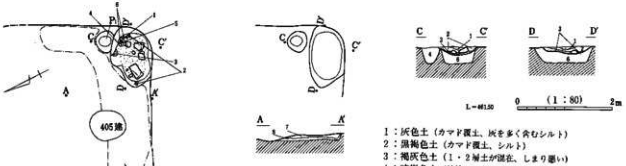
遺　物　床面付近から坏（1）、内黒鉢（4）、甕（5・6）、臼玉（24）などが出土している。1は須恵器坏蓋を模倣する器形、2の高坏は裾の短い、柱状の脚部のみ残る。3は甕である。4は大型の内黒の鉢で、底部外面は丸底で、内面はやや平底気味である。器壁は底部で厚い。5の甕は広口で、器壁は比較的薄く、内外面が磨かれている。6は長胴甕で、口縁部が直線的に外反して最大径を持ち、寸胴な体部を持つ器形である。

時　期　土器の様相から7世紀中頃と考える。

446号住居跡（図126、PL28）　位置　U－19

検　出　Ⅳ層上面で検出。住居のほとんどは削られていて、堅緻な床面とカマド部分で確認する。442住、405穴を切っている。覆土はほとんど残らない。

構　造　南隅が直角であることから、平面形態は方形を呈すると推測する。壁は残らない。床はカマド付近から南西側に堅緻な貼り床が残っている。それ以外は削平されているため残らない。ピットは2基あり、P1はカマドに接していて、円柱状のピットである。P2は西側にあり、浅い皿状のピットである。掘り方は平坦で浅く、埋土は暗褐色土のシルト質土である。



1：灰色土（カマド覆土、灰を多く含むシルト）
2：黒褐色土（カマド覆土、シルト）
3：褐灰色土（1・2層土が混在、しまり悪い）
4：暗褐色土（粘性シルト、灰混じる）
5：灰黄褐色土（砂質シルト、粘性ややあり）
6：暗褐色土（カマド掘り方埋土、シルト質と、灰ややあり）
7：褐色土（床面層、シルト、しまり良い）
8：暗褐色土（掘り方埋土、シルト）

図126　446号住居跡

カマド　南隅に1基付設されている。火床部は平面長楕円形に浅く掘り窪められ、内部には灰が厚く堆積する。また、灰層上部には芯材の角礫や凝灰角礫岩を角柱状に切り出した礫、土器片が散乱している。袖部などは残存しない。カマド掘り方は火床部同様に楕円形に掘り込んで、シルト質土で埋めている。

遺　物　土器片がカマドから出土している。1は口縁部に向かい大きく開く器形の須恵坏、2・4は内黒坏、3は内黒の台付皿、5・6はいずれもロクロ成形で平底の鉢で、5は内面が黒色処理されている。

時　期　土器の様相から平安時代の9世紀後葉と考える。

447号住居跡（図127）　　位置　U－19

検　出　Ⅳ層上面で検出する。全体に削平が激しく残りが悪い。436住を切り、443住、405建に切られる。覆土は2層に分かれ、2層土には、炭化物や焼土を多く含む。埋没過程は不明である。

構　造　平面形態は横長の長方形を呈する。壁は北側が全く残らない。南側では緩やかに掘り込まれ、深さ12cm程である。周溝は西壁と南壁に幅10cm、深さ10cm程であり、連続していない。床面には南側に貼り床が残っている。また、床面上には多量の炭化物や焼土があり、焼失家屋と考えられる。7基のピットはいずれも小型で平面円形であり、柱穴の可能性がある。

カマド　確認されていない。

遺　物　床面から土器片の他に白玉（25～28）が出土している。坏は全て土師器で、1は須恵器坏蓋模倣の器形である。2・3は浅い半球形を呈している。4は内黒の高坏で坏部は浅い半球形である。5の須恵器甕は口縁部が短く、肩が張る器形である。

化学分析　南壁にある炭化物を同定したところ、草本類と判明した（付章第1節参照）。

時　期　土器の様相は古墳時代後期6世紀後葉であるが、本跡を切る443住が6世紀前葉と考えられ、整合していない。

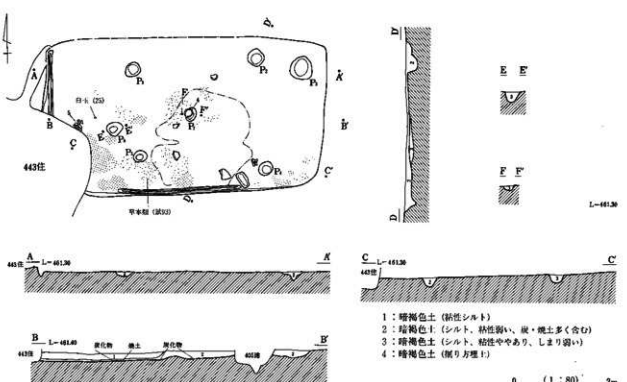
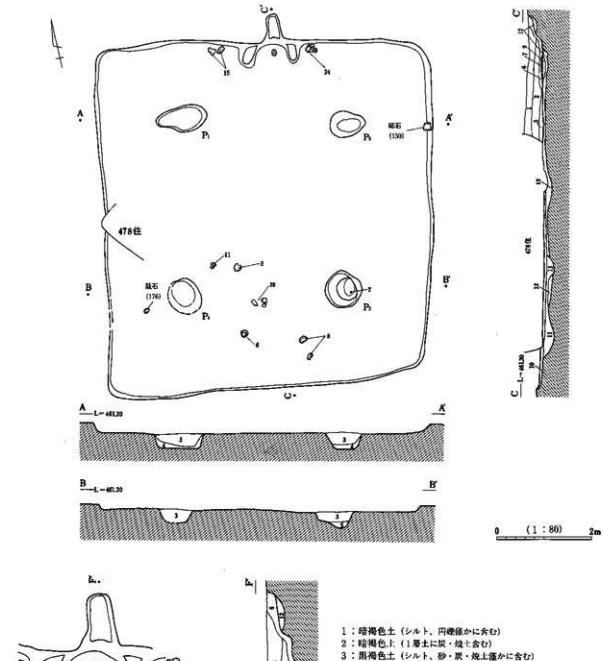


図127　447号住居跡



1：暗褐色土（シルト、円礫僅かに含む）
2：暗褐色土（1層土に炭・焼土含む）
3：黒褐色土（シルト、砂・炭・焼土僅かに含む）
4：黒褐色土（3層土に砂多く含まれる）
5：黒褐色土（シルト、褐色砂ブロック含む）
6：暗褐色土（カマド腰土、焼土・炭混入）
7：　　（カマド腰土、灰・炭材）
8：暗褐色土（カマド袖材抜け跡腰土、焼土あり）
9：赤褐色土（カマド火床）
10：　　（床土、堅くしまる、白色砂ブロック含む）
11：暗褐色土（掘り方埋土、シルト、炭僅か含む）
12：暗褐色土（掘り方埋土、シルト、白色砂多く含む）
13：黒褐色土（粘性シルト）
14：暗褐色土（砂質シルト）
15：暗褐色土（4557号土坑腰土、シルト、均質）
16：黒褐色土（4557号土坑腰土、石鏃と炭・焼土・礫含む）

図128　448号住居跡（1）

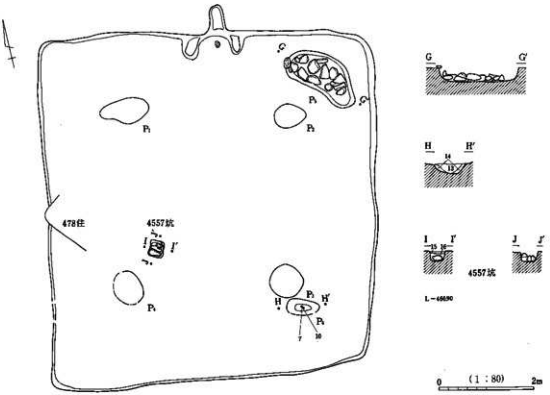


図129　448号住居跡（２）

448号住居跡（図128・129、ＰＬ28）　位置　Ｕ－19

検　出　平成６年度に北側を７年度に残る南側を調査する。447・472・473住を切り、478住に切られる。覆土は大きく３層に分けられ、床面直上の３層土には炭化物や焼土粒が含まれている。埋没過程は不明。

構　造　平面形態は方形を呈する。壁は急角度に掘り込まれ、深さは20cm程である。床は平坦で、堅緻な貼り床である。ピットは４基あり、いずれも主柱穴で、４本柱の方形配列を呈している。床下には３基ピットがあり、Ｐ5は北東隅にあり、平面不整楕円形の大形のピットで河原礫が大量に投入されている。Ｐ６は床上のＰ３に隣接して、平面長楕円形である。また4557坑は本跡に伴うのか不明であるが、３点の河原礫が整然と並べられ、覆土には炭化物と焼土、骨片を含み、墓壙の様相を呈している。

カマド　北壁の中央に１基付設されている。燃焼部の両袖と火床部、煙道部が残る。袖には芯材がなく、暗褐色の袖構築土が薄く両袖に残る。また断面から袖下には芯材の据え跡が認められる。支脚石の据え跡も火床部奥にある。火床部は楕円形に強く被熱して、その上部には焼土や灰、炭が薄く堆積している。煙道部は下半分が残り、現存長で50cmを測る。煙道口は火床部から高さ10cm程で、断面楕円形を呈する。煙道は掘り抜き式と考えられるが、上半部が削られている。底面は水平に伸びて、煙出口では直立する。煙出口は削平されていて不明である。全体に余り被熱していない。

遺　物　床面に散乱している。土器片が主体であるが、砥石（130）、敲石（176）も出土している。土器では１・２が須恵坏蓋で、１は内面にカエリがある。２は擬宝珠ツマミの付く小型品で、３は短頸壺の蓋と思われる。擬宝珠ツマミが付き天井部が深い器形である。４～８は高台坏で、法量で大小に分かれる。５の底部外面にはヘラ記号が残る。９は高坏の坏部であろう。10～12の坏の他に皿（14）や大形の鉢（15）も出土する。土師器では内黒の高坏が一定量出土している（16～24）。そのうち16～18、20～22は須恵器高

坏を模倣した器形である。坏部は直線的に外反して外面はロクロ成形で、脚部は柱状で、上半に1～2条の浅い沈線が巡る。また裾部は次第に曲線的に開いて端部が明確に直立している。胎土も砂粒が多く、明らかに他の土師器と違う。他に床下から碁石状石製品（45）が出土している。

時　期　土器の様相から奈良時代、8世紀初頭～前葉と考えられる。

449号住居跡（図130）　　位置　U－7

検　出　平成6・7年度継続調査。6年度に北半分、7年度に南半分を調査する。Ⅳ層上面で検出。418・448・470・478住に切られる。覆土はレンズ状堆積で自然埋没である。なお壁際の床面には焼土や炭化物の分布が認められる。

構　造　平面形態は方形を呈する。壁は若干の傾斜を持つが、ほぼ直立している。周溝は南隅から南西壁、南東壁の一部、カマド右の3カ所の壁際に認められる。また、南隅の周溝からP3まで間仕切り状に伸びる同様の溝がある。床は堅緻であり、貼り床の可能性がある。ピットは5基あり、柱穴としてP1～4を考えるが、配置は整然としない。特にP3は径70cm、深さ32cmと大形で、P2・4底面には河原礫があり、礎盤石の可能性を持つ。掘り方は非常に浅く、貼り床層らしき砂質シルトで埋められている。

カマド　北西壁中央に1基付設されている。残りは悪く右袖の芯材と思われる河原礫と煙道部のみ確認されている。煙道は掘り抜き式で現存長60cm、先端部は470住に切られる。煙道口は不整楕円形で、底面は緩やかな上向きの傾斜である。内部は被熱している。

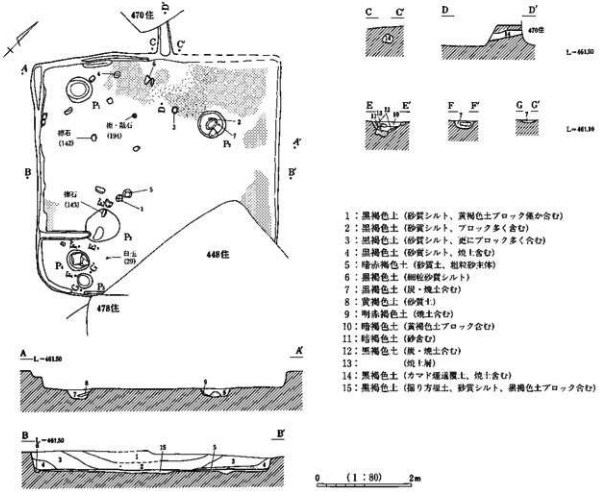


図130　449号住居跡

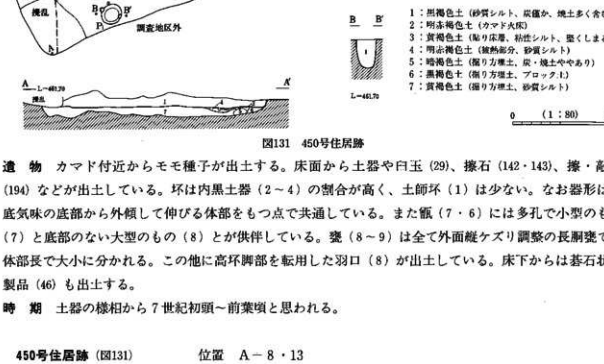


図131　450号住居跡

遺　物　カマド付近からモモ種子が出土する。床面から土器や臼玉（29）、擦石（142・143）、擦・敲石（194）などが出土している。坏は内黒土器（2～4）の割合が高く、土師坏（1）は少ない。なお器形は丸底気味の底部から外傾して伸びる体部をもつ点で共通している。また甑（7・6）には多孔で小型のもの（7）と底部のない大型のもの（8）とが供伴している。甕（8～9）は全て外面縦ケズリ調整の長胴甕で、体部長で大小に分かれる。この他に高坏脚部を転用した羽口（8）が出土している。床下からは碁石状石製品（46）も出土する。

時　期　土器の様相から7世紀初頭～前葉頃と思われる。

450号住居跡（図131）　　位置　A－8・13

検　出　平成6年度に検出し、7年度に再調査。調査区の西に突出する部分のⅣ層上面で検出する。その大半は調査地区外にあるため北西壁と西隅のみの調査である。重複関係はない。覆土は自然埋没で、黒褐色の砂質シルトの単層である。

構　造　残る部分から、全体形を方形と推測する。壁は浅く深さ8cm程残る。床は軟弱であるが、貼り床と考えられる。ピットは西壁際の床面に1基あり、円柱状で柱穴と思われる。掘り方は比較的深く、深さ20cm程まで粗掘りされていて凹凸が顕著である。埋土は黄褐色土のブロックを含む粘性土で炭化物や焼土のブロックも認められる。

カマド　北西壁に1基付設されていたと思われる。残りは悪い。火床面は堅緻に被熱し、支脚石の抜き痕も認められる。右袖には構築土が薄く残る。また芯材らしき河原礫が散乱している。火床部上には炭化物や焼土の他に被熱した骨片も出土している。なおこのカマド火床部右の床下にも強く被熱して硬化した範囲があり、カマドの作り替えがあったとも考えられる。

遺　物　非常に少ない。土器では丸底で浅い器形の内黒坏（1）、石器では擦石（144）が出土している。

時　期　僅かな土器からの所見であるが7世紀中頃以降とする。

451号住居跡　　位置　A－8

検　出　平成6年度に検出。7年度に最調査。大半が調査地区外にある。Ⅳ層上面で検出。452住、4562坑に切られている。西側は撹乱を受けている。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層で、炭化物を含む。

構　造　直線的な南東壁のみであるが、平面形態は方形と考えてよいだろう。壁はほとんど残らず、深さ5cm程である。床には黄褐色の粘性土が貼られている。比較的堅く締まる。壁際には焼土塊を検出する。

遺　物　床面から僅かに土師器片が出土しているが時期は決められない。

時　期　重複関係から古墳時代後期以前とする。

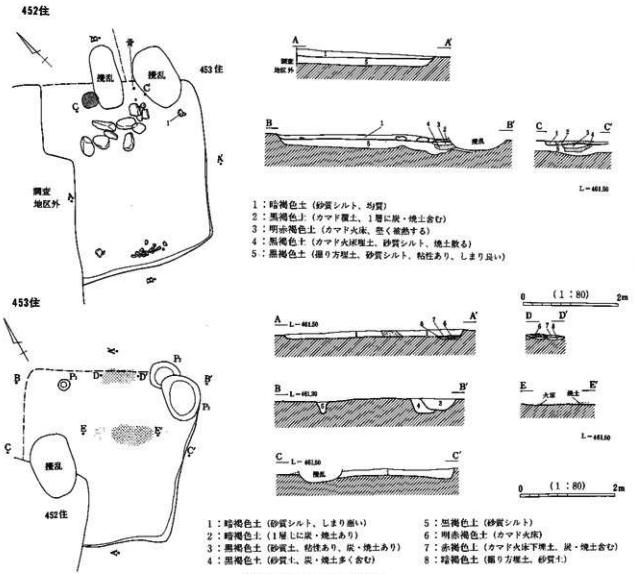


図132 452号・453号住居跡

452号住居跡（図132、PL28） 位置 A－4

検 出 平成6年度に検出。7年度に再調査。Ⅳ層上面で検出。西側が調査区外に出て、北東壁付近は近世墓壙の撹乱を受けている。451号・453住、303溝を切っている。覆土は暗褐色土の単層である。

構 造 ほぼ方形の平面形態と思われる。壁は傾斜して掘り込まれている。残る部分は浅い。床には貼り床があり、堅緻である。ピットは確認できない。掘り方は全体に深く平坦に粗掘りされている。カマド下は特に深い掘り方を持ち、その上に構築されている。深さは平均15cm程、カマド付近は25cm程ある。

カマド 北東壁の中央寄りに1基付設される。煙道部付近が撹乱を受けて消失している。火床部は強く被熱して堅く残っている。右袖にあたる部分には構築土が薄く検出されている。芯材と思われる偏平な河原礫が焚出部付近に散乱している。また、火床部付近の覆土から骨片が出土している。

遺 物 遺物は少ない。土器では須恵器の高坏（1）は浅い皿状で、口縁が強く外反する坏部に柱状の脚部を持つ。2は土師器坏で浅い椀状の器形、3の長胴甕は口唇部が面取りされ、口縁部に最大径を持つ寸胴な器形で、体部内面が横ナデ調整されている。

時 期 土器の様相から7世紀中葉と考えられる。

453号住居跡（図132）　　位置　A－4

検　出　6年度に検出。7年度に再調査。Ⅳ層上面で検出する。北西側は攪乱を受けている。303溝を切り、452住に切られている。覆土は暗褐色土の単層で、炭化物や焼土が混ざる。

構　造　残る部分から、平面形態はほぼ方形と思われる。壁は南側に僅かに残る程度であり、比較的急角度に掘り込まれている。床は平坦であるが、堅緻ではない。ピットは3基確認する。東隅にはP2・3が重複している。P3覆土には土器片が多く含まれる。P2は現状では住居外に一部張り出した状態であるが、北東壁がもう少し北に広がる可能性がある。北隅付近の床面にあるP1は柱穴であろう。

カマド　北東壁中央寄りに、火床部のみ残る。火床部は横長で強く被熱している。また周囲に焼土などが分布しているが、袖の構築材などは見られない。

遺　物　出土量は少ない。図化資料として須恵器坏蓋を模倣した土師器坏（1）がある。丸底から明瞭な稜を持って、口縁部が短く直立する器形である。内面には暗文風の縦ミガキが残り、内外に黒色物質が塗布されている。

時　期　出土土器と重複関係から古墳時代後期、6世紀後半頃だろうか。

454号住居跡　　欠番

455号住居跡（図133、PL29）　位置　U－17

検　出　黒褐色土の隅ち込みとしてⅣ層上面で検出。南西隅は調査地区外に出ている。地区内でも樹木根などの影響で、明確に調査できない部分がある。467住、303溝を切り、407建に切られる。覆土は黒褐色の砂質土の単層である。

構　造　平面形態はほぼ方形を呈するが、南隅がやや歪んでいる。壁は浅く、傾斜を持って掘り込まれている。床は全体に堅緻であるが、貼り床ではない。ピットは3基あり、いずれも主柱穴で、本来地区外にもう一つピットを備える4本柱の方形配列に組まれると推測する。3基とも深さ20cm程の円柱状である。

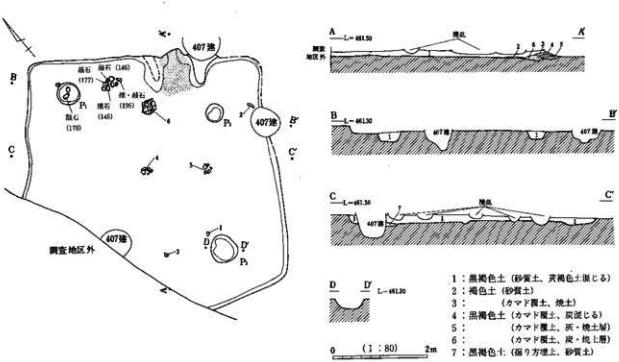


図133　455号住居跡

カマド 遺存状況は良くない。両袖には芯材がなく、構築土で形成されている。燃焼部内部には焼土や灰、炭化物が堆積している。被熱する火床部は認められない。

遺 物 床面から比較的多く出土している。土器片の他に擦石（145・146）や敲石（177・178）、擦・敲石（195）といった石器もまとまって出土している。土器では浅い椀状の内黒坏（1・2・4）、厚手の土師坏の底面を焼成前にくり貫いている甑？（3）、小型甕（5）、内面がハケ目調整された平底の長胴甕（6）が出土している。

時 期 土器の様相から7世紀後葉とする。

458号住居跡 位置 U－22

検 出 Ⅳ層上面で検出。本跡の南側は調査地区外に出ている。また北東隅は攪乱を受けている。303溝、4655坑を切る。覆土は黒褐色土の単層である。

構 造 残る部分から方形と判断する。壁は僅かしか残らない。床は比較的堅緻である。

遺 物 非常に少なく、図化資料はない。奈良時代の軟質な須恵坏片が出土している。

時 期 切り合いと僅かな土器片から、奈良時代頃とする。

458号住居跡（図134） 位置 U－17

検 出 Ⅳ層上面で検出するが、攪乱の影響を強く受けている。457・459住を切る。覆土は黄褐色土ブロックを含む暗褐色土の単層である。

構 造 平面形態は不整であるが、長方形と考える。壁は急角度に掘り込まれている。床は堅緻であるが、貼り床ではない。ピットは7基あり、そのうち柱穴はP2・4・7辺りと思われる。また小ピットのP5・6は入口施設に伴うと考える。

カマド 北東壁中央寄りに、火床部らしき被熱部分があるが、他に痕跡がない。廃絶時に片付けていったためであろうか。

遺 物 床面から僅かに土器が出土している。1・2はいずれも内黒高坏の脚部で、裾部が短く屈曲する器形であり、坏部は浅い椀状と予想される。またミニチュア土器（33）も出土している。

時 期 土器の様相から7世紀代とする。

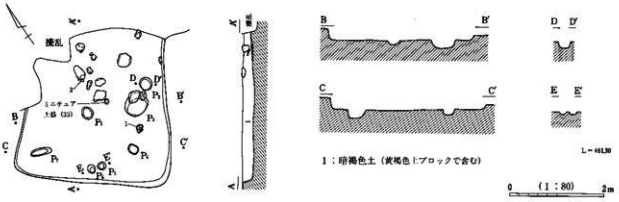


図134 458号住居跡

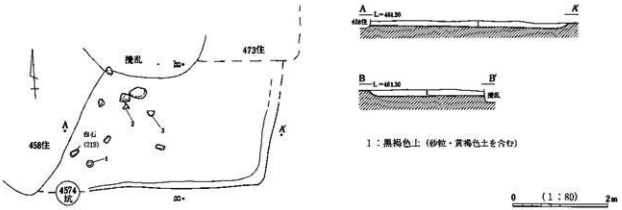


図135　459号住居跡

459号住居跡（図135）　　位置　U－19

検　出　Ⅳ層上面で検出するが、近世墓壙の攪乱を強く受けている。460住を切り、458・473住に切られている。また4574坑にも切られる。覆土は黒褐色土の単層である。

構　造　大半が攪乱されているため、はっきりしないが平面形態は方形と推測される。壁は南東隅付近のみ浅く残り、緩やかに掘り込まれいる。床は堅緻である。柱穴は認められない。

カマド　調査できる範囲にはない。

遺　物　床面から土師器片が出土している。1は丸底気味で体部が外傾する内黒坏、2は内黒高坏の脚部、3は多孔の小型甑である。石器では台石（219）、金属製品では青銅製の耳環（49）が出土している。

時　期　土器の様相と重複関係から、7世紀中頃あたりだろうか。

460号住居跡（図136）　　位置　U－13

検　出　Ⅳ層の上面で検出する。攪乱と他遺構との重複で検出は難行する。459号・472号・473住に切られる。覆土は黒褐色土の単層である。

構　造　全体形は掴めないが、残る南東部分から平面形態は方形を呈すると思われる。壁も僅かに浅く残り、緩やかに掘り込まれる。深さは18cm程である。

カマド　調査範囲内には確認されない。

遺　物　床面から土器片と敲石（179）が出土している。土器はいずれも内面黒色処理された坏（1・2）と鉢（3）である。1は深めの椀形で、2は浅く口径が広い。3は丸底気味で、体部が深く底部内面に屈曲部を持つ器形である。また内外面がよく磨かれている。

時　期　出土土器と重複関係から7世紀中頃と思われる。

461号住居跡　　位置　U－12

検　出　Ⅳ層上面で検出。北東部が近世墓壙の攪乱を受けて消失している。4608坑に切られる。覆土は黒褐色土の単層である。

構　造　平面形態は東西に長軸を持つ長方形である。壁は急角度に掘り込まれ、深さは18cm程残る。床は平坦で、僅かに堅緻である。ピットは4基あり、そのうちP1・3・4が柱穴である。P1は有段状の断面である。またP2はP1・3の中間にあり、平面円形で断面有段状の大型のピットである。また覆土から完形の須恵坏蓋が出土している。

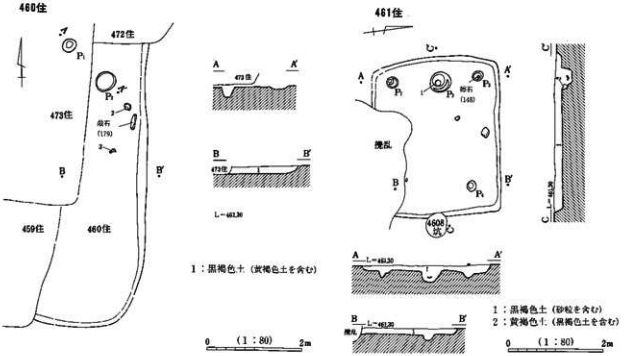


図136 460号・461号住居跡

カマド 調査範囲では確認されない。また、他の住居跡と形状や性質が違うため、カマドは設けられていない可能性もある。

遺 物 P2内出土の須恵坏蓋（1）は口径の大きい、擬宝珠ツマミの付く器形である。またP3内覆土から擦石（148）が出土している。

時 期 出土土器から、奈良時代8世紀中頃とする。

462号住居跡（図137、PL30） 位置 U－6

検 出 Ⅳ層上面で、黒褐色の方形の隅ち込みとして検出する。4598坑に切られる。覆土は黒褐色土の単層である。埋没過程は不明。

構 造 平面形態はほぼ方形である。壁はやや傾斜を持って掘り込まれている。床は平坦であるが、それ程堅緻ではない。ピットは4基あり、方形配列を呈している。あまり深くないが、主柱穴と考える。

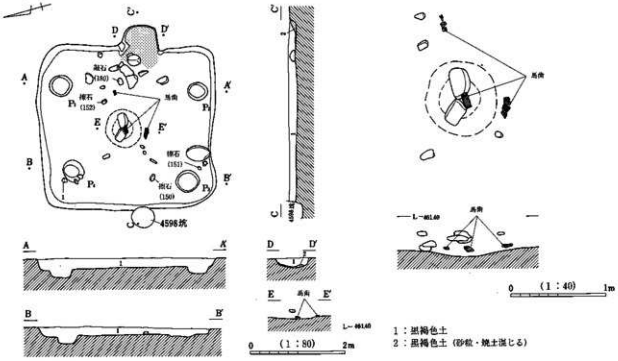
馬骨の出土 床面中央の浅く窪んだ部分とその周辺の床面から、同一個体のウマの生骨が出土する。出土状況は窪んだ部分から左上顎骨、南側から左下顎骨、東側から左下顎が出土するといった具合に部位毎にまとまっている。体部の骨は出土していない。覆土の状態では本跡との関連性は判然としないが、床面を壊して掘り窪められている点から、本跡埋没後に改めて埋められたものとも考えられる。

カマド 西壁中央やや右寄りに1基付設されている。燃焼部は方形の土坑状に壁から張り出している。火床部や袖などは、人為的に整理されていて残らない。僅かに焼土が堆積するが、量は少ない。

遺 物 出土量は少ない。土器片の他に、軽石製品（57）や擦石（149～152）、敲石（180）といった石器の出土が目立つ。土器では内黒坏（1）が図化される。底部回転糸切りで体部が浅く広がる器形である。

時 期 土器の様相から、9世紀後葉とする。

462住



463住

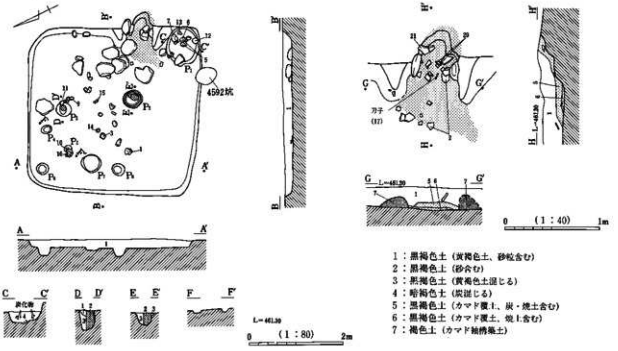


図137　462号・463号住居跡

463号住居跡（図137、PL30・31） 位置 U－6

検 出 Ⅳ層上面にて検出する。404溝を切り、4592坑に切られる。覆土は黒褐色土の単層で、大型で偏平な河原礫が投入されている。

構 造 平面形態は方形を呈する。壁は急傾斜に掘り込まれている。床は平坦であるが、貼り床ではない。ピットは8基確認される。そのうちP2・3には土質差で柱痕が残る。配列と形状などからP2・3・6・8辺りを柱穴と考える。P1はカマド右の住居南隅にある大形のピットで、覆土から土器が集中することから、カマドに関連する施設と思われる。

カマド 南東壁右寄りに1基付設される。燃焼部が壁から半紡錘形に張り出している。壁に袖の痕跡の構築土が貼られて、その周辺から偏平の河原礫が散乱することから、それらを芯材に用いていたと思われる。燃焼部内には火床はなく、焼土が堆積している。

遺 物 カマドから刀子（17）が出土する。床面とP1からは比較的多くの土器片が出土している。坏類では内黒土器（5～7、9～11、13～15）の比率が高く、そのうち暗文風のミガキが明瞭なものは4点（5～7、9）ある。他に須恵坏2点（1・2）、土師坏2点（3・4）がある。また内黒埦（8）、高台皿（12・13）や鉢（17）がある。土師甕は東信型の薄手の甕（18）と長胴甕（19・20）が共伴している。また須恵大甕の肩部（21）も出土している。石器には擦石（153・154）が出土している。

時 期 土器の様相から、9世紀中葉とされる。

464号住居跡 位置 U－6

検 出 西側の調査地区境で、Ⅳ層上面にてカマド跡のみ検出する。

構 造 全体形は全く分からない。

カマド 袖芯材の河原礫と焼土が確認されているだけである。

遺 物 付近から出土したのは内黒坏（1）のみである。底部回転糸切りで、体部が開く器形である。

時 期 平安時代9世紀後半あたりだろうか。

465号住居跡 位置 A－9

検 出 調査地区境の縁の手状に折れる土層面で確認。平面状の調査は不能であった。覆土は黒褐色土の単層である。

構 造 住居跡の南隅部分が調査地区外にあることが推定される。

カマド 確認されない。

遺 物 出土していない。

時 期 不明であるが、検出状況から古代の住居跡と思われる。

466号住居跡 位置 U－17

検 出 Ⅳ層上面付近で焼土を確認する。調査時では重複関係にある遺構との新旧は明らかではない。

構 造 全体形は分からない。

カマド 火床部らしき被熱範囲のみ検出されている。

遺 物 火床部周辺で須恵器が出土している。1は坏蓋で、2は底部ヘラケズリの坏である。

時 期 奈良時代であろう。

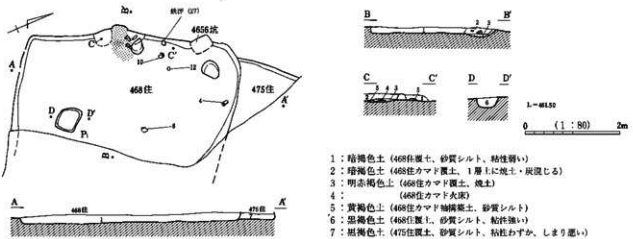


図138　468号・475号住居跡

468号住居跡（図138）　　位置　U－24

検　出　Ⅳ層上面で検出。昨年度調査範囲との境部分と攪乱により、検出は良好ではない。469・475住を切り、4656抗に切られる。444住との新旧は不明である。覆土は暗褐色の砂質シルトの単層で、自然埋没と思われる。

構　造　西側のみ残っている。そこから平面形態は方形と推測する。壁は全体に浅く、深さ18cm程残るだけである。床は北側程堅緻で南側は軟弱である。貼り床は認められない。ピットは1基だけあり、浅く平面方形を呈する。柱穴だろうか。

カマド　北西壁の中央に1基付設されている。遺存状態は良くない。燃焼部が僅かに壁から突出する。全体に焼土が堆積していて、円形の火床部が認められる。袖には構築土が薄く残る。

遺　物　カマド右に鍛冶滓（27）が出土している。また土器は床面や覆土内から出土している。坏は須恵器主体で、土師器や内黒土器は少ない。また甕は内外をハケ調整され、口縁端部に沈線の巡る、胎土の白っぽい甕（9）と薄く体部が削られた長胴の甕（10）がある。この他に軽石製品（59）、刀子（18・19）、鍛冶滓（28）が出土している。

時　期　土器の様相から、奈良時代の8世紀中葉～後葉とする。

469号住居跡　　位置　U－24

検　出　Ⅳ層上面で攪乱の間から検出される。僅かながら468住に切られる。覆土は黒褐色土の単層で、自然埋没と考える。

構　造　残る部分から、平面形態は方形と推定する。壁は東側では垂直に近い角度で掘り込まれている。ピットは認められない。床は堅緻ではないが、部分的に貼り床がある。

カマド　確認できていない。

遺　物　覆土中から土器片が出土。環状ツマミの付く須恵坏蓋（1）は、天井部外面は手持ちケズリ調整である。土師甕（5・6）はいずれも薄作りで、口縁部はやや直立して強く外反する。須恵甕（4）も出土している。

時　期　重複関係と土器から8世紀前葉とする。

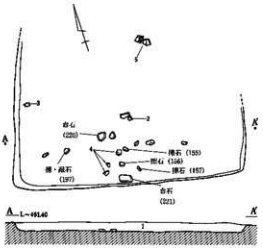


図139 470号住居跡

470号住居跡（図139） 位置 U－7

検 出 平成6年度調査範囲では本跡下の418住のみ検出。本跡は床面らしき痕跡を認めたが、検出できていない。7年度は南側のみ調査する。418住のほぼ同位置に構築されている。建て替えだろうか。

構 造 おそらく方形あるいは長方形を呈すると考える。壁は浅く残り、急角度に掘り込まれている。床は平坦であるが、堅緻ではない。ピットは確認されない。

カマド 7年度調査分では認められない。北側にあったと思われる。

遺 物 土器片や擦石（155～157）、擦・敲石（197）、台石（220・221）などが床面に散乱する。土器は内黒坏（1・2）、高坏（3）、鉢（4）の他に丸底の長胴甕（5）が出土している。この他に刀子（20）がある。

時 期 土器と重複関係から7世紀代とする。

471号住居跡 位置 U－23

検 出 Ⅳ層上面で、まず切られる456住を検出して、その東に隣接する土器の集中地点を確認して、精査したのち住居跡と確認。全体に攪乱を強く受け、北半分は調査地区外に出る。

構 造 調査範囲では形状は不明である。壁は非常に浅い。床は軟弱である。

カマド 検出できない。

遺 物 床面から土器片が僅かに出土するが、図化資料はない。石器では砥石（117）が出土する。

時 期 重複関係と土器片から古墳時代後期と考えられる。

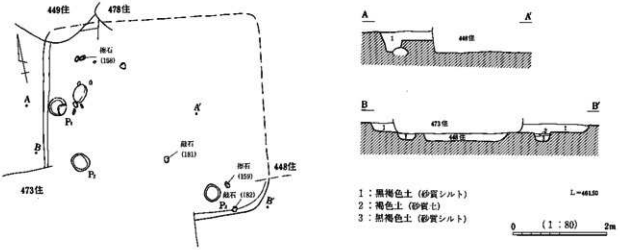


図140 472号住居跡

472号住居跡（図140）　　位置　U－12

検　出　非常に遺構の重複する範囲で、トレンチなどで確認しながら、Ⅳ層上面で検出する。460・477住を切り、448・449・473住に切られる。覆土は黒褐色土の単層で、自然埋没と思われる。

構　造　僅かに西壁と南東隅が残り、そこから方形を呈すると推定する。壁は傾斜を持って掘り込まれている。床は堅緻であるが、477住覆土上は軟弱である。ピットは3基確認され、いずれも形状規模から柱穴と思われる。

カマド　確認できない。

遺　物　擦石（158・159）、敲石（181・182）が出土する。土器片は小片で図化できない。

時　期　重複関係から、古墳時代後期7世紀代とする。

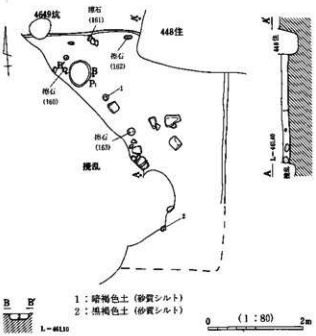


図141　473号住居跡

473号住居跡（図141）　　位置　U－12

検　出　Ⅳ層上面で検出。重複遺構が多く、攪乱を受けているため検出は難行する。459・460・472・477・478住を切り、448住、4649坑に切られる。覆土は暗褐色土の単層である。

構　造　残る部分からおそらく方形を呈すると推定する。壁は傾斜を持って掘り込まれている。床は部分的に堅緻である。ピットは1基確認される。

カマド　調査範囲には確認できない。

遺　物　土器の他に擦石（160・161）や敲石（162・163）が出土している。土器では土師坏（1）と内黒坏（2・3）、丸底の鉢（4）、長胴甕（5・6）がある。

1は底部が尖るように丸く、体部が開く器形。2は平底気味で底部内面に屈曲部を持つ器形。4は球形で口縁部が直立する。5・6は口縁部に最大径を持つ長胴甕である。内面はハケ調整。

時　期　重複関係と土器の様相から6世紀後半とする。

474号住居跡　　位置　A－4

検　出　Ⅳ層上面の検出段階で、住居床面を検出する。調査地区境の土層観察で立ち上がりも確認する。覆土は黒褐色土の単層である。

構　造　住居跡と確認しただけで、全体形は不明である。床だけは僅かな範囲ながら貼り床と確認する。

カマド　確認できない。

遺　物　なし

時　期　不明であるが、古代と推定する。

475号住居跡（図138）　　位置　U－24

検　出　Ⅳ層上面で、最初に本跡を切る468住を確認し、その断面観察から本跡を確認する。445、4644坑を切る。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層で、自然埋没と思われる。

構　造　大半が調査地区外にあるため、形状は不明である。壁は浅く残り、僅かに貼り床が広がる。ピットは確認できない。

カマド　調査範囲では確認できない。

遺　物　僅かに土器片が出土するが、図化資料はない。

時　期　重複関係から、奈良時代以前と推定する。

476号住居跡　　位置　U－11

検　出　Ⅳ層上面で、303溝の調査時に被熱する範囲を確認。上部に住居跡があったと推定する。

構　造　カマド跡と思われる被熱範囲のみ検出するに過ぎない。

カマド　詳細は不明である。

遺　物　カマド付近から東信型の甕、所謂武蔵型甕が2個体出土している（1・2）。いずれも頸部が直立気味で、口縁部が外反している。ほぼ完形の2はやや短胴で、上半部に最大径を持つ。底部は小さな平底である。全体に薄く仕上げられ、内面はハケ調整である。

時　期　土器の様相から、平安時代9世紀前葉の住居跡と理解する。ちなみに当該時期の住居跡はいずれもⅣ層上面の検出段階で、床面近くまで削られていて、本跡と同様の状況を示している。

477号住居跡　　位置　U－12

検　出　472住床下から、黒褐色土の陥ち込みとして検出。北半分は6年度に検出できていないため不明である。448住に切られる。

構　造　平面形態は方形を呈すると思われる。壁は傾斜を持っている。床には堅緻な部分が残る。ピットは確認されない。

カマド　南西隅付近に焼土を検出するが、カマドかどうか不明である。

遺　物　古墳時代後期の土師器片が出土している。

時　期　重複関係と土器片から古墳時代後期に属すると思われる。

478号住居跡　　位置　U－7

検　出　6年度の調査では未確認。7年度に本跡下の448住調査時に、土層断面から確認される。448・449住を切る。

構　造　土層断面中心の検出のため、ほとんど分からない。

カマド　確認できていない。

遺　物　僅かに土器片が出土している。

時　期　重複関係から、奈良時代以降とする。

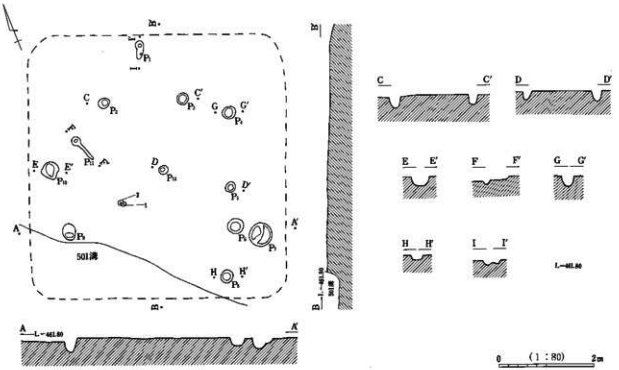


図142　501号住居跡

501号住居跡（図142）　　位置　J－13

検　出　Ⅳ層上面での検出時に、床面露出。501溝に切られる。

構　造　床面の範囲確認から方形と推定する。しかし、壁の状態は不明。床は自然面を平坦に掘り均している。ピットは12基確認する。いずれも小ピットで、そのうちのいくつかは柱穴と思われる。

カマド　北壁の中央付近の床に焼土があり、その右に長楕円の小ピットがあることから、カマドの燃焼部跡と芯材の据え跡と思われる。しかし詳細は不明である。

遺　物　床面から土師器の小皿（1）と高台皿（2）が重なって出土している。

時　期　土器の様相から、11世紀後半と位置づける。

502号住居跡（図143、ＰＬ31）　位置　Ｊ－21

検　出　表土除去後の検出で、石組み様の付近から略完形の土器が多く出土したため、カマドおよび竪穴住居跡の可能性を考える。更に検出すると、Ⅲｂ層下位、Ⅳ層直上に暗褐色の陥ち込みが認められる。501溝に切られる。覆土は暗褐色の砂混じり粘土質シルトであり、拳大の円礫や炭化物が見られる。

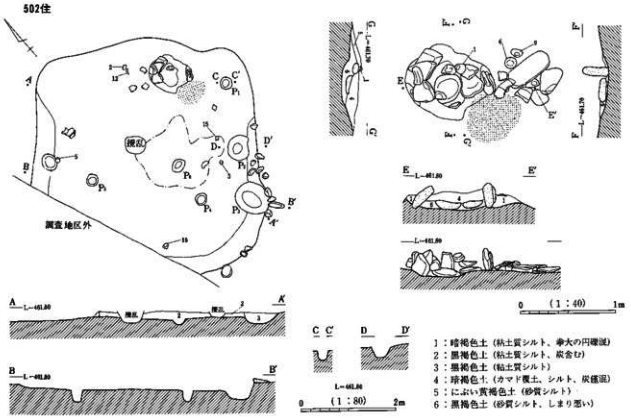
構　造　平面形態は方形を呈する。隅がやや丸みを持つ。壁は緩やかに掘り込まれいる。床は中央に堅緻な部分が残っている。ピットは５基確認し、そのうち柱穴としてＰ１・４・５辺りが考えられる。

カマド　北東壁の中央右寄りに１基付設される。501溝に切られて壊れているが、楕円形に掘り込んだ部分に芯材の河原礫を立てて使用されていたと考えられる。また支脚石も掘り込みの中央のやや壁際に直立して検出されている。カマド右横には天井部などの河原礫を土器と共に片付けた形跡がある。

遺　物　土器の出土が目立ち、特にカマド周辺に集中する。坏は土師器の割合が多く、内黒土器が僅かに残る。灰釉陶器には塊、皿、輪花皿、壺がある。塊と皿には光ケ丘１号窯式と大原２号窯式が供伴する。煮沸具では底のない甑、ロクロ成形の甕がある。金属製品では鉄鏃（６）や刀子（21）が出土している。

時　期　土器の様相から９世紀後葉～10世紀前葉とする。

502住



503住

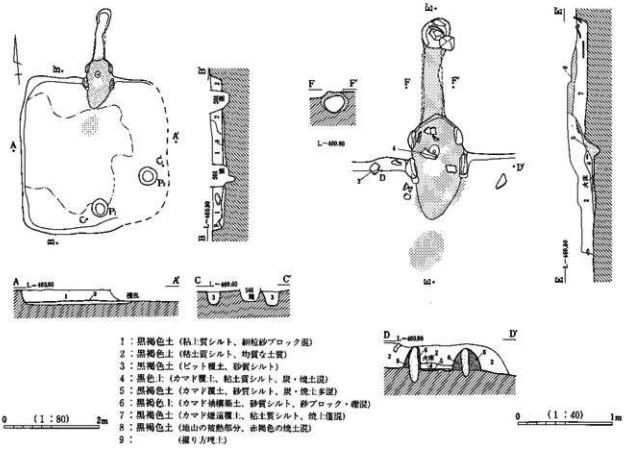


図143 502号・503号住居跡

503号住居跡（図143、PL31）　位置　P－6

検　出　Ⅳ層上面で黒褐色土の陥ち込みとして検出。東側に削平を受けている。512住を切り、501趾に切られる。覆土は2層に分けられ、1層は黒褐色の砂混じりシルト。褐色の細砂粒ブロックと小礫を含む。2層は黒褐色の粘土質シルトで均質な性状である。

構　造　平面方形を呈する。壁はどの辺も緩やかな傾斜で掘り込まれ、深さは24cm程を測る。床には西側の広い範囲に堅緻な貼り床を残している。全体に平坦である。ピットは2基あり、いずれも円柱状で柱穴と考えられる。

カマド　北壁の中央に1基付設される。燃焼部は壁から円形に張り出している。また、そこから煙道部が真直ぐ掘り込まれている。両袖には芯材の河原礫が住居壁内寄りと掘り込みのほぼ中央と2点ずつ原位置を保って遺存している。火床は燃焼部の中央に円形に被熱して残り、その奥に隣接して支脚石の据え跡の小ピットがある。煙道部の断面は楕円形で内部は側面から天井にかけて堅く被熱する。煙出口は平面円形で径30cm程を測り、そこから土師甕の大きめの破片が出土している。

遺　物　カマド中心に土器が出土している。坏には須恵高台坏（1）と土師器の丸底坏（2・3）があり、甕は肩の張らない寸胴な長胴甕（4）である。2は有稜坏で、古い様相で混入の可能性が高い。

時　期　土器の様相と重複関係から、7世紀末～8世紀初めと思われる。

504号住居跡（図144、PL31）　位置　O－2

検　出　当初ははっきり認定できていない。ピットを先行して調査するに従い、本跡の外形が明らかになる。505住、502溝を切る。覆土は1層が灰黄褐色の粘土質シルトでⅡ層起因の撹乱土の可能性がある。2層は黒褐色で細砂混じりの粘土質シルトである。周辺の小ピットも同質の覆土である。

構　造　竪穴は隅丸気味の長方形である。壁は緩やかに掘り込まれる。床はあまりはっきりしない。柱穴として竪穴内に2基、周辺に6基が2間×2間の総柱に並ぶ。いずれも円柱状の小ピットである。竪穴と軸をほぼ同じくし、覆土も同様であることから、竪穴と小ピットの柱穴からなる竪穴状遺構（住居跡）と考える。

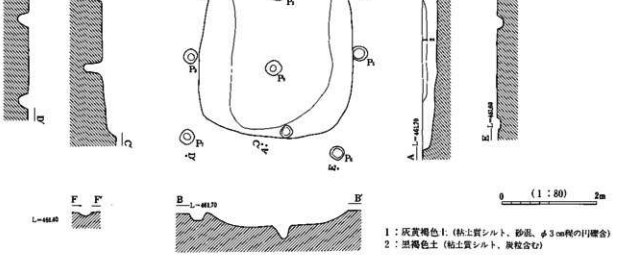


図144　504号住居跡

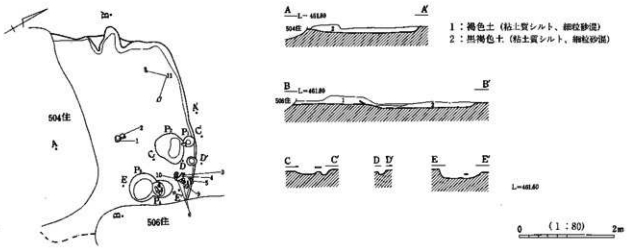


図145 505号住居跡

カマド 持たない。

遺 物 土器の小破片である。

時 期 重複関係から平安時代、9世紀中葉以降とする。

505号住居跡（図145） 位置 O－2

検 出 遺物包含層のⅢb層を精査している段階で、土器片の散布する部分として確認する。トレンチ調査の結果、床を確認して住居跡と考えた。504・506住に切られる。覆土は粘土質シルトを色調から2層に分ける。

構 造 残る北西部分から方形か長方形を推定する。壁は浅く残り、斜めに掘り込まれている。床は軟弱ではっきりしない。ピットは5基確認して、いずれも浅く、柱穴を決めかねる。

カマド 壁から住居床面に袖状に張り出す部分を北西壁の右寄りに確認する。焼土などを伴わないが、その形状からカマドの痕跡と考える。

遺 物 土器が北東床面のピット周辺に集中して出土している。坏は内黒土器が多く、土師坏は少ない。須恵坏は図化できる資料がない。底部調整は回転糸切りが大半で、僅かにヘラ調整が残る。甕はロクロ成形で平底の小型甕（9・10）がある。また、広口で底部に向かって徐々に細まる器形の甑（11）が出土している。石器には砥石（118）が出土している。

時 期 土器の様相から9世紀中葉～後葉とする。

506号住居跡（図146、PL32） 位置 O－3

検 出 重機による表土掘削の後、精査したところ、黒褐色土の陥ち込みとして検出する。504・505住を切り、501溝に切られる。覆土には多量の河原礫と土器が廃棄されている。礫は比較的大形で、住居南側の床面からやや上部に集中する。土器はあまり破損しない状態で、礫中とその下から出土している。その状況から、住居廃絶から時間差を持たないで人為的に礫や土器を置き捨てたと考えられ、住居廃棄の特殊な一例と思われる。

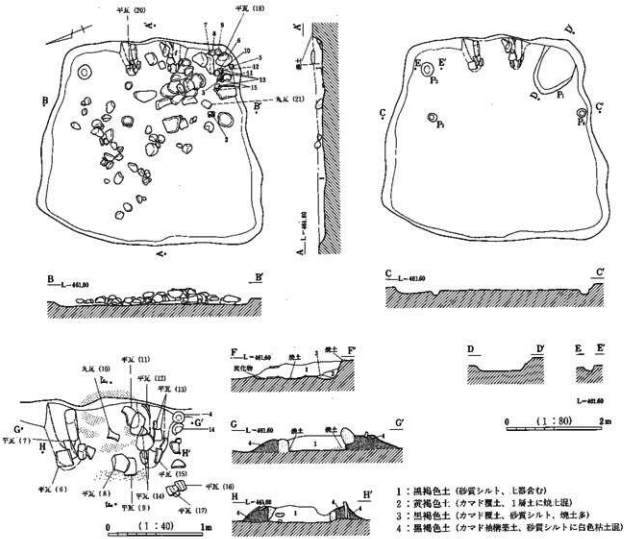


図146　506号住居跡

構　造　北東隅が501溝に切られるため、現状では台形を呈するが、本来、ほぼ方形の平面形態と推定する。壁は傾斜を持って掘り込まれている。床は軟弱で判然としない。ピットはカマド側床面に4基あり、P1はカマド右の住居隅にある底部の平坦な大型のピットで、ほかのピットは小型である。

カマド　南東壁の中央に1基ある。両袖には構築土と河原礫と共に、平瓦が芯材に用いられている。その構築は燃焼部側に礫を置き、その外側に瓦を据えている。なかには構築土を被うように瓦を貼っている部分も見られる。燃焼部には焼土と炭が堆積している。火床は残らない。

遺　物　土器はカマド近辺とカマド右のP1上部覆土に集中している。内黒坏主体で、埦や皿も見られる。また灰釉陶器の光ケ丘1号窯式の埦も出土している。瓦（6～23）はいずれも本跡東にある信濃国分寺造営に使用された布目瓦で、カマド芯材の平瓦のほか、丸瓦も床面から出土している。石器では砥石（119）が出土している。

時　期　土器の様相と重複関係から9世紀後葉とする。

507号住居跡（図147）　　位置　O－12

検　出　調査区の西壁際の精査で、Ⅳ層上面で黒褐色の陥ち込みを確認する。陥ち込みは平面三角形で壁の外まで続いている。状況から住居跡の北東隅部分と考える。覆土は黒褐色の砂質シルトである。

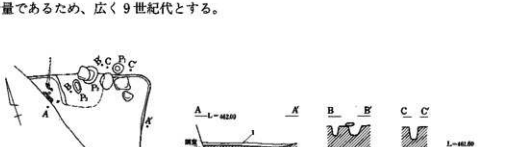
構 造 平面形態は残る部分から方形と推定する。壁は浅く不明である。床は削平されている部分もあるが、全体に堅緻である。ピットは3基あり、1基は床面外にある。

カマド 北壁の右に小ピットと焼土の散乱する範囲があり、カマド跡と考える。またその周囲には芯材らしき河原礫も散らばる。カマド掘り方は方形に住居壁から床面下に認められる。P2・3は袖芯材の据え跡であろう。

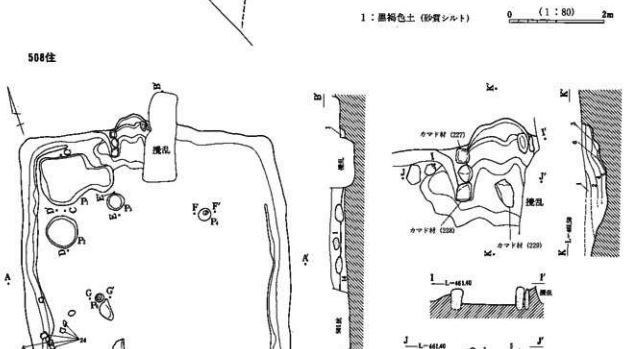
遺 物 カマド左床面から土師坏（1）が出土している。底部回転糸切り調整で比較的大形である。

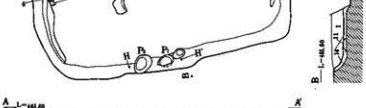
時 期 土器が少量であるため、広く9世紀代とする。

507住



508住





1：黒褐色土（砂質シルト）
2：暗褐色土（カマド覆土、1層上に炭・焼土混）
3：暗褐色土（カマド覆土、砂質シルト）
4：黒褐色土（カマド覆土、砂質シルトに炭多混）
5：暗褐色土（カマド覆土、砂質シルトに灰混）
6：赤褐色土（焼土層）
7：暗褐色土（ピット覆土、砂質シルト、炭・焼土混）
8：暗褐色土（ピット覆土、砂質シルトに白色粘土ブロック含）
9：暗褐色土（ピット覆土、砂質土）
10：褐色土（ピット覆土、砂質土）
11：明黄褐色土（床下層、砂質土）
12：黒褐色土（床下層、砂質土）
13：黒褐色土（床下層、砂質土に焼土混）
14：黄褐色土（床下層、砂質土）

図147 507号・508号住居跡

508号住居跡（図147）　　位置　O－8

検　出　Ⅳ層上面で検出。501溝に切られる。覆土は単層で礫を含んだ砂質シルトである。

構　造　やや不整な長方形を呈している。壁は傾斜を持って掘り込まれている。東西の壁の下には浅い周溝が残る。床は軟弱であるが、全体に貼り床である。ピットのうちP4・5が柱穴の可能性がある。またP6～8は入口施設に伴うものであろう。掘り方は平坦に掘り込まれ、その上に黄褐色の砂質土を貼って床としている。P1はカマド右、住居北西隅にある底部が平坦な大形のピットである。

カマド　北壁のやや左に付設され、右袖部は攪乱を受けている。燃焼部は僅かに壁から張り出す。左袖には芯材として礫が用いられているが、そのうち2点とカマド内部にある1点が凝灰岩（227～229）を柱状に成形している。本カマドは燃焼部壁際が階段状に掘られ、左袖外から焚出部も窪んでいる。燃焼部底面には焼土が堆積することから、機能していた時にはすでに掘り崩められていた可能性が高い。

遺　物　土器は須恵器主体である。坏の底部調整はヘラケズリと回転糸切りに分かれる。また環状のツマミの付く坏蓋がある。この他、須恵器では短頸壺（19・20）、突帯文四耳壺（22）、広口甕（23）があり、土師器で坏（12）、内黒坏（13・14）、高坏（15）、内黒鉢（16）、黒色無頸壺（17）、壺（18）、長胴甕（21・24）がある。石器では擦石（164・165）、金属製品では釘（33・34）、鑿（30）、また羽口（9）、平瓦（24）が出土している。

時　期　土器の様相から8世紀中葉～後葉とする。

509号住居跡（図148）　　位置　T－14

検　出　Ⅳ層上面で検出する。床面が帯状に3段に落ち込んでいるのは、後世の地下掘削による陥没と思

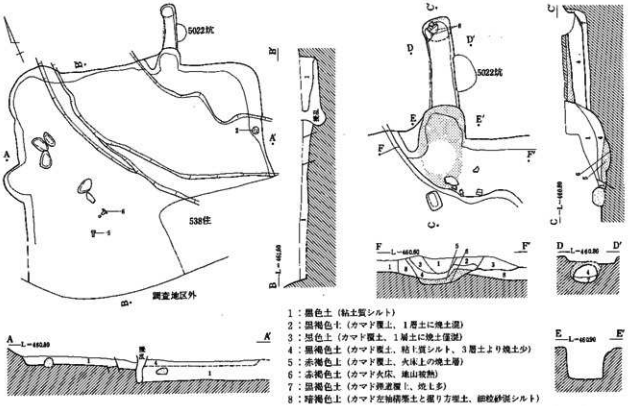


図148　509号住居跡

われる。538住、5022抗に切られ南側は調査地区外に出る。覆土は黒色の粘土質シルトの単層である。

構 造 調査範囲では方形から長方形と思われる。壁はカマド辺以外、緩やかな傾斜を持つ。また北隅と西辺中央に半円形に張り出した部分がある。床は全体に堅い貼り床がある。ピットは認められない。

カマド 北壁やや右寄りに付設されている。燃焼部は壁から30cm程、方形に張り出している。その先に約100cmの煙道部が真直ぐ伸びている。袖芯材は見つからないが、左袖に構築土と思われる暗褐色細粒砂と黒褐色シルトの混じる土が壁から20cm程張り出している。燃焼部内の住居壁内側に円形の火床部が残る。煙道部は掘り込み式で、上部地山が残っている。形状はほぼ水平に伸びて、煙出口で急角度に立ち上がっている。断面形態は底部がやや平坦な楕円形で、煙出口は円形に近い。煙出口には土器小片が見られる。

遺 物 床面からは非ロクロの内黒坏や高坏が出土している。甕には東信型甕の粗形のような器形の甕（7）と長胴甕（8）が出土している。金属製品では鉄製の棒状品（41）が出土している。

時 期 土器の様相と重複関係から、古墳時代7世紀後葉とする。

510号住居跡（図149） 位置 T－15

検 出 Ⅳ層上面で検出。工事工程上2回に分けて調査される。そのため調査境部分が未調査範囲で残る。506建、551・5023・5027抗、506溝を切る。覆土は2層に分かれ、中央部にのみ砂ブロックを多く含む2層土が堆積している。

構 造 やや横長の長方形の平面形態。壁は全体に緩やかな傾斜で掘り込まれる。床は中央部を除いて堅緻な貼り床が認められる。ピットは4基あるが、いずれも小形で、柱穴かどうかは不明である。掘り方は浅く平坦で、貼り床土で埋められている。

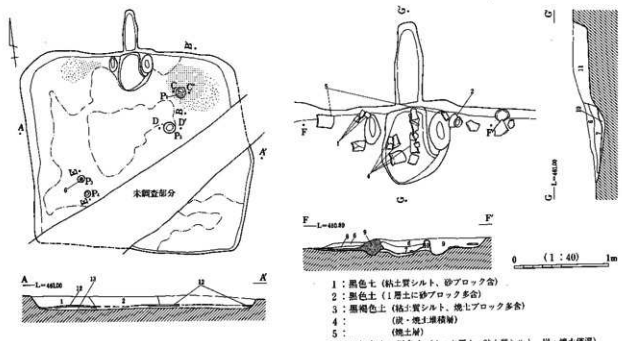


図149 510号住居跡

カマド　北壁中央に１基付設されている。燃焼部には袖芯材の抜け跡が両袖に残り、左袖には構築土が覆っている。また中央部は皿状に窪んでいて、火床はないが、土器片が無数に散乱している。煙道部は上部と煙出しが削られているが、掘り抜き式と思われる。住居北壁に直交する方向にほぼ水平に伸びる。煙道の底面は比較的平坦であまり被熱していない。焔面は急角度に立ち上がり、強く被熱している。カマドの両側には炭や焼土が集中する部分がある。特に右側は広範囲に厚く堆積している。

遺　物　土器片はカマド周辺に多く分布している。カマド燃焼部内からは肩の張らない長胴甕（4）、右側から短い脚部を持つ高坏（2）、左側からは須恵高台坏（1）、長胴甕（5）が破片で出土する。

時　期　土器の様相から奈良時代、８世紀前半とする。

511号住居跡（図150、ＰＬ32・33）　位置　Ｔ－５

検　出　Ⅲｂ層内で、黒褐色シルトに対して砂混じりの礫層の陥ち込みで確認し、Ⅳ層上面で精査する。517住、502・503建、579・590坑を切っている。覆土はⅢａ層起因の礫層であり、他の遺構と検出面は同じであるが、覆土の性状の相違から一定の時間差があることが認められる。

構　造　平面形態はやや不整な横長の長方形を呈している。壁は傾斜を持って掘り込まれている。床は北西壁際以外、堅緻な貼り床が認められる。ピットは５基認められ、柱穴としてＰ２・３が考えられる。また、住居東隅のＰ１と北隅のＰ４は皿状の大型のピットであり、特異である。

カマド　東壁の左寄りに１基付設される。燃焼部には袖の構築土と袖石が残っているが、原位置は保っていない。火床部は中央に略円形に残る。煙道部は削られていて、20cm程残るだけである。またＰ１付近にカマド芯材らしき河原礫が放置されている。

遺　物　カマドや東壁付近を中心に床面から土器片が出土している。小形のロクロ坏や灰釉陶器の皿や埦があり、灰釉陶器は成形が雑なものが目立つ。煮沸具として羽釜と羽釜形の甑がある。この他に国分寺瓦の丸瓦（25～28）、平瓦（29・30）、鉄製の鋸（29）、鍛冶滓（29・30）が出土している。

時　期　土器の様相から、10世紀後葉～11世紀前葉頃と思われる。

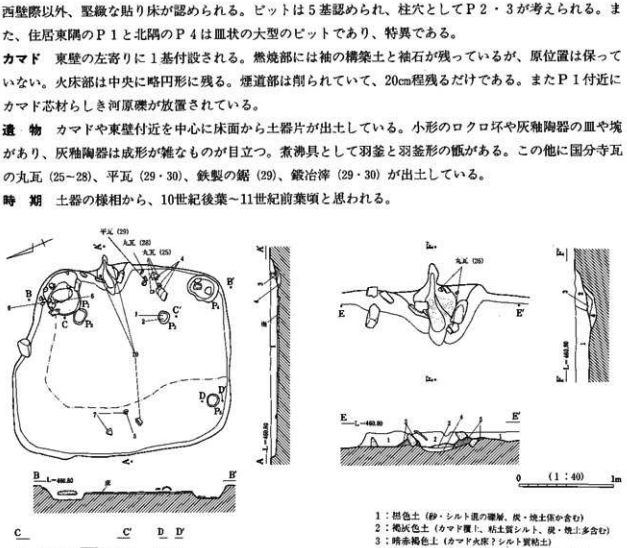


図150　511号住居跡

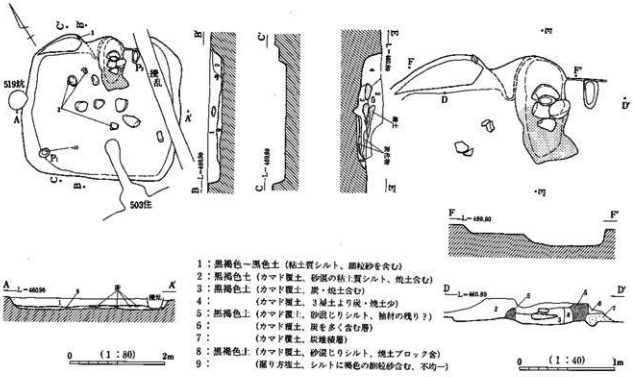


図151 512号住居跡

512号住居跡（図151） 位置 P－6

検 出 Ⅳ層上面で検出。黒褐色の陥ち込みと焼土の分布から住居跡と想定。503・519住に切られる。覆土は2層に分かれ、北壁側に黒褐色の砂混じり粘土質シルトの2層土が堆積し、住居全体は黒色から黒褐色の粘土質シルトの1層土に覆われている。

構 造 やや不整な横長の長方形を呈している。壁は全体に緩やかな傾斜を持つが、特に西隅と北隅の斜度が低い。床は全体に平坦な貼り床がある。自然面を平坦に均して床を貼ったと考えられる。ピットは2基あり、P2はカマド右袖の芯材据え跡と思われる。

カマド 北東壁の中央に1基付設される。遺存状況は悪い。左袖の地山が住居側に張り出していることから、袖部を掘り残して構築したと思われる。袖芯材は原位置に残らないが、カマド内や周囲に数点の河原礫が散在しており、抜き取った跡と考えられるP1が右袖部分にある。燃焼部中央には支脚石の据え跡もあり、住居廃棄時に破壊していったと考えられる。カマド右の住居壁にはテラス状の平坦部がある。

遺 物 出土量は少ない。床面から体部中央に最大径を持つ甕（1）が出土している。平瓦（31）は混入品と思われる。床下から凹石（205）が出土している。

時 期 重複関係と土器から5世紀後葉とする。

513号住居跡 位置 J－22

検 出 Ⅳ層上面で精査している段階で、焼土部分が検出される。それが火床を伴うため、住居跡のカマド痕跡と理解する。この痕跡以外は削られていて消失している。

構 造 全体は全く不明である。

カマド 円形の火床部とその前に皿状のピットを伴う。袖等の構築物は残らない。

遺 物 火床上部からロクロ成形の甕（1）が出土している。

時 期 土器の様相から平安時代9世紀後葉と考える。

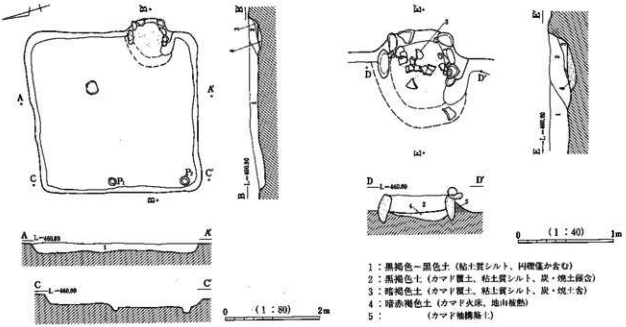


図152　514号住居跡

514号住居跡（図152、PL33）　位置　T－9

検　出　Ⅳ層上面で、黒褐色土の陥ち込みとして検出する。覆土は粘土質シルトの単層である。

構　造　平面形態は方形を呈している。壁はやや傾斜を持っている。床は平坦であるが、軟弱で貼り床は認められない。ピットは東壁際に2基ある。いずれも小型だか柱穴と思われる。

カマド　東壁右に1基付設される。燃焼部は皿状に掘り窪められ、壁から半円形に張り出して構築されている。袖には芯材と構築土が一部原位置を保って残る。火床部は燃焼部内に不整形に残る。地山が非常に強く被熱している。

遺　物　カマド内に土器片や平瓦（32）がある。図化資料として、須恵坏蓋（1・2）と須恵高台坏（3）がある。1は環状のツマミが付き、口縁部に明瞭な稜が見られる。2の口縁部は断面三角形である。3は浅く開く坏部のやや内側に高台が付く器形である。

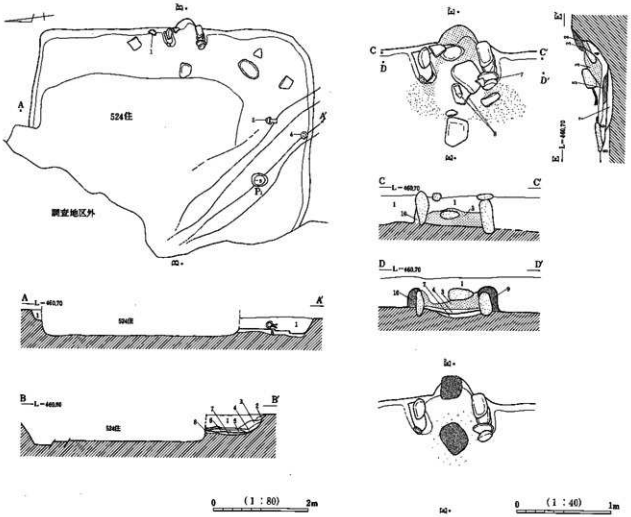
時　期　土器から9世紀初頭～前葉とする。

515号住居跡（図153、PL33・34）　位置　T－4

検　出　Ⅳ層上面で検出。工事工程上、2回に分けて調査する。西側は調査区外のため調査不能である。516住、5001坑を切り、524住に切られる。覆土は粘土質シルトの単層である。また後世の地下掘削の影響から、床面が数段に陥没している。

構　造　平面形態は方形と考える。壁は比較的急角度に掘り込まれている。床は南側に堅緻な貼り床を残している。ピットは南壁付近に小形のものが1基認められる。

カマド　東壁の中央やや右寄りに1基付設される。天井部は残らないが、カマド内に崩落した焼土が堆積している。また、裏側が煙けた天井石と思われる河原礫がカマド南側床面にある。袖には芯材の河原礫が左に2点、右に4点遺存して、原位置を保つと思われる。礫の外側には構築土が残る。火床は円形に強く被熱している。煙道部は明確に残らないが、僅かに住居壁から半円形に張り出している部分がある。その部分にも天井の構築土らしき2層土が被熱して乗っている。



1：黒褐色土（砂質シルト、しまり悪い）
2：褐灰色土（カマド覆土、堅くしまる砂とシルト、天井部？）
3：にぶい赤褐色土（カマド覆土、焼土・炭・骨多く含む）
4：暗褐色土（カマド覆土、砂混じりの粘土質シルト、焼土少）
5：褐色土（カマド覆土、堅くしまる粘土質シルト、天井部崩落？）
6：黒褐色土（カマド覆土、粘土質シルト、炭・焼土含む）
7：暗赤褐色土（カマド火床？しまり悪い）
8：（掘り方埋土、V層土と1層土混ざる）
9：赤褐色～黒褐色土（カマド右袖構築土、砂混じり粘土質シルト）
10：（カマド左袖構築土）

図153 515号住居跡

遺 物 カマド付近と南側床面から、土器が出土している。土器の構成は須恵坏（2・3）、高台坏（1）、長頸壺（5）、広口甕（6）、土師器の広口甕（7）、東信型の甕（8）である。須恵坏は底部ヘラ調整が主体で、糸切り調整も見られる。長頸壺はほぼ完形で出土している。また東信型の甕は、体部がやや長胴で、口縁がやや立ち上がり気味に外反する器形である。金属製品では青銅製の飾り金具（52）が出土している。

時 期 土器の様相から、8世紀中葉～後葉頃と思われる。

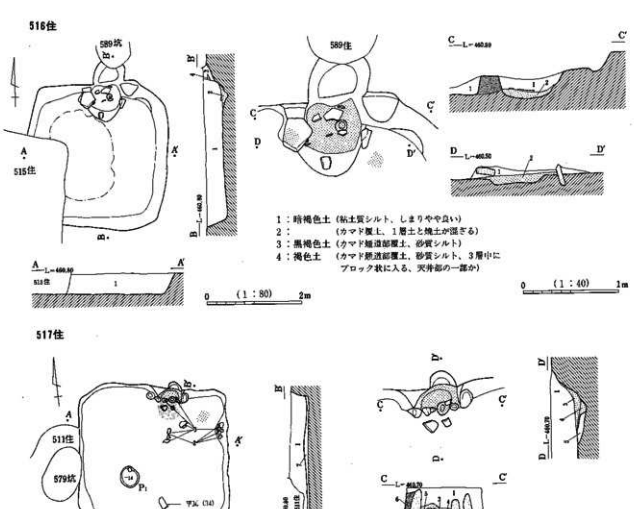


図154　516号・517号住居跡

516号住居跡（図154、ＰＬ33）　位置　Ｔ－４

検　出　Ⅳ層上面で検出する。516住、589坑に切られる。覆土は暗褐色の砂質シルトの単層である。

構　造　平面形態は小形の方形である。壁は緩やかな傾斜を持っている。床は中央よりやや西側に一定の範囲で貼り床を持つ。全体に南側に傾斜している。ピットは検出されない。

カマド　北壁の中央やや右に１基付設される。袖は壁を一部掘り残して利用している。右袖には芯材の河原礫が原位置を保って立っている。左袖にも軽石質の面取りした礫が検出されているが、天井石の可能性もある。燃焼部内には支脚石の据え跡の小ピットがある。煙道部は切られていてはっきりしないが、円形様の掘り込みがその一部だろうか。

遺　物　土器の小片が僅かに出土している。図化資料はない。

時　期　土器の様相と、重複関係から奈良時代８世紀前半頃とした。

517号住居跡（図154、ＰＬ34） 位置 Ｔ－５

検 出 Ⅳ層上面で、暗褐色の粘土質シルトの方形の陥ち込みとして検出する。503建、590坑を切り、511住、579坑に切られる。覆土は２層に分けられ、自然埋没と考える。

構 造 やや不整ながら、平面形態は方形である。壁は比較的急角度に掘り込まれる。床は堅緻ではないが、明瞭である。ピットは南側床面に浅い円形のＰ１のみ検出する。掘り方は僅かに平坦にある。

カマド 北壁の中央やや右寄りに１基ある。燃焼部の両袖は右袖の壁際に２点、左に１点ずつ河原礫が据えられたまま残る。燃焼部内には支脚石の痕跡が認められる。火床は袖よりやや住居床面寄りに、地山が略円形に被熱して残る。また上部には焼土が厚く堆積している。煙道部は僅か半円形に残り、すぐ立ち上がっている。

遺 物 床面から甕（１・２）、平瓦（34）が出土している。２は小形甕で、外面が薄く削られるやや短胴な器形である。３はロクロ成形の甕であり、口縁部が短く外反して、口唇部が面取り気味に直立し、内面が丁寧にハケ調整されている。須恵器の高台坏（１）も出土する。この他土器片板（53）がある。

時 期 土器の様相と重複関係から９世紀前葉と思われる。

518号住居跡 位置 Ｏ－25

検 出 Ⅳ層上面で検出するが、大規模な攪乱で大半が消失している。503溝に切られている。覆土は黒褐色土の単層である。

構 造 北東隅と東壁のみの検出であるが、平面形態は方形であろう。壁は傾斜を持っている。床はほとんど残らない。ピットはない。

カマド 検出範囲にはない。

遺 物 出土量少なく、須恵器の坏片が主体である。

時 期 土器の様相から、奈良時代～平安時代初め頃と考える。

519号住居跡 位置 Ｏ－20

検 出 調査区の境で、Ⅳ層上面から検出する。大半が調査地区外に出ている。520住を切る。覆土は黒褐色土の単層である。

構 造 南西隅部分のみの調査であるが、平面形態は方形であろう。壁は傾斜を持っている。床には貼り

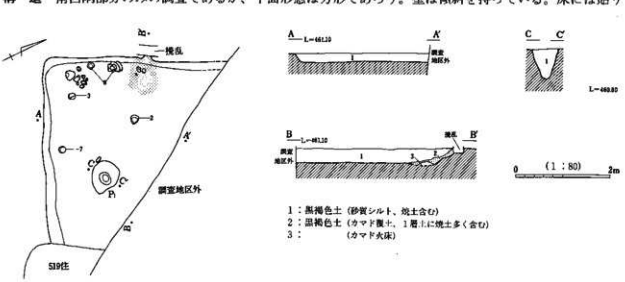


図155 520号住居跡

床はなく、自然面を掘り均している。ピットは検出されない。

カマド　調査部分にはない。

遺　物　僅かに土器片が出土するが、図化資料はない。

時　期　重複関係から奈良時代8世紀後半であろう。

520号住居跡（図155）　　位置　O－20

検　出　Ⅳ層上面で検出。530住、594坑を切り、519住に切られる。東側の大半は調査地区外にある。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層である。

構　造　残る調査範囲から方形を呈すると推定する。壁は浅く残り、傾斜している。床は自然面を平坦にしている。ピットは床面から1基検出される。円形で深く掘り込まれていることから、柱穴と考える。

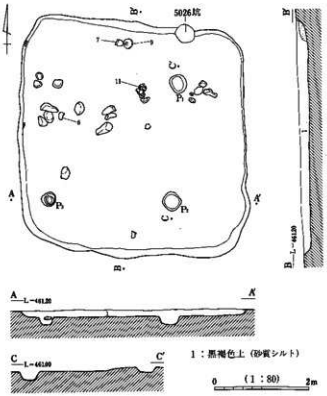
カマド　北西壁の中央に1基付設されている。燃焼部は円形に被熱する火床と、その上部の焼土の分布のみ残る。煙道は僅かに半円形に掘り込まれている。意識的に破壊された可能性がある。

遺　物　カマド右側やその周辺の床面から土器片が出土している。須恵高台坏（2）は底部が高台より突出している。坏蓋（1）の口縁部は断面三角形である。須恵坏（3）、内黒坏（4）とも底部はヘラ調整である。甕類では肩が張る器形の須恵甕（5）、ロクロ成形の小型甕（6・7）、口縁部が直線的に外反し、体部がやや長胴で薄く削られて仕上げられた東信型の甕（8）がある。他にカマド焼土から鉄製の紡錘車(26)、覆土から砥石（108）や帯金具の巡方（46・63）が出土している。

時　期　土器の様相から、8世紀前葉～中葉と思われる。

521号住居跡　欠番

522住



523住

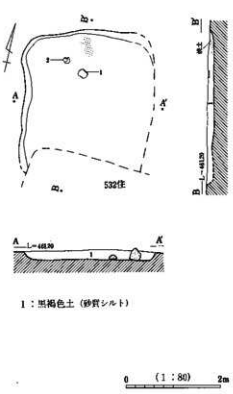


図156　522号・523号住居跡

522号住居跡（図156）　　位置　O－19

検　出　Ⅳ層上面で検出。523・530住に切られ、532住に切られる。覆土は黒褐色土の単層である。

構　造　平面形態は整然とした方形である。壁は浅く、緩やかな傾斜を持つ。床は自然面を均した状態で貼り床はない。ピットは3基あり、その配置から柱穴と思われる。

カマド　北壁の中央にあったと推測される。しかしほとんどその痕跡はなく、完形の小型甕（7）と甑（9）が意識的に置かれていることから、住居廃絶時に片付けていったと思われる。

遺　物　北側床面に土器と拳大の礫が出土している。土器はいずれも土師器で、坏は非ロクロ成形の内黒坏が主体で、内面は丁寧に磨かれている。小型甕が3点あり、甕は体部上半がややふくらみ、底部が突出気味の長胴甕である。石器では砥石（120）、擦石（166）が出土している。

時　期　土器の様相から6世紀中頃と思われる。

523号住居跡（図156）　　位置　O－13

検　出　Ⅳ層上面で黒褐色の陥ち込みとして検出する。検出状況は良くない。529・533住を切る。覆土は砂粒や礫を含む黒褐色の砂質シルトであることから、流水の影響による自然埋没と思われる。

構　造　やや不明瞭であるが、平面形態は長方形を呈すると思われる。壁は浅く残るだけである。床は明確ではないが、自然面を掘り均している。ピットは確認できない。

カマド　北壁の中央に焼土が分布するため、おそらくそこがカマドの痕跡と推測する。その他関連する施設は残らない。

遺　物　カマド周辺に須恵坏蓋（1）と底部回転糸切り調整の須恵坏（2）が出土している。金属製品では板状の鉄製品（38）がある。

時　期　土器の様相から、8世紀後葉頃と思われる。

524号住居跡（図157）　　位置　T－4

検　出　Ⅳ層上面で検出。工事工程上、都合2回に分けて調査する。北西半分は大規模な攪乱で消失している。また515住を切っている。床面は515住同様に、地下掘削の影響で、覆土も合わせて陥没している。覆土は黒褐色から暗褐色の粘土質シルトの単層である。僅かに焼土粒が散在している。

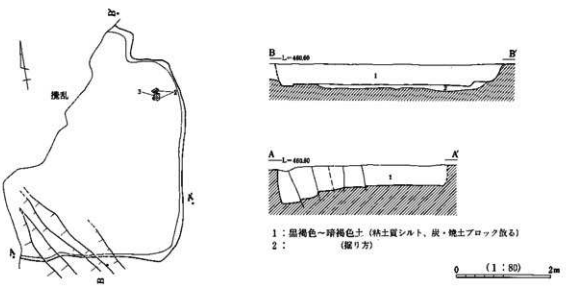


図157　524号住居跡

構　造　残る調査部分から、方形の平面形態と推測する。壁は比較的急角度に掘り込まれている。床は掘り込んだⅣ層上に、埋土にⅢ層の混じる10cmほどの平坦な掘り方を持ち、貼り床を形成している。ピットは確認できない。

カマド　当初、521住として調査した北壁の中央右寄りの、方形に住居壁から突出する部分がカマドと思われるが、攪乱などの影響でほとんど調査できていない。

遺　物　カマド手前の床面から須恵坏（2・3）が出土している。2は底部静止ヘラケズリ調整で浅く広がる器形で、3は高台が底部内側に付いた高台坏である。

時　期　土器の様相と重複関係から奈良時代8世紀後葉とする。

525号住居跡（図158）　　位置　O－9

検　出　Ⅳ層上面での検出で、土器や焼土が出土したため、調査地区境の壁周辺を精査したところ、土層断面にて住居跡と認められた。しかし平面的にはかなり削られていて不明な部分が多い。526住に切られる。覆土は2層に分かれ、炭・焼土を含む6層土の下で、砂質土が床面を覆っている。

構　造　僅かしか検出できていないため、平面形は不明である。壁は緩やかに掘り込まれると判断する。床は軟弱で、ピット等は認められない。

カマド　検出範囲では不明である。

遺　物　調査区壁から集中して土器が出土している。坏類は須恵器が主体で、非常に偏平な坏蓋（1）、底部回転糸切り調整の坏（4）などがあり、甕には土師器の小型甕（5）と、口縁部が直立した後、短く外反して、体部が球形にふくらむ器形をした、須恵器を模倣したような土師器の甕（6）も出土している。

時　期　土器の様相から、9世紀の初め頃と判断する。

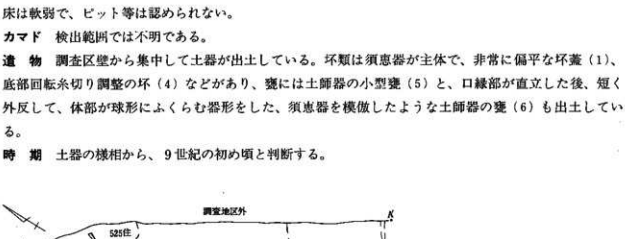


図158　525号・526号・527号住居跡

526号住居跡（図158）　　位置　O－14

検　出　525住同様に、調査壁にて確認。525・527住を切っている。平面的な調査は非常に困難な状況である。覆土は黒褐色の砂質土で、土層観察では表土下に厚く堆積しているが、立ち上がりは不明瞭である。

構　造　平面は方形を推測するが、不明である。壁は土層観察から傾斜すると思われる。床は削平されて不明である。ピットは2基あり、非常に小さなピットが並んでいる。

カマド　壁に露出する礫がカマド芯材の可能性があり、その周囲には炭や焼土が散っているが、詳細は不明である。

遺　物　僅かに土器片が出土するが、図化できない。

時　期　重複関係から9世紀初頭以降とする。

528号住居跡　　位置　O－13

検　出　Ⅳ層上面まで調査面を下げた際、調査地区外との境界壁の土層観察で確認するが、面的な調査はできていない。断面形状と焼土の混じった覆土から住居跡と判断する。覆土は黒褐色土で、小礫や砂粒が混じっている。

構　造　形態は不明である。壁は傾斜を持っている。床は軟弱である。

カマド　はっきりと確認されないが、断面の北側に焼土を含む層があることから、その付近にカマドか炉跡があったと推測される。

遺　物　出土していない。

時　期　不明であるが、覆土の状況から平安時代以前、奈良時代あたりと思われる。

531号住居跡　欠番

532号住居跡（図159）　　位置　O－18

検　出　Ⅳ層上面で検出。撹乱の影響を強く受けている。522住を切る。覆土は黒褐色土の単層である。

構　造　北壁が残るが、平面形態は不明である。壁の掘り込みも明瞭に残らない。床は軟弱である。ピットは認められない。

カマド　調査範囲にはない。

遺　物　平安時代の土器が出土している。回転糸切り成形の内黒坏（1・2）、灰釉陶器埦（3～4）、皿（6）がある。灰釉陶器には光ケ丘1号窯式と大原2号窯式がある。

時　期　土器の様相から10世紀前半と思われる。

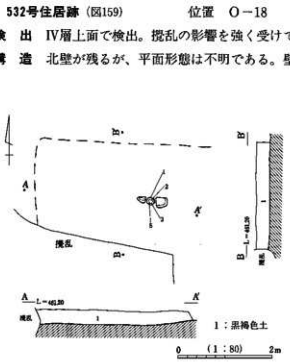
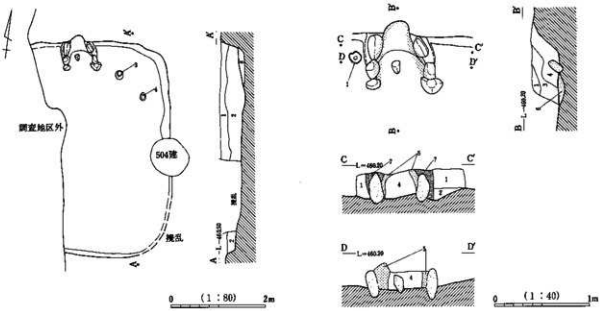


図159　532号住居跡



1：黒褐色土（粘土質シルト、砂ブロックも含む）
2：黒褐色土（砂混じり粘土質シルト）
3：茶色～黒褐色土（カマド質土、粘土質シルト、炭・焼土含む）
4：黒色～黒褐色土（3層上に炭・焼土ブロックまく含む）
5：（焼土層）
6：（カマド火床）
7：黒褐色土（カマド袖構築土、砂質シルト、しまり良い）
8：（掘り方埋土）

図160　535号住居跡

534号住居跡　　位置　O－19

検　出　Ⅳ層上面の検出で南側が攪乱を受けた状態で確認される。東側も不明瞭。530住を切っている。

構　造　残る北西側から平面形態は方形と推測する。壁は傾斜を持ち、床は軟弱で判然としない。

カマド　調査範囲にはない。

遺　物　僅かに土師器と須恵器の破片が出土している。

時　期　重複関係と土器片から、大きく古代に相当するといえる。

535号住居跡（図160）　　位置　T－9

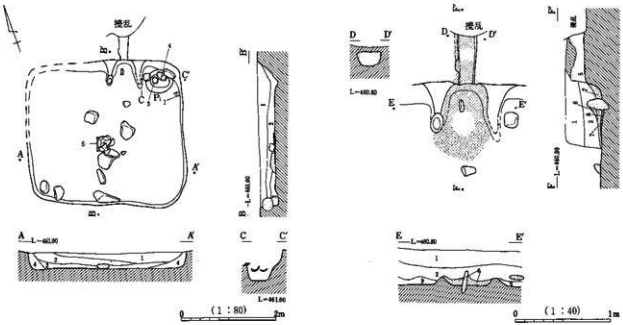
検　出　Ⅳ層上面で検出中、方形の黒褐色土の陥ち込みを確認。溝状に入る攪乱土を除去すると床面が露出したため、住居跡と認定した。調査面の精査から本跡覆土が504建に切られていることが分かる。覆土は主に2層に分かれ、黒褐色の砂混じり粘土質シルトの2層土が床面を覆い、その上部に黒褐色の粘土質シルトが堆積する。なお西側は調査地区外のため調査不能。

構　造　東側の壁の状態から平面形態は方形と理解する。壁は40cm程と深く残り、急角度に掘り込まれている。床は掘り込んだⅣ層を床面として、全体に壁際が高くなっている。ピットは見つからない。

カマド　北壁の中央付近に付設される。両袖に芯材の河原礫が各3点ずつあり、礫の火床側は強く被熱している。黒褐色の構築土が残る部分もある。袖は壁に対して左が直交方向であり、右はやや外側に開いている。支脚石は河原礫で、燃焼部やや壁よりの位置に斜めに傾いて立ち、火床は焚出部から支脚石の間が略円形に堅く焼けている。煙道は底面の一部が残り、39°の急角度で立ち上がる。上半部は被熱している。

遺　物　小形甕（3）と内黒鉢（4）がカマド右の床面から出土する。他に丸底の内黒坏（1）と内黒高坏（2）がある。

時　期　土器の様相から古墳時代後期、7世紀中頃と思われる。



1：暗褐色～黒褐色土（砂混じり砂質シルト、ブロック状に堆積）
2：黒褐色～黒色土（1層土に暗褐色砂含む）
3：褐灰色土（細粒砂の多い土質）
4：黒褐色～黒色土（2層土より砂少ない）
5：黒褐色～黒色土（カマド覆土、焼土ブロック含む）
6：暗褐色～褐色土（カマド覆土、炭・焼土堆積）
7：（カマド覆土、炭層）
8：（カマド大床）
9：暗褐色～褐色土（細粒砂に炭・焼土含む）

図161 536号住居跡

536号住居跡（図161、ＰＬ34） 位置 Ｐ－11

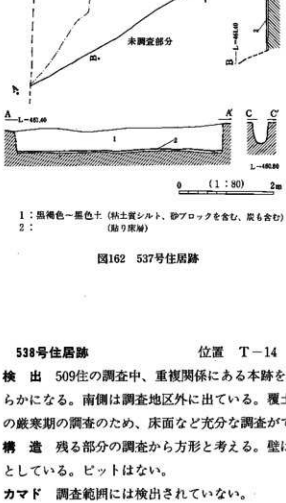
検 出 Ⅳ層上面で、土色の違う陥ち込みとして認められる。トレンチ調査で土器片の出土と床面が確認され、住居跡とする。切り合いはない。覆土は４層に分かれる。いずれもシルト質土で色調と砂の割合から分ける。その堆積状況はレンズ状で、自然埋没と理解する。

構 造 平面形態は横長の長方形である。壁はカマドのある北壁以外、急傾斜で掘り込まれる。壁高は30～36cmを測る。床は掘り込んだⅣ層を床面としていて、全体に平坦で貼り床はない。ピットはカマド右の住居東隅に１基ある（Ｐ１）。径60cmで床面から深さ30cmあり、覆土から完形の坏類出土。

カマド 北壁の中央やや右寄りに１基ある。燃焼部に天井や掛け口は残らない。袖には構築時に掘り残したⅣ層が両側に低く残る。また、袖芯材の据え跡が左側の住居側に楕円形の小ピットとして検出される。支脚石は河原礫が燃焼部の中央よりやや奥に埋設されている。火床は焚出部から支脚石までの範囲が径20cmの略円形に被熱して残る。煙道部は掘り抜いた状態で残っている。煙道口の断面は略方形。火床面から底面までの高さは約15cmである。煙道も断面が略方形で側面から上面は強く被熱しているが、底面はほとんど焼けていない。煙道の中央では天井が崩れている。煙出口は撹乱を受けて残らない。

遺 物 Ｐ１から小型鉢（3）、内黒鉢（4）が出土して、その周囲の床面から内黒坏（1）、床面中央から広口の甕（5）が出土している。坏・鉢ともに非ロクロ成形で、底部外面はケズリ調整である。５は比較的短胴で口縁が僅かに外反して、底部が突出気味の器形である。体部外面はケズリ調整で、口縁部から体部内面上半までは横ハケ調整である。

時 期 土器の様相から、古墳時代後期、７世紀中頃とする。



1：黒褐色～黒色土（軟土質シルト、砂ブロックを含む、炭も含む）
2：　　（貼り床層）

図162　537号住居跡

537号住居跡（図162）　　位置　P－16

検　出　Ⅳ層上面の調査で、土色の違う陥ち込みと一部貼り床が露出していて、住居跡と確認する。なお南側の大半は調査地区外に出ていて調査できていない。505建を切る。覆土は黒褐色から黒色の粘土質シルトでⅣ層起因の褐色砂ブロックや炭化物を含む。

構　造　北側の調査からほぼ方形と判断する。壁は調査境の壁で観察したところ、わずかに外傾する程度の急角度に掘り込まれている。床は調査区境付近に貼り床が認められる。ピットは1基確認する。円形で深さ30cm程あり、柱穴と考えられる。

カマド　北壁の中央左寄りに小半円形に壁から張り出す部分があり、そこに焼土が溜まることからカマドの痕跡と認識する。

遺　物　非ロクロで丸底気味の内黒坏（1）が出土している。

時　期　僅かな出土土器から7世紀中頃～後半頃としたい。

538号住居跡　　位置　T－14

検　出　509住の調査中、重複関係にある本跡を発見する。その平面精査から本跡が509住を切ることが明らかになる。南側は調査地区外に出ている。覆土は黒褐色の粘土質シルト。酸化鉄が散在する。なお、冬の厳寒期の調査のため、床面など充分な調査ができていない。

構　造　残る部分の調査から方形と考える。壁はやや外傾して掘り込まれる。床は掘り下げたⅣ層を床面としている。ピットはない。

カマド　調査範囲には検出されていない。

遺　物　須恵坏蓋（1）と高台坏（2）が出土している。1は口縁部の稜が明瞭な器形で、2は坏部が深く、口径は小さめで、高台中央に窪みを持っている。

時　期　土器の様相と重複関係から8世紀後半と考えられる。

601号住居跡（図163、PL35）　位置　D－20

検　出　Ⅳ層上面まで掘り下げた際、暗褐色の砂質シルトの陥ち込みとして認められる。トレンチ調査から601溝、601坑に切られることが分かる。覆土は3層に分かれ、自然埋没と考えられる。

構　造　平面形態は方形と思われる。壁は割合急角度に掘り込まれている。床は西隅付近に堅緻な部分が残る。ピットは南西側に4基あり、いずれも小ピットで、柱穴の可能性がある。

カマド　北西壁中央付近に1基付設されている。袖は遺存状態がよく、両側共に芯材の河原礫とそれを固める構築土が認められる。袖は北西壁から直交方向に伸びている。燃焼部内には支脚石らしき河原礫が覆土から見つかる。天井石と思われる偏平で横長の河原礫もカマド手前に転がった状態にある。火床ははっきりしないが、右袖側が強く被熱している。煙道はないが、燃焼部奥がやや壁から突出している。

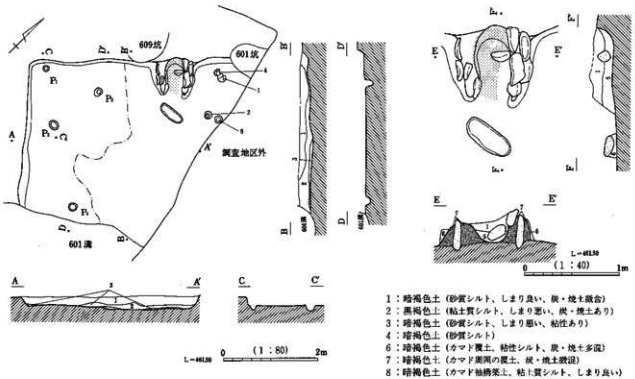


図163 601号住居跡

遺 物 カマド右横の床面から非ロクロの内黒坏（1・2・4）と小型壺（8）が出土している。他に内黒坏5点、広口の壺1点、長胴甕2点がある。他に台石（224）が出土している。

時 期 土器の様相から古墳時代後期、6世紀前葉～中葉としたい。

602号住居跡（図164、PL35） 位置 D－15

検 出 Ⅳ層上面で検出。604～606坑に切られる。覆土は3層に分かれるが、基本的に2層土の黒褐色の粘性シルトが住居全体を覆っている。

構 造 やや不整な方形の平面形態である。特にカマド壁側の東隅と北隅が歪んでいて直線的ではない。壁は急角度に掘り込まれ、深さも30cm程あり、よく残っている。床は平坦であるが軟弱である。ピットは3基あり、位置から柱穴と考えられる。方形配列を想定して東隅を精査したが、これ以上ピットは見つからない。

カマド 北東隅に1基付設されている。燃焼部は住居壁からやや突出している。両袖は遺存状況がよく、構築土と芯材の河原礫がほぼ原位置を保って見つかる。偏平な河原礫以外にも円礫等が構築土内に入れられている。袖は全体に幅が狭く長い。燃焼部内にも構築土同質の土を貼っている。火床部と支脚石は見つからない。

遺 物 カマド左床面から球胴の壺（9）が潰れた状態で出土する。北西壁際には炭化材とともに球胴の壺（6・7）が破片で出土している。他に有稜坏（1～3）、内黒坏（4）、小型甕（5）、長胴甕（8・10・11）が出土している。

時 期 土器の様相から6世紀前葉～中葉とする。

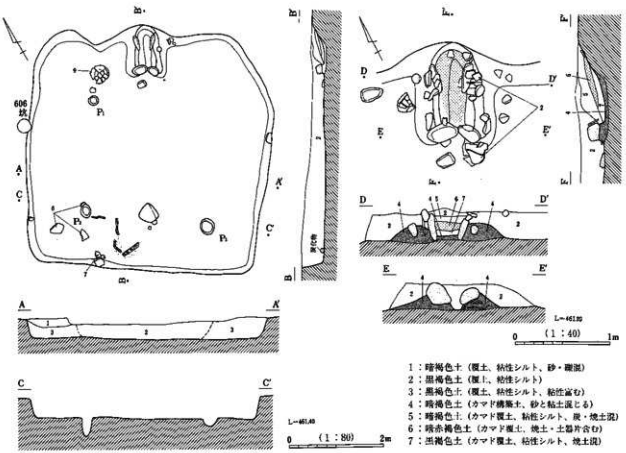


図164　602号住居跡

603号住居跡（図165、ＰＬ36）　位置　Ｊ－11

検　出　Ⅳ層上面で、他の遺構と重複する黒色土の略方形の陥ち込みを確認する。トレンチ調査の結果、本跡は607住、602溝、627坑を切っていることが分かる。覆土は黒色の砂質シルトの単層である。拳大以下の礫や炭、焼土が散在する。

構　造　南東隅がずれるが、方形の平面形態である。壁は外傾し、比較的急角度に掘り込まれている。床は全体に西側に傾斜している。貼り床はない。ピットはカマド両側の住居隅に１基ずつ検出される。いずれも皿状で大型のピットである。

カマド　北西壁の中央に１基ある。天井や掛け口は残らない。袖は左側が壁から突出するように掘り込まれていて、そこから壁は緩やかに補正しながら北隅に向かっている。袖の芯材は原位置にはないが、カマドの周囲の床付近に数点の偏平な河原礫が散在している。また、左袖には据え跡と思われる楕円形の小ピットが検出されている。火床は焚出部側に略円形に被熱して残る。

遺　物　カマド内から甕（5）、カマド左側からも甕（7）が出土している。他には須恵坏（1・2）、土師坏（3）、須恵大甕（6）がある。坏は全て回転糸切り未調整である。土師器の甕は体部が薄くケズリ調整され、口縁部が外反する東信型の甕の粗形である。他に敲石（186）が出土している。

時　期　土器から８世紀末葉～９世紀初頭と考えられる。

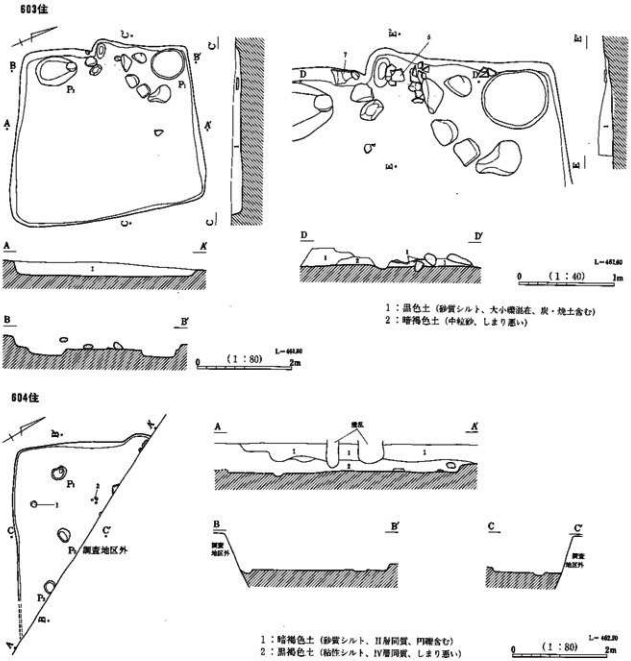


図165 603号・604号住居跡

604号住居跡（図165） 位置 J－12

検 出 IV層上面で検出。東側の大半が調査地区外のため調査できていない。覆土は黒褐色で砂混じりのシルトの単層である。

構 造 調査部分から方形と判断する。壁は外傾している。床面は掘り込んだIV層で、貼り床はない。ピットは3基確認する。南東壁側に並んで検出されるが非常に浅く、性格は不明である。

カマド 未確認であるが、南西壁の調査境がやや張り出しているため、その部分の可能性がある。

遺 物 床面から非ロクロの内黒坏が2点出土している（1・2）。いずれも底部ヘラ調整で、法量で大小に分かれる。

時 期 土器から7世紀代とする。

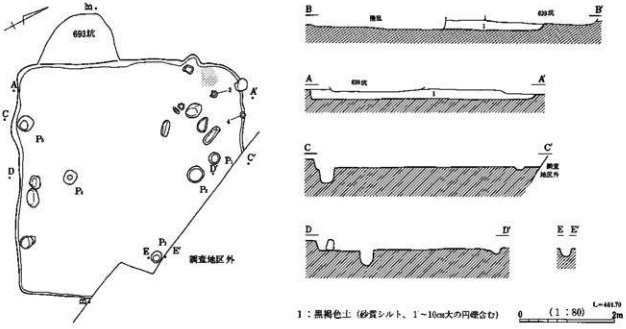


図166　605号住居跡

605号住居跡（図166、ＰＬ36）　位置　Ｊ－６

検　出　Ⅳ層上面で、他の遺構と重複して検出される。トレンチ調査で、621・639坑に切られることが分かる。覆土は黒褐色の砂質シルト。小礫を多く含み、拳大の礫も僅かにある。なお東隅は調査地区外のため調査できない。

構　造　平面形態は方形を呈する。壁はやや外傾して掘り込まれている。床は掘り込んだⅣ層を平坦にしている。貼り床はない。ピットは５基確認され、そのうちＰ４・５が円柱状に深く柱穴と考える。

カマド　調査範囲にはない。北隅に焼土の分布があるが、カマドではない。

遺　物　床面から須恵坏（２）、内黒坏（４）が出土している。他に須恵坏蓋（１）などが出土している。坏の底部はいずれもヘラ調整である。

時　期　土器の様相から、８世紀中頃と考える。

606号住居跡（図167、ＰＬ36）　位置　Ｉ－７

検　出　工事工程上、２回に分けて調査を行う。検出面はⅣ層上面で、黒褐色土の陥ち込みとして確認する。平面検出から本跡が602溝を切っていることが明らかである。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層で円礫と焼土も僅かに含む。604住覆土と似る性状である。南西部は調査地区外に出て、調査できていない。

構　造　残る部分から、平面形態は方形と判断する。壁は浅く残り、外傾している。特に北西壁は極めて緩やかな傾斜である。床は一部に掘り込んだⅣ層上部を埋め均している部分も認められるが、明確な貼り床は分からない。ピットは見つからない。

カマド　北東壁の中央右寄りに１基付設されている。燃焼部が住居壁より半円形に張り出している。天井や掛け口は残らない。袖構築材はないが、右袖に芯材の据え跡の小ピットがある。火床は燃焼部の中央左寄りに円形に広がっている。上部には焼土が堆積している。

遺　物　カマド右床面から須恵坏（１・３）が出土している。他に須恵高台坏（５）、内黒坏（６）、須恵甕（７）、ヘラケズリ調整の小型甕（８）、ロクロ調整で平底の小型甕（９）がある。須恵坏（１）は底部回転ヘ

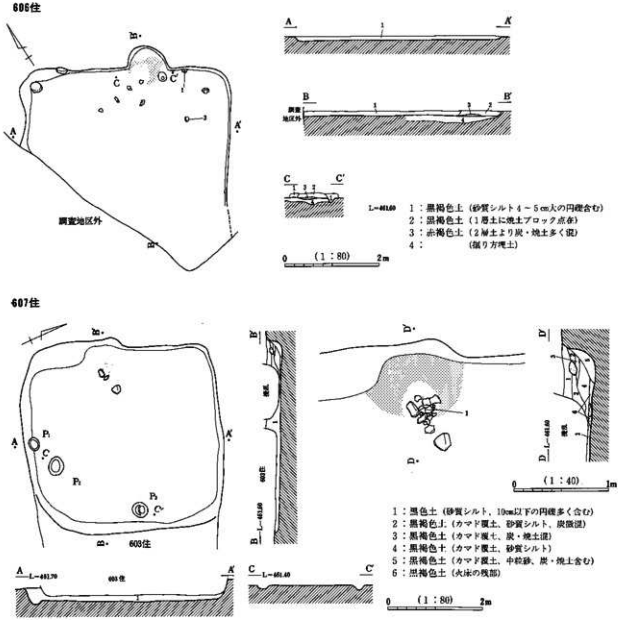


図167 606号・607号住居跡

ラケズリ未調整、2は回転糸切り未調整、3は静止ヘラ調整であり、4は静止ヘラケズリ未調整である。内黒坏は回転糸切り未調整、9の小形甕底部も回転糸切り未調整である。石器では砥石（121）がある。

時 期 土器の様相から8世紀中葉～後葉と考える。

607号住居跡（図167、PL36） 位置 J－11

検 出 603住の床下調査で、603住に切られる住居跡として確認する。検出面はⅣ層上面である。また、本跡は627坑を切る。覆土は黒色で礫混じりの砂質シルト。10cm以下の円礫を多く含む。

構 造 平面形態はほぼ方形で、北西隅以外はやや丸みを持つ。壁は北隅付近が比較的急角度に掘り込まれているが、他は緩やかに傾斜している。特にカマド左側はテラス状に残っている。床は掘り込んだⅣ層を床面として、東へ僅かに傾斜している。ピットは3基あり、いずれも円形で浅い。

カマド 西壁中央やや左寄りに1基付設される。天井や掛け口は残らない。袖としての構築材はないが、

カマド左側に続くテラス状の壁の掘り残した部分を袖に用いたと考えられる。火床はほぼ円形に残る。また燃焼部内には焼土が厚く堆積している。

遺　物　カマド内から須恵坏（1）が出土している。また須恵坏は３個体（1～3）、高台坏（4）が１個体あり、甕は東信型の甕（5）である。須恵坏は全て回転糸切り未調整で、全体に浅く開く器形である。また口径から12.5cm程と13.9cmに分かれる。５の甕の口縁部は体部から僅かに立ち上がり気味で外反している。

時　期　土器の様相から９世紀初頭～前葉とする。

その他　本跡を切る603住は住居軸線や規模が共通し、遺物の時期差もほとんどない。またカマドは設置位置が正反対であるが、形状はよく似ている。加えて本跡覆土には同時期の住居跡と遠い円礫が多数含まれることから、本跡を埋戻して、やや位置をずらした位置に603住を再構築したと考えたい。

イ 掘立柱建物跡

調査区全体で26棟検出されている。建物跡の時期は、柱穴掘り方出土の土器片や住居跡との重複関係から推定すれば、大半が古墳時代後期頃に収まりそうであり、奈良時代頃と考えられるのは4棟、平安時代後半頃と考えられるのは1棟に過ぎない。

古墳時代後期の分布はある程度のまとまりを持ち、大グリッドでいえば、北からⅡT区東とⅢP区西付近（4棟）、ⅢP区南とⅢU区北付近（7棟）、ⅢU区東付近（3棟）、ⅣG区北東付近（5棟）のほぼ4カ所に分けられる。その形態は大半が側柱式であり、総柱式は⑤区に1棟だけである。柱穴の掘り方は円形と方形があり、2間×3間で面積25m²を越えるような大形の建物跡では、掘り方が方形で大きく、覆土差から円形で細い柱痕が確認できることが多い。1間×1間から2間×2間で面積10～15m²程の小形の建物跡では柱穴は比較的小さな円形の掘り方を持つことが多い。主軸方位は東西または南北を意識したものと、30°前後東西に振れるものとに分かれ、その傾向は上記した分布範囲内では共通しそうである。

奈良時代と考えられる建物跡はⅡT区東（2棟）とⅡY区南（1棟）、ⅢB区北西（1棟）に分かれ、いずれも1間×2間や2間×2間の小ぶりのもので、そのうち2棟が総柱式である。

平安時代後半の1棟は底が付くと考えられる比較的大形の建物跡である。柱穴は小さな円形で、なかには礎盤石のように偏平な河原礫を残す柱穴もある。

301号建物跡（図168、PL37） 位置 G－20、H－16

検 出 Ⅳ層上面で検出する。重複関係はない。覆土は黒褐色土である。

構 造 浅い円形の陥ち込みが並ぶため、掘立柱建物跡の一部と判断する。平面形は少なくとも1間×2間以上の構造と推測するが、南側に柱穴がなくはっきりしない。主軸は現状でN－65°－Wを指す。

遺 物 古墳時代後期の内黒坏や甕の小片が僅か出土している。

時 期 遺物からは古墳時代後期といえる。

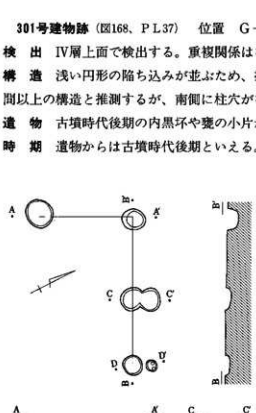


図168 301号建物跡

302号建物跡（図169、PL37）

位置 B－23・24、G－3・4

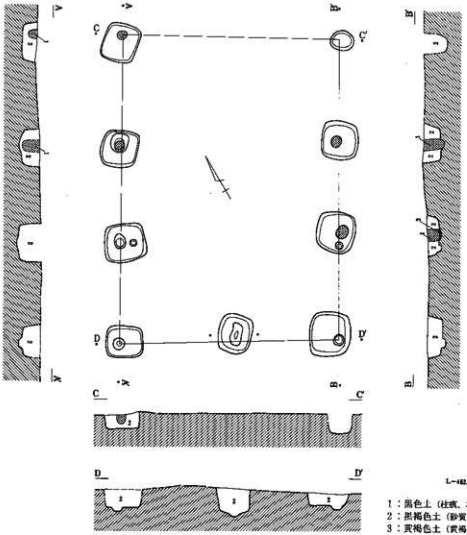
検 出 Ⅳ層上面で検出。319・323・336・341住、306建、304溝を切り、378住に切られる。

構 造 南面と対をなす柱穴がないものの、平面形は2間×3間の側柱式で、南北棟である。規模は桁行6.54m、梁行4.66mで、面積30.48m²を測る。主軸はN－31°－Eを指し、柱間は桁行で1.9～2.3m、梁行で2.1～2.5mを測る。柱穴は底面の中央が窪む方形が基本であり、柱痕は円形に残って一部は掘り方底面まで及んでいる。なお東隅のみ掘り方が円形であるが、深さはほぼ同一である。

遺 物 古墳時代後期の坏や高坏、甕の小片が出土している。

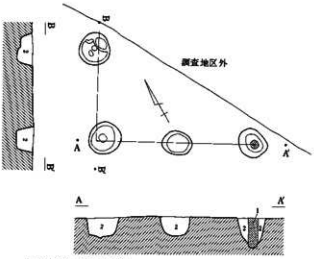
時 期 重複関係と土器からすると、古墳時代後期、7世紀代頃の可能性が高い。

302建



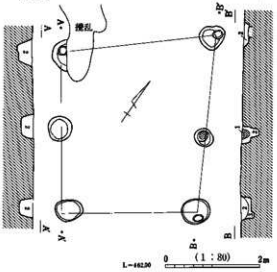
1：黒色土（柱痕、均質、しまり悪い、粘性あり）
2：黒褐色土（砂質シルト、黄褐色砂ブロック散在）
3：黄褐色土（黄褐色土と黒褐色土のブロック土）

303建



1：黒色土（柱痕、均質）
2：暗褐色土（砂質土、褐色砂ブロック混じる）

305建



1：暗褐色土（柱痕、砂混じり粘土質シルト）
2：暗褐色土（砂混じり粘土質シルト）
3：にぶい黄褐色土（褐褐色土と黄褐色土のブロック土）

図169　302号・303号・305号建物跡

303号建物跡（図169、ＰＬ37） 位置 Ｂ－14・19

検 出 Ⅳ層上面で検出し、重複関係はない。円形の柱穴が規則的に並ぶため、掘立柱建物跡の一部と考えるが、北東側は調査地区外のため未検出である。

構 造 現状で平面形は１間×２間以上の東西棟、側柱式と想定する。主軸はＮ－31°－Ｅを指す。柱痕は南隅１基に残り、円形で掘り方底面まで及び、底面は窪んでいる。掘り方の深さはほぼ一定であるが、柱痕の残る１基が最も深い。

遺 物 内黒坏や甕、須恵高台坏の小片、土器片板（54）などが出土している。

時 期 遺物からすると、奈良時代だろうか。

304号建物跡 欠番

305号建物跡（図169、ＰＬ37） 位置 Ｇ－３

検 出 Ⅳ層上面で検出し、315・316住を切っている。

構 造 平面形はやや歪むものの、１間×２間の南北棟、側柱式と考える。規模は桁行3.4～3.9ｍ、梁行2.7～3.1ｍで、面積は11.38㎡を測る。主軸はＮ－36°－Ｗを指す。柱間は桁行1.6～2.1ｍ、梁行2.7～3.1ｍを測り、柱穴は円形を基本として、底面は有段状になるものや平石が置かれているものがある。残っている柱痕は円形で覆土中位まで入っている。深さはほぼ一定しているが、平石を持つ柱穴は浅い。

遺 物 古墳時代後期の坏、内黒坏、須恵坏、甕の小片が出土している。

時 期 土器と重複関係から古墳時代後期と考えられる。

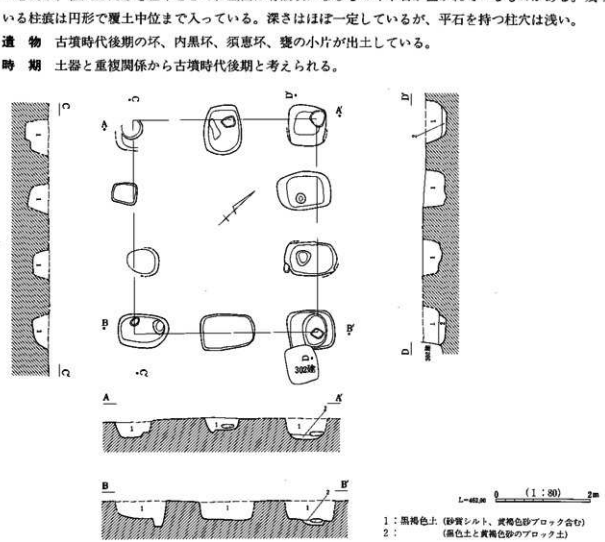


図170 306号建物跡

306号建物跡（図170、PL37）　位置　B－23、G－3

検　出　Ⅳ層上面で検出し、315・327・336・337・345住を切り、302建に切られている。

構　造　平面形は2間×3間の南北棟、側柱式で、規模は桁行4.5m、梁行3.9m、面積は17.71m²を測る。主軸はN－48°－Wを指す。柱間は桁行1.3～1.6m、梁行1.8～2.0mを測り、柱穴は方形を基本としているが、西側は検出状況が悪く不定形である。底面は有段状になるものがあり、柱の据え跡と判断される。柱穴の深さはほぼ一定で、有段部が深く掘り込まれるものがある。また鍛冶滓（31・32）が出土している。

時　期　重複関係から7世紀以降の築造と思われる。

307号建物跡　欠番

309号建物跡（図171）　位置　G－9・10・15

検　出　Ⅳ層上面で検出し、306・325・377住を切っている。攪乱で西隅の柱穴が消滅する。

構　造　北西面に対になる柱穴がないものの、平面形は3間×3間の側柱式である。規模は桁行5.6m、梁行5.14mと桁梁長には大差なく、面積は28.78m²を測る。主軸はN－54°－Wを指し、柱間は桁行1.7～2.0m、梁行1.6～1.9mを測る。柱穴は方形を基本として、底面に柱の据え跡が残るものがある。柱痕が残るものは1基だけであり、柱痕は柱穴壁際から張り出した位置で掘り方底部まで及んでいる。

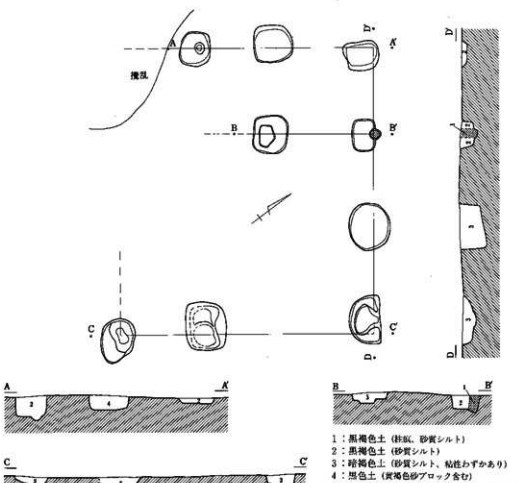


図171　309号建物跡

遺 物 主に古墳時代後期の坏、内黒坏、甕の破片が出土している。

時 期 古墳時代、7世紀頃と思われる。

401号建物跡（図172、PL37） 位置 P－23

検 出 Ⅳ層上面で検出し、南面の柱穴の重複関係から、本跡は402建の建て替えと考えられる。

構 造 東面に対になる柱穴はないものの、平面形は1間×2間の南北棟で、側柱式である。規模は桁行4.5～4.7m、梁行2.1～2.4mで面積は10.61m²を測る。主軸はN－5°－Eを指す。柱穴は円形が基本であるが、南面の2基は402建の南面と同様に、浅い皿状の土坑（401・438坑）範囲に円形の柱穴を設けていて、この皿状の土坑は402建の構築時か本跡改築時に関連すると思われる。深さは均一であり、柱痕は平面不整形で、底面まで達している。

遺 物 古墳時代後期の内黒坏や甕の小片が出土している。

時 期 土器から古墳時代と考えられる。

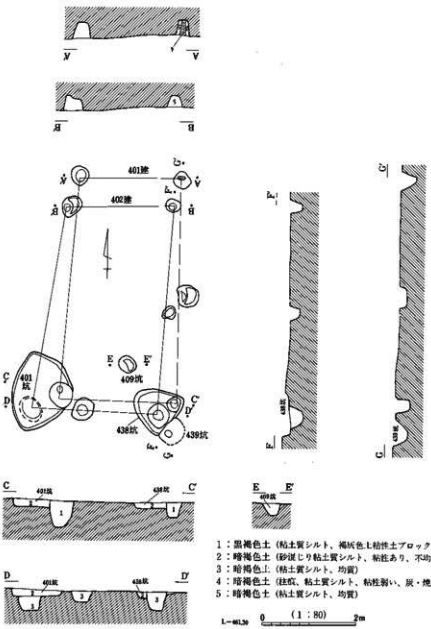


図172 401号・402号建物跡

402号建物跡（図172、ＰＬ37）　位置　Ｐ－23

検　出　Ⅳ層上面で検出し、438坑を切り、401建と401坑に切られる。

構　造　南面と東面に対応する柱穴がないものの、平面形は２間×２間の南北棟、側柱式が想定される。規模は桁行4.3～4.4ｍ、梁行2.2～2.6ｍで、面積10.70㎡を測る。主軸はＮ－７°－Ｅを指し、401建より東に２°ずれる。柱間は桁行2.1～2.2ｍ、梁行1.1～1.6ｍで、柱穴は円形である。深さは北面が浅い。

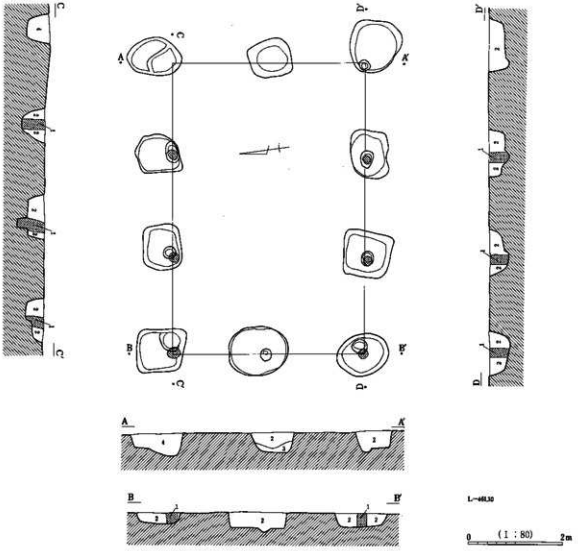
遺　物　古墳時代後期の内黒坏や甕の小片が出土している。

時　期　土器の様相からすれば、古墳時代後期と考えられる。

403号建物跡（図173、ＰＬ38）　位置　Ｐ－22・23、Ｕ－２・３

検　出　Ⅳ層上面で検出し、410住を切っている。

構　造　平面形は２間×３間の東西棟、側柱式で、規模は桁行6.1ｍ、梁行4.0ｍで、面積26.84㎡を測る。主軸はＮ－98°－Ｅを指し、柱間は桁行1.9～2.1ｍ、梁行1.9～2.0ｍを測る。柱穴は方形を基本として、



1：黒褐色土（粘質、粘性シルト、しまり悪い）
2：黄灰色土（埋土、砂質シルト、黄褐色砂質土ブロック混じる、堅くしまる）
3：黒褐色土（粘土質シルト、炭・焼土僅か含む）

図173　403号建物跡

円形を示すのは、検出段階の誤りである。底面は柱の据え跡が窪むことが多く、柱痕は円形で底面まで達していて、埋土の2層はブロック土が入り堅く締まっている。

遺 物 主に古墳時代の甕片が出土しているが、奈良・平安時代の須恵壺、坏蓋の小片も出土する。

時 期 古墳時代から奈良時代と推定する。

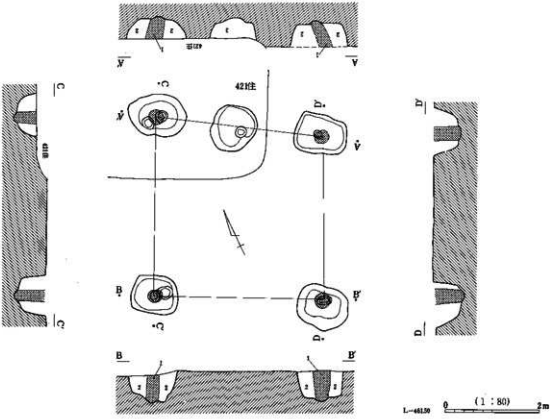
404号建物跡（図174、PL38・39） 位置 U−10・15

検 出 Ⅳ層上面で検出し、423住を切り、421住に切られている。

構 造 北面と対になる柱穴がないものの、平面形は1間×2間の南北棟、側柱式で、規模は桁行3.4~3.8m、梁行3.5m、面積12.62m²を測る。主軸はN−27°−Eを指し、柱間は桁行3.4~3.8m、梁行1.7~1.8mを測る。柱穴は方形が基本で、円形に近いものもあり、柱痕は円形で、掘り方底面まで達している。深さは一定している。

遺 物 古墳時代後期の内黒坏や甕の小片が出土している。

時 期 重複関係と土器から、古墳時代後期7世紀後半と考えられる。



1：暗褐色土（砂質、粘土質シルト）
2：にぶい黄褐色土（埋土、砂混じり粘土質シルト）
3：黒褐色土（砂混じり粘土質シルト、褐色土ブロック含む）

図174 404号建物跡

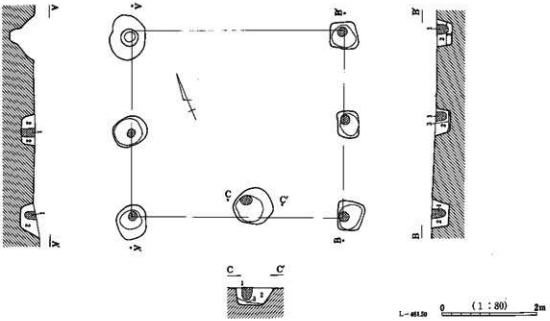


図175　405号建物跡

405号建物跡（図175、ＰＬ39）　位置　Ｕ－19・20・24・25

検　出　Ⅳ層上面で検出し、447・446住を切っている。

構　造　南面と対になる柱穴がないものの、平面形は２間×２間の南北棟、側柱式で、規模は桁行3.9ｍ、梁行4.4ｍ、面積17.56㎡を測る。主軸はＮ－22°－Ｅを指し、柱間は桁行1.7～2.0ｍ、梁行2.1～2.4ｍを測る。柱穴は方形を基本とすると思われるが、円形のものもある。柱痕は円形で、覆土下位から底面まで達している。深さはほぼ一定であるが、北隅の１基が深い。

遺　物　内黒高坏に448住－16などと同型の須恵器模倣の器形のものがある。

時　期　出土遺物と重複関係から、７世紀終わり～８世紀初め頃と推測する。

406号建物跡（図176、ＰＬ39）　位置　Ｕ－20・25

検　出　Ⅳ層上面で検出し、362・433住を切っている。

構　造　柱穴が浅く検出状況は悪いが、現状から２間×４間の南北棟で、そのうち西側の１間×４間を庇部と考える。規模は桁行7.6ｍ、梁行4.1、面積25.01㎡を測り、主軸はＮ－24°－Ｅを指す。柱間は桁行1.6～2.5ｍ、梁行1.5～2.3ｍを測り、柱穴は円形を基本としている。覆土には砂礫層が堆積していて、流水の影響を受けていることが示唆される。また本跡範囲内に小ピットが幾つかあるが、覆土も同質であるから本跡に関連するものと判断する。

遺　物　古墳時代の後期の土器片が出土しているが混入であると思われる。

時　期　検出状況が悪い点と砂礫層の堆積から、埋没時期は平安時代10世紀以降と考えられる。

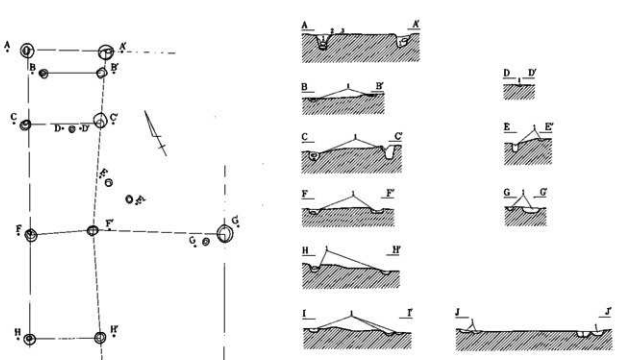


図176 406号建物跡

407号建物跡（図177、PL37） 位置 U－16・17・21・22

検 出 Ⅳ層上面で検出し、455・467住、303溝を切り、4571坑に切られる。西側が調査地区外に出る。

構 造 現状から、少なくとも2間×3間の南北棟、総柱式である。主軸はN－1°－Wを指し、柱間は桁行2.1～2.2m、梁行1.6～2.2mを測る。柱穴は円形を基本として、底部はやや有段のものがある。深さはほぼ一定している。

時 期 重複関係から、構築は7世紀後葉以降と考える。

408号建物跡（図177） 位置 P－22

検 出 Ⅳ層上面で検出し、407住を切っている。

構 造 南面と対になる柱穴がないものの、平面形は1間×2間の南北棟、側柱式で、規模は桁行4.7m、梁行3.4m、面積15.79m²を測る。主軸はN－12°－Wを指し、柱間は桁行4.4～4.7m、梁行1.4～1.9mを測る。柱穴は円形が基本であるが、底面が2カ所窪む楕円形のものもある。深さは北東隅の1基が浅い。

時 期 重複関係から、7世紀後葉以降と思われる。

409号建物跡（図178） 位置 P－16

検 出 Ⅳ層で検出した。402溝を切っている。

構 造 現状では平面形は1間×2間の南北棟、側柱式で、規模は桁行5.6m、梁行1.9m、面積10.75m²を測る。主軸はN－35°－Wを指し、柱間は梁行で1.9mを測る。柱穴は円形が基本であるが、楕円形で有段状の底面を持つものもある。深さはほぼ同じである。

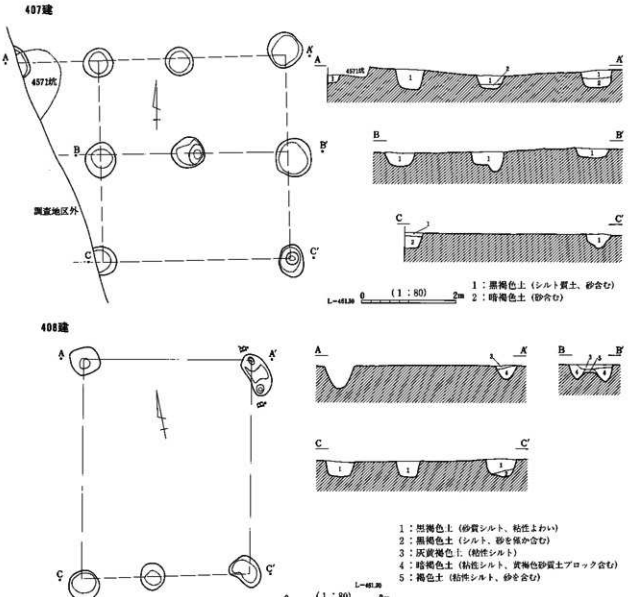


図177　407号・408号建物跡

遺　物　古墳時代後期の7世紀代にあたる内黒坏や甕の小片が出土している。

時　期　重複関係と遺物から、古墳時代後期の7世紀代築造の可能性がある。

410号建物跡（図178）　　位置　P－22・23

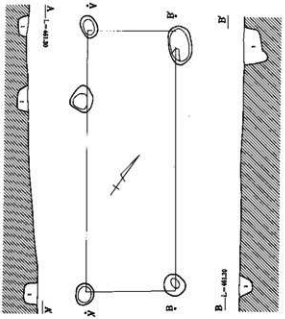
検　出　Ⅳ層上面で検出する。

構　造　平面形はやや歪み、1間×2間の南北棟の側柱式で、規模は桁行5.1m、梁行3.6～4.3mを測る。主軸はN－12°－Eを指し、柱間は梁行で1.4～2.2mを測る。柱穴は円形で深さは北側が浅い。

遺　物　古墳時代後期と思われる坏などの小片が出土している。

時　期　遺物から古墳時代後期と考える。

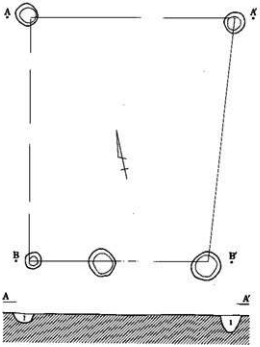
409建



1：褐色土（粘土質シルト、砂を含む、粘性弱い）

0 (1：80) 2m

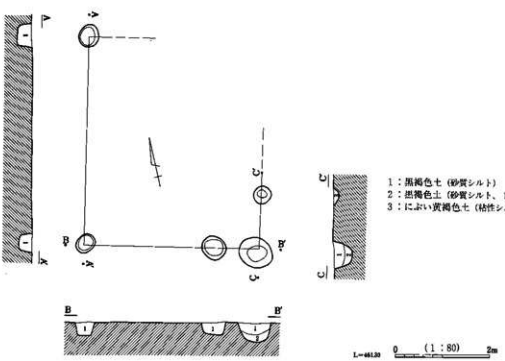
410建



1：暗褐色土（粘土質シルト、砂を含む）
2：黒褐色土（シルト、しまり良い）
3：黒褐色土（シルト、2層土より砂多い）

0 (1：80) 2m

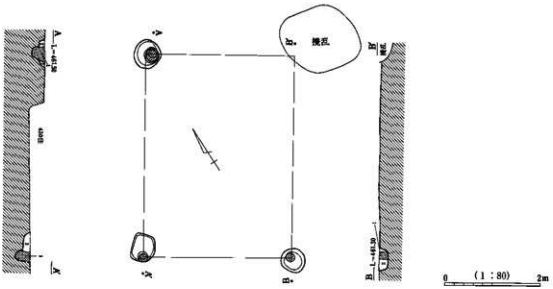
411建



1：黒褐色土（砂質シルト）
2：黒褐色土（砂質シルト、1層土より砂質が増す）
3：にぶい黄褐色土（粘性シルト、砂含む）

0 (1：80) 2m

図178 409号・410号・411号建物跡



1：黒褐色土（柱痕、粘性シルト）
2：黒褐色土（埋土、砂質土とシルト土が交互に堆なる）

図179　412号建物跡

411号建物跡（図178）　　位置　P－22・23、U－3

検　出　Ⅳ層上面で検出する。北東隅の柱穴は見つかっていない。

構　造　平面形は現状で1間×1間の南北棟、側柱式であり、南東隅の1基周辺の土坑も関連する可能性がある。規模は桁行4.3m、梁行3.6m、面積15.72m²を測り、主軸はN－15°－Eを指す。柱穴は円形であり、南東隅の柱穴が他より深い。

遺　物　古墳時代後期の内黒坏、甕の小片が出土している。

時　期　土器から古墳時代後期と考えたい。

412号建物跡（図179）　　位置　U－10・15

検　出　Ⅳ層上面で検出し、東隅の柱穴が撹乱を受けて見つからない。430住を切っている。

構　造　平面形は1間×1間の南北棟、側柱式であり、規模は桁行4.3m、梁行3.1mで、面積13.33m²を測る。主軸はN－32°－Eを指し、柱穴は円形で、円形の柱痕を残している。柱痕は底面まで達し、底面はその部分が窪んでいる。深さは西隅が深い。

時　期　重複関係から古墳時代後期、7世紀後半以降と考えられる。

501号建物跡（図180、PL40）　位置　P－6・11

検　出　Ⅳ層上面で検出し、503住を切る。南東隅の柱穴は見つかっていない。

構　造　平面形は2間×4間の東西棟の総柱式で、規模は桁行4.1m、梁行3.6m、面積14.99m²を測る。主軸はN－97°－Eを指し、柱間は桁行で1.3～1.4m、梁行1.6～1.8mを測る。柱穴は円形を基本として、底面は有段状のものが多く、河原礫が置かれているものもある。ただ河原礫はⅣ層内に含まれるものと同質であるため、意識的においたのかは不明である。深さはほぼ一定している。

遺　物　奈良時代の坏、須恵高台坏、甕などの小片が出土している。

時　期　重複関係と遺物から、奈良時代前半頃と思われる。

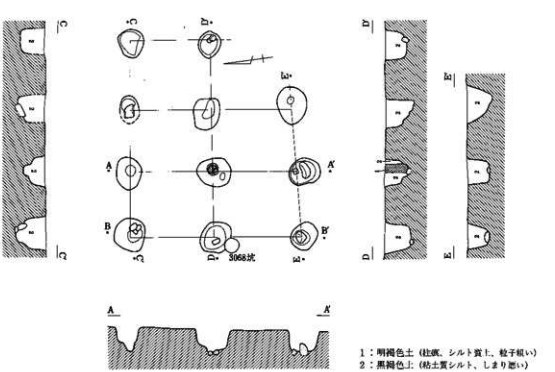


図180 501号建物跡

502号建物跡（図181、ＰＬ40） 位置 Ｔ－５・９・10

検 出 Ⅳ層上面で検出し、577坑を切り、511住、567・571坑、507建に切られる。

構 造 平面形は１間×２間の側柱式で、規模は桁行3.1ｍ、梁行2.9ｍで、面積9.24㎡を測る。主軸はＮ－55°－Ｗを指し、柱間は桁行3.0～3.1ｍ、梁行1.2～1.6ｍを測る。柱穴は円形で四隅はいずれも深い。柱穴は明確ではないが、底面が有段状を呈するものがある。

時 期 重複関係と、503建に形状や規模が似ることから、奈良時代以前と考えられる。

503号建物跡（図181、ＰＬ40） 位置 Ｔ－５

検 出 Ⅳ層上面で検出し、511・517住に切られる。

構 造 平面形は１間×２間の南北棟、側柱式で、規模は桁行3.3ｍ、梁行3.1ｍ、面積10.49㎡を測る。主軸はＮ－36°－Ｅを指し、柱間は梁行で1.3～1.6ｍを測る。柱穴は円形で、柱痕があるものは柱部分ともう１カ所が深く窪んでいる。深さは均一ではないが、全体に非常に深い。

時 期 重複関係から奈良時代以前と思われる。

504号建物跡（図181、ＰＬ40） 位置 Ｔ－11・14

検 出 Ⅳ層上面で検出し、535住を切り、西側は調査地区外に出ている。

構 造 現状では１間×２間の南北棟、側柱式であるが、西側に規模は広がると思われる。主軸はＮ－18°－Ｅで、柱間は桁行1.9～2.0ｍ、梁行1.5～1.8ｍを測り、柱穴はほぼ円形で底面は平坦である。

時 期 重複関係から７世紀後半以降と考えられる。

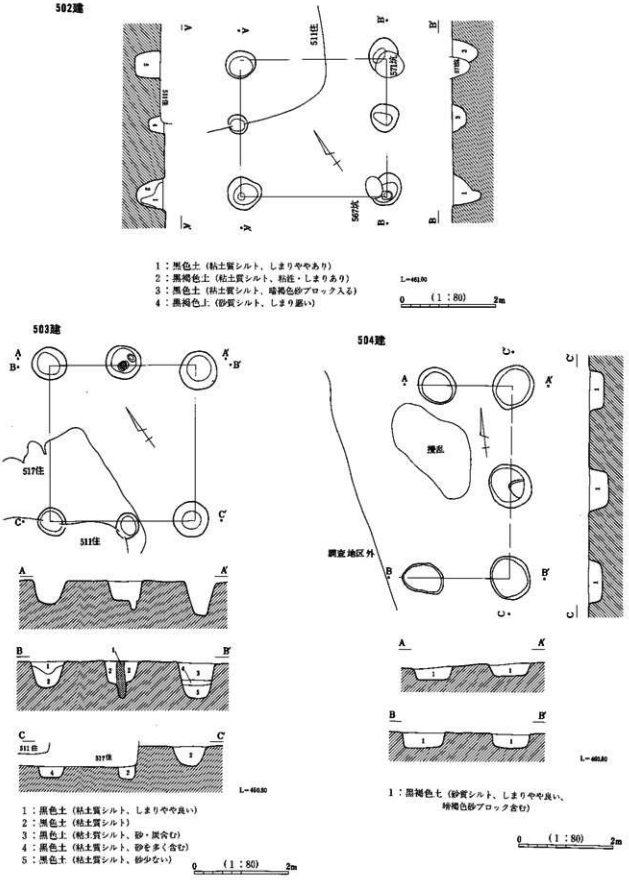


図181　502号・503号・504号建物跡

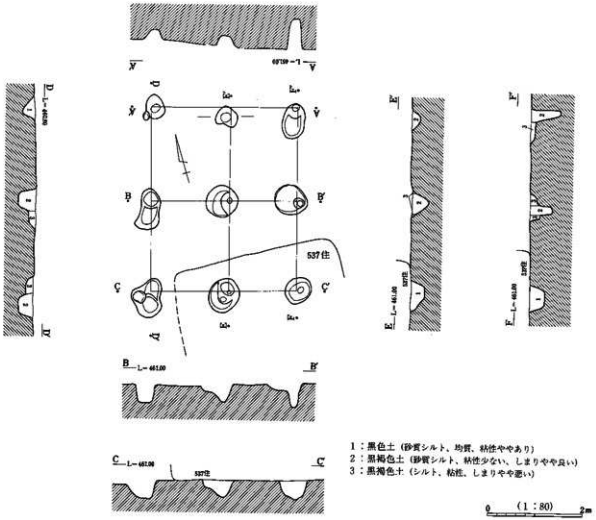


図182 505号建物跡

505号建物跡（図182、ＰＬ40） 位置 Ｐ－11・16、Ｔ－15・20

検 出 Ⅳ層上面で検出し、537住に切られる。

構 造 平面形は２間×２間の南北棟、総柱式で、規模は桁行3.8ｍ、梁行3.2ｍ、面積12.22㎡を測る。主軸はＮ－16°－Ｅを指し、柱間は桁行1.8～2.1ｍ、梁行1.5～1.6ｍを測る。柱穴は円形で、底面は有段状のものが多い。深さは有段形の底面を持つものが深い。

遺 物 内黒坏や須恵坏、甕の小片が出土している。

時 期 重複関係からすると、７世紀後半以前の構築となるが奈良時代の503建と構造が似ているため、本来の重複関係と食い違う可能性もある。

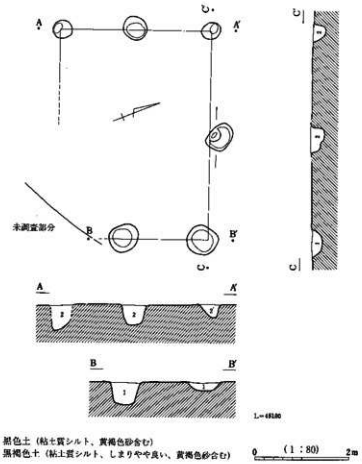


図183　506号建物跡

506号建物跡（図183）　　位置　T－10・15、P－6・11

検　出　Ⅳ層上面で検出し、510住に切られる。南東隅は調査地区外に出ている。

構　造　平面形は現状で2間×2間の東西棟、側柱式で、規模は桁行4.4m、梁行3.1m、面積13.90m²を測る。主軸はN－112°－Eを指し、柱間は桁行2.2m、梁行1.5～1.6mを測る。柱穴は円形で深さは北側が浅くなる傾向がある。

遺　物　坏や甕の小片が出土している。

時　期　重複関係と土器から7世紀以前と思われる。

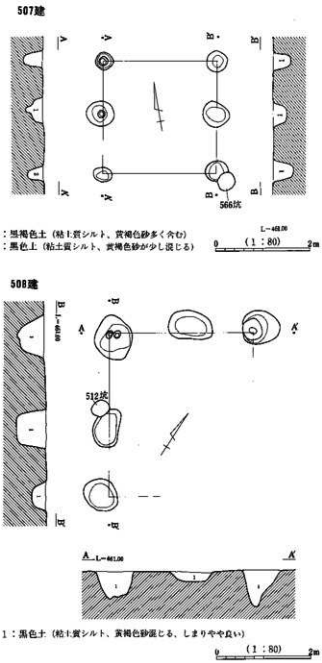


図184 507号・508号建物跡

507号建物跡（図184）

位置 T－5・10

検 出 Ⅳ層上面で検出し、502建を切り、566坑に切られる。

構 造 平面形は1間×2間の南北棟、側柱式で、規模は桁行2.4m、梁行2.4m、面積5.76㎡を測る。主軸はN－10°－Eを指し、柱間は桁行で1.1～1.2mを測る。柱穴は円形で、西側の底面は有段のものがある。深さはほぼ一定している。

遺 物 奈良・平安時代相当の坏や甕の小片が出土している。

時 期 重複関係と土器から奈良時代から平安時代と思われる。

508号建物跡（図184）

位置 P－1・6

検 出 Ⅳ層上面で検出し、512坑に切られる。また東隅の柱穴は見つかっていない。

構 造 現状で、平面形は2間×2間の側柱式で、規模は桁行3.4m、梁行3.0m、面積10.53㎡を測る。主軸はN－34°－Wを指し、柱間は桁行1.4～2.0m、梁行1.3～1.7mを測る。柱穴は円形で底面が窪むものもあり、深さは一定していない。

遺 物 古墳時代後期から平安時代の坏や甕の小片が出土している。

時 期 土器から考えると、古墳時代後期から平安時代までの幅を考える。

ウ　礎石建物跡

③区で検出された掘り方を持つ礎石群を308号建物跡として取り上げる。また同じ性格のＳＨ301も関連して、ここで記す。

308号建物跡（図185～187、ＰＬ41・42）　位置　Ａ－20、Ｂ－11・12・16・17

検　出　Ⅲｂ層中を検出中に、大形の礫とそれを囲む拳大の礫が認められた。その後、Ⅳ層上面まで検出面を下げたため、礫が露出する状態で調査を継続した。当初、配石遺構（ＳＨ）として個別に調査したが、掘り込みの中央にある礫がいずれも平坦な部分が上を向いていることや、Ｐ２・３・４が直線上に並びＰ１・５もそれに平行することから、その５基をまとめて礎石建物跡とした。なお、360・393・398・3400住を切っている。

構　造　現状では平面形は１間×２間で、主軸をＮ－51°－Ｅを指している。規模はＰ２～４間で14.84ｍ、直交するＰ１～２間で4.4ｍを測る。

Ｐ１の構造　掘り方は方形で規模1.28×1.12ｍで深さ0.3ｍである。中央に径0.9ｍ程の礫が上部を平坦な状態に据えられ、その底部から周囲に拳大の礫が込められている。また東側にやや大きな亜円礫が崩れたように集中している。

Ｐ２の構造　Ｐ１から北西方4.4ｍにある。掘り方は方形で規模1.2×1.0ｍ、深さ0.5ｍ程あり、中央に最長幅0.7ｍで略三角形の礫が据えられている。やはりこの礫も平坦面を上面にしている。また底面から周囲が拳大の礫で固められている。

Ｐ３の構造　Ｐ２から南西方8.6ｍにあり、掘り方は略方形で規模1.4×1.3ｍ、深さ0.7ｍを測る。中央に最長幅0.9ｍの略方形の礫が据えられている。他の礎石と異なり、平坦面は掘り方上面より低い位置にある。また拳大の礫は底面から周囲だけでなく、礎石の上部まで覆っていた調査所見があるが、平面図化の段階では上部の礫は取り除かれていた。

Ｐ４の構造　Ｐ２から北西方14.8ｍの位置にあり、この直線上にＰ３もある。掘り方は略円形で規模は径1.0ｍ、深さ0.5ｍを測る。その中央には長径0.7ｍの略楕円形の礫が平坦面を上にして据えられている。礫の底面から周囲には拳大の礫が込められていたが、図化段階には取り去られていた。

Ｐ５の構造　Ｐ１から南東方10.2ｍにあり、掘り方は方形で規模1.0×0.95ｍ、深さ0.3ｍを測る。その中央には最長幅0.7ｍの略三角形の礫が据えられている。礫の平坦面は上にあり、底面から周囲まで拳大の礫で固められている。

遺　物　本跡が切る遺構からの混入と考えられる坏や甕などの土器片が出土している。

ＳＨ301（図187、ＰＬ42）　位置　Ｇ－１

検　出　Ⅳ層上面での検出段階で中央の礫はすでに10cm程露出している。また周囲から拳大程度の礫が多数認められ、その分布する範囲のほぼ外縁に黒褐色シルトの陥ち込みが見えたため、意図的な構造物と判断して配石遺構（ＳＨ）とした。303溝を切っている。

構　造　掘り方は楕円形で規模1.6×1.0、深さ0.25ｍを測る。なお中央の礫上部からの深さは0.4ｍある。掘り方中央の礫は楕円形で、現状で0.9×0.5ｍ程あり、平坦な自然面を上にして据えられている。下部は平坦な破面で、側面一方に幅５cm程のタガネ痕が７カ所並ぶことから、本来更に大きな転石を、タガネで割り取って運び込んだと思われる。また拳大前後の河原礫は中央の礫の下部から周囲に埋められていた。

遺　物　信濃国分寺瓦と思われる平瓦の小片（35）が小礫と混じって中央の礫下から出土している。

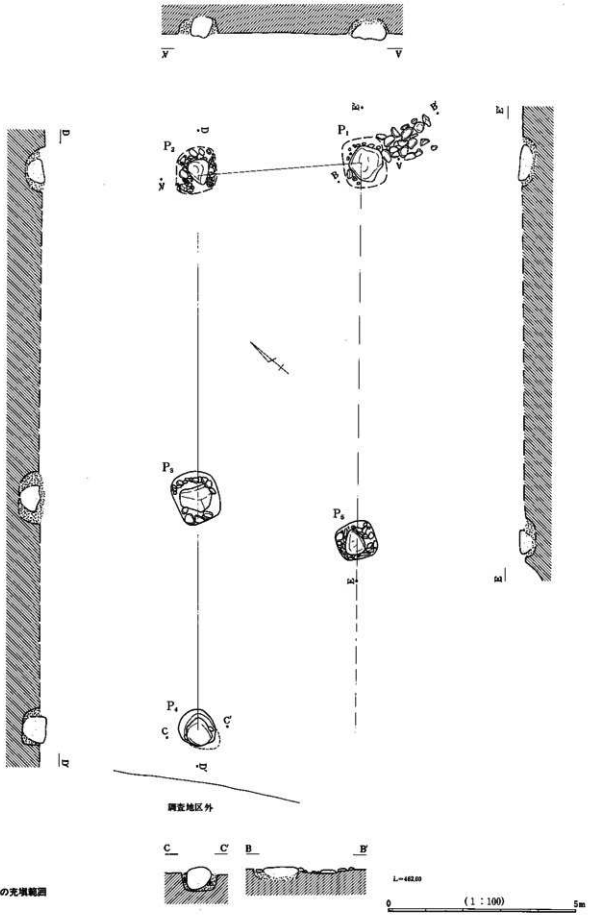


図185 308号建物跡（1）

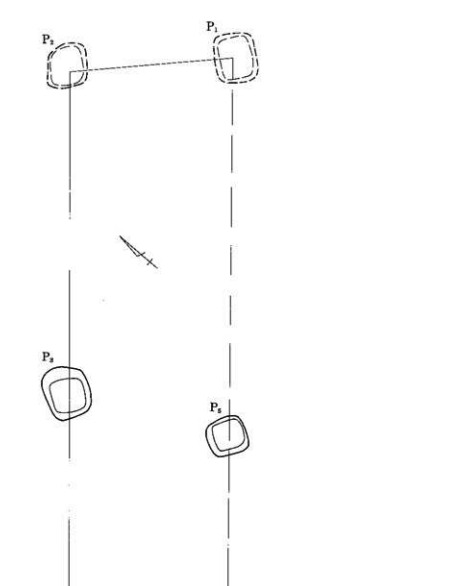


図186　308号建物跡（２）

308号建物跡とＳＨ301の関係　ＳＨ301は最も近い308建Ｐ５から南方13.8ｍ、またＰ２とＰ４を結ぶ主軸線から直角距離で15.6ｍ離れている（図187）。遺構の性格は、Ⅲｂ層の検出中から見つかっていた点や中央の礫や掘り方、小礫の状況など非常に共通している。現状での礫上部の標高は308建が461.74～461.82ｍで、ＳＨ301は461.90ｍである。この差をどのように捉えるべきか分からないが、少なくともどちらの遺構も同時期に構築されて、礎石として機能していたとは考えていいだろう。しかし現状では位置が離れ過ぎていて、同一の建造物の礎石とは想定できない。

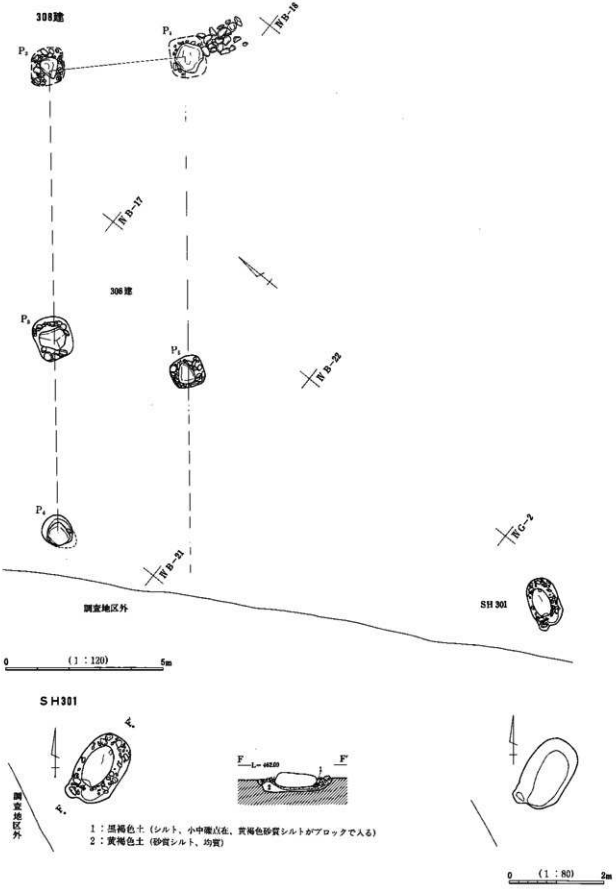


図187 308号建物跡（3）・SH301

構築方法　いずれの場合もまず掘り方を穿って、そこに拳大の礫を並べ、平坦面を上にして礎石を据え、掘り方と礎石の隙間に拳大の礫を詰めている。またＰ１東側の崩れた礫の集中とＰ３の礎石上部まで礫が覆っていた所見から、実際の掘り方は現在より深く、そこへ礎石を据え入れて柱を立てた後、更に礎石と柱を覆うように礫を入れた可能性がある。

時　期　308建もＳＨ301もⅣ層上面では検出面が低く、本来の生活面はもっと上位であったと思われる。これは③・④区で検出された平安時代の住居跡がⅣ層上面では上部が削られていて、ほとんど壁が残らない状態と似ている。またＳＨ301礎石下から国分寺瓦と思われる平瓦が出土したことから、構築時期は平安時代以降であると考えたい。

エ　柱穴列（ＳＡ）

同じような性格の土坑が直線状に並ぶ遺構を、「柱穴列（ＳＡ）」とした。機能としては柵跡などが考えられるが、全て遺構の密集した③・④区から検出されているため、未検出の掘立柱建物跡の列の一つを示している可能性が高いため、「柱穴列（ＳＡ）」に止めた。検出数は③区から３基、④区から４基の合わせて７基である。

ＳＡ301（図188、ＰＬ43）　位置　Ｇ－15・20

Ⅳ層上面で検出する。円形の柱穴が３基並び、芯々距離3.8ｍを測る軸線はＮ－45°－Ｅを指す。柱穴の深さはいずれも浅く、覆土は黒褐色土の単層である。またこの南東に301建が隣接している。

遺　物　坏や内黒坏、甕の小片が出土している。

ＳＡ302　欠番

ＳＡ303（図188）　位置　Ｂ－25

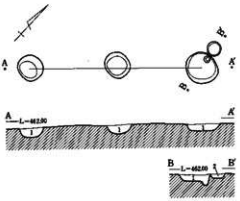
Ⅳ層上面で検出する。当初は個別の土坑としていたが、直線に並ぶ柱痕を持つ同規模の３基をＳＡ303とした。338住を切っている。いずれも掘り方は円形で、中央に円形の柱痕が、底面または覆土下位まで達している。芯々距離2.6ｍを測る軸線はＮ－61°－Ｅを指している。掘り方の深さはほぼ均一で、西側の１基の柱痕は底面を越えて地山に突出している。

時　期　重複関係から６世紀前半以降と思われる。

ＳＡ304（図188）　位置　Ｂ－23、Ｇ－２

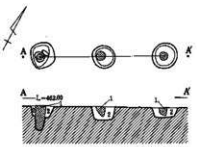
Ⅳ層上面で検出した、柱痕を持つ円形の土坑２基をＳＡ304とした。当初掘立柱建物跡と考えたが、方形に組める柱穴がなかった。327住との重複関係は不明である。芯々距離3.5ｍを測る軸線はＮ－33°－Ｅを指す。南側の柱穴はほぼ円筒形であったと思われ、北側の柱穴は、底面の一部が円形に地山に突出していて、柱が入っていた後と思われる。またこの南東には302・305・306建が並ぶ。

SA301



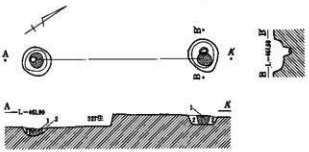
1：黒褐色土（砂質シルト、粘性・しまりややあり）
2：　　（1層土より黒色強い）

SA303



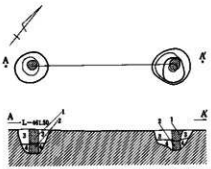
1：黒褐色土（炭を含む）
2：赤褐色土（酸化鉄が集積）

SA304



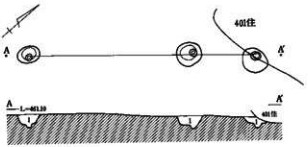
1：黒褐色土（柱痕、粘土質シルト）
2：にぶい黄褐色土（粘土質シルト、砂が混じる）

SA401



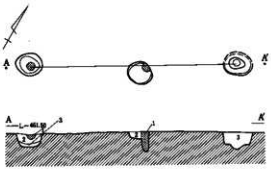
1：黒褐色土（柱痕、砂質シルト、粘性少ない）
2：黒褐色土（柱痕、粘性シルト）
3：灰黄褐色土（埋土、瓦層で殺き締まる）
4：褐灰色土（埋土、しまり悪い、粘性はある）

SA402



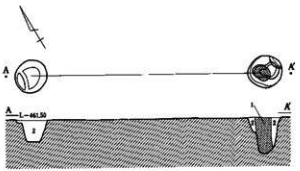
1：暗褐色土（砂混じり粘土質シルト、褐色土ブロック含む、小礫あり）

SA403



1：にぶい黄褐色土（柱痕、粘土質シルト、砂含む）
2：にぶい黄褐色土（粘土質シルト、暗褐色土が混じる）
3：暗褐色土（粘土質シルト、粘性強い）

SA404



1：暗褐色土（柱痕、砂混じりの砂質シルト、黄褐色土ブロック含む）
2：暗褐色土（粘土質シルト、1層土より黄褐色土多い）

0　(1：80)　2m

図188　柱穴列（SA）

ＳＡ401（図188）　　位置　Ｕ－24

Ⅳ層上面で検出した、柱痕を持つ円形の土坑をＳＡ401とした。芯々距離3.0ｍを測る軸線はＮ－50°－Ｅを指す。柱穴は円形であり、円形の柱痕が底面まで達している。柱痕周囲の覆土は砂質土とシルトを水平に交互に重ねて敲き締めた状況があった。掘り方の深さはほぼ同じである。この北に405建がある。

遺　物　古墳時代後期の坏や甕片が出土している。

時　期　古墳時代後期頃と考える。

ＳＡ402（図188）　　位置　Ｐ－17

Ⅳ層上面で検出した、底部に柱を据えた窪み跡を残す土坑３基が直線に並ぶため、ＳＡ402とした。北側の１基は401住に切られている。芯々距離4.8ｍを測る軸線はＮ－40°－Ｅを指している。柱穴は円形で、底面に小さな窪みを持ち、深さはほぼ一定である。この南方には403・408・410・411建が並ぶ。

時　期　重複関係から７世紀後半以前と思われる。

ＳＡ403（図188）　　位置　Ｕ－10、Ｖ－６

Ⅳ層上面で検出した柱痕や底面に窪みを持つ土坑が直線に並ぶため、３基についてＳＡ403とした。芯々距離4.4ｍの軸線はＮ－59°－Ｅを指している。柱穴は皆円形で、南側の１基は覆土中位まで柱痕が残り、中央の１基は浅い掘り方から地山に柱痕が突出している。北側の１基は柱痕はなく、底面中央に柱の据え跡がある。深さは中央の柱痕が最も深い。この南西に404・412建がある。

ＳＡ404（図188）　　位置　Ｕ－５、Ｖ－６

Ⅳ層上面で検出した、円形の土坑２基をＳＡ404とした。芯々距離4.9ｍを測る軸線はＮ－8°－Ｗを指している。柱穴は円形でいずれも掘り方中位に段差があり、東側の１基は円形の柱痕が残っている。この南方にＳＡ403、404号・412号建がある。

オ　土器・礫集中、配石遺構（ＳＨ）

１基確認されたＳＨ301は308号建物跡と関連して、ウ　礎石建物跡に記載した。

カ 土坑

土坑は最も検出数の多い遺構で、総数707基を数える。規模の大小や形状に関係なく、竪穴住居跡以外の陥ち込みを土坑として番号付けをしたために、竪穴遺構（工房跡）や墓壙、井戸跡、廃棄坑（ごみ捨て穴）などといった本来の機能に基づいた呼称は用いていない。以下には、遺構の性格や遺物の出土などで特記する必要があると考えられる土坑を最小限の範囲で選択して、所見を記載した。

3002号土坑（図189、PL48） 位置 G－14

Ⅳ層上面で検出。不整な楕円形で、掘り方は浅い。規模は186×116×14cmを測り、黒褐色の覆土に焼土や河原礫、坏（1）、擂石（168）、擦・敲石（198）が入っている。

時 期 1の坏からすると、古墳時代後期といえる。

所 見 何らかの作業空間か、廃棄坑と思われる。

3029号土坑（図189） 位置 H－17

Ⅳ層上面で検出。不整円形で規模は36×36×20cmを測る。暗褐色土の覆土から、炭や焼土ブロックと共に骨片が出土している。

所 見 哺乳類の骨片であるが、種名まで同定できない。カマドの廃棄坑か。

3036号土坑（図189） 位置 H－22

Ⅳ層上面で検出、円形で規模は44×40×14cmを測る。中央に円形の柱痕が残り、底部には偏平な河原礫がある。この礫は人為的かⅣ層内に含まれていた礫かは不明である。

所 見 この周囲にはこれと同規模の土坑が分布することから、本来建物跡の柱穴とも思われる。

3056号土坑（図189、PL48） 位置 G－8

Ⅳ層上面で検出し、不整楕円形で規模は130×88×46cmを測る。底部はほぼ円形に深く、炭を含む覆土のほぼ全域から坏（1）や甕（2）といった土器片、臼玉（31）や凹石（206）といった石器類が出土する。

時 期 土器から古墳時代中期後半～後期初頭と思われる。

所 見 住居やカマドに関連する廃棄坑と想定する。

3079号土坑（図189） 位置 G－20

Ⅳ層上面で検出し、円形で規模は50×50×18cmを測る。炭を含む黒褐色土の覆土に甑（1）などの比較的大きな土器片が入っている。

時 期 土器から古墳時代後期頃と思われる。

所 見 土器などの廃棄坑であると推測する。

3100号土坑（図189、PL48） 位置 G－24

Ⅳ層上面で検出し、南西部は調査地区外に出ている。円形で規模は径54cm、深さ34cmを測る。炭を僅かに含む黒色土には長胴甕（1）や甑（2）が大きな破片のまま入っている。特に1は底部が抜けた状態で横たわっていた。また土製紡錘車（5）も出土している。

時 期 土器から古墳時代後期といえる。

所 見 廃棄坑の性格に共通するが、甕の出土状況などから、単に廃棄坑とは言いにくいと思われる。

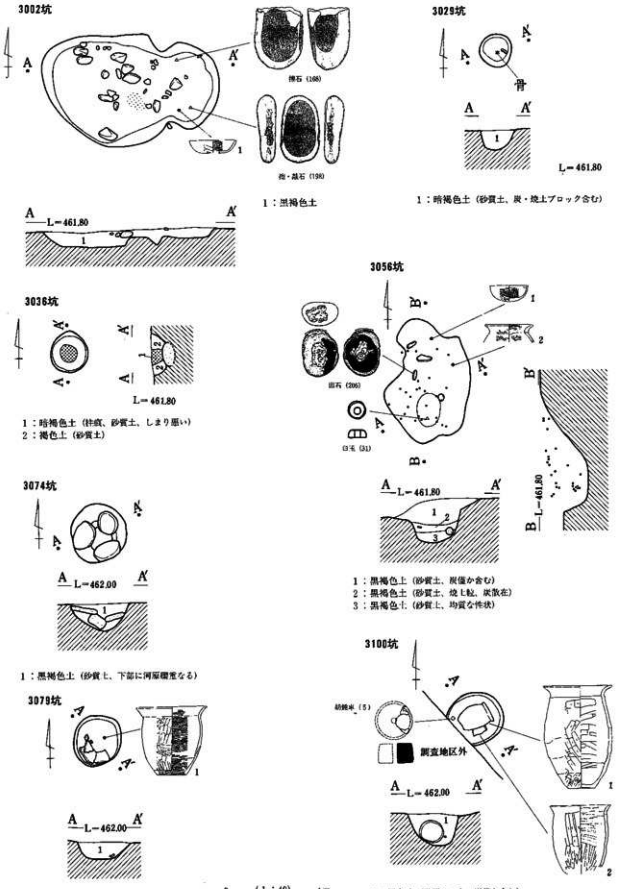

3002坑
A
A'
L=461.80
1
1：黒褐色土
3029坑
骨
A
A'
L=461.80
1：暗褐色土（砂質土、炭・焼土ブロック含む）
3036坑
A
A'
L=461.80
1：暗褐色土（粘質、砂質土、しまり悪い）
2：褐色土（砂質土）
3056坑
B
B'
1
2
L=461.80
1：黒褐色土（砂質土、炭微か含む）
2：黒褐色土（砂質土、焼土粒、炭散在）
3：黒褐色土（砂質土、均質な性状）
3074坑
A
A'
L=462.00
1：黒褐色土（砂質土、下部に河原礫堆なる）
3079坑
A
A'
L=462.00
1：黒褐色土（砂質土、土器片・炭含む）
3100坑
調査地区外
A
A'
L=462.00
1：黒色土（砂質シルト、炭微か含む）
0
(1：40)
1m

図189　土坑（1）

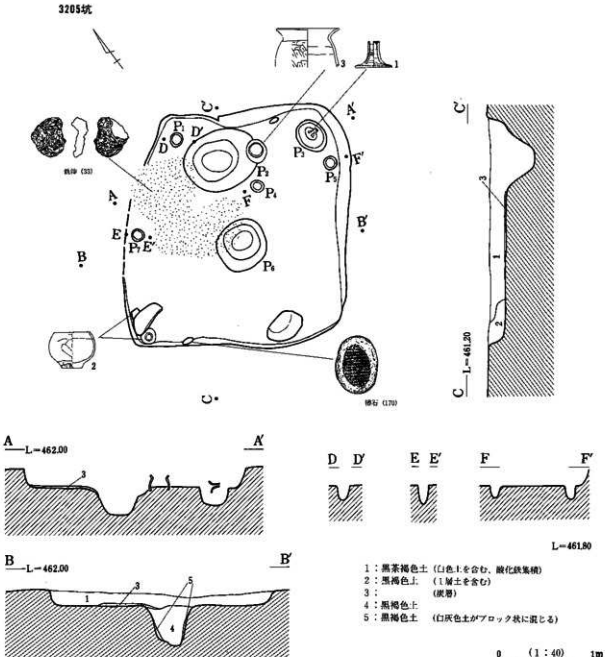


図190 土坑（2）

3205号土坑（図190、PL48） 位置 B－24

IV層上面で検出する。338・341・342住、304溝を切っている。規模232×226×16cmを測る、長方形の竪穴遺構である。壁は傾斜していて、床面は非常に堅緻で北西隅には炭化物が分布している。ピットは6基あり、柱穴は小ぶりだが比較的深いP1・5・7が当てはまる。北東壁中央には楕円形で大きく深いP2があり、床面中央にはP2より小さいが、深く掘り込まれた円形のP6がある。

遺 物 P2横に据えられたように鞴上半部（3）があり、P3には須恵高坏脚部（1）、西隅壁際には球形の鉢（2）が出土している。他に炭化物と共に、椀形をした鍛冶滓（33・34）も出土した。

時 期 土器から、古墳時代後期といえる。

所　見　壁際の小柱穴や床面に並ぶ大きなピットなど、通常の住居跡には無い性格を持つ竪穴遺構である。据えたような甕や炭化物の分布、鉄滓の出土なども考えると、鍛冶業に関連する作業を行っていた施設とも推測されるが、鍛冶炉は検出されていない。

3150号土坑（図191）　　位置　G－9

Ⅳ層上面で検出する。楕円形で底面は平坦で、規模106×82×22cmを測る。覆土から須恵坏（1）、須恵高台坏（2・3）の破片や擦石（169）などが出土している。**時　期**　土器から8世紀後半と思われる。
所　見　時期を同じくすると思われる、近隣の3187・3190坑や南方の328住と関連を指摘される。

3187号土坑（図191）　　位置　G－5

Ⅳ層上面で検出。方形で規模は44×44×10cmを測る。覆土からほぼ完形の須恵坏（1）が出土した。
時　期　坏から奈良時代後半と思われる。
所　見　時期を同じくすると思われる、近隣の3150・3190坑や南方の328住と関連を指摘される。

3190号土坑（図191）　　位置　G－5

Ⅳ層上面で検出する。やや不整な楕円形で浅く、規模は164×76×10cmを測る。また覆土には須恵高台坏（1）などの古代の土器片が含まれている。**時　期**　土器から奈良時代と思われる。
所　見　時期を同じくすると思われる、近隣の3150・3187坑や南方の328住と関連を指摘される。

3270号土坑（図191、ＰＬ48）　位置　B－7

Ⅳ層上面で検出する。やや不整な楕円形で掘り方は浅く、規模は162×130×24cmを測る。覆土内から擦石（171）や鉄鏃（8）が出土している。**時　期**　古墳時代以降である。**所　見**　性格は明確ではない。

3330号土坑（図191）　　位置　B－21

Ⅳ層上面で検出。長方形で規模100×76×20cmを測り、鉢形のミニチュア土器（35）が出土した。
時　期　古墳時代以降と思われる。**所　見**　性格は明確ではない。

3354号土坑（図191）　　位置　B－17

Ⅳ層上面で検出する。円形で底面の一部が深く掘り込まれていて、規模は64×60×54cmを測る。覆土から平安時代の内黒坏や須恵坏が出土している。
所　見　柱穴の可能性があり、近隣の3355・3421坑との関連が指摘される。

3355号土坑（図191、ＰＬ48）　位置　B－17

Ⅳ層上面で検出する。円形で底面の一部が掘り込まれ、規模は92×80×47cmを測り、覆土中位には偏平で大きな河原礫が平担面を天地にして入っている。
所　見　柱穴の可能性があり、近隣の3354・3421坑との関連が指摘される。

3421号土坑（図191、ＰＬ48）　位置　B－17

Ⅳ層上面で検出する。楕円形で底面は凹凸があり、規模は90×76×40cmを測る。覆土中位に偏平な河原礫が平担面を天地にして入る。**所　見**　3355坑によく似ている。柱穴の可能性がある。

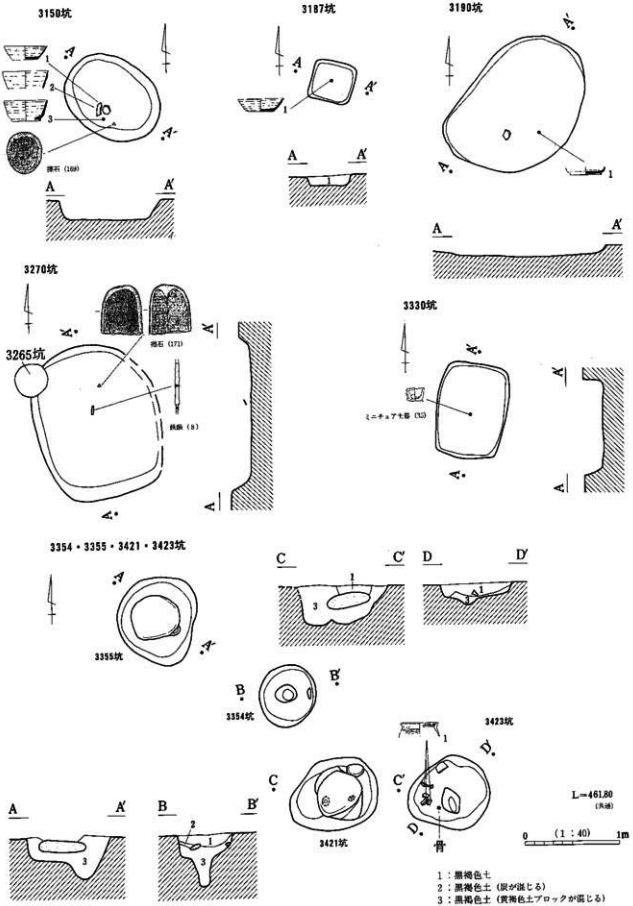

3150坑
3187坑
3190坑
3270坑
3265坑
3330坑
3354・3355・3421・3423坑
3355坑
3354坑
3421坑
3423坑
ミニチュア土器 (32)
L=461.80
(1:40)
1：黒褐色土
2：黒褐色土（炭が混じる）
3：黒褐色土（黄褐色土ブロックが混じる）

図191 土坑（3）

3423号土坑（図191）　　位置　B－17

Ⅳ層上面で検出。不整楕円形で規模は86×76×18cmを測る。覆土に甕（1）などの土器片や骨片が入る。
時　期　土器から奈良時代頃と思われる。**所　見**　廃棄坑と思われる。

3361号土坑（図192）　　位置　A－15

Ⅳ層上面で検出し、円形で規模は54×48×42cmを測る。覆土から坏（1）の破片が出土する。
時　期　土器から古墳時代中期後半頃と推測される。**所　見**　性格は明確ではない。

3374号・3375号土坑（図192）　　位置　B－17

Ⅳ層上面で検出し、3375坑の北東に3374坑が隣接している。3374坑は攪乱を受け、円形で規模は現状で径58cm、深さ36cmを測り、3375坑は円形で規模は74×68×20cmを測る。深さは同じではないが、3374坑から須恵坏蓋（1）、また坏（2）は2基の土坑から出土した破片が接合している。
時　期　土器から奈良時代と考えたい。**所　見**　性格は不明である。

3379号土坑（図192、PL48）　位置　G－3

Ⅳ層上面で検出し、円形で規模は56×48×16cmを測る。底面から砥石（131）が出土している。
所　見　砥石を転用して、礎盤石にした可能性がある。

3393号土坑（図192）　　位置　B－12

Ⅳ層上面で検出。円形で規模は37×33×22cmと小型で、覆土から骨片が出土している。
所　見　性格は不明である。

3420号土坑（図192）　　位置　A－20

Ⅳ層上面で検出する。楕円形で規模は100×90×24cmを測る。覆土中位から河原礫と高坏脚部（1～3）が出土する。**時　期**　高坏の器形から古墳時代後期といえる。
所　見　廃棄坑と思われるが、高坏脚部のみ出土する点は特異である。

424号土坑（図192）　　位置　P－22

Ⅳ層上面で検出する。楕円形で規模は124×80×26cmを測る。覆土は崩土の2層と、黒褐色の粘土質シルトの1層の2つに分けられる。覆土から古墳時代後期の内黒高坏、甕の小片が出土している。
所　見　性格は不明である。

494号土坑（図192）　　位置　U－4

Ⅳ層上面で検出する。円形で規模は40×36×20cmを測る。覆土から鍛冶滓（35）が出土している。
所　見　性格は不明である。

4531号土坑（図192）　　位置　U－9

Ⅳ層上面で検出する。不整な楕円形で規模は長径140cm、深さ46cmを測る。覆土から須恵器片や銅製の耳環（47）が出土している。
時　期　古墳時代後期と思われる。**所　見**　性格は不明である。

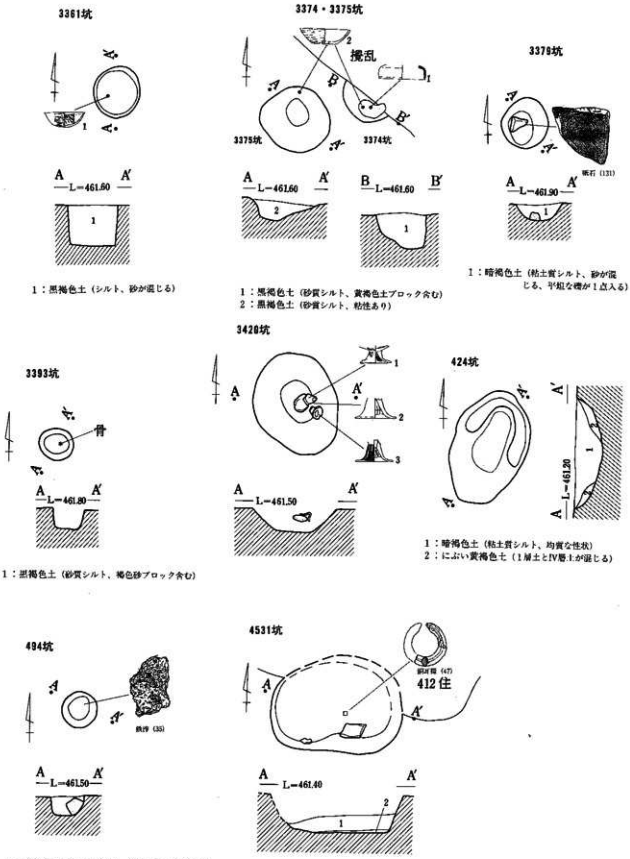

3361坑
A L=461.60 A'
1：黒褐色土（シルト、砂が混じる）
3374・3375坑
撹乱
3375坑
3374坑
A L=461.60 A'
B L=461.60 B'
1：黒褐色土（砂質シルト、黄褐色土ブロック含む）
2：黒褐色土（砂質シルト、粘性あり）
3379坑
帆石 (131)
A L=461.90 A'
1：暗褐色土（粘土質シルト、砂が混じる、平組な礫が1点入る）
3393坑
骨
A L=461.80 A'
1：黒褐色土（砂質シルト、褐色砂ブロック含む）
3420坑
A L=461.50 A'
424坑
A L=461.20 A'
1：暗褐色土（粘土質シルト、均質な性状）
2：にぶい黄褐色土（1層土とⅣ層土が混じる）
494坑
鉄滓 (35)
A L=461.50 A'
1：暗褐色土（粘土質シルト、砂混じる、粘性弱い）
4531坑
銅鉄類 (47)
412住
A L=461.40 A'
1：黒褐色土（砂質シルト、均質な性状）
2：褐灰色土（1層土とⅣ層土が混じる）
0 (1：40) 1m

図192 土坑（4）

4507号土坑（図193、ＰＬ49）　位置　Ｕ－15

Ⅳ層上面で検出する。方形で規模は164×154×114cmと非常に大型である。覆土は人為的に貼ったような暗茶褐色の２・３層土が壁際にあり、その中央に柱状に１・４層土が堆積している。また１層土中から須恵器の坏蓋（1）、坏（2）、高坏脚部（3）、甕口縁部（4）などの土器片が出土している。

時　期　１層土の土器片から埋没時期は奈良時代と考えられる。

所　見　調査段階で、２・３層土が人為的で、１・４層土は自然堆積であることは明白であった。大きく２分される覆土には時間差があり、２・３層土がある状態で、土坑は開口していた可能性が高い。このような状況から井戸跡と考えやすく、礫などが少ないことから木枠などを用いていたと思われる。

4529号土坑（図193、ＰＬ49）　位置　Ｖ－16

Ⅳ層上面で検出する。上面は楕円形で、底面には更に方形の浅い陥ち込みがある。規模は232×170×100cmと大型である。また方形の陥ち込みは116×96×20cmの規模である。覆土は３層に分けられるが、いずれも砂ブロックを多く含んでいる。

時　期　奈良から平安時代と思われる。

所　見　底面の方形の陥ち込みは井戸枠の据え跡と思われるため、本跡は井戸跡と考えられ、礫などが無いことから木枠を組み重ねて構築されていたと想定される。

4538号土坑（図194、ＰＬ48）　位置　Ｕ－20

Ⅳ層上面で検出。不整な方形で、規模は128×102×20cmを測る。また暗褐色土の覆土からは坏（1）が出土している。

時　期　奈良時代後半から平安時代と考えられる。

所　見　性格は不明である。

4624号土坑（図194）　位置　Ｕ－６

Ⅳ層上面で検出する。円形で北西側が攪乱を受けている。規模は径54cmで深さ46cmを測る。覆土から坏（1）、高坏（2）などが出土している。

時　期　土器から古墳時代後期、６世紀代と考えられる。

所　見　性格は不明である。

4557号土坑（図194、ＰＬ48）　位置　Ｕ－13

448住床面下から検出される。長方形で規模は34×28×20cmであり、内部には柱状の河原礫を３つ短軸方向に並べてある。また覆土には炭や焼土と焼骨片が含まれている。

時　期　448住との関係は不明だが、属するとすれば奈良時代である。

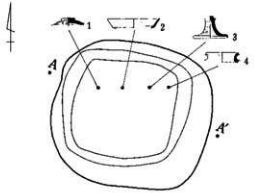
所　見　墓壙の可能性がある。

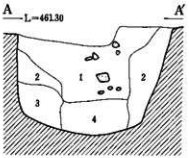
4589号土坑（図194）　位置　Ｕ－22

Ⅳ層上面で検出し、円形で南西側が調査地区外に出ている。規模は径72cm、深さ60cmを測り、底面は北東側が更に掘り込まれている。須恵甕片が出土している。

所　見　形状からは柱穴とも考えられる。

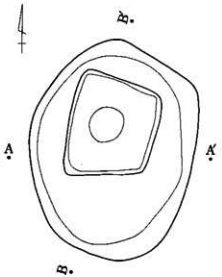
4507坑

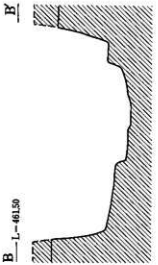


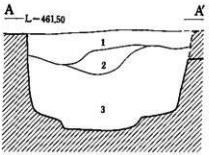


1：暗茶褐色土（粘質シルト、炭片・円礫をやや含む）
2：暗茶褐色土（白色砂がラミナ状に堆積する）
3：暗茶褐色土（砂ブロックをほとんど含まない）
4：灰黒褐色土（粘質シルト、粘性強い）

4529坑







1：黒褐色土（粘質シルト、茶褐色土ブロックや砂粒含む、しまり良い）
2：黒褐色土（粘質シルト、白色砂ブロック含む）
3：黒褐色土（粘質シルト、砂ブロック多く含む、φ3cm程の円礫あり）

0 (1：40) 1m

図193 土坑（5）

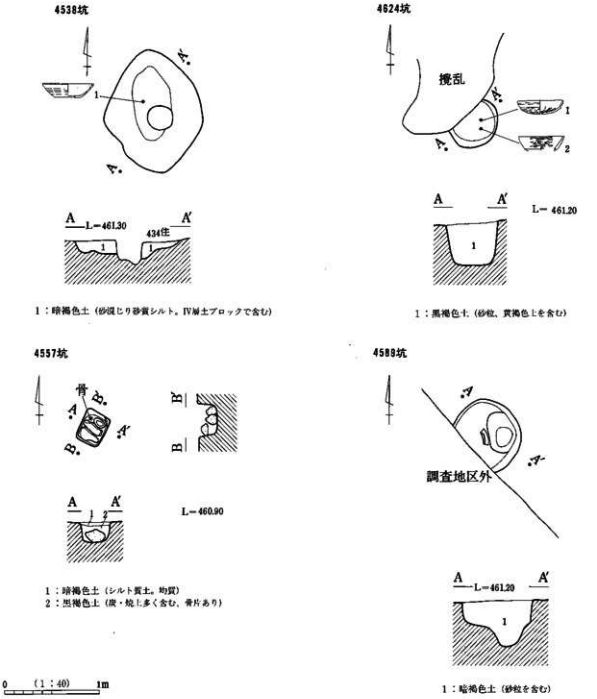
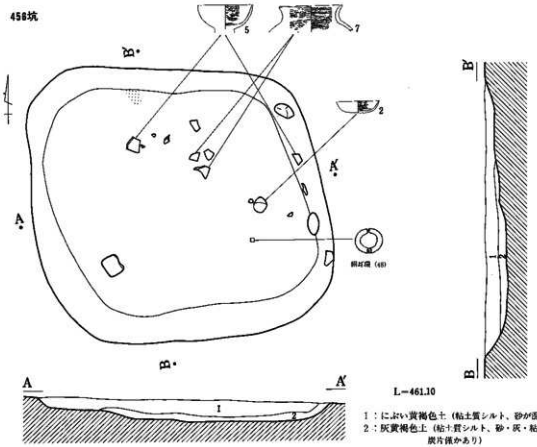

4538坑
A
A'
1
A
L=461.30
A'
434住
1
1
1：暗褐色土（砂混じり砂質シルト。Ⅳ層土ブロックで含む）
4624坑
撹乱
A
A'
1
2
A
A'
L=461.20
1
1：黒褐色土（砂粒、黄褐色土を含む）
4557坑
骨
B
B'
A
A'
B'
B
A
A'
1
2
L=460.90
1：暗褐色土（シルト質土。均質）
2：黒褐色土（炭・焼土多く含む、骨片あり）
4588坑
A
A'
調査地区外
A
L=461.20
A'
1
1：暗褐色土（砂粒を含む）
0　(1：40)　1m

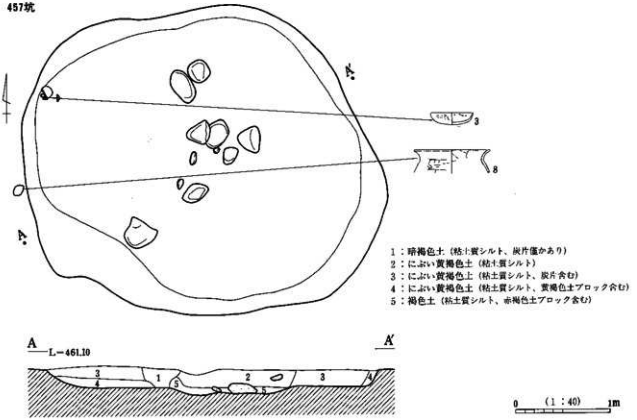
図194　土坑（6）

458坑



1：にぶい黄褐色土（粘土質シルト、砂が混じる）
2：灰黄褐色土（粘土質シルト、砂・炭・粘土が混じる、炭片微かあり）

457坑



1：暗褐色土（粘土質シルト、炭片微かあり）
2：にぶい黄褐色土（粘土質シルト）
3：にぶい黄褐色土（粘土質シルト、炭片含む）
4：にぶい黄褐色土（粘土質シルト、黄褐色土ブロック含む）
5：褐色土（粘土質シルト、赤褐色土ブロック含む）

図195 土坑（7）

456号土坑（図195、ＰＬ48）　位置　Ｐ－17・18

Ⅳ層上面で検出する。不整な方形で規模は310×286×22cmと大きく、床面が平坦なため、竪穴状遺構といえる。覆土は２層に分けられ、床面は灰や炭化物、粘土などが混じった２層土が堆積し、そこから坏（1）、平底気味で体部が開く内黒坏（２～３）、深い坏部を持つ内黒高坏（５）、体部中央に最大径を持つ長胴甕（６）、内黒と思われる壺（７）や銅製の耳環（48）などが出土している。

時　期　土器から古墳時代後期６世紀後半と考えられる。

所　見　柱穴などがないが、上屋構造を持つ施設であると思われる。

457号土坑（図195、ＰＬ49）　位置　Ｐ－17

Ⅳ層上面で検出する。不整な楕円形で規模は392×336×24cmと大きく、底面は比較的平坦なため、竪穴状遺構と考えられる。覆土は５層に分けられ、床面近くの４・５層土にはブロック土が入り込んでいることから埋戻し土と考えられる。またそこには河原礫や須恵高台坏（1）、須恵高坏脚部（２）、坏（３）、高坏（４）、内黒坏（５・６）、須恵短頸壺（７）、口縁部が屈曲して短く外反する甕口縁部（８）などの破片が投棄されていた。

時　期　投棄された土器が床面に近い部分から出土していることから、土器の時期と本跡の廃絶（埋没）時期は同じと考えられ、奈良時代の８世紀前半頃と考えられる。

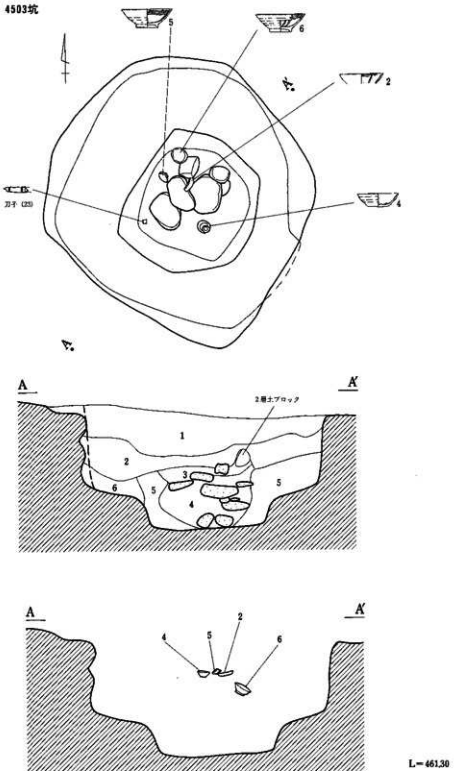
所　見　柱穴はないが上屋構造を持つ施設と考えたい。

4503号土坑（図196、ＰＬ49）　位置　Ｕ－14・15

Ⅳ層上面で検出する。上面はやや崩れるが方形で規模は270×260×120cmと大型の土坑である。底面は更に不整な方形に掘り込まれ、規模は140×132×36cmを測る。覆土は大きく３層に分けられ、土坑下部の壁際に人為的に埋められた５・６層土、その内部に堆積した３・４層土、土坑上部を覆う自然埋没土の１・２層土である。４層土には偏平な河原礫が投棄されたように入り込んでいて、３層土にはその礫と共に須恵坏蓋（1）や内黒坏（２・３・４）、埦（５・６）などが完形や大きな破片で投げ込まれている状態に入っていた。２・４～６の内面には暗文風のミガキ痕があり、６の外面には昆虫（ハネカクシ）の痕跡が確認されている（付京第２節参照）。２層土は砂質土であり、流水により堆積したものと考えられ、最上部の１層土は砂質シルトに円礫が入り込んでいることから、更に強い流水の影響により堆積したと思われる。

時　期　覆土中位よりやや上に平安時代９～10世紀前半頃の土器が投入されていることから、最終的な廃絶時期はその時期を含む辺りと考えられる。

所　見　底部形態から木枠を組み上げた井戸跡と考えられる。底面の方形の陥ち込みは木枠を据えた基礎に当たると思われ、５・６層土は井戸枠を囲む土であると考えられる。また３・５層土堆積時には機能が停止しつつあり、投棄といった人為的な埋没行為も行われている。上部に堆積する１・２層土は流水による堆積物であり、土坑の形状が上部で崩れていることも、その影響による可能性がある。



1：灰黄褐色土（砂質シルト、1～5cm程の円礫含む）
2：にぶい黄褐色土（1層土より粘性のあるシルト、砂がラミナ状に堆積する、円礫も混じる）
3：灰黄褐色土（砂質土、中粒砂が均質に堆積、円礫も含む）
4：褐灰色土（粘性のある砂質シルト、投げこまれたように扁平な円礫が入り込む）
5：褐灰色土（中粒砂、粘性あり）
6：褐灰色土（砂質シルト、粘性強い、しまり良い）

0 (1：40) 1m

図196 土坑（8）

501号土坑（図197、ＰＬ50）　位置　Ｏ－８

Ⅳ層上面で検出する。不整な方形で規模は196×148×43cmを測り、底面は比較的平坦である。覆土は黄灰色の単層である。

所　見　性格は不明である。

502号土坑（図197、ＰＬ50）　位置　Ｏ－12・13

Ⅳ層上面で検出し、526坑に切られる。不整な楕円形で規模は長径200cm、深さは24cmで底面は平坦である。覆土から底部回転糸切り未調整の内黒坏が出土している。

所　見　性格は不明である。

526号土坑（図197、ＰＬ50）　位置　Ｏ－８・13

Ⅳ層上面で検出し、502坑を切っている。長方形で規模は156×118×20cmを測り、底面は比較的平坦である。

所　見　性格は不明である。

588号土坑（図197）　位置　Ｏ－20

Ⅳ層上面で検出し、南西側が攪乱を受けている。594坑との重複関係は不明である。ほぼ楕円形で、長径102cm、深さ23cmを測る。底面は平坦で覆土は黒褐色土の単層である。覆土から古代の坏や甕の小片が出土している。

所　見　性格は不明である。

591号土坑（図197）　位置　Ｏ－20

Ⅳ層上面で検出し、南西側は攪乱を受け、594坑を切る。不整な円形で規模は長径110cm、深さ13cmを測る。底面は平坦で、暗褐色土の単層である。

所　見　性格は不明である。

594号土坑（図197）　位置　Ｏ－20

Ⅳ層上面で検出する。北西を520住に切られ、西側を591坑に切られ、攪乱も受けている。本来方形を呈していたとも考えられ、現状で規模は径290cm、深さ26cmを測り、底面は平坦である。

所　見　大きな土坑であり竪穴状遺構とも考えられる。

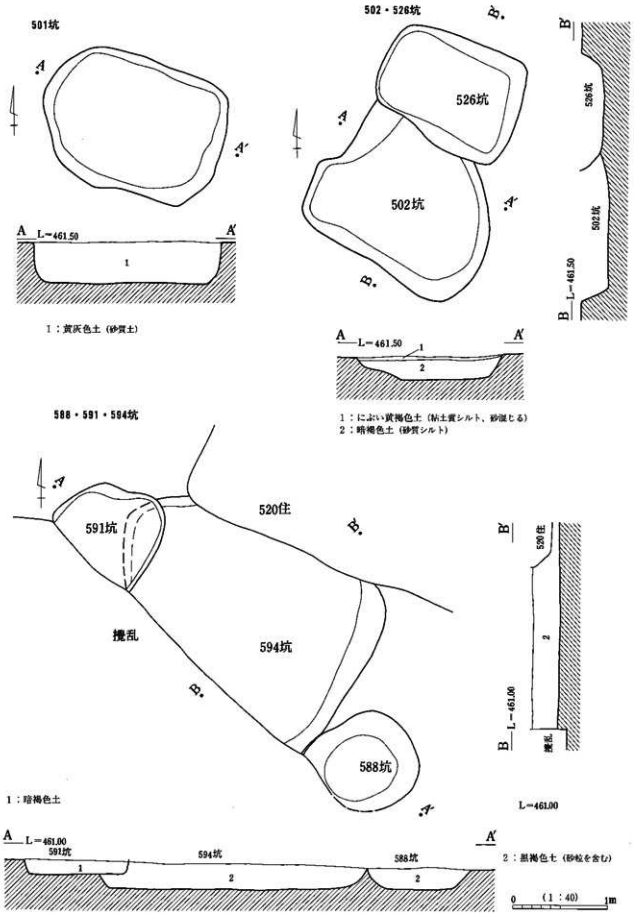

501坑
A
A'
A L=461.50 A'
1
1：黄灰色土（砂質土）
502・526坑
B
526坑
502坑
B'
526坑
502坑
B L=461.50
A L=461.50 A'
1
2
1：にぶい黄褐色土（M土質シルト、砂混じる）
2：暗褐色土（砂質シルト）
588・591・594坑
591坑
520住
撹乱
594坑
588坑
B'
520住
2
B L=461.00
撹乱
1：暗褐色土
L=461.00
A L=461.00 A'
591坑
594坑
588坑
1
2
2
2：黒褐色土（砂粒を含む）
0 (1：40) 1m

図197　土坑（9）

515号土坑（図198、ＰＬ50）　位置　Ｏ－７

Ⅳ層上面で検出する。円形で底面の一部が更に小円形に掘り込まれ、規模は110×92×12cmを測る。覆土上部にはロクロ成形の甕などの小片と台石（222）が出土している。

時　期・所　見　性格は不明だが、９世紀代の廃棄坑とも考えられる。

579号土坑（図198）　位置　Ｔ－５

Ⅳ層上面で検出する。平面楕円形で、壁面は垂直に近い。規模は117×74×48cmを測り、覆土は水平に３層に分けられ、自然埋没と考えられる。

所　見　性格は明らかではない。

516号土坑（図198、ＰＬ50）　位置　Ｏ－７

Ⅳ層上面で検出。楕円形で規模は52×46×29cmを測り、底面には偏平な河原礫が３つ置かれている。

所　見　礫の目的ははっきりしないが、礎盤石の可能性もある。

523号土坑（図198）　位置　Ｏ－４

Ⅳ層上面で検出する。小型の円形で規模は34×29×14cm程であり、底面に偏平な河原礫が１つ置かれている。

所　見　柱穴とすれば、礎盤石の役割が考えられる。

549号土坑（図198、ＰＬ50）　位置　Ｏ－７

Ⅳ層上面で検出する。小型の円形で、規模は34×34×14cmを測り、内部に河原礫が２つ入っている。

所　見　性格は不明である。

587号土坑（図198）　位置　Ｏ－25

Ⅳ層上面で検出し、東側が調査地区外に出ている。不整な円形で規模は72×63×20cmを測る。覆土は暗褐色土の単層で灰釉陶器埦（１）が出土している。

時　期　土器からすると平安時代と考えられる。

所　見　性格は不明である。

601号土坑（図198）　位置　Ｄ－20

Ⅳ層上面で検出し、東側が調査地区外に出ている。本来は楕円形と思われ、現状で径76cm、深さ42cmを測る。黒褐色土の覆土からハマグリの破片が出土している。

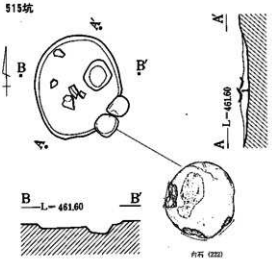
所　見　性格は明らかではない。

602号土坑（図199、ＰＬ50）　位置　Ｄ－25、Ｅ－21、Ｉ－５

Ⅳ層上面で検出する。長方形で規模は246×60×10cmで、長大で浅い土坑である。覆土は黒褐色土の単層である。

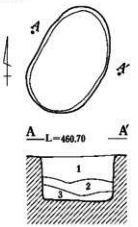
所　見　性格は明らかではない。

515坑



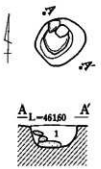
1：暗褐色土（砂粒・炭・焼土含む）

578坑



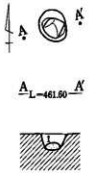
1：暗褐色土（粘土質シルト、炭多く含む）
2：暗褐色土（粘土質シルト、焼土含む、Ⅳ層土含む）
3：黒褐色土（粘土質シルト、均質な性状）

516坑



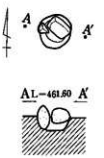
1：暗褐色土（砂粒を含む）

523坑



1：暗褐色土

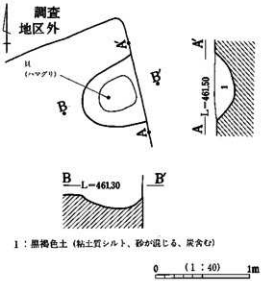
549坑



587坑

1：暗褐色土

601坑

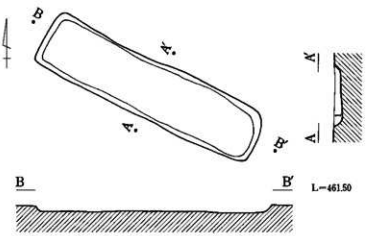


1：黒褐色土（粘土質シルト、砂が混じる、炭含む）

0 (1：40) 1m

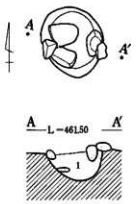
図198 土坑（10）

602坑



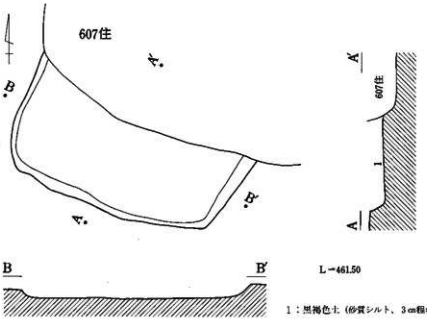
1：黒褐色土（粘土質シルト、粘性強い）

603坑



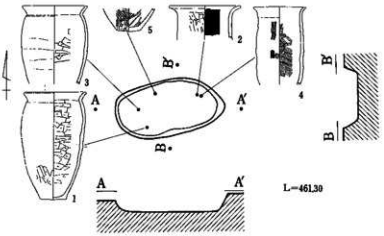
1：黒褐色土（粘土質シルト、人頭大の円礫含む）

627坑



1：黒褐色土（砂質シルト、3cm程の円礫含む）

610坑



638坑

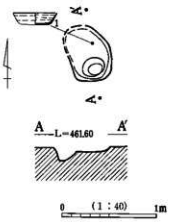


図199　土坑（11）

603号坑（図199、ＰＬ50） 位置 Ｉ－５

Ⅳ層上面で検出する。楕円形で規模は74×66×30cmを測り、黒褐色の粘土質シルトの単層に河原礫が幾つか入っている。

所 見 性格は明らかではない。

627号土坑（図199、ＰＬ50） 位置 Ｊ－11

Ⅳ層上面で検出し、607住に切られている。本来方形と思われ、現状では規模242cmで深さ13cmを測る。底面が平坦である。

所 見 竪穴状遺構とも思われるが、性格は明らかではない。

610号土坑（図199、ＰＬ50） 位置 Ｄ－24

Ⅳ層上面で検出する。長楕円形で規模は118×60×14cmであり、底面は平坦である。覆土には長胴甕（1～5）が大きな破片で投棄されている。甕には平底で肩が張り、口縁が強く屈曲する器形（1・3・5）と寸胴な体部に短い口縁部を持つ器形（2・4）がある。

時 期 甕の器形から７世紀後半～８世紀前半と考えられる。

所 見 廃棄坑と思われるが、甕だけ集中的に捨てられている特徴がある。

638号土坑（図199） 位置 Ｊ－６

Ⅳ層上面で検出する。不整な楕円形で、底面の一部は更に掘り込まれていて規模は64×44×14cmを測る。また覆土からほぼ完形の須恵坏（1）が出土している。

時 期 土器から奈良時代と考えられる。**所 見** 性格は不明である。

621号土坑・639号土坑（図200・201、ＰＬ50） 位置 Ｊ－６

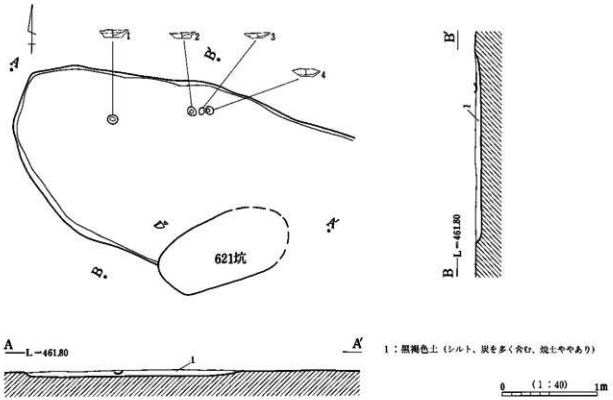
639坑 Ⅳ層上面で検出する。当初は上部の639坑だけを浅い楕円形の土坑として調査したが、その後その南側下部から621坑が検出された。上部は非常に検出状態が悪いため、639坑の形状は明確にできていないが、ほぼ楕円形と考え現状で長軸360cm、短軸198cm、深さ6cmを測る。その覆土北側からは土師皿が４枚出土している。

621坑 639坑を完掘する段階で南部分の土坑上位にまず大量の土器（食器）が不規則に伏せて重ねられている状態を検出して、その土器を取り除いた後に形状を把握している。北東側ははっきりしないが不整な楕円形と想定され、規模は144×70×23cmを測る。底部は比較的平坦で、覆土には炭や焼土が混ざり、大小の河原礫も含まれている。

埋納状況 その覆土中位から下位には短軸線にほぼ合わせる方向に土師皿を20枚ずつ２列に並べて埋納している。東列は北方を上面にして、西列は南方を上面にするように重ねて、２列は接するように揃えて置かれている。いずれの列も整然と重ねられていて、埋納時は紐などで括られていた可能性がある。また上面の土器は皿、足高高台皿、坏と種類は多く、ほとんどが現状の621坑検出面より上位から出土している。この他に地点は分からないが、覆土から鉄斧（28）と鉄釘（35）も出土している。

２基の土坑の関連性 ２基の土坑の検出状況と、遺物の出土状態からすると、この２基は同一の遺構、あるいは同一の作業によって作られたと想定する。まず浅く広く掘り込まれた639坑の更に一部分を楕円形に掘り込んだ621坑に土師皿を並べて埋納して、その上部に更に食器を逆位に重ねて、639坑内にも土師皿を入れて、全てを埋めてしまったと考えたい。

639坑



621坑（上部）

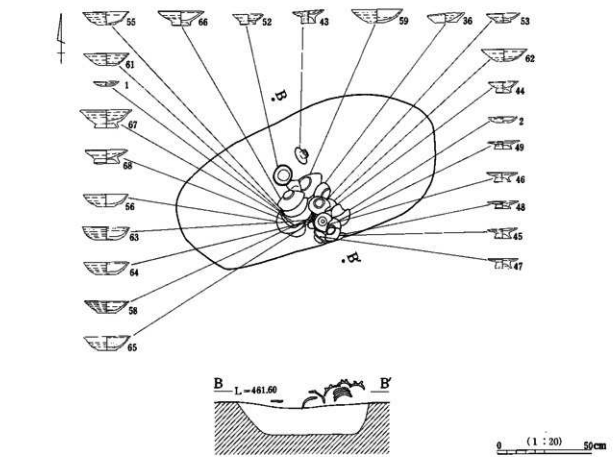


図200　土坑（12）

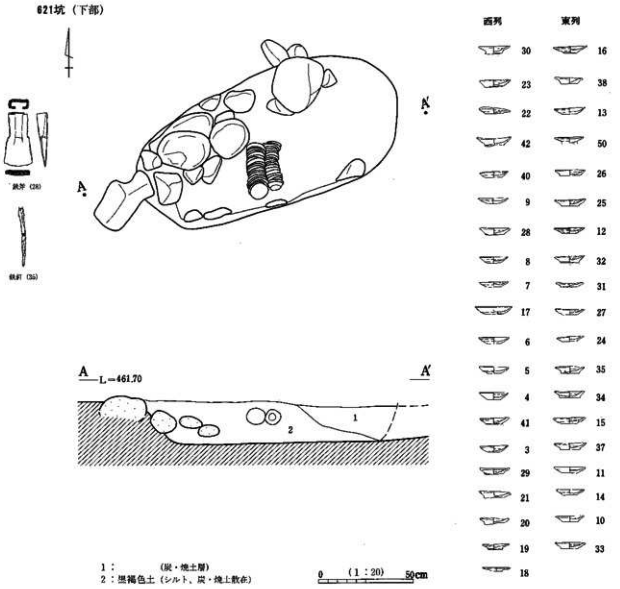

621坑（下部）
A
A'
A
L＝461.70
A'
1
2
1：（炭・焼土層）
2：黒褐色土（シルト、炭・焼土散在）
0 （1：20） 50cm
西列
東列
30
23
22
42
40
9
28
8
7
17
6
5
4
41
3
29
21
20
19
18
16
38
13
50
26
25
12
32
31
27
24
35
34
15
37
11
14
10
33

図201 土坑（13）

その他の土坑について

707基という膨大な数の土坑全ての所見や属性を記載することは限られた紙面数からしても、時間的にも不可能であった。その結果、大半の土坑については規模すら記載されていない。

ここでは、それら土坑の規模（長軸、短軸、深さ）、平面形、断面形、柱痕の有無といった属性をグラフ化して、最小限の土坑の性格に触れてみたい（図202）。

グラフ1では、大グリッド別の土坑数と平面形の内訳を表している。最も多いのはⅣ－Bの155基で、続いてⅢ－U（140）、Ⅵ－G（100）、Ⅲ－P（77）の順である。また平面形では円形、楕円形が大半を占めている。このグリッドのピークはグラフ2の掘立柱建物跡と柱穴列（SA）の検出数のピークと共通していて、土坑の中には、本来掘立柱建物跡などの柱穴としての機能を持つものが含まれている可能性がある。

グラフ2では掘立柱建物跡と柱穴列（SA）と柱痕を持つ土坑に遺構を限定して、大グリッド別の検出数を較べると、Ⅱ－T以外、それらの遺構は同グリッドから検出されていることが分かる。とすれば更に柱痕のある土坑や柱穴列は、本来掘立柱建物跡の柱穴であった可能性が高いと思われる。

グラフ3ではグラフ2で表したように、掘立柱建物跡、柱穴列（SA）、柱痕を持つ土坑がほぼ同数検出されたⅢ－U区をモデルに、土坑や柱穴について平面形と柱痕の有無を記号化して、長軸の長さと深さの分布状態を見てみる。

平安時代後半の406建は最も規模の小さい範囲に集まり、極めて属性が異なることが分かる。また404建は現状規模が1間×1間でありながらいずれも大きく深い柱穴を持っていて、本来はもっと大きな建物跡でありながら柱穴が住居跡に切られたり、住居跡覆土に埋もれて検出されなかった状態も推定できる。405建と407建、やや小ぶりな412建の柱穴は長軸の長さ40～100cm、深さ20～60cmの範囲にあり、同一遺構内における柱穴の分布幅（楕円形の範囲）は重複する範囲が多い。因みに時期は405・412建が古墳時代後期、407建が奈良時代頃とされている。

次に柱穴列（SA）では、長軸の長さは上記した3棟の建物跡の柱穴の分布幅に含まれ、深さも1つの柱穴を除けば同様の分布幅を持っている。

この分布状況に柱痕を持つ土坑4基（★）を重ねると、全ての土坑が長さ・深さともに建物跡の分布幅中央付近に当てはまることがわかる。

調査段階では同規模の柱穴が一定の規則性を持って並ばなければ建物跡と認識しにくく、また図上復元も土坑の観察が共通の認識で行われていなければ難しい。特に本遺跡のように遺構重複密度の高い遺跡では、重複する遺構内に埋もれた建物跡を復元することは困難を極める。

しかし、属性を用いた3つのグラフに表れる傾向は、現場調査や図面整理で土坑や柱穴列としたものの中にも本来建物跡の柱穴や一構造であった可能性を持つ遺構があることを示唆するといえないだろうか。

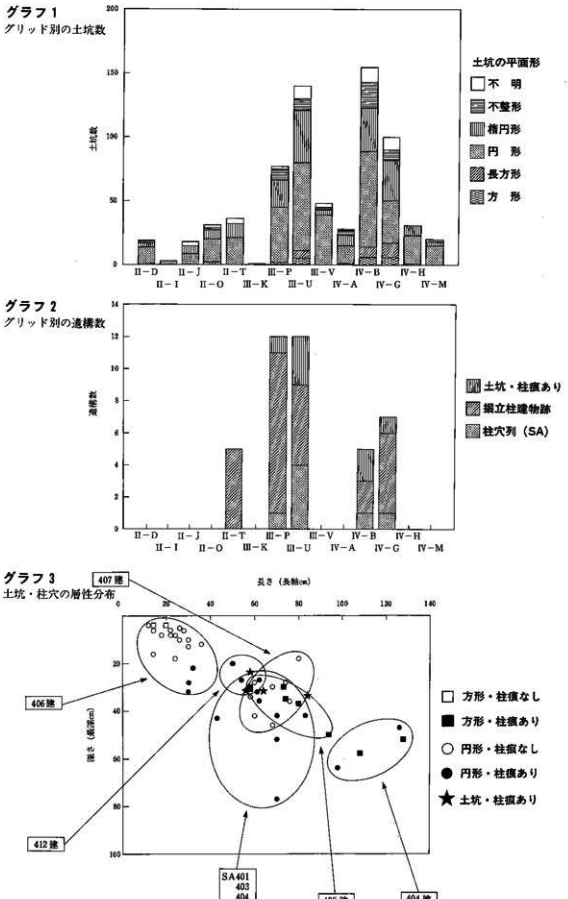

グラフ1
グリッド別の土坑数
土坑数
200
150
100
50
0
II－D II－J II－T III－P III－V IV－B IV－H
II－I II－O III－K III－U IV－A IV－G IV－M
土坑の平面形
不 明
不整形
楕円形
円 形
長方形
方 形
グラフ2
グリッド別の遺構数
遺構数
14
12
10
8
6
4
2
0
II－D II－J II－T III－P III－V IV－B IV－H
II－I II－O III－K III－U IV－A IV－G IV－M
土坑・柱痕あり
掘立柱建物跡
柱穴列（SA）
グラフ3
土坑・柱穴の属性分布
407跡
406跡
412跡
SA401
403
404
405跡
404跡
長さ（長軸cm）
深さ（深度cm）
0 20 40 60 80 100 120 140
20 40 60 80 100
方形・柱痕なし
方形・柱痕あり
円形・柱痕なし
円形・柱痕あり
土坑・柱痕あり

図202 土坑の属性

キ　溝跡

ここには古代と思われる18条について記載した。なお溝跡としても、人為的に区画する溝や若干の流水の可能性のある細い溝、河川の氾濫に起因するような非常に大きな溝、または性格の不明の溝などに分かれるが、それについては各遺構で記述している。

301号溝跡（図203、ＰＬ43）　位置　Ｈ－16・17

Ⅳ層上面で検出して、303・304住、3029坑を切っている。形状は浅くやや歪みながらほぼ東西に伸びていて、東側は途中から消滅し、西側はやや丸みを持って終わる。断面は浅い皿状で規模は最大長9.4ｍ、幅は東で1.8ｍ、西で2.8ｍを測る。覆土は黒褐色の砂質土の単層で、炭化物を含み、酸化鉄は斑状に発達している。また底面高には東西でほとんど差異がなく、流水の状況は捉えられない。

遺　物　土器の小破片が河原礫と共に、底面付近から出土している。図化したものには丸底の坏（1～3）、丸底気味の内黒坏（4～6）、甕（7）、底部のない大型の甑（8）がある。

時　期　土器からすると、埋没時期は古墳時代後期の６世紀に収まりそうである。

所　見　人工的な掘り込みの可能性がある。

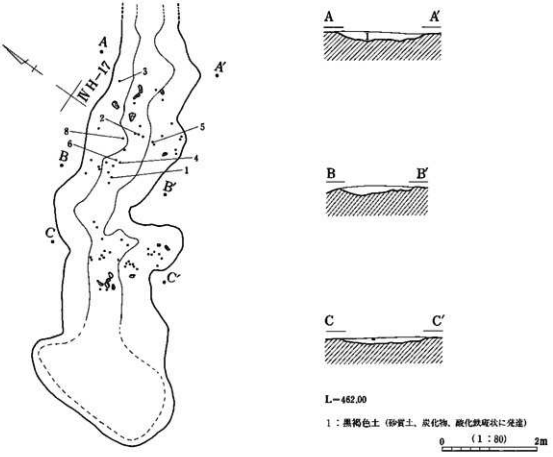


図203　301号溝跡

302号溝跡（図204、ＰＬ43） 位置 Ｇ－14・15・19・20・24、Ｈ－６・11・12・17

Ⅳ層上面で検出し、308・347・376住を切り、328・355住、3095・3209坑に切られる。形状は現状でコの字状を呈している。北辺は北東から南西に傾き、東辺は北辺から直角に折れて南東に向かって調査地区外に出て、西辺も同じく直角に折れて南東に向かい攪乱を受けて消滅している。規模は長さと幅で北辺28.5ｍ・1.0～2.1ｍ、東辺は13.2ｍ・1.2ｍ、西辺は11.25ｍ・0.6ｍを測る。他の遺構同様に③区南隅は検出状況が悪く、溝の幅が細くなるのも、その影響と思われる。また底面の標高は東が461.6ｍと最も高く、西辺が461.5ｍ、北辺が461.2ｍと最も低くなっている。覆土は砂質土の自然埋没と考えられるが、明確な流水堆積は認められない。

遺 物 主に北辺から、半球形で内湾する坏（１・２・４）、口縁部がつままれたような器形の内黒坏（５）、短脚の高坏（６・７）、甑（３・９）、甕（８）などが破片で出土し、石器では剣形模造品（40）、砥石（110）がある。

時 期 土器の様相は古墳時代後期、６世紀代と考えられ、少なくとも重複関係と符合する。

所 見 何らかの目的で、人工的に区画するために掘り込んだ溝跡と思われる。

305号溝跡（図205、ＰＬ47） 位置 Ｂ－８・12・13・17・18・22

Ⅳ層上面で検出し、344・359・384・392住、304溝を切り、357住、3354・3436・4021坑に切られる。北北東から南南西に伸びていて、北方は調査地区外に出て、南方は丸く終わっている。規模は最長26.0ｍを測り、幅は0.7～1.0ｍで、底面の標高は南北で大きく変わらない。覆土は砂質シルトで、黄褐色砂ブロックを含み、中央付近では河原礫が投入されている。

遺 物 須恵坏（１）、須恵長頸壺（２）、壺（３）、坏（４～６）、内黒坏（７・８）などの破片が出土している。

時 期 遺物と重複関係から埋没時期は６世紀代と考えられる。

所 見 人為的に掘り込んだ溝跡と考える。

306号溝跡 位置 Ｖ－22

Ⅳ層上面で検出し、371住を切っている。北東から南西に伸びるが、東は調査地区外にあり、西は3.3ｍで終わっている。幅は1.7ｍ程で底面の標高はほぼ同一である。

遺 物 古墳時代後期の坏や内黒坏の小片、砥石（123）が出土している。

時 期 重複関係からは古墳時代後期、６世紀以降と考えられる。

307号溝跡 欠番

308号溝跡 位置 Ｂ－６・７

Ⅳ層上面で検出し、374・395住に切られている。北北西から南南東に伸びるが、374住以北が不明で、395住以南は攪乱などで消滅している。最長6.0ｍ、幅は2.8ｍであり、深さは30cm程ある。また底面の標高は全体に同じで、覆土からも流水の状況はない。

遺 物 覆土から石製模造品の円板（37）、剣形（39～42）、鉄鏃（７）が出土している。

時 期 重複関係から５世紀後半以前と思われる。

所 見 溝跡としたが、395住下部分に地点が限定されることなどから、395住に関連する床下施設の可能性が高い。

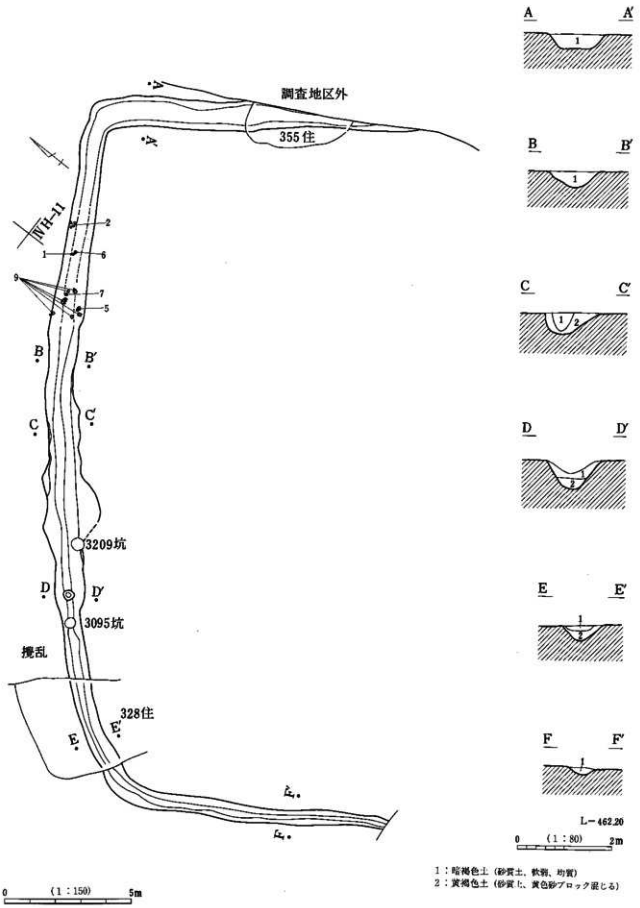

調査地区外
355住
WH-II
1
2
6
9
7
5
B
B′
C
C′
3209坑
D
D′
3095坑
攪乱
328住
E
E′
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
L－462.20
0　(1：80)　2m
1：暗褐色土（砂質土，軟質，均質）
2：黄褐色土（砂質土，黄色砂ブロック混じる）
0　(1：150)　5m

図204　302号溝跡

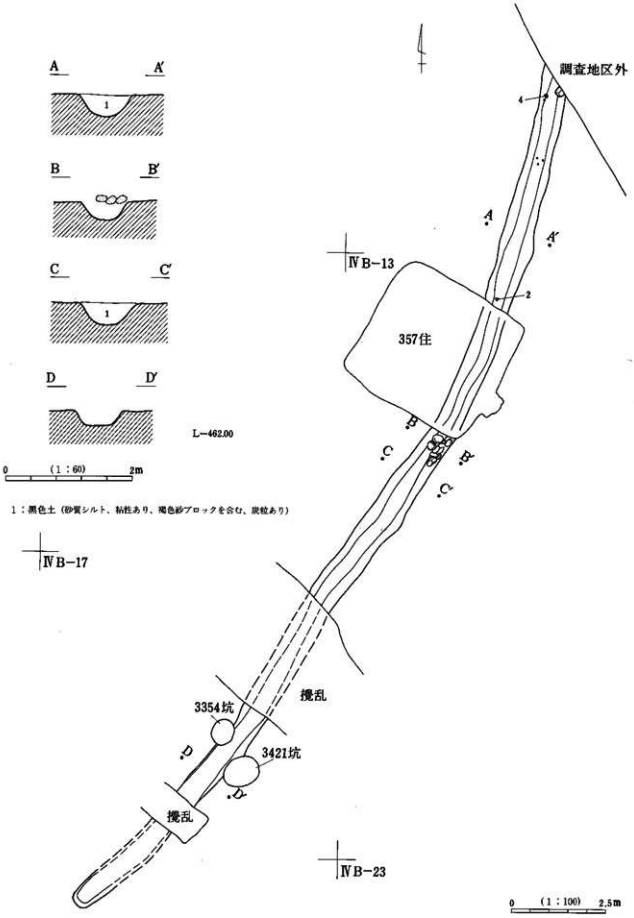

A
A′
1
B
B′
C
C′
1
D
D′
L=462.00
0
(1：60)
2m
1：黒色土（砂質シルト、粘性あり、褐色砂ブロックを含む、炭粒あり）
調査地区外
4
A
A′
2
Ⅳ B−13
357住
B
B′
C
C′
Ⅳ B−17
撹乱
3354坑
D
3421坑
D′
撹乱
Ⅳ B−23
0
(1：100)
2.5m

図205 305号溝跡

402溝

調査地区外

A　A′

457坑

409建

P-22

B　B′

C　C′

434坑

416住

調査地区外

0　(1：100)　2.5m

A　A′

B　B′

C　C′

L＝461.50

0　(1：60)　2m

1：褐色土（粘土質シルト、褐色砂ブロック含む）
2：暗褐色土（粘土質シルト、1層土より粘性が強い）
3：灰褐色土（砂質土、粘性弱い、黄褐色土混じる）
4：褐色土（砂質土、3層土より粒子細かい、黄褐色土多く入る）
5：灰黄褐色土（均質な砂質土）
6：褐色土（粘土質シルト）
7：黒褐色土（砂質シルト、粘性ややあり）

403・404溝

調査地区外

403溝

4586坑

B　B′

404溝

463住

A　A′

B　B′

L＝461.50

0　(1：60)　2m

1：黒褐色土（403溝覆土、黄褐色土、砂粒含む）
2：黒褐色土（404溝覆土、黄褐色土多く含む）

図206　402号・403号・404号溝跡

401号溝跡 位置 P－23

Ⅳ層上面で検出している。北東から南東に長さ4.2m、幅0.6m程であり、深さは0.25～0.30m程を測る。底面の標高はほとんど同じで、両端はどちらも丸く終わっている。覆土は黒褐色土の単層で、埋没過程は不明である。

遺 物 古墳時代後期の甕の小片が出土している。

時 期 土器からすれば古墳時代後期といえる。

所 見 形状から人工的に掘られた溝であり、流水の目的はないと思われる。

402号溝跡（図206） 位置 U－1、P－12・16・17・21、Y－5

Ⅳ層上面で検出し、416住や409建、434・457坑に切られる。北北東から南南西に向かってほぼ真直ぐに調査地区内を通過している。形状は掘り込みの壁面に屈折部分があり、底面はほぼ平坦で、また北側程深く残っていて、規模は最長23.0m、幅0.45～0.70m、底面の標高は北側が460.36m、南側が460.72mを測る。覆土は流水による堆積物と考えやすく、底部高から南から北へ流れたと考えられる。

遺 物 横瓶（1）や須恵甕（2）、内黒鉢（3）、高坏脚部（4）、甕（5）、平瓦（37）などの破片が出土している。

時 期 重複関係と土器から埋没時期は古墳時代後期の6世紀後半以前と思われ、平瓦は混入だろう。

所 見 掘り方の形状などから人工的に掘り込まれた溝と考える。

403号溝跡（図206） 位置 U－1

Ⅳ層上面で検出し、4586坑を切っている。北西側は調査地区外に出て、南東部は幅0.80mで丸く終り、底面は平坦で、標高差も少ない。

所 見 どのような成因でできた溝かは不明である。

404号溝跡（図206） 位置 U－1

Ⅳ層上面で検出する。やや弓なりに南北に伸びていて、北側は4586坑、南は463住に切られる。非常に浅く、長さも2.6m程しかない。また底面の標高差も少ない。

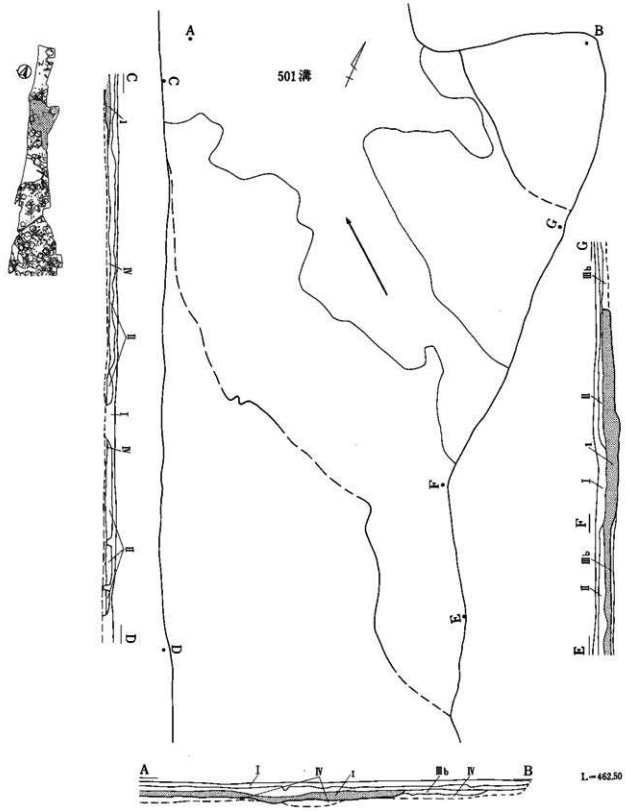
時 期 重複関係からは平安時代9世紀後半以前と考えられる。

所 見 遺存状況が悪く、成因は不明である。

501号溝跡（図207） 位置 J－12・13・16～18・21～23、O－1～3・8・9

重機によってⅡ層を下げていく段階で、Ⅱ層下位から径5cm以下の河原礫が混在する部分があり、トレンチ調査からその下に礫の集中する層（Ⅲa層）が認められる。Ⅲa層は粘土質シルトに、径5cm以下の河原礫が多数混在する層であり、主に⑤・⑥区に分布している。特に⑤区では、下位の遺物包含層（Ⅲb層）や遺構検出面下位層（Ⅳ層）を浸食してⅢa層が堆積している部分が南東方向から北西方向に調査区を横断して帯状に広がっていたため、その陥ち込みを自然流路跡と判断し501溝とした。検出面がⅣ層上面であるため本来の流路規模は確認できず、現存状態は底部付近を捉えていると思われ、長さ38m程、幅20m深さ0.6mに及ぶ。底面の標高はあまり差異ないが、南東から北西に傾斜していることは明らかである。また重複する501・502・505・506・508・525住を全て切っている。

遺 物 礫層からは、内黒坏（1～4）、足高高台の付く浅い埦（5）、灰釉陶器の皿（6）や埦（7）、平瓦（38）が出土しているが、重複する遺構からの流入と思われる。銭貨では紹聖元宝（57）がある。



Ⅰ　：基本層序Ⅰと同じ
Ⅱ　：基本層序Ⅱと同じ
Ⅰ　：基本層序Ⅲａ層と同じ砂礫層、含まれる円礫は南東から北西に向かって傾斜して堆積する。
Ⅲｂ：基本層序Ⅲｂと同じ
Ⅳ　：基本層序Ⅳと同じ

図207　501号溝跡

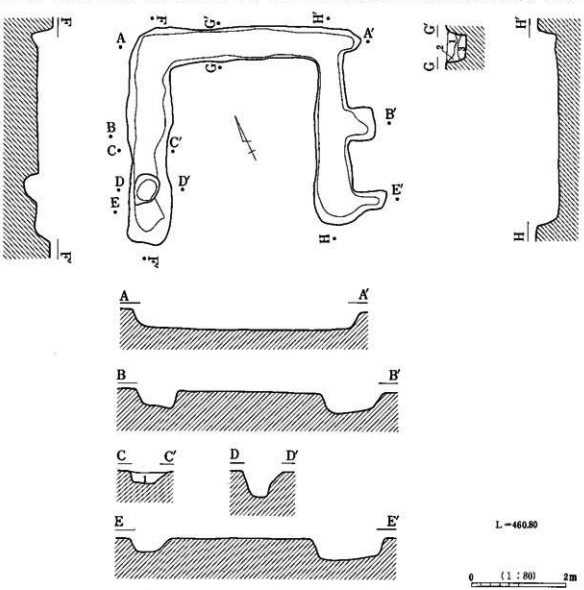
時 期 出土土器は平安時代9世紀後半から10世紀前半に属するものが主体で、僅かに足高高台の埦(5)のような10世紀以降の土器や北宋銭である紹聖元宝(57)もある。また重複関係からすれば、11世紀代の501住を切っていることから、少なくとも11世紀以降に現状の流路跡が形成され、また確実に中世以降といえる遺物がほとんど皆無であることからすれば、埋没時期もさほど時間差を持たないと考えられるだろうか。

所 見 Ⅲb層の河原礫は鳥帽子岳山塊の安山岩に酷似していることから、この溝の成因や礫の堆積のあった流水には、千曲川だけではなく神川の氾濫などといった影響が示唆される[註1]。

註 1 山岸壱久馬氏が現場視察した際のご教示による。

502号溝跡(図208) 位置 T－5、P－1

Ⅳ層よりやや上位で黒褐色の帯状の陥ち込みとして認められる。検出当初よりコの字状を呈していたため、何らかの遺構の重複が考えられたが、本跡の覆土には重複関係を示す分層が観察できなかった。コの



1：黒色土(粘土質シルト、Ⅲb層と同層、粘性ややあり、しまり悪い)
2：暗褐色土(シルト質土、黒褐色土混じる)
3：黒褐色土(砂質シルト、2層土に比べて粒子大きく、砂を含む)

図208 502号溝跡

字状の平面形から東辺に3カ所外側に張り出す部分があるが、これも遺構の重複ではなくこうした平面形を本来有する遺構であると判断した。覆土は粘土質シルト～砂質シルトであり、全体的に安定した性状である。また遺構壁付近に崩土も認められず、グライ化した状況もなかったため、覆土からは滞水や流水の状況は考えられない。形状と規模は、西辺が北北東から南南西を向いていて、幅と長さ、深さは0.95×4.55×0.50mであり、南端付近に円形のピットがある。北辺は西辺から直角に屈曲して直線的に伸び、規模は0.65×4.55×0.40mを測り、東辺は北辺から直角に屈曲して規模は0.72×4.16×0.48mであり、東側の南北端と中央の3カ所張り出し部分がある。また東辺は西辺と平行であるがやや短く、掘り込みは全体に逆台形を呈している。

遺　物　遺物量は少ない。図化資料に底部に焼成後の穿孔を持つ坏（1）と内黒坏（2）がある。

時　期　遺物から考えると、7世紀後半～8世紀前葉と考えられる。

所　見　本跡の機能は不明であるが、覆土の状況は503～505溝によく似ている。規模や形状からは南側にある502・503建との関連が示唆される。また古代の佐久地方に見られる溝持ち式の掘立柱建物跡にも構造が似ている。

503号溝跡（図209）　　位置　O－25、K－21

Ⅳ層上面で検出する。東南東から西北西に直線状に伸び、西側は調査地区外に出て、西端は587坑に切られ、518溝を切り、最終的に攪乱を受けて消滅している。断面形状は浅い皿状で、覆土はⅢb層起因の黒色土シルトの単層である。規模は幅0.7m、長さ10.2m、深さは0.2mを測り、底面高は僅かながら東から西側に傾く。

時　期　重複関係から平安時代以降と考えられる。

所　見　覆土は502・504・505溝によく似ている。

504号溝跡（図209）　　位置　O－25、T－5、P－1

Ⅳ層上面で検出する。覆土はⅢb層の単層で幅0.4m、長さ4.7m、深さ0.15mを測り、南東から北西に直線的に伸びていて、両端は丸く終わっている。断面形状は浅い皿状で底面高には大きな差異はない。

所　見　覆土は502・503・505溝によく似ている。

505号溝跡（図209）　　位置　O－25、P－1、T－5

Ⅳ層上面で検出する。504溝と503溝の間で検出され、504溝と平行する。覆土も同質で、規模は幅0.5m、長さ5.7mで深さは0.16～0.25mを測り、北端がやや陥ち込み、中央より南側に円形のピットがある。断面形状は浅い皿状に近い。

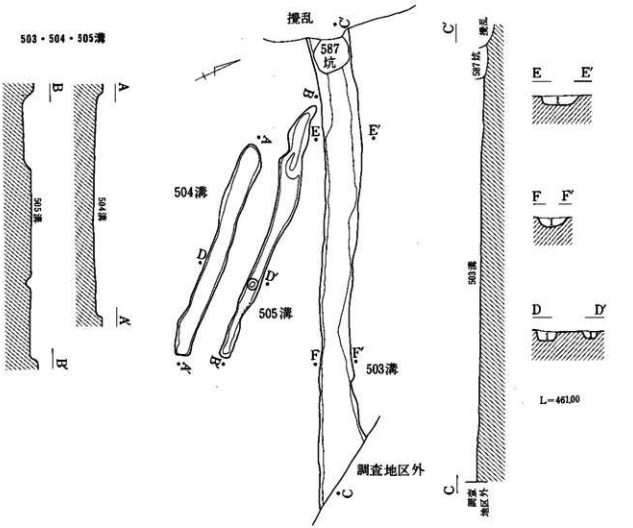
所　見　覆土は502・503・504溝によく似ている。

506号溝跡（図209）　　位置　T－15

Ⅳ層上面で検出し、南側は工事工程上、調査ができていない。また本跡は510住床下に全て包括されている。覆土の下位2層は自然埋没の様相があるが、1層はブロック土が多く、人為的な埋没が考えられる。平面形は不整形に東西に伸びていて、西端が大きく膨み、東側は比較的同じ幅を呈している。また断面形は浅い皿状をしていて、規模は現状で幅0.4～1.2m、長さ3.1m、深さ0.2m程を測る。

時　期　少なくとも510住の8世紀前半以前である。

所　見　510住との関係は明らかではない。



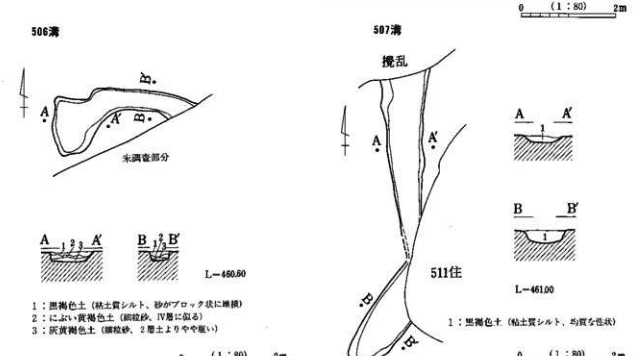


図209 503号・504号・505号・506号・507号溝跡

507号溝跡（図209）　　位置　T－4

Ⅳ層上面で検出する。北端は攪乱を受け、南側一部は511住に切られている。511住より北側は南北に伸びるが、それより南側は西に偏る。断面形は浅い皿状で覆土は黒褐色土の単層である。規模は幅0.5～1.1m、長さ6.0m、深さ0.25m程を測る。また底面高は北から南に傾く。

時　期　少なくとも511住の10世紀後半以前である。

508号溝跡（図210）　　位置　O－19・20・25

Ⅳ層上面で検出し、溝は東西方向にほぼ直線的に伸びていて、東端は調査地区外に出て西端は588坑に切られ、攪乱を受けて消失している。覆土は3層に分けられ、下位2層は崩土と思われる。断面形は逆台形で規模は幅0.9m、長さ11.0m、深さ0.55mを測り、底面高はあまり差異がない。

遺　物　須恵坏（1）、底面ヘラケズリの坏（2）、大型の坏（3）、高坏脚部（4）、石製紡錘車（6）、凹石(207)が出土している。

時　期　出土土器から、奈良時代の8世紀前半頃と思われる。

所　見　掘り込み断面形が逆台形であり、人為的な溝と思われる。覆土からは流水の状況は見られない。

509号溝跡（図210）　　位置　O－2・7

Ⅳ層上面で検出する。南側が調査地区外に出て、北側が504住に切られていて、ほとんど残らない。断面形は非常に浅い皿状で、現状の規模は幅1.9m、長さ1.2m、深さ0.1m程を測る。

時　期　少なくとも504住の9世紀後葉以前と考えられる。

所　見　本跡の成因や流水の状況は不明である。

601号溝跡（図210）　　位置　D－25、E－21

Ⅳ層上面で検出し、601住を切っている。北東から南西にほぼ直線的に伸びていて、東端は調査地区外に出て、西端は検出できずに消失している。覆土は黒褐色のシルト質粘土で拳大の礫を含み、やや大きな円礫が底面に並ぶ部分もある。規模は幅1.1m、長さ6.2m、深さ0.2～0.4mを測り、底面高は東から西に傾いている。断面形状は浅い逆台形に近い。

遺　物　須恵坏（1）、高台坏（5）、甕（2）、内黒坏（3・4）が出土している。

時　期　遺物からすれば、奈良時代と考えられ、重複関係も一致している。

所　見　人工的な溝と考えられ、覆土からあまり強い流水はなかったといえる。

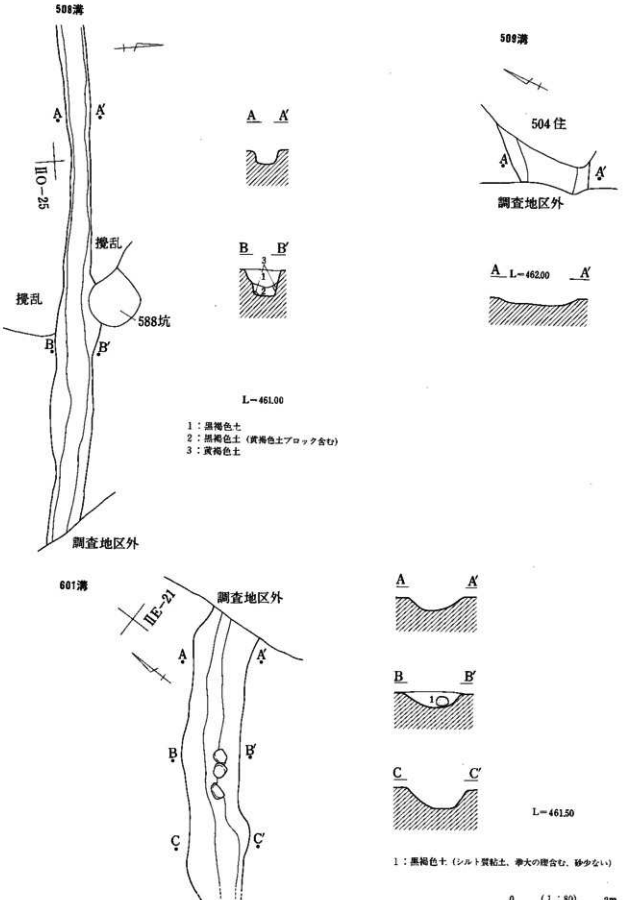


図210 508号・509号・601号溝跡

ク　不明遺構（ＳＸ）

機能不明な遺構の総称であるが、本遺跡では検出段階では不明遺構であるが、本来住居跡などの構造の一部といえそうである遺構が２基確認された。しかし住居跡とする根拠が乏しいため、本項で扱う。

ＳＸ301（図211）　　位置　Ｂ－７・８

Ⅳ層上面にて383住を検出段階で、火床跡が確認され、それに伴う床面状のやや堅緻な平坦面が楕円形に広がっていた。最終的には383住を本跡が切っていることが明らかになっている。床面からはいずれも底部回転糸切り未調整の須恵坏（１）と土師坏（２）が出土している。

時　期　遺物から平安時代の９世紀代といえる。

所　見　火床の機能は分からないが、本来平安時代の住居跡が存在した可能性が高い。

ＳＸ401（図211）　　位置　Ｕ－16・17

Ⅳ層上面にて、弥生時代後期の457住を切っている状態で検出される。検出段階でカマド袖石様の１対の河原礫が直立して、そこから北西に広がる不整な長楕円形の陥ち込みを確認した。カマド燃焼部と推測して、トレンチ調査などを実施したが、住居跡の平面形が検出できず、当初確認した河原礫と燃焼部のような陥ち込み、被熱範囲だけを調査するに過ぎなかった。覆土には炭や焼土ブロックが含まれている。

遺　物　被熱範囲上部から長胴甕底部（１）が出土している。

時　期　土器から古墳時代後期と思われる。

所　見　古墳時代後期の住居跡カマドと考えたい。

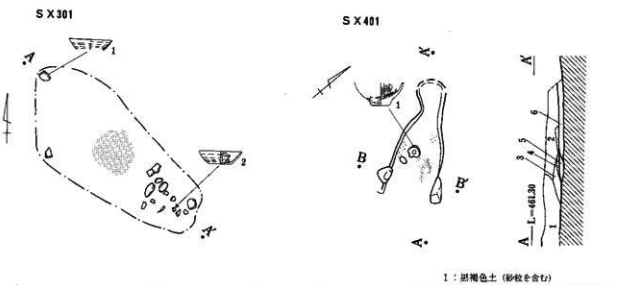


図211　301号・401号不明遺構（ＳＸ）

(2) 遺物

(i) 縄文時代の遺物

ア 土器（図212・213、表10、PL51）

国分寺周辺遺跡群からは前期から後期の縄文土器が出土しているが、量的には中期末葉から後期初頭が主体である。また出土地点は遺物包含層（Ⅲb層）以外にも竪穴住居跡、土坑、溝といった遺構の覆土からも出土しているが、いずれも縄文時代以降の弥生、古墳時代や古代に属する遺構であり、縄文時代の遺構は確認できなかったので、遺物包含層のものとともに一括して扱った。土器や石器はそう摩滅が顕著ではないことから、縄文時代にはすでにこの段丘面は生活範囲に含まれていたといえる。なお、一つ上位のⅣa面には縄文時代中期後葉から後期と思われる住居跡が調査されている（第2章第2節参照）。

個々の遺物の特徴、属性である色調、胎土、焼成、調整・施文方法などは観察表を参照されたい。

前期後葉（1～4）

1・3は櫛歯状工具、2は半截竹管状工具によって施文されている。4は縄文施文の土器だが後述の縄文中期加曽利E式や後期の磨消縄文土器との縄文原体とは節の感じが異なる。やや薄手である。

中期末（5～32）

5～9は隆帯を貼り付けるもので、7～9は隆帯上を刻む。10は鋸状工具、11は半截竹管工具を束ねた工具によるものか？10・11はやや厚手でいずれも後述の加曽利E式に伴うものと考えた。12～32は縄文を地文とし、やや太めの沈線で区画している。縄文原体は無節Lや単節LRもあるが単節RLが多い。

口縁部の破片は隆帯で区画し、さらに凹線を施すもの（12）、凹線だけで区画するもの（13～15）とがある。胴部破片は縦位に区画して磨消部分を持つ胴部破片（16・17・19・29～31）や楕円形ないしU字の区画を持つ胴部破片（22・27・28）があり、加曽利E式のうち新しい時期（加曽利EⅢ式）のものが主体を占める。

後期初頭（33～42）

33～42は沈線が細く、縄文の節も細かい。35～37のように渦巻様の文様を描くものもある。これらは後期初頭（称名寺式）に属するものだろう。34は隆帯上を指頭圧痕で刻んでいるもので7・8とも類似するが、土器の器面が磨かれ、隆帯も低く幅広で若干様相が異なるので後期に下る可能性を考えた。

後期前葉（43～59）

43～46は幅広の沈線が施された胴部破片。厳密な時期を判別するのは難しく、ここでは堀之内式の範疇と考えたが、それ以前に遡る可能性もあろう。

47～54は後期前葉の中でも古手、堀之内Ⅰ式に並行する資料。47・48は鉢形土器で、47は同心円状の単位文様を描く。ゆるやかな波状を呈す口縁の波頂部。48も口縁がゆるやかな波状を呈し、若干肥厚した口縁部文様帯の下端を刺突する。49～50は鉢形土器のややふくらむ胴部下半の破片である。

55～59は後期前葉でも新手、堀之内Ⅱ式に並行する資料。55・56は朝顔形に開く深鉢形土器で、口縁端部を内面に屈曲させる。文様は沈線が横位に展開する。57～59も朝顔形の深鉢形土器の胴部破片である。

後期中葉（60～62）

口縁部文様帯に並行沈線で文様が施され、黒色処理された上に丁寧に研磨されている。加曽利B1式期か。

その他

65は外面に荒い条痕が施される。詳細な所属時期は不明。63は堀之内1式の注口土器の把手。64は中期末後期初頭のヒサゴ形の注口土器の縦位に貫通した把手。

イ　石器（図214・215、表11～13、ＰＬ52）

縄文時代の石器として、石鏃、刃器、打製石斧が出土している。土器と同様に出土状況は遺物包含層や時代の新しい遺構からであり、分布地点も調査地区全体に広がっている。

石鏃（図214、表11、ＰＬ52）

総数23点を数える。石材は黒曜石が19点、チャートが４点と圧倒的に黒曜石が多い。完形品は６点と少なく、他の資料は大半が基部を欠損し、先端部が僅かに欠損している資料もある。また形態は基部茎の有無から大きく２種類に分けられ、無茎が16点、有茎が５点で、不明が２点ある。

無茎では基部の括れの形態で、爪形が６点、逆Ｃ字形が５点、逆Ｖ字形が７点ある。有茎では茎を除いた基部形で爪形４点、平形１点がある。また側辺部の形態は直線状が12点、外湾状が11点あり、直線状のうちで233・248には両側部に１対の抉りが見られる。また231・235・242は側辺部調整が細かく規則的な鋸歯状である。

使用痕や装着痕はほとんど見られないが、235の基部に擦り痕が観察され、装着痕の可能性がある。

刃器（図214、表12、ＰＬ52）

３点出土した。279・280は千枚岩質粘板岩製で打製石斧と同石材である。279は略三角形で長辺部に細かな調整を施していて、そこが刃部と思われる。280は略方形で４辺に調整が施されているが、特に長辺部一端の調整が細かく刃部の様相を成す。形状から打製石斧頭部の欠損品を二次加工した石器と思われる。281はオリーブ灰色の変質したヒン岩製で、自然面が一面に残る。やや外湾した長辺部に規則的な調整があり刃部を形成している。刃部角は鈍い。

打製石斧（図214・215、表13、ＰＬ52）

25点出土した。そのうち271・277・278は転石及び僅かな調整がある資料であるが、石斧素材として持ち込まれたものと理解して、同じに数えている。出土分布は特に③・④区が多い。石材は全て千枚岩質の粘板岩で、完形品は５点だけで刃部付近の欠損した資料が目立つ。また形態は短冊形（275・258・264・265・266）、短冊形で側辺部に抉りのあるもの（273・263・270・262・272・274）の２種類が主体である。261の大型品は頭部から１側面に自然面が残り、頭部は三角形に尖っている。

また光沢状の擦り痕が刃部にあるもの（275・265・263・270・259・272・274）、側面にあるもの（258・273・266・263・270・259・272・274）については、使用痕や柄部の装着痕と理解する。

（ii）　弥生時代後期～古墳時代前期の土器

本遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期初頭の箱清水式土器主体の時期と古墳時代前期の２つに大きく分けることができる。ここではそれぞれの時期に属する主な遺構の土器様相を概観する。

弥生時代後期～古墳時代前期初頭まで

313号住居跡（図216、ＰＬ53・54）

壺には大形で赤彩された壺（12）と無赤彩の壺（５）がある。12は頸部が細く、体部下半が大きく膨らむが、その部分に明瞭な稜は見られない。頸部にはＴ字文が施される。５は大きく開く口縁部の破片であるが、詳細は不明である。

甕は法量で大中小に分けられる。大形の甕（８）は平底で体部は緩やかに膨らみ、口縁部はやや直線的に外反する。体部上半から口縁部までの器面には櫛描斜状文を地文とした後に櫛描波状文が施され、頸部に簾状文が一周している。中形の甕（10）は口縁部に最大径を持ち、体部の膨らみは緩やかである。小形の甕（６・７・９）のうち、６・７は口縁部径が僅かに体部径より大きく、両者の体部の張りや口縁部の形

態はよく似ている。施文は8と同じである。9は器形や施文が3・4の小形台付甕に似ていることから、台付甕の可能性がある。小形の台付甕（3・4）は甕部が短胴で口縁部が短く外反し、脚部は短く直線気味に開き、端部は面取りされている。

この他に赤彩された蓋（1）と丁寧に磨かれた擂り鉢形で底部に厚みのある甑（2）がある。なお11はハケ調整され、口縁部が短く直線的に外反する甕であり、他の土器と全く様相が異なり、古墳時代前期の混入と理解する。

時　期　弥生時代後期箱清水式期とする。

316号住居跡（図217、PL54）

小形甕（5・7）は、口縁部が短く緩やかに外反して、体部の膨らみは少ない。櫛描波状文の施文が雑で、5は頸部下位に集中している。また東海系の台付甕脚部（3・4・6）が出土している。

高坏（1）は坏底部にやや稜を意識して大きく開き、脚部は短く直線的な器形で、脚部上位に4単位の円形スカシ孔がある。2は小形の浅鉢といえるだろうか。口縁部が内面に稜を持って強く外反し、端部は面取りされていて、体部内面には丁寧なタテミガキが施されている。

時　期　赤彩された土器が無くなり、東海系の土器が多く供伴することから、古墳時代前期初頭と考える。

345号住居跡（図217、PL54）

赤彩された片口鉢（1）が図化されている。口縁部外面は有段で直立気味に短く立ち上がり、内面には明瞭な屈曲は見られない。体部はやや内反するように小さい平底に向かう。器面はミガキ調整であり、内外面ともに赤彩される。

時　期　図化されない土器も考慮して、おおよそ弥生時代後期箱清水式期とする。

457号住居跡（図217、PL54）

小形の甕（2）は平底で、体部は緩やかに膨らみ、口縁部はやや直線的に開いて最大径を持つ。体部上半から口縁部に櫛描波状文、頸部に簾状文が施される。内面は丁寧にヨコミガキされる。1は大径で浅い鉢と理解する。無赤彩で外面はヨコナデ後タテミガキが施される。

時　期　甕の器形から弥生時代後期、箱清水式期とする。

467号住居跡（図217、PL54）

甕（2～4）は中形であり、平底から細身の体部を持ち、口縁部の外反も弱い。施文は櫛描波状文であり、簾状文は見られない。1は赤彩の鉢で、平底から体部は浅く大きく開き、口縁部が直立気味に内湾している。赤彩は内外面に施される。

時　期　甕の器形から弥生時代後期、箱清水式期とする。

529号住居跡（図217、PL54）

甕（4）は頸部付近のみ残る個体で、全体に細身の器形で、体部の張りも緩く、口縁部も外反は弱いと思われる。文様は櫛描波状文の後に2段の簾状文が施される。3は小形のコップ形の甕であり、台付甕の可能性もある。上半部に櫛描波状文がある。1は赤彩の鉢であり、2は編笠状に開く蓋で、ツマミ部中央に小孔を穿つ。

時　期　甕の器形からは、弥生時代後期、箱清水式期と思われる。

530号住居跡（図217・218、PL55）

大形の壺（4～6）には全体形の分かる個体はないが、各部位で見ると4の口縁部は細まった頸部から屈曲して直線的に外反するが、裾は余り長く伸びない。頸部にはT字文があり、その上部外面は赤彩されている。5の体部上半はさほど膨らまずに、直線的に下部に向かう器形をなし、頸部にはT字文と横位に沈線を刻んだボタン状貼付文が付く。頸部以下は赤彩される。6の体部下半は平底から非常に緩やかに膨らんで上半に向かう器形を呈する。外面は細かくミガキ調整があり、内面はハケ調整である。5と6は同一個体の可能性がある。3は甕の器形に似た広口壺で内外面に赤彩が施されている。

甕（8）は大形で、体部上半までの個体である。体部の膨らみはそれ程強くなく、頸部から口縁部の外反も緩やかである。1は深い塊形の坏部を持つ赤彩高坏で、脚部は短く裾が開き、4単位の三角スカシがある。2は蓋であり、天井に小孔は見られない。なお7は古墳時代前期の混入土器と思われる。

時　期　弥生時代後期、箱清水式期とする。

533号住居跡（図218・219、PL55）

大形の壺（4～7）では口縁部が非常に大きく広がる器形（4）が目立つ。頸部の残る個体（4～6）にはT字文がある。7は頸部から体部下半の個体で底部は残らない。体部下半に稜を持たないで最大径を持ち、そこから急に細まって底部に向かう。また頸部以下外面全体に赤彩が施されている。

他に1は深い塊状の坏部を持つ赤彩高坏で、坏部はやや直線的に開き、脚部は短く裾が僅かに開く。2は小形の台付甕で上半部に櫛描波状文がある。3は深めの赤彩の鉢で口唇部が直立気味に内湾する。

時　期　弥生時代後期、箱清水式期である。

303号溝跡（図219・220、PL56）

壺では、大形のもの（9・12）、やや小形の無赤彩で、体部は丸く下半に稜を持ち細まる器形のもの（11）、外面全体と口縁部内面を赤彩した広口壺（10）、頸部に「2分の1円弧文」といわれる櫛描文があるもの（8）がある。なお3・4の有段口縁壺は、新しい時期の混入と考えられる。

甕では、櫛描波状文が施され、やや体部の膨らみの強いもの（16・17）と短胴で頸部の屈曲の少ないもの（18）がある。またS字口縁台付甕（14・15）やハケ調整の施された甕（13）もある。

他の器種では脚部の短い赤彩高坏（1）、甑（2・6）、片口の赤彩鉢（5）、装飾器台と思われるもの（7）がある。

時　期　溝跡のためか、出土遺物は住居跡より時間幅が大きいようである。弥生時代後期の終末から古墳時代前期前半頃まで広がるだろうか。或いは混入も考えられるが、覆土が浅いため、詳細な出土状況をとらえられない。

古墳時代前期

330号住居跡（図217、PL54）

壺には、口縁部が厚手で直立して、肩部の張るもの（4）、有段口縁で小形のもの（1）、やや有段口縁気味のもの（3）、朝顔形に開く口縁部を持つもの（2）がある。甕（5）は口縁部が短く直立気味に外反して、球形胴をなしている。他に台付甕の脚部（6）も出土している。

時　期　古墳時代前期後半と思われる。

340号住居跡（図217）

1の高坏は有稜部を持ち、浅く開く。2は編笠状に開く蓋である。

時 期 古墳時代前期後半から中期前半頃か。

304号溝跡（図220、PL56）

壺には有段口縁壺（10）がある。甕はハケ目調整された丸底の球形胴で、口縁部が直線的に外反するもの（14～19）が主体である。また台付甕の脚部も出土している（20～22）。

高坏では有稜の坏部を持つもの（3）があり、1・2・4の赤彩高坏は古い時期の混入の可能性がある。器台には受部が小さく皿状のもの（6）と、柱状の脚部に3単位の円形スカシがあるもの（5）がある。

他に蓋（7）、小形鉢（8）、偏球形の鉢（9）、甑（12）、ヒサゴ壺？（13）などがある。

時 期 溝跡であることと、本来遺物が少ないことから、正確な構築時期や埋没時期は摑みにくいが、全体の様相から古墳時代前期の構築と考えたい。

SH302（図221、PL56）

3はやや丸みを持った体部上半から僅かに直立気味の頸部を経由して口縁部が大きく外反する器形で、口縁端部は擬似口縁状であるため、本来パレススタイルの壺である可能性が高い。加飾性に富んでいて、口縁部の内外には赤彩が施され、頸部には断面三角形の突帯が一巡する。頸部以下には横位楕描文があり、一部波状文を呈する部分もある。器形だけではなく色調が明赤褐色で、胎土には石英が多く含まれていることなど、他の同時期の土器と明らかに違う様相を呈している。壺にはこの他に底部がやや突出して、やや直線的に体部上半に向かうもの（8）、口縁部が直立気味で端部が外反する器形（14）などがある。

甕にはハケ目調整の甕（10・11・15）と口縁端部を明瞭に面取り成形した甕（16・18）、台付甕（17・19～21）がある。なお13は弥生時代後期からの混入であろう。2の高坏はやや有稜気味で直線的に開く坏部であり、円形スカシの入った器台の脚部（4～7・9）もある。他に平底の小形鉢（1）が出土している。

時 期 304溝の埋没過程にある時期の遺構であることも考慮して、古墳時代前期としたい。

遺構外の土器（図221、PL56）

遺構外でも多数の当期土器が出土したが、図化したものでは塊形の赤彩高坏（1）、肩部外面にヨコハケ調整が残るS字口縁台付甕（2）や赤彩の広口壺（3）、小形丸底壺（4）などが出土している。

(iii) 古墳時代中・後期の土器

当該期は、本遺跡で最も遺構が集中する時期にあたり、土器の出土数も膨大である。ここでは大まかに時期を5世紀中頃から6世紀初頭、6世紀、7世紀と区切って、その中でも一括性の高い住居跡の土器を中心に概観する。なお現時点では上小地方の当該期の土器様相が明確にされていないため、併行関係を5世紀中頃から6世紀初頭について、長野市本村東沖遺跡の編年（千野1993）、6・7世紀の土器については西山克巳らの善光寺平・佐久平の編年（西山他1995）に求めている。

5世紀中頃から6世紀初頭

本村東沖遺跡では3段階～6段階にあたる。各段階に相当する遺構を見てみたい。

3段階（5世紀第2四半期）の好資料は本遺跡にはないものの、398住が4段階（5世紀第3四半期）でも、より3段階に近い様相と考える。坏には半球形で口縁部が丸く終わるもの（1）と口縁部が短くくの字状

に外反するもの（2）があり、壺として、胎土に多量の雲母を含み、厚手で口縁部に僅かに有段口縁の形態が残り、体部が長く伸びる器形を示すもの（5）がある。またミニチュア土器（図278−28）は小形丸底土器を模しているようである。

4段階（5世紀第3四半期）には、321・339・353・366・369・375・3400住などが相当するだろう。

この時期の土器は、全体に歪みが大きく甕の内面には明瞭な接合痕が残るものの、坏等の小形土器のミガキ調整は非常に緻密である。坏は法量に共通性がなく、全体形は半球形が多く、口縁部の形態は丸く終わるものと、短く強く外反して内面に稜を持つもの、短くくの字状に外反するものの3種類に分けられる。高坏には有稜坏部に柱状で裾部が強く屈曲して開くもの（339住−16）は少なく、有稜坏部に脚部がやや膨らむようなへの字状から裾端部が強く反るものと、坏部がやや明瞭になり内湾気味で、脚部がハの字状から裾部が更に開くものが主体である。鉢は偏球形で丸底のものが多く、口縁部は坏と似て、短く強く外反して内面に稜を持つものとやや丸みを持ったくの字状に外反するものがある。なお坏と鉢には内面黒色処理した個体も現れる。

甕は球形胴に近く、体部中央に最大径を持ち、口縁部が強く屈曲するものと体部中央に最大径を持ちつつ長胴化が進むもの、更に長胴化が進行して体部下半に最大径が移るものなど、非常に個体差が大きい。その器面調整にはヘラケズリやナデだけでなく、外面にミガキ調整が施されるもの（321住−27・28、369住−8など）がある。このほか量は少ないが肩が張って頸部が直線的な壺（366住−10・11）がある。甑は小形で単孔のもの（339住−22、369住−5、3400住−22）と、大形で底部がなく口縁部に向かって緩やかに広がるもの（321住−26、353住−3、375住−15）がある。

5段階（5世紀第4四半期）から6段階（5世紀末〜6世紀初頭）には338・351・393住が相当するだろう。

338住には内面黒色処理した坏はなく、半球形で口縁部が丸く終わるもの（1・2）と須恵器坏蓋模倣坏（3）や丸底で底部外面に僅かな稜を持つもの（4・5）がある。甕（11）は底部が突出して、体部中央に最大径を持って口縁部が比較的強く外反する器形である。また球形胴で器厚のある大形の壺（10）も出土している。351住では、坏では口縁部が僅かに外反気味のもの（2〜5）が主体で、偏平な鉢（8）や器高の高い鉢（1）もある。また坏と鉢には内面黒色処理されたものが確実に入る。甕には体部中央に最大径を持つと思われるもの（13）と、体部下半に最大径をもつもの（12）、口縁部に最大径を持つ長胴形のもの（11）が共存する。壺（14）は球形胴を持つと思われ、甑には把手付の球形胴のもの（10）がある。393住では3・4段階の坏の形態を残しつつ、須恵器坏蓋模倣坏（2）や内黒の坏（1）が伴っている。また小形壺（6）も内面黒色処理されている。

6世紀

西山編年の善光寺平2期、佐久平2期（6世紀前葉〜中葉）としては、343・383・411・419・601・602住がある。

坏には内面黒色処理されたものが主体を占めつつ有り、器形では底面に稜を持ち、そこから直線的に開くもの（343住−2、383住−5、411住−1・2など）や、底部が厚く内面に屈曲線を持つもの（343住−3、411住-11・12など）、須恵器坏身模倣坏（383住−2）や蓋模倣坏（383住−1、602住−2）などがあり、坏身模倣のものは受部が明瞭に見られる。鉢（411住−16・17、419住−5・7・8など）は内面黒色処理されていて、全体形は深い椀状で、口縁部が真直ぐ立ち上がって終わるもの（419住−7）、内湾するもの（419住−5）や僅かに外反するもの（419住−8）、口縁部が長く伸びるもの（411住−17）や体部が偏球形で、口縁部が短く外反するもの（411住−16）が見られる。甕は球形胴のもの（383住−9・10、411住−22〜26、419住−12・13、601住−9）や体部中央から下半に最大径を持つもの（343住−8、383住−11、602住−5〜7・9）、肩が張らない

寸胴なもの（383住－12、411住－27～30、601住－10・11、602住－8・10・11）がある。壺には球形胴に直立気味で裾が開く口縁部をもつもの（411住－20・21）がある。

西山編年の善光寺平3期、佐久平3期（6世紀中葉～後葉）では、336・341・347・384・392住がある。

坏は内面黒色処理されたものが主体で、内外面黒色処理されたもの（384住－1）もある。器形では須恵器坏模倣坏で受け部が不明瞭であるもの（384住－1・2）、底部がやや平底気味の丸底で口縁部が直線的に大きく開くもの（336住－4、347住－4）などがある。高坏も内面黒色処理が大半で、埦形の坏部に短い脚部がつくもの、脚部がやや長く裾部が強く開くものがある。甕は全て長胴化して、体部中央に最大径を持つもの（341住－13、347住－1）と、短く屈曲して外反する口縁部に最大径を持つものがある。甑は小形で単孔のものが主体で、内面黒色処理されたもの（341住－9）もあり、小形の底部で多孔の甑（347住－7）も現れる。

西山編年の善光寺平4期、佐久平4期（6世紀後葉～末葉）には、344・359住が当てはまるだろうか。

坏には内面黒色処理で、底部が平底気味で体部がやや内湾しながら立ち上がり、底部内面には屈曲線を持つ器形（344住－8～10、359住－1・2）がある。また須恵器坏身模倣の坏（344住－13）は受け部がやや不明瞭になっている。甕には口縁部が屈曲して寸胴の長胴甕（344住－17）、と広口の甕（344住－18）が伴う。体部の底部付近に円孔を穿った大形の甑（344住－16）もある。

7世紀

西山編年善光寺平5期、佐久平5期（7世紀初頭～前葉頃）には326・334・368・374・449住がある。

坏は大半が内面黒色処理され、底面が平底気味で底部内面に屈曲線を残すもの（326住－2、368住－4～7）や、内外面ともに緩やかに内湾しながら開くもの（334住－2、374住－5、449住－1～4）が主体である。また群馬方面からの影響と考えられる所謂有段口縁坏（326住－1）が見られる。甕は長胴甕であり、口縁部に最大径を持つ器形（326住－7、334住－5、368住－10～15、449住－10）が主体的になる。また甑には把手の付いたもの（368住－16）、小形で多孔のもの（449住－7）、底部が無く体部が徐々に広がる大形のもの（449住－6）がある。須恵器坏（374住－1・2）はTK209からTK217型式の特徴を持っている。

西山編年善光寺6期、佐久平6・7期（7世紀中葉～8世紀初頭頃）には401・421・425・430住がある。

坏は大半が浅い半球形で、口縁部が内湾しないで終わる器形のもの（401住－1・2、420住－2・3、425住－1、430住－3・4）になり、高坏の坏部も同形（425住－2）であり、脚部は短く裾が屈曲する。いずれも内面黒色処理されているものが多い。甕は器厚が薄く寸胴のもの（421住－2、430住－6）と、更に薄く削られて、肩部が張り頸部から口縁部がくの字状の東信型の甕の粗形と考えられるもの（421住－3）も現れてくる。

（iv） 奈良時代の土器

須恵器坏の底部調整などの形態の変化を中心に、土師器甕の器形の変化も合わせて見てみたい。時期設定は小林真寿氏の上小地方の編年（小林1987）と堤隆氏の佐久地方の編年（堤1987）を規範とした。

8世紀初頭から前葉（小林Ⅰ・Ⅱ期、堤8世紀第Ⅰ四半期）

448住では、須恵器の坏（10～12）は全て静止ヘラ調整であり、底部は大径で器厚があり、体部はやや外反するように伸びている。高台付の坏（4～8）の底部は回転ヘラケズリ調整であり、高台は断面方形から平行四辺形であり、内側の稜で立地するものが多い。法量には大小あり、小形のものは比較的体部が深く、急角度に立ち上がるが、大形のものは体部が浅く広がっている。坏蓋には内面にカエシの付いたもの

（1）とカエシがなく偏平な擬宝珠ツマミの付くもの（2）があり、いずれも小形である。3は短頸壺の蓋と考えられる。14は浅い皿であり、15も大皿といえるだろうか。また土師器では器形が須恵器高坏を模倣したような内黒高坏（16~18、20~22）がまとまって出土している。ロクロ成形されて、坏部は直線的に開く。脚部は上部が柱状で、裾に向かってラッパ状に開き、裾端部は稜を持って垂直に立つ器形で、上部に横位に沈線が1～2条巡っている。胎土も長石や石英といった混和材が多量に含まれ、色調は橙色である。その他に浅い半球形の坏部を持つ、一般的な高坏（19・23・24）もある。

8世紀前葉から中葉（小林Ⅱ・Ⅲ期、奥8世紀第Ⅱ四半期）

520住では須恵器坏（3）は底部調整がヘラケズリで、高台付坏（2）は手持ち回転ヘラケズリである。2は底部が高台より突出気味で、体部はやや内湾して急角度に立つ。高台の断面形は方形で内側の稜で立地している。また土師器の坏には偏平な半球形の内黒坏（4）が残っている。5の須恵器甕は広口で肩がやや張り、口縁部は体部から短く外反して端部は受け口状に短く立ち上がる。外面には平行タタキ跡が残っている。土師器の甕には法量から大小があり、大形の甕（8）はくの字状の口縁部に肩がやや張る長胴傾向の体部が付き底部は非常に小さな平底で、体部外面は非常に薄くケズリ調整が残る。最大径は口縁部にある。小形の甕（6・7）はロクロ成形で、6は全体に球形で、平底で肩が張る体部に、直立気味の短い口縁部が付く。外面下位はロクロ成形後にタテケズリ調整されている。7はやや長胴気味で底部径も大きい。口縁部はくの字状に立ち上がり、最大径は体部上半にある。調整は外面がロクロ調整後、底部周辺をヨコケズリしている。この他363・373住では、くの字状の口縁部の甕（363住－4・373住－4）があり、小形甕（363住－3）は平底の略球形の体部を持ち、口縁部は外反した後、外面端部が明瞭に面取りされている。器厚は薄く、外面下位にヘラケズリ、中位にヨコハケ調整があり、内面はヨコケズリ調整である。

8世紀中葉から後葉（小林Ⅲ・Ⅳ期、奥8世紀第Ⅲ四半期）

367住では底部が手持ちヘラケズリ調整された須恵器坏（2・3・4・6）が主体で、回転糸切り未調整のものも1点ある（5）。5は底部から体部に向かう稜が明瞭で、体部は緩やかに外反している。内黒坏（7）は古墳時代から継続する器形であるが、他の土器より破片が小さいため、供伴性は微妙である。他に須恵器では甕（8）と大甕（10）があり、土師器の小形甕（9）は撫で肩の薄作りのものである。

373住では須恵器坏（1）は回転ヘラ調整で、高台坏（2）は非常に口径が大きく、器高は低く盤状を呈している。高台は長く、接地面中央に浅い溝がある。土師器坏（3）は丸底の半球形のものが残っている。甕（4）は長胴傾向だが器厚は薄く削られ、頸部が僅かに立ち上がり気味にくの字に外反する。口縁部外面には接合痕がみられる。

508住では、須恵器坏には底部回転糸切り未調整のものがあり、土師器坏もロクロ成形が主体をなしているものの、土師器高坏やまだ長胴傾向の土師器甕など、8世紀中葉前半からそれ以前に収まるような要素が多分に残っている。須恵器坏では底部調整に静止ヘラ調整のもの（1・2）、回転ヘラケズリ調整のもの（3）、回転糸切り未調整のもの（4・5）と多様性が認められる。坏蓋にはカエシはなく、偏平な環状ツマミが付くもの（8・9）がある。他に須恵器には短頸壺（19・20）、突帯文四耳壺（22）や広口甕（23）など多彩である。

土師器の坏は全てロクロ成形であり、13・14は内面黒色処理されている。他に大形の内黒鉢（16）もロクロ成形されていて、内外面黒色処理された無頸壺（17）もある。また直口壺（18）もあり、甕は肩の張らない寸胴な長胴甕（21）と、薄く削られているが、肩がほとんど張らない長胴甕（24）がある。口縁部はやや器厚があり、くの字状よりコの字状に近い形態を示している。

468住の須恵器坏の底部調整は回転ヘラ切り未調整のもの（1・3・4）と、静止ヘラ調整を施すもの（2・5）があり、回転糸切り未調整は認められない。高台坏（7・8）の底部は回転ヘラ調整であり、高台の断面形は方形が崩れて、面全体で立地している。坏蓋（6）はカエシのない器形でツマミは不明である。また土師器坏にはロクロ成形されたもの（10）が認められ、それは底部回転糸切り調整の後、体部下位から底部周囲を手持ちヘラケズリしている。11の内黒坏は手持ちヘラケズリの大形のものである。土師器の甕にはやや肩が張り口縁部が短く外反して、口縁端部が明瞭に面取りされるもの（9）と、体部が薄く削られて、口縁部がくの字状に外反して、最大径が僅かながら口縁部に求められるもの（13）がある。

515住では、須恵器坏の底部調整に回転糸切り未調整のもの（3）があるが、回転ヘラ調整（2）やヘラ調整（4）が未だ主体的といえよう。器形もまだ底部径が大きく、直立気味の体部のもの（2）と直線的に開くもの（3・4）がある。他に須恵器には長頸壺（5）や広口甕（6）がある。土師器の甕（8）は、468住の甕より肩が張り、口縁部がやや直立気味になる器形になるが、まだ長胴傾向である。外面調整はヘラケズリで、口縁部は比較的器厚があり、粘土紐の接合痕が見える。7は広口の土師器甕であり、寸胴な体部から口縁部が直線的に開く器形で器厚は8より厚く、外面はケズリ調整、内面はヨコミガキ調整である。

606住も当該期に当てはまる住居跡で、高台坏（5）は偏平で口径が大きく、底部から体部へは緩やかに外反して、高台は比較的中心側に付いている。

8世紀末から9世紀初頭（小林Ⅳ・Ⅴ期、堤8世紀第Ⅳ四半期～9世紀初頭）

603住では須恵器坏（1・2）、土師器坏（3）ともに底部調整は回転糸切り未調整である。どちらも底部が平坦になって、底部から体部に移行する稜が明瞭になり、口径より底径が減少する形態変化も見受けられるものの、未だ体部自体の内湾は変わらず、体部が直線化するのはこの次の段階以降といえるだろう。また土師器の甕（4・5・7）の口縁部は、くの字状からコの字状に移行していく段階と理解され、7の体部は未だ長胴傾向にあるが、肩部の張り出しも認められることから、9世紀以降徐々に砲弾形に近づき、所謂東信型の甕の典型になっていくと思われる。この他に須恵器では大甕（6）がある。口縁部と体部中位を欠損しているが、平底で体部上半が強く張り、口縁部から頸部がラッパ状に開く器形と思われる。頸部には短い櫛描文が横位方向に連続し、その上部にも波状の櫛描文が見られる。体部の外面調整は全体に平行タタキであり、内面には略円形の押え工具跡が重なる。体部下位から底部はヨコケズリ調整である。法量は体径38.0cm、現存高39cmを測る。

（v） 平安時代の土器

平安時代、9世紀に入ると、食器類は奈良時代から続く須恵器を中心とした様相が、徐々にロクロ成形された土師器、特に内面黒色処理された所謂「黒色土器」に移行していく。またそこに灰釉陶器の塊や皿類が搬入され、多彩な構成を呈してくる。

10世紀に向かうに従って、須恵器はほとんど見られなくなり、内黒土器の内面調整は粗雑化が進む。そして、9世紀中頃からは、土師器の坏や皿が登場して、その構成比を増していき、10世紀初め頃には主体をなす住居跡も出てくる。また9世紀後半には内黒坏や土師器坏の法量は大小に区分され、10世紀に入ると土師器坏の小形化傾向は顕著である。灰釉陶器は製作技法が粗雑化すると共に、10世紀後半から11世紀前半には遺構内での構成比が増加するようである。

11世紀後半に当てはまる住居跡や土器埋納土坑の土器では、軟質な焼成状態で口径10cm前後の土師器の小皿や高台小皿、小境が多く見られ、内黒坏や土師器坏は口径に比して器高が低い、やや偏平気味の器形

になっている。

また煮沸具の土師器甕は、古墳時代から奈良時代まで継続していた厚手の長胴甕が、８世紀半ばから体部を薄く削って仕上げた所謂武蔵型甕（東信型の甕）に入れ替わっていく。この甕は当初、長胴傾向でくの字状の口縁部であった器形が、次第に短胴化して体部上半が強く張り、頸部から口縁部がコの字状を呈する器形に変容していく。上小地方では９世紀前半はこの武蔵型甕が煮沸具の主体を成しているが、中頃から短い口縁部と砲弾形で丸底の北信型甕も用いられ、９世紀後葉にはその構成比は逆転する。その後、10世紀中頃以後には確実に羽釜が登場してくる。

ここでは当埋文センターがまとめた松本地方の古代土器編年（埋文センター1990）と佐久地方の古代土器編年（埋文センター1991）の２地域の編年を基軸にして、当遺跡の概観を時期を追って遺構単位で記す。

９世紀初頭から前葉（松本５・６期、佐久５段階）

607住では須恵器坏（１～３）の底部調整は全て回転糸切り未調整であり、底部から体部に向かう部分の稜が明確になり、体部の立ち上がりもこれまでの内湾傾向から直線的な形状に変わる。また体部のロクロ成形痕も顕著に残っている。土師器の甕（５）は武蔵型甕であり、次第に体部上半が最大径になりつつ、頸部がやや直立して口縁部が外反する器形を呈している。また頸部外面には指頭圧痕が残る。

431住や514住の須恵器高台坏（431住－２、514住－３）は高台が比較的中心側に付き、底部から緩やかに体部に向かう器形を呈している。また坏蓋（431住－１、514住－１・２）にはカエシの付くものは無く、裾部の屈曲は強まっている。

９世紀前葉（松本６期、佐久６段階）

525住では、須恵器坏（４）は回転糸切り未調整で、底部が小さく、体部の開き方が大きくなっている。坏蓋（１～３）はツマミが極端に偏平な擬宝珠であり、裾部の屈曲が強い。とくに１は体部がほぼ平坦な器形である。他に小形の甕（５）は薄手で肩が張り、頸部が立ち上がり口縁部が外反する武蔵型甕の器形を示し、６は大形の球形胴で口縁部は直立して、端部が短く外反して外面に稜を呈する甕で、須恵器の短頸壺に似る器形といえよう。

また476住の甕（１・２）では、１は明瞭にコの字状の口縁部を呈していて、外面には接合痕が１条見られる。２は全体形が鶏える個体で、非常に小さい平底から緩やかに体部上半に向かい、上半部に最大径を持って、そこからまた緩やかに細まって頸部に繋がっている。頸部は直立気味で、明瞭な屈曲をしないで口縁部は外反している。体部は全体に削られて薄手であるが、口縁部は比較的厚く作られている。

９世紀中葉（松本６・７期、佐久６・７段階）

463住では内黒坏（５～７・９～11・13～15・17）が大半を占め、須恵器坏（１・２）は２点と少ない。内黒坏には法量差から口径13cm程で、器高３～５cm程の小形のものと、口径16cm程で、器高５cm前後の中形のもの、口径22cm程のもの（器高は不明）に分けられる。内黒土器には坏の他に高台の付く皿（12）もあり、いずれも内面のミガキ調整は緻密で、放射状のタテミガキの残るもの（５・７・12）と、タテミガキの後に口縁部をヨコミガキしたもの（６・９）がある。

また甕では前段階より口縁部がコの字状になる個体（18）があるが、口縁部に最大径を持つ、撫で肩のもの（19）もある。須恵器には大甕の肩部の破片（21）が出土している。

9世紀中葉から後葉（松本7期、佐久7段階）

井戸跡である4503坑では、9世紀前半所属の可能性を持つ、須恵器坏蓋（1）もあるが、主体は内黒坏と埦であり、それらの内面ミガキは非常に少量になり、暗文風になってきている。3条が中央で交叉するもの（4）、口縁部のヨコミガキの後2条を交叉させたもの（5）、同じく口縁部のヨコミガキの後、2条ずつを縦位に4方向残すもの（6）などがある。なお6の外面には成形時に付着した昆虫の圧痕が観察され、ハネカクシの一種であることが鑑定されている（付章第2節参照）。

505住では内黒坏は法量から大小に分けられ、口径12.3～14.2cm、器高4.0～4.7cmの小形のもの（2・3・6・7）と、口径16.0～16.8cm、器高4.2cmの大形のもの（4・5）がある。そのうち6は外面に細い沈線が螺旋状に密に認められ、特異である。また7は底部を故意に外面から打ち欠いているようである。他に小形のロクロ成形の甕（8～10）と大形の鉢（11）があり、11は体部が緩やかに開き、口縁部はやや外反して、最大径を持っている。体部の外面調整はロクロ成形の後、ハケ調整が施されている。

9世紀後葉（松本8期、佐久8段階）

446住には非常に底径の小さな須恵器坏（1）があり、体部は埦状に開いて、口縁端部がやや外反している。内黒坏は器高が低くなり、内面調整は粗雑になっていて、その状況を明瞭に観察できなくなっている。また内黒鉢（5）と土師器鉢（6）は共に深い埦状の体部で、口縁部が短く外反している器形で共通する。

506住の内黒坏は法量から大小に分けられ、口径12.1～13.8cm、器高3.4～4.5cmの小形のもの（2～10）と、口径16.8cm、器高5.0cmの大形のもの（11）がある。このうち小形のものの法量は、前段階の505住のものより小さく、特に器高が低くなっている。また器形も505住では体部が内湾して口縁部が丸く終わる器形が多いのに対して、506住では体部が浅く開き、口縁部内面に僅かな稜を持って外反する器形が多く見られる。他に土師器皿（13）、黒色高台皿（14）、内黒高台皿（15）があり、灰釉陶器では破片ながら、光ケ丘1号窯式の特徴を持つ、三日月高台で施釉が刷毛塗りの皿（16）がある。

413住でも、内黒坏を主体とした坏類は大小の法量差を明瞭に示し、小形のもの（4～12）は口径12.0～13.6cm、器高3.8～4.5cm、大形のもの（2・3）は口径17.6～18.3cm、器高5.3～5.4cmであり、506住より大形のものは数値が高い。器形は506住同様に口縁部が僅かに外反する器形が主体であり、内面調整は非常に粗雑で、観察しづらい状況である。他に灰釉陶器の皿を模したような高台皿（13）、内黒高台皿（14～17）、埦（21）、内黒埦（22・23）があり、甕は砲弾形で体部中央に最大径を持ち、口縁部が短く外反するロクロ成形の北信型の甕（27）があり、小形甕は平底で外面カキ目調整のロクロ成形甕（20）である。また灰釉陶器では光ケ丘1号窯式の特徴を示す小埦（24）、埦（25）、段皿（18）、皿（19）があり、須恵器の長頸壺には、大形のもの（28）と小形のもの（26）があり、底部から体部下半の器形はよく似ている。

434住の内黒坏の法量差は小形のもの（2・3・5・6）が口径12.9～13.8cm、器高3.8～5.0cmであり、大形のもの（4・7）は口径15.5～16.1cm、器高4.5～5.1cmである。また甕（9・10）はいずれも北信型のロクロ成形で、口縁部に最大径を持つ器形である。なお9では内面調整にロクロ成形後に頸部下位にヨコハケ調整を施している。

513住では、口縁部に最大径を持つ、撫で肩の器形の北信型甕（1）がある。

9世紀後葉から10世紀前葉（松本8・9期、佐久8・9段階）

502住では土師器坏が食器の主体を成すが、口径10.4cm～12.2cm、器高3.3～4.6cmと前段階までの主体である内黒坏より更に小形化が進行しているようである。そのうち9は口縁部の内外面に黒色の油脂物質

が炭化して付着していて、所謂灯明皿に用いられたと考えられる。内黒坏（7・10）では口径11.3～13.1㎝、器高3.8～4.1㎝の法量を示し、506住の数値より、口径がやや小形化していると理解できよう。

この他に甑（13）は寸胴で底部を持たない器形で、体部外面の中位より上に黒色の煤が明瞭に付着している。甕は口ク成形の北信型甕（14・19）であり、14は肩がやや張る器形と思われるが、19は体部が緩やかに開き、最大径を口縁部に持っている。

灰釉陶器では、刷毛塗り施釉の可能性のある塊（12）の他、大原2号窯式の特徴を示す、漬け掛け施釉の塊（16）と皿（15）、また肩部の破片ながら、壺（18）も出土している。

10世紀前半（松本9期、佐久10段階）

532住では、内黒坏（1・2）は口径12.2～12.4㎝、器高4.5㎝と小形でやや深めの器形を呈する。また灰釉陶器は大原2号窯式の特徴を示す塊（3～5）と、輪花皿の可能性を持つ皿（6）が出土している。

10世紀中葉から後葉（松本10・11期、佐久11・12段階）

412住では土師器坏（1～4）は口径10.1～11.0㎝、器高2.6～3.5㎝と前段階より一層小径で浅い様相を呈している。また内黒坏は口径13.4～13.8㎝、器高3.9～4.4㎝の小形のもの（5・6）と、口径16.0㎝、器高6.0㎝の大形のもの（7）に分けられる。内黒塊（8）は断面三角形の高台がやや外傾して付き、体部は直線的に開いている。9の土師器皿は口縁部が強く外傾し、高台は三日月形である。

煮沸具には羽釜（13）が登場している。13は丸底の短胴で口縁部はほぼ直立している。鍔は長く突出して、やや上面が下方に傾斜するような形状で一周する。体部調整は外面をヘラケズリ調整した後、底部に平行タタキを施していて、内面の上位には指頭痕があり、底部には抑え工具痕が略円形に残っている。また鍔下部には接合痕らしき横位の条痕があり、口縁部の内外はロクロ成形され、口唇部内面は僅かに外反している。灰釉陶器には大原2号窯式の特徴を示す小塊（11）と塊（12）、緑釉陶器には皿片（10）がある。

11世紀前半（松本12・13期、佐久13・14段階）

511住では土師器坏は口径10.0～10.6㎝、器高2.6～2.9㎝と前段階とほぼ同じ法量であり、小底でやや腰が張り、偏平な器形である。3は内黒塊の底部と思われるが、底部は回転糸切り未調整のまま、内外面とも外湾した高台を付けている。灰釉陶器には皿（4）、段皿（5）、小塊（6・7）、塊（8）がある。4の皿の高台は低く、断面三角形で口縁部が短く外反している。底裏には回転糸切り痕が残っている。施釉は漬け掛けである。5の段皿は縁帯幅が小さく、段部のケズリが浅くなっている。また外面の腰部には段が無くなりやや厚く感じられる。高台は浅く断面台形で、これも底裏に回転糸切り痕が残ったまま、非常に雑に貼り付けている。施釉ははっきりと認められない。6の小塊の体部は丸みを持って張り、口縁部は端部が僅かに外反する。高台は断面三角形で、底裏には回転糸切り痕が残っている。施釉は漬け掛けである。7の小塊の体部はハの字状に開き、口縁部はほとんど外反しない。高台は断面三角形で、回転糸切り痕が残る。施釉は漬け掛けである。8の塊は体部上半がないため、器形は明確ではないが、外面は腰部から体部にかけてヘラケズリ調整されている。内面底部は広く丸く中心へ窪んだ作りになっている。底裏の回転糸切り痕は回転ヘラケズリ調整で消されていて、付高台は高く、内外面ともに弧状に外反している。施釉は漬け掛けである。以上の灰釉陶器では4～7が丸石2号窯式、8が虎渓山1号窯式の特徴を持っていると思われる。

また煮沸具には羽釜（9・10）があり、9は口縁部が直立して、体部は下方に向かって細まる器形と思われる。鍔は長く伸びて、端部が丸く収まっている。胎土は粗く、角閃石や長石といった中粒砂を多く含

んでいる。10の上半部は寸胴で、口縁部は内側に折り込まれている。鍔は長く突出していて、端部が面取りされている。外面調整はタテケズリであり、胎土は石英などを含んでいて粗い。

11世紀後半（松本14期、佐久16段階）

501住には621坑分類の土師器の小皿a（1）と高台小皿（2）がある。小皿は黄橙色で、混和材には長石や小礫が多く含まれ、回転糸切り未調整である。高台小皿は灰白色で緻密な胎土である。

621坑は、小土坑内に土師器の小皿類を2列に重ねて埋納して、その上部に塊や坏類を逆位に重ねた状態で検出された特殊な遺構である。各器種毎に細分類が可能であるため、以下に列記する。

土師器小皿…ロクロ調整の偏平な土器、口径10cm前後のものを小皿とする。

小皿a……小さな底部で、浅くやや腰の張る体部を持つ。比較的丁寧に作られ、口縁部が丸く外反するものもある。胎土は混和材に角の取れた粗粒砂を含む、色調はにぶい黄褐色から明赤褐色である。焼成はほぼ良好といえる。

「該当個体：1～17　口径8.2～12.0cm、器高1.5～2.4cm」

小皿b……小さな底部から偏平で薄い体部を挽きだし、口縁端部を僅かに立ち上げている。胎土は緻密な粘土に黒色粒子を含む。色調はにぶい黄橙色である。

「該当個体：18　口径9.2cm、器高1.4cm」

小皿c……非常に粗雑で、底部から浅い体部を挽きだしている。底部が大きく、中世の「カワラケ」と似ている。不整円形が多く、底部も不安定である。胎土は粘土に細～粗粒砂を混ぜている。色調はにぶい黄橙色から浅い黄橙色である。

「該当個体：19～42　口径9.1～12.4cm、器高1.45～3.0cm」

高台小皿……小皿に足高で、断面が略三角形の高台がつくもの。

高台小皿a…体部が小皿aの形状を呈するもの。胎土は緻密なものと、やや粗いものがある。色調はにぶい黄橙色から明黄褐色であり、焼成はほぼ良好である。

「該当個体：43・44　口径9.8～10.2cm、器高3.7～4.3cm」

高台小皿b…体部が小皿bの形状を呈するもの。胎土は緻密で、長石などを僅かに含む。色調は明赤褐色からにぶい黄橙色であり、焼成はほぼ良好である。

「該当個体：45～51　口径8.7～10.5cm、器高2.2～3.4cm」

小塊……小皿より深い体部に断面三角形の小さな高台が付くもの。体部には腰の張るもの（52）と緩やかに開くもの（53）がある。52の胎土は粗く、色調は黄橙色で、53の胎土は緻密で、橙色である。

「該当個体：52・53　口径9.8～10.7cm、器高3.0～3.4cm」

坏……回転糸切り未調整で、深い塊状の体部を持つ。内面黒色処理するものも含む。

坏a……小さな底部が突出して、腰が張る器形で、器厚は薄く、ロクロナデ痕は余り残らない。胎土はやや粗く、雲母などを含み、色調はほぼ橙色である。焼成は良好。

「該当個体：55・56　口径14.6～14.8cm、器高4.0～4.1cm」

坏b……底部は回転糸切りの後、ヘラ調整され体部は緩やかに開き、口縁部は丸く収まる。器厚は薄い。胎土はやや粗く、黒色粒子や赤色粒子を含み、色調はにぶい黄橙色で、焼成はやや還元気味である。

「該当個体：57　口径15.8cm、器高4.7cm」

坏c……器厚が厚く、ロクロ成形痕が外面に強く残る。体部は丸みを持って開き、口縁部が外反する。胎土は粗く、砂を含み、色調はにぶい橙色で、焼成は良好である。

「該当個体：58～60　口径13.8～16.4cm、器高3.7～4.3cm」

坏d……薄手で、底部内面が平坦である。体部は直線的に開き、外面にロクロ痕が残る。胎土は粗く砂を含み、色調はにぶい赤褐色からにぶい黄橙色で、焼成はほぼ良好で有るが、黒斑が残る部分もある。

「該当個体：61・62　口径14.7～14.9cm、器高3.8～3.9cm」

坏e……厚手で、腰が強く張り、口縁部が外反気味の器形で、胎土はやや粗く、白色粒子や黒色粒子を含む。色調は橙色で、焼成は良好である。

「該当個体：63・64　口径15.0～15.5cm、器高4.0～4.3cm」

坏f……内面黒色処理されていて、体部はロクロ成形痕が強く残り、大きく開く。口縁部は外反する。胎土には砂を含み、色調は暗灰黄色で、焼成はやや不良といえる。

「該当個体：65　口径15.2cm、器高径4.7cm」

盤……足高高台を有する身の浅い塊形の器。

盤a……土師器で器厚は薄く、口縁部がやや外反している。高台の断面は三角形である。胎土は粗く、砂が多い。色調はにぶい黄橙色で、焼成は軟質だが良好といえる。

「該当個体：66　口径15.0cm、器高4.6cm」

盤b……高台は内外ともに外傾し、端部は丸く収まる。体部は器厚が厚く外面にロクロ痕を残して開く。粗雑な作り。体部が短く中途で終わるもの（68）がある。胎土は粗く、浅い黄橙色で、焼成は軟質ながら良好である。

「該当個体：67・68　口径13.7～16.7cm、器高4.5～5.8cm」

盤c……内面黒色処理され、高台は外面が弧状で、内面は直線状に開く。体部は内反して口縁部に向かって強く開く。胎土は密で砂は少ない。色調は灰黄褐色で、焼成はやや不良である。

「該当個体：69　口径18.2cm、器高5.1cm」

この他に、灰釉陶器の段皿（54）は、縁帯の巾が小さく、その段差も浅くなっている。高台は低く断面半円形で、回転糸切り未調整のままで粗く接着している。施釉方法は不明である。

本遺構の小皿類には比較的精緻な個体「小皿a・b」と極めて粗雑でカワラケに似た器形の個体「小皿c」が共存している。小皿cは、体部外面に回転糸切りの紐痕が残ったり、26のようにロクロ切り離し時に底が抜けた部分を粘土の小塊で埋めてそのまま焼成していたりしていて（PL91）、「非日常的な小数回の使用」に限定しているような印象が強い。

621坑に関連する639坑からも小皿a類が1点（3）とc類が3点（1・2・4）出土していて、その法量は3が口径9.0cm、器高1.9cm、1・2・4は口径8.02～9.3cm、器高1.6～2.4cmであり、ほぼ621坑土器と同規模であることが分かる。

遺構外出土土器（図271、ＰＬ93）

ここでは古墳時代中期から平安時代に属する遺構外から出土した土器の特出すべきものについて記す。

古墳時代では底部内面にハケ調整が見られる須恵器坏（2）、内部が窯変している小形の須恵器鼎（5）、「十」のヘラ記号がある土師器坏（15）、土師器塊（17）、高坏の脚部のようであるが、坏部が接合される部分まで磨いてそのまま焼成した土師器器台（20）、底部が尖っていて自立しない土師器甕（21）がある。

奈良時代にはツマミが非常に浅く面取りされたような須恵器坏蓋（1）、身部内面に「廣」と焼成前の刻書がある坏蓋（4）、底部外面に「大」と焼成前の刻書がある須恵器坏（7）、須恵器甕（6）がある。

平安時代では須恵器長頸壺（8）、内面に朱墨痕のある、灰釉陶器段皿の転用硯（9）、内面に墨書「の」がある坏（13）、「十」のヘラ記号を持つ内黒坏（10）、「本」の刻書が底裏にある内黒塊（14）、底裏に爪痕のある内黒塊（16）、底部に格子目状の刻みがある内黒坏（18）、口縁部外面に「大」の刻書のある羽釜（19）やオコゲ状の黒色物質の付着した内黒坏（11）と鉢（12）などがある。なお11・12の物質は化学分析されている（付章第１節参照）。

（vi） 瓦（図272～275、表16、ＰＬ94）

信濃国分寺で使用されていた瓦で、平瓦と丸瓦がある。平瓦のうち40・44は幅が狭く堤瓦と思われる。

出土状況 506住と511住のカマド芯材に二次利用された瓦が特徴的であり、他は破片として覆土内から出土したものが大半で、369住や512住、402溝のように古墳時代後期に属する遺構の覆土から出土した混入品もある。

９世紀後葉の506住では、比較的大きな平瓦片をカマド袖の芯材として、袖の外側に構築土で固めている。その他カマド右側の床面には土器や河原礫と共に、平瓦片と僅かに丸瓦片が出土している。

10世紀後葉～11世紀前半頃の511住では、カマド右袖に平瓦と丸瓦の小片を貼り付けていて、カマド右側の床面から覆土に平瓦と丸瓦が出土している。特に25は完形の丸瓦で床面に正位の状態で置かれていて、下から灰釉皿が出土する。状況からはカマドに関連した利用が予想される。

瓦の特徴 平瓦はいずれも破片で、全体形や法量を計測できる資料はない。厚さは1.6～2.8cmと幅があるが、2.0～2.5cm辺りが多い。凸面調整は縄目タタキが基本であり、その後全体や周縁にナデ・ケズリ調整を施すものもある。また24・33・39の凸面には平行タタキ調整が施されている。凹面は布目痕が残るものが主体で、その上からナデやケズリ調整する個体もある。側面調整は凹面側を面取り気味に削っている個体が多いが、18・33のように逆に凸面側を面取りする例もある。11・39には模骨痕が残り「桶巻き作り」の可能性がある。33では側面まで布目痕があり「一枚作り」と考えられる。この他に２・７・８・10・14・15・43には凹面の布目痕の下に粘土塊から切り取る際にできる斜状の糸切り痕が観察できる。13では凹凸面に糸切り痕がある。

丸瓦では25が唯一の完形品で全体形が観察できる。法量は長さ34.8cm、幅15.9cm、厚さ1.5cm、重量2.03kgを測り、玉縁部は長さ4.0cm、幅11.3cmである。凸面はナデ調整され、凹面には同じ布目痕が筒部から玉縁部まで残っていて「一本作り」であることが分かる。側面は凹面側を削って面取りしている。また４・５・26も布目痕から「一本作り」といえる。この他21では凸面端部を台形のタガ状に作り出していて、側面には成形時に凹面途中まで切り込んだ後、折り取った痕跡が観察できる。

なお、成形台に被された布は１㎠辺りの本数が５×５～８×８本内に収まり、６×６～７×７本が主体で、ほぼ同様の布を用いていたことが分かる。21には綴じ代、25には紐跡があり、布が筒状または袋状であった可能性がある。

（vii）　土製品（図276～280、表17～22、ＰＬ95～97）

土製品には、紡錘車、土製玉、土錘、ミニチュア土器、土器片板、その他土製品（土製円板、匙形、人形、土鈴など）がある。

紡錘車（図276・277、表17、ＰＬ97）

６点出土している。いずれも酸化炎焼成で、断面形が偏平な半楕円形のもの（１・６）と厚い台形のもの（２～５）がある。３はほぼ完形で、上外径6.0cm、下外径8.9cm、厚さ4.4cm、重量331.4ｇを測り、他の５点と比べると極めて大型品である。外面調整は1～５がナデ調整であり、６にはミガキ痕が残る。

土製玉（図277、表18、ＰＬ97）

丸玉（７）、勾玉（８）、管玉（９）がある。７は７世紀前葉の326住の床面から出土し、８は６世紀前半頃の383住、９は６世紀前半の443住から出土している。いずれも酸化炎焼成で、胎土は緻密である。８の勾玉は穿孔が途中で、貫通していない。

土錘（図277、表19、ＰＬ96）

４点出土し、筒形が３点、丸形が１点であり、いずれも酸化炎焼成である。筒形には10の重量49.3ｇの大きめのものと11・12の10ｇ前後の小さめのものがある。丸形は60ｇ程である。10は指オサエ調整でそれ以外はナデ調整である。個体数が少ないが、漁網錘とすれば重量差は網の種類に基づくと考えられる。

ミニチュア土器（図277・278、表20、ＰＬ95）

27点出土し、全て酸化炎焼成である。小粘土塊から指で作り出したものは15・19・27の３点で、それ以外は粘土紐を巻き上げて作られていると考えられる。

器形としては古墳前期の330住出土の高坏脚部（17）、平底で口縁部が開く坏や鉢形を模したもの（20・21・23・26・29・30・34・35・37・38・40）があり、そのうち29は口縁部が有段状になっている。また30の底部外面には赤彩の痕跡が観察できる。壺形を模したもの（14・18・19・22・24・25・28・31・32・33・36・39）には14のような無頸壺、18・19・24・25・32・33のような短頸壺を模したものがある。また31の口縁部には１対のオサエ痕がある。36の外面には刻みと突帯があり、人面のように見える。

土器片板（図279、表21、ＰＬ96）

18点出土して、いずれも酸化炎焼成の壺か甕の破片を用いている。大半が周縁を打ち欠いて略円形に成形していて、46・47・52・54・56は周縁の一部が研摩されている。

径や重量にも幅があり、用途は限定できないが、44（359住）の床下からミニチュア土器と出土する例や45～49（371住）と臼玉２点とミニチュア土器２点が同一住居跡から出土する例、50～52（3400住）と紡錘車、ミニチュア土器、匙形といった土製品や臼玉が同一住居跡から出土する例のように、他の石製や土製の模造品などと供伴することが多く、何らかの什器を模したものとも考えられる。

42は赤彩された稲清水式土器の壺体部を半円形に研磨成形した個体であり、長野市篠ノ井遺跡でも出土例がある。本来弥生時代後期の遺物ながら、本遺跡では６世紀前半の336住カマド横から出土している。

その他土製品（図280、表22、ＰＬ96・97）

59～61は酸化炎焼成された土製円板である。59はナデ調整された中央が膨らむ円板で、317住カマドからミニチュア土器と供伴して出土している。60は１面に細かな刺突文が２列並び、赤彩されている。61・62は半円形であったと思われ、62の側縁には刻み文がある。

63・64は匙形の土製品で63は匙部が偏平で軸は円形であり、64は匙部が半球形に深く、軸は丸く短く、端部は竹の節状に中央が窪む。

66は粘土塊を捏ねて、何となく人形様に作られている。頭部と短い腕部、不揃いの脚部が確認できる。

65は土製鈴である。円柱状に指ナデ成形されていて、振るとカラカラと乾いた音がする。Ｘ線透過試験の結果、内部に４個の小さな土玉が確認された。製作方法は同じくＸ線透過試験で円柱上部内面に接合痕が確認されたことから、まず筒状にした粘土に粘土玉４個を入れ、それを粘土の板で塞いで外面を指で撫でて成形し、酸化炎焼成したと考えられる。

67は指ナデされた柱状の個体で、両端が欠損していて全体形は不明である。

（viii） 石製品・石器（図276・277・281～297、表23～31、ＰＬ97～105）

ここでは磨製石鏃、紡錘車、玉類、模造品、軽石製品、石錘類、砥石、擦石、敲石、擦・敲石、凹石類、台石というような、石を使用したり、加工したりした遺物全般を取り上げる。

磨製石鏃（図214、表11、ＰＬ52）

Ⅲｂ層中から１点だけ出土している。灰色の粘板岩製で先端部と基部共に欠損している。両面の長軸に緩やかな稜部を持ち、断面形は丸みを持った偏平な菱形である。刃部には細かな剥離痕があり、基部には着装のための円孔が両面から穿かれている。

紡錘車（図276・277、表17、ＰＬ97）

石製の紡錘車は８点出土し、６の粘板岩以外、滑石製であり、形態は５・６が偏平な半楕円形である他は、略台形を呈している。外面調整は丁寧な磨きであるが、１・３・８のように磨きの下に縦方向の粗削りの痕が見られる個体もある。外面施文では４の側面と底面では４～５つの三角形区画を刻んで、その内部に斜格子状に刻み線を充塡している。特に側面の上下縁部には横位ミガキを施していて、三角形区画を明瞭にしている。

玉類（図281、表18、ＰＬ97・98）

管玉（９・10）と、勾玉（11・12）がある。管玉は光沢のある緑色の碧玉製で、９は３分の１程しか残らないものの、10と幅や孔径が近値であることから、長さもほぼ同じであると想定する。10は長さ2.5cm、幅0.7cm、孔径0.25cmを測り、孔は両端から穿かれている。12の勾玉は粘板岩製で断面形はやや偏平な円形を成し、外面は丁寧に磨かれている。13は滑石製で断面形が板状で、両端が尖るような三日月状を成す。外面はやや粗く磨かれている。どちらも光沢のない石材を用いていて、模造品の可能性が高く、特に11（321住）は同じ住居から模造品３点も出土している。

模造品（図281・282、表18、ＰＬ98）

白玉20点、小玉１点、管玉２点、勾玉１点、円板１点、剣形５点、不明品１点で総数31点を数える。石材は白玉や小玉、管玉といった小形で厚みがあり、細かな調整が必要なものには滑石を用い、勾玉や円

板、剣形といった板状に加工するものには滑石片岩を用いている。

臼玉は短い柱状で両端が平坦に加工されているが、やや雑で斜めになっていることが多い。大きさは幅0.5～0.8cm、厚さ0.2～0.4cm程の小形のものと、幅1.0～1.5cm、厚さ0.5～1.0cmのやや大形のものに分かれる。

小玉は幅0.4cm、厚さ0.3cmで、算盤玉状の小形品である。

管玉の34は幅0.4cm、厚さ2.2cmと細く長い形態で、孔は両側から穿つ。35は幅0.5cm、厚さ1.5cmとやや太く短い形態で、同じく孔は両側から穿つ。

36の勾玉は板状で、屈曲する内側には粗成形時の痕跡が残り、表面には磨き痕が線状に見られる。

円板はやや角張った略円形に成形されて、中央に細い孔が1つ穿かれている。表面には磨き痕がある。

剣形は木の葉状に丸みを持ち長軸線上に2つの孔がある「双孔剣」(38) と二等辺三角形 (39・42) や略五角形 (41) で、短辺側に1つ孔をもつ「単孔剣」、また40のように孔が確認されないものがある。いずれも板状にして側辺部や平坦面を磨いた擦痕が線状に見られる。

出土状況としては、321住から勾玉 (11) と臼玉 (15・16)、管玉 (34) が出土している例、3400住から臼玉 (17) と剣形 (38) や各種土製品が出土する例、342住から臼玉2点 (18・19) が出土する例、371住から臼玉2点 (21・22) とミニチュア土器2点、土器片板5点が出土する例、447住から臼玉4点 (25~28) が出土する例、449住から臼玉 (29) と碁石状石製品 (46) が出土する例、308溝から円板 (37) と剣形3点 (39・41・42) が出土する例があり、比較的一括して出土するか、他の非日常品（模造品）の類と供伴して出土する傾向がある。

軽石製品（図282・283、表23、PL98）

ここでは石材に軽石を用いた石器14点をまとめて報告する。従って形態や大きさは様々で、本来砥石などの目的を持つ個体も含まれている。

52は円板状に削って磨いた軽石の中央部に両面から孔を1つ穿つ。日常品を模倣した土・石製品を多く出土する3400住出土のため、用途に関連性が考えられる。50は一部が欠けた転石の一面が摩耗している。砥石として用いたのか。52と同じ3400住から出土している。

53・55は平面略円形で長軸両端に抉りを持ち、抉り間を結ぶ表面に浅い溝を作る形状で共通する。53は断面半円形で平坦面には溝がなく、ケズリ痕のような条痕が外方から内側に5本見られる。抉りは平坦面を切って形成されていることから、まずこのような形状に転石を加工して、その表面に細かな加工を施したといえる。また55は転石をそのまま加工している。どちらも抉りは打ち欠き、溝は研磨調整である。重量は53が79.56g、55が68.71gと近い。

56～60も本来転石であったものが研磨及び摩耗して現状の形をしていると思われる。56は多角錐形で、60は板状であり、その他は面を幾つも持つ不定形である。59の4つの孔は意識的に外面から穿っている。

石錘類（図284、表24、PL99）

石錘類は全て河原礫を用いている。335住出土の62・63は安山岩製である。62は柱状の不整な長楕円形で長軸中央がやや細まる形態で、63は偏平な楕円形で短軸両端に打欠調整した抉りを持つ。重量は62が221g、63が207gと非常に近く、編物石に近い特徴を持っている。

64はⅢb層から出土して、安山岩製であり、偏平な楕円形で長軸両端に打欠調整した抉りを持つ。重量は319gを測る。

編物石　住居跡の床面からまとまって出土した、平面長楕円形や長方形で長さ10～12cm程の河原礫について、「コモ」などを編む「編物石」と考えて、石錘類のなかで取り上げる。

5世紀末～6世紀前葉の327住からは9点（65～73）出土し、石材は安山岩を主体に、珪化岩と閃緑岩がある。形態は平面形が不整な楕円形や長楕円形、長方形が主体で、断面は円柱、角柱、偏平と分かれる。65・68・69・70・72には長辺部のやや凹んだ部分の稜（図284の▲部分）に磨き痕が観察されている。これらは紐がうまく掛かりやすいように加工したり、使用時に紐が擦れて磨かれたりした痕と理解する。

7世紀前半の396住からは5点（74～78）出土して、石材は砂岩や変質玄武岩、珪化岩、閃緑岩、安山岩と多様である。形状は327住と同じである。

5世紀後半の3400住の5点（79～83）は石材に安山岩とヒン岩、変質玄武岩を用いる。形状では長辺部中央が僅かに細まる個体が3点あり、83には摩耗痕が見られる。

6世紀中頃～後葉の420住は12点（84～95）と多く、石材は主に安山岩で、石英安山岩、閃緑岩、石英閃緑岩もある。意識的に長辺部が僅かに細まる河原礫（転石）を選択し、91のように摩耗痕が細まる部分を全周するものや93のように長辺部中央を敲打して僅かに窪ませて、紐掛け部分を作り出す個体もある。

437住は10点出土して、石材は全て安山岩である。やはり長辺部が細まる礫を選択していて、95・96には紐掛け部分に摩耗痕が残っている。

上記した住居跡毎に長さ、幅、厚さ、重量の平均値、比較的個体数の多い327・420・437住については標準偏差も求めた（表6）。

表6 編物石の平均値と標準偏差

遺構名	個数	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g
327住	9	10.9	6.0	3.9	320.7
		0.8	0.7	0.5	53.7
396住	5	15.1	6.8	5.1	747.4
3400住	5	15.9	5.9	4.7	684.8
420住	12	12.9	7.7	5.2	695.3
		0.6	0.8	0.7	84.2
437住	9	12.6	6.1	4.4	521.5
		1.1	1.1	0.4	82.3

（上段：平均値
下段：標準偏差

これによると、重量では327住が最も軽量で320.7gであり、次に437住が521.5gで、396・3400・420住は680～750g内に収まっている。長さでは327住が10.9cmで最も短いが、420・437住が13cm弱、396・3400住が16cm弱にまとまる点では、重量のまとまりとはやや異なる。また幅は5.9～7.7cm、厚さは3.9～5.2cm間に収まり、大きな差異はなく、長細い礫を選択していることで全ての住居跡に共通していると思われる。また標準偏差では長さや幅、厚さのばらつきは非常に少ないことが分かる。重量は他の数値より幅を持っているものの、手の感覚で選び出していれば、それ程大きなばらつきと考えなくても良さそうであるし、使用時には長さのまとまりが選択の最重要点であると想定すれば、充分理解できるといえるだろう。

編物石の使用法では、昭和初めまで行われていた「コモ編み」に倣えば、長辺部中央を縦糸（紐）に括って横並びになる錘の間隔と重量は遺構内（道具内）で共通する必要があり、紐掛けしやすく結び付けやすい礫として、細長く長辺部中央が細まるものを選択することは遺構や時代を越えて共通すると思われる。

砥石（図284～287、表25、PL99・100）

ここでは明瞭な砥面を加工して作り出しているものや、素材が転石であっても、擦石の機能面と比較して、明らかに砥面と理解できる面を持つ石器をまとめて砥石としている。また形態や大きさからそれらを以下のA～Cの3種類に分類した。なお、この分類基準に明瞭な数値区分があるわけではなく、調査者が相対的に分類したものである。

A類……板状を呈して、手頃な大きさの小形品。持ち砥。

B類……柱状を呈して、手頃な大きさの小形品。持ち砥。

C類……板状を呈して、手に持って扱えない大形品。置き砥。

まずA類とした砥石（106～111）の石材はいずれも堆積岩で、凝灰岩と千枚岩質粘板岩、砂岩がある。107は不整な長方形で長軸中央両面の研ぎ減りが顕著であり、長軸一端の孔は携帯用の紐を通していたと考えられる。106・110・111は研ぎ減りが長軸一方に偏っているが、本来107と同じ形態をしていた砥石が使用していく段階で中央から折れたものと思われる。108は円板状の砥石である。研ぎの方向は108以外タテかタテナナメが主体である。

B類（112～125）の石材の大半は緻密な凝灰岩を加工して用いられているが、112はヒン岩、125は安山岩と思われる。B類の中でも、中央がやや膨らむ形態を成すもの（112・114・116・117・125）と分銅形のように中央が細くなるもの（113・115・122）、また非常に小さいもの（118・120・121・123）に分けられそうである。これは本来の形態に由来するより、使用の結果によるものが大きいと思われる。特に分銅形の122は、研ぎ減りが進んで、中央で折れている状態である。

C類（126～133）の石材は砂岩と安山岩やヒン岩といった火成岩でありA・B類より緻密ではない。形態から明らかに板状に加工したもの（126・130～133）と転石を用いたもの（127～129）に分かれる。板状に加工したものでは126や130、133のように側面まで使用痕があるものや、131のように中央が窪んでいるもの等がある。転石を用いたものは両端部まで使用が及んでいないものの、129は側面に敲打痕があり、127や128は中央の研ぎ減りが顕著で、特に128は両側面まで使用面が確認される。研ぎの方向は長辺に沿うタテかタテナナメが主体で、平面楕円形の129では両面とも多方向に研ぎ面が認められる。

擦石（図288～290、表26、ＰＬ101）

41点出土している。いずれも河原礫のような転石を用いている。石材は安山岩が主体で、変質玄武岩（174）もある。平面が円形から楕円形で、偏平な形態が大半であるが、柱状の形態のもの（141・143・150・155・159・162・168・172）もある。使用面は平坦面が多く、柱状のものでは141や162、168、172のように側面まで用いていることがある。大きさは均一ではないが、特に長軸６～10cmで重量400ｇ以下と長軸10～15cmで重量500～1000ｇの２カ所に分布が集中している。前者の小形品程、擦りは多方向に及び、大形品は擦りが一定方向になる傾向がある。特に重くて長い擦石はほとんど縦方向に集中している。なお、使用形態は基本的に手に持った状態を考えている。

敲石（図291・292、表27、ＰＬ102）

12点出土している。大半が安山岩などの火成岩であり、砂岩は183だけである。どれも転石を利用しているが、形状は184のような小形の長楕円形や、182などの偏平な円形、179のような長大な柱状と多様である。また使用部分は長軸の端部を集中的に用いることが多いが、177や181のように側面を用いたり、178や183、185のように外周で細かく敲打している例もある。179は2440ｇもあるが、長軸両端にツブレ状の使用痕が認められる。

擦・敲石（図292・293、表28、ＰＬ103）

前述した擦石と敲石の「擦る・敲く」という２つの機能が認められる石器を呼称する。13点認められる。石材は全て安山岩に共通している。基本的に河原礫のような転石をそのまま用いているが、196は欠損した部分でも敲打痕があり、199は円柱状で側面が横位の強い擦り、端部のみ敲打痕があって、黒色物

質が付着する特殊な例である。その他のものは大半が偏平な円形や楕円形を呈していて、平坦面に擦り、端部や外周に敲きの痕跡を残している。いずれも手に持って使用する状態を考える。

凹石類（図294・295、表29、ＰＬ104）

石材の大小や凹みの形状、深さに関係なく、明らかに使用による凹み部が認められる石器を「凹石類」とまとめた。12点出土している。石材は201のみデイサイト（石英安山岩）であり、他は安山岩である。重量500ｇ以下の小ぶりなもの（202・206・208・209・210・211）は手持ち使用を考える。擦りのみで浅く凹んだ208、敲きのみで凹んだ209・210、両者の複合による202・206・211・212に分けられる。また202・206・209は２カ所に凹み部がある。重量500ｇ以上あるものは、置いて使用した状態を考える。そのうち偏平な石材を用いて凹み部が広く浅い「石皿」のような200・205は、側辺部まで擦りが及んでいて、一方、厚みのある石材を用いて狭く深い凹み部を持つ「石鉢」のような201・203・204・207は、凹み部に擦りや敲きが集中する。この使用痕は前者が「弱く擦り敲く」作業、後者が「強く敲きつぶす」作業を主体にしていたことを意味していないだろうか。

台石（図296・297、表30、ＰＬ105）

優に重量が1000ｇを越える転石で、平坦面に主に擦り痕が認められる礫は、これを床に置いて土台にして、なんらかの作業を行った石器として「台石」とした。なかには平坦面が凹んできて、「凹石」に近い形態を成すものも見られるが、調査者が相対的に判断して分類した。

石材は安山岩を主体として、全て火成岩であり、形態は偏平なもの（213～218・220・222・223・224・225）と柱状のもの（219・221）に分かれる。基本的に平坦面に擦り痕が認められるが、215や222のように敲打痕も見られる。また14550ｇもある218は表面が被熱して剥落している。224も重量が12600ｇもある大形品で側面が剥離していて４点が接合している。

カマド構築材（図297、表32、ＰＬ105）

本遺跡のカマドは河原礫を芯材として使用する場合が多いが、平安時代の住居跡の一部には河原礫に混じって、凝灰岩や砂岩を角柱状に加工した礫が確認されたため、「カマド構築材」としてここで扱う。

平安時代９世紀後葉の413住では河原礫と共に、凝灰岩（226）が左袖の芯材として用いられている。被熱の影響か一側辺が壊れているが、本来角柱状に加工されていたと思われる。幅３㎝の鑿跡らしき加工痕が横方向に残っている。残る部分の厚さは12.3㎝ある。

８世紀後葉～９世紀初め頃の508住では凝灰岩の227と砂岩の228が左袖芯材として据えられていて、カマド内に凝灰岩の229が横たわっている状態で検出されている。227は上下が脆く崩れているが、幅は約14.8㎝、厚さ12.0㎝を測る。一側面は被熱して変色している。表面には幅３㎝の鑿跡が横位に重なって残る。228は断面長方形の板状であり、幅は約18.0㎝、厚さ約7.9㎝を測る。残存する側面は強く被熱して赤化している。加工痕は楕円形のケズリ痕が重なっている。229は上下端が脆く崩れていて、幅は16.9㎝、厚さは12.5㎝を測る。加工痕は幅の広い二面に残っていて、幅３㎝程の鑿跡が縦から斜めに重なっている。またその一面は被熱して赤化している。

これら以外にも９世紀後葉～10世紀前葉の446住にも同様な凝灰岩がカマド内から見つかっている。

こうしてみると本遺跡で平安時代初め頃からこのような加工した構築材が用いられていて、９世紀後葉から10世紀前葉にはその使用頻度は高くなっているようである。因みに長野市篠ノ井遺跡においても９世紀後葉から10世紀前葉の２軒の住居跡から出土した同様の鑿の加工痕を残す角柱状の凝灰岩が「切石」と

して4点報告されている（県埋文センター1997）。その幅は約18.5cmで、厚さは10.0～12.0cm内に収まり、本遺跡のものとよく似ている。

その他の石製品（図281・282、表31、ＰＬ98）

44（図282、ＰＬ98）は黒色頁岩製の方形硯の硯池右側縁部の破片である。側面には細かな磨き痕が見える。45（図282、ＰＬ98）と46（図281、ＰＬ98）は黒色から暗灰色の小さな粘板岩を偏平な碁石状に加工して、磨き出している。用途は明らかではないが、46が臼玉（29）と同じ449住から出土していて、その関連性が考えられる。61（図282、ＰＬ98）は滑石をやや丸みを持つ板状に削り出し、中央上に円形の孔が穿かれている。下部と右側面が欠損している。全体形は不明であるが、丸みを持つことから本来、鍋のような円形の入れ物の把手であったとも思われる。

（ix）　金属製品（図298～300、表33・34、ＰＬ106）

合計63点出土している。素材は鉄と銅であり、遺存状態は良くなく、その結果器種名は分かっても全体形を把握できないものや、全く器種が判別できないものが多い。以下に鉄製品、銅製品（銭貨を含む）の順に概要を記す。

鉄製品（1～45、図298・299、表33、ＰＬ106）

45点出土している。そのうち鉄鏃（1～10）は住居跡からの出土が主体である。完形のものはなく、頸部や茎部が欠損していたり、鏃身部がなかったりして全体形を把握できないものが多い。1～4・6・8は長頸鏃であり、そのうち3は鏃身部が残っていて両側に逆刺が明瞭に見られる。5・7・9・10は鏃身部が大きく、5は長三角形で逆刺はなく、7は長三角形で逆刺があり、9は三角形で逆刺が見られる。また10は柳葉形に近く、逆刺が残っている。

刀子は15点出土していて、刃部が長く比較的大形の形状（11・12・13・14・16・18・19・24・25）と刃部が短く小形の形状（17・20・22・23）に分かれる。刃部の長い形状のものは研ぎ減りが顕著であり、18や19のように非常に細身になっているものがある。刃部が短い形状のものでは20や22が茎部の錆化部分に柄部の木質が観察できる。特に22は柄を止める帯状の鉄製金具も残っている。また刃部の短い形状のものも研ぎ減りが顕著である。

26・27は鉄製の紡錘車で、いずれも円板状で、27には中央に軸部が一部残っている。26・27とも外面観察では鍛造製と思われる。なお26は奈良時代前半の520住から出土している。

28の斧は平安時代11世紀後半の土師皿を大量に埋納した621坑から出土している。本遺跡出土の鉄製品の内では非常に遺存状態が良い。形態は有袋有肩であり、外面観察からは鍛造製と思われる。なお、この621坑からは35の釘も出土している。また29は片刃の鋸の刃部であり、30は鑿の刃部と推測される。

釘（31～37）はいずれもほぼ断面方形に鍛打成形されていて、完形品は少なく、軸は変形している個体が多い。37は基部が残っていて、片鬮に短く折り曲げている。その他の鉄製品は明確に器種が分からないが、42の板状品は弥生時代後期の313住から出土していて注目される。

銅製品（46～63、図300、表34、ＰＬ106）

46と63は帯金具、所謂銙帯金具の「巡方」である。どちらも緑青に覆われていて、奈良時代の8世紀前半の520住から出土している。大きさはどちらもほぼ同じあり、縦2.4×横2.6cm、厚さ0.3～0.4cmを測り、垂孔は縦0.6×横1.6cmである。留め方は裏面の遺存状態が悪いため、明確ではないが、裏面上方の隅2カ

所に僅かな突出部が観察できて、それが鋲の名残の可能性が有り得る。そうすれば脚鋲式と言われるものであろうか。このような形態を、田中広明氏の変遷（田中1990・1995）に当てはめると、乖孔が大きいⅠ期（奈良時代前半）の型式に収まり、土器様相からみた遺構時期と整合している。

47～51は耳環である。47は断面菱形で平面形がやや楕円気味の円形で、長さ4.6cmを測り、最も大きい。表面の箔はほとんど剝落している。48～51は断面円形であり、49と50には銀箔が残っている。52は不整楕円形の薄く小さな銅板の一端に小孔が穿かれている。表面は緑青に覆われていて詳細は不明である。

銭貨（53～62）では遺物包含層Ⅲb層出土ながら「和同開珎」（53）が注目される。比較的輪や郭が整然とし、字体も直線的に図案されていて、収集界でいうところの「新和同」である（兵庫埋蔵銭調査会1996）。出土地点の⑤区は奈良時代の遺構が集中することから、それらに関連する遺物であろう。501溝出土の北宋銭「絹聖元寶」（57）は、本跡が平安時代終わり以後に埋没したことを示す根拠とされるものである。

（x） 鍛冶関連遺物（図300・301、表35・36、ＰＬ107）

鉄生産の鍛冶工程に必要な羽口、鍛冶炉から排出される鍛冶滓について記す。

羽口（図300、表35、ＰＬ107）

15点出土している。いずれも小片で全体形を把握できるものはない。図化したものでは１は基部の一部であり、基部径は約8.0cmあり、広口である。外面は青灰色に変色している。８は「ハ」字状に開く土師高坏脚部を二次利用した「転用羽口」である。裾付近の破片であるが、坏部と接合する側に青灰色に変色した二次被熱痕が斜めに見られる。13は先端部の破片であり、先端は丸く溶解していて、小礫が付着している。外径6.0cm、口径2.2cmを測る。磁着度は４と比較的高いが、メタル度はない。

羽口の出土した遺構では唯一343住（２）に鍛冶炉の可能性がある焼土が認められる。

鍛冶滓（図300・301、表36、ＰＬ107）

遺跡全体で2701.67ｇ、計35点出土している。そのうち全体形が椀形を呈する椀形鍛冶滓は31点と主体を占め、メタル度がＨ～Ｍ反応を示す含鉄椀形鍛冶滓は４点である。28は非常に小形の椀状を呈して、メタル度がＨ反応している。表面は酸化土砂の付着が顕著で、全体に放射割れも観察できる。金属鉄をかなりの割り合いで含有していることが予想でき、素材として用いられていた鉄塊系遺物の可能性がある。29は大形の含鉄椀形鍛冶滓で、表面は錆化していて細かな木炭痕が観察できる。精錬鍛冶工程の排滓と思われる。他に17・19・21・31のように破面数の多い小さな鍛冶滓も認められる。

鍛冶滓を出土した遺構では、羽口（２）も出土している343住（19・20）、竪穴遺構の429住（23）、3205坑に鍛冶炉などの施設が有った可能性がある。

（xi） 鹿角製品、貝製品（図300、表37、ＰＬ106）

１は鹿角の基部付近を直方体に加工している。表面にはその刀子痕と思われる幅５～８㎜の加工痕が横位を中心にある。２はハマグリ？を碁石状に加工している。表面はよく磨かれていたと思われるが、剝落が顕著で観察できない。

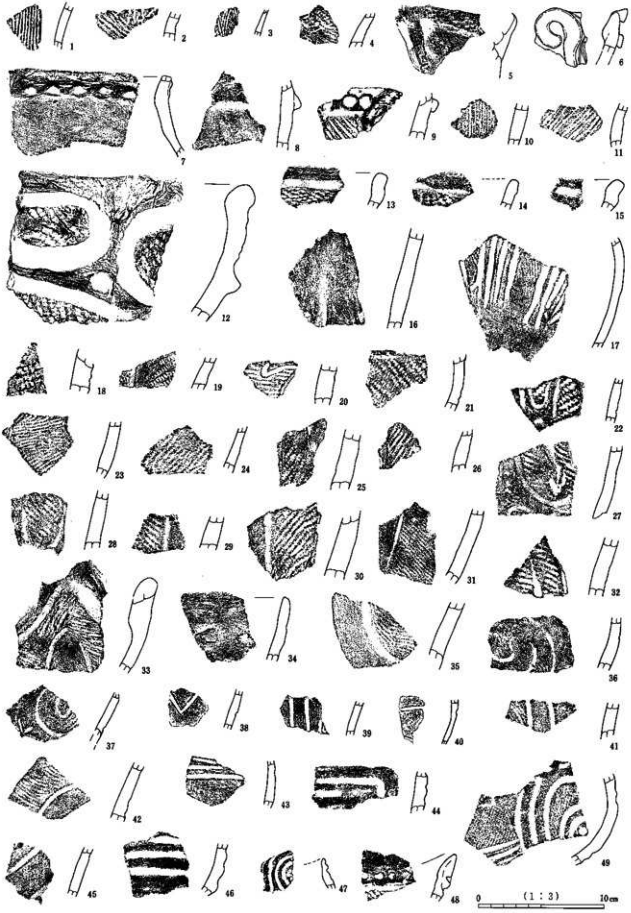


図212　土器（1）－縄文時代－

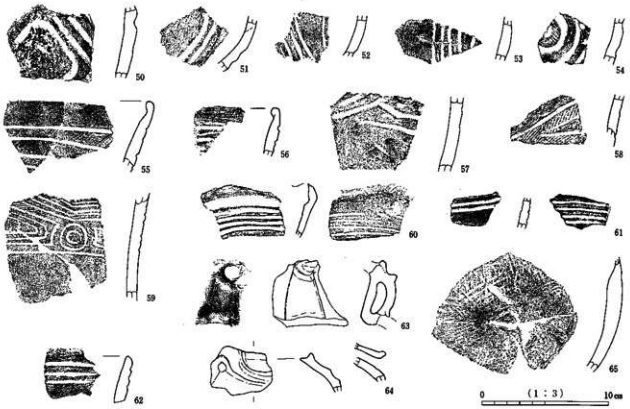


図213 土器（2）－縄文時代－

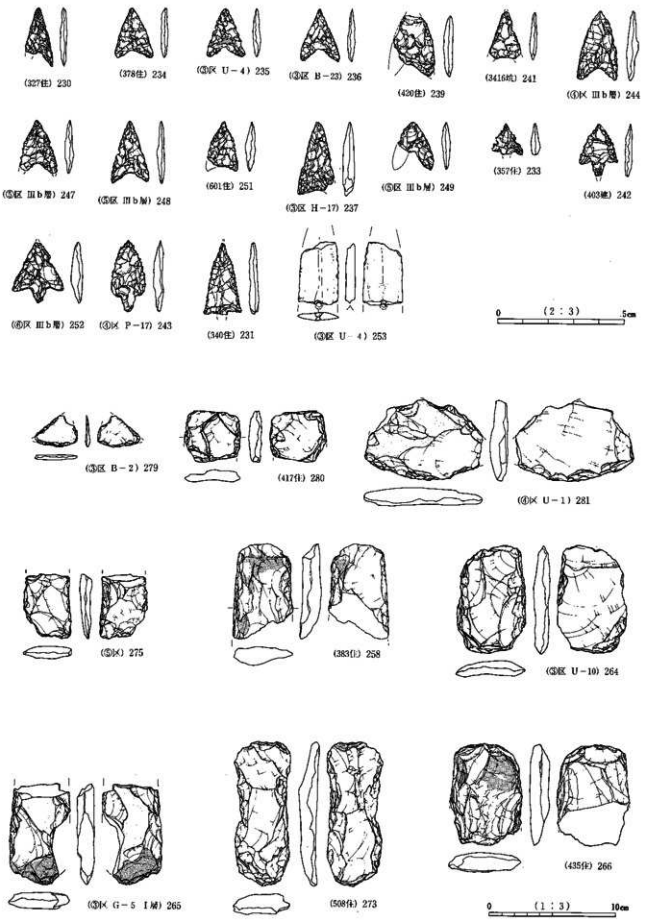
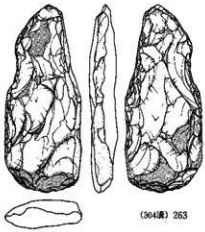
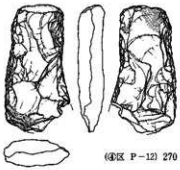
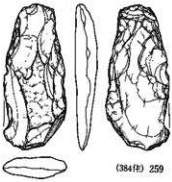
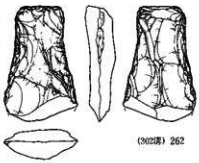


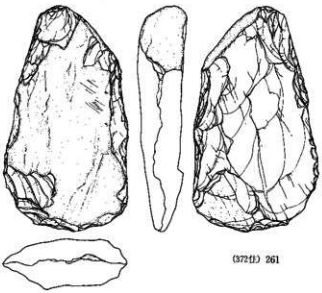
図214　石器1（石鏃・刃器・打製石斧）

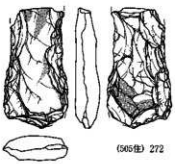

(364床) 263

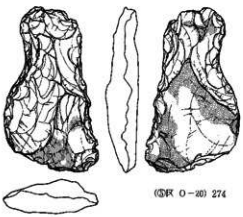

(③区 P－12) 270

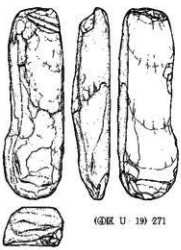

(384住) 259

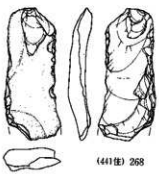

(302床) 262


(372住) 261


(505住) 272


(③区 O－20) 274


(③区 U－19) 271


(441住) 268

0 (1：3) 10cm

図215 石器2（打製石斧）

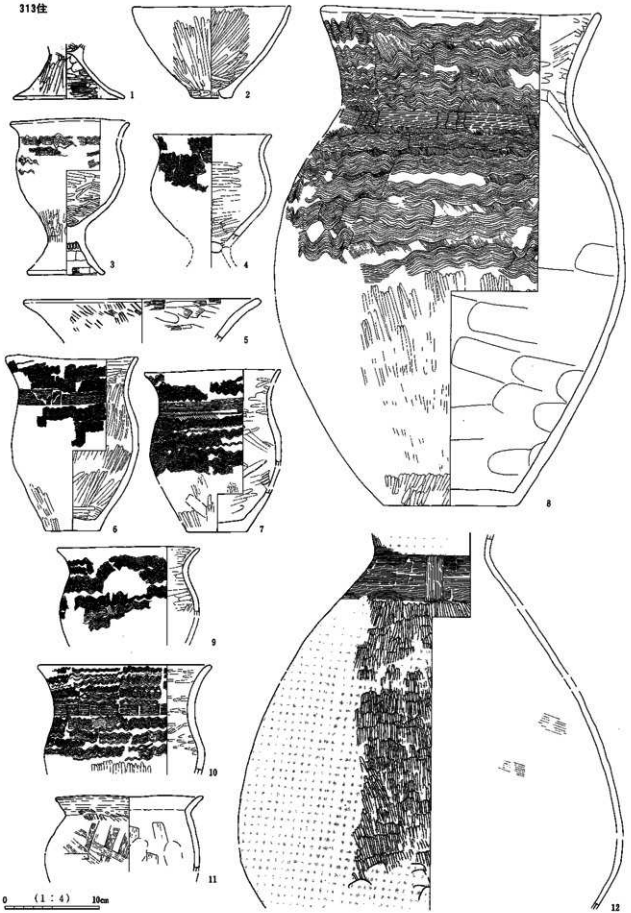


図216　土器（３）－弥生時代後期～古墳時代前期－

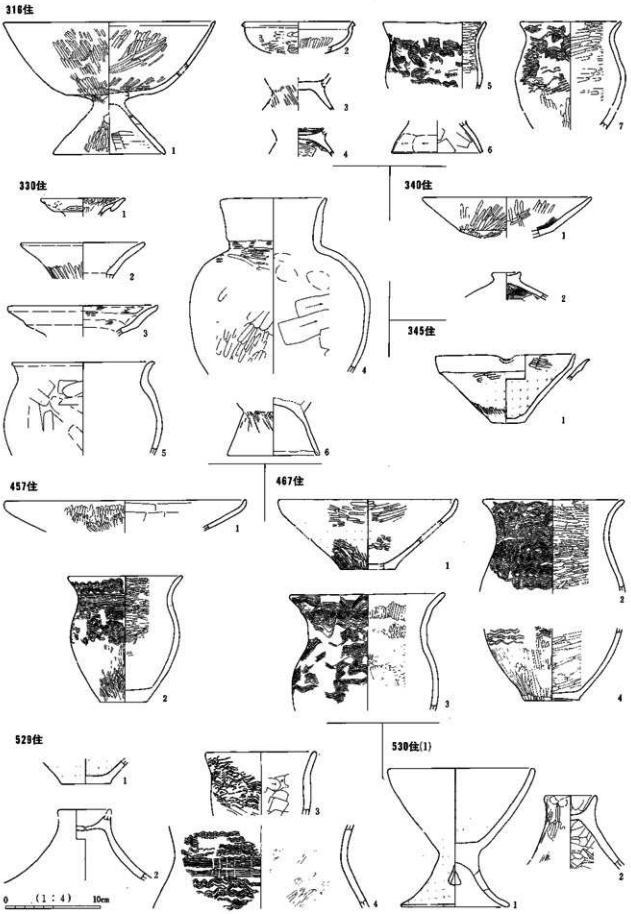


図217 土器（4）－弥生時代後期～古墳時代前期－

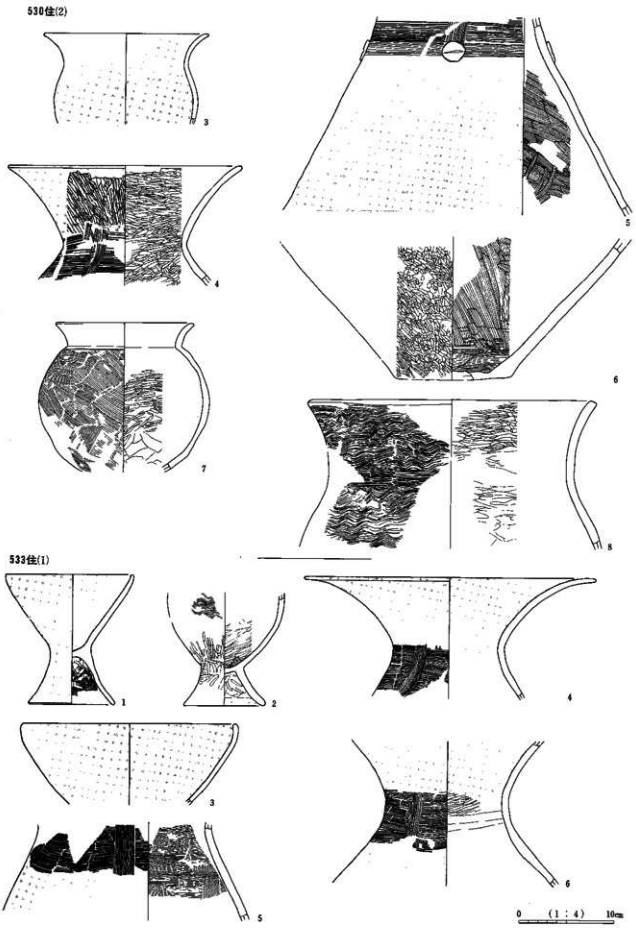


図218　土器（5）－弥生時代後期～古墳時代前期－

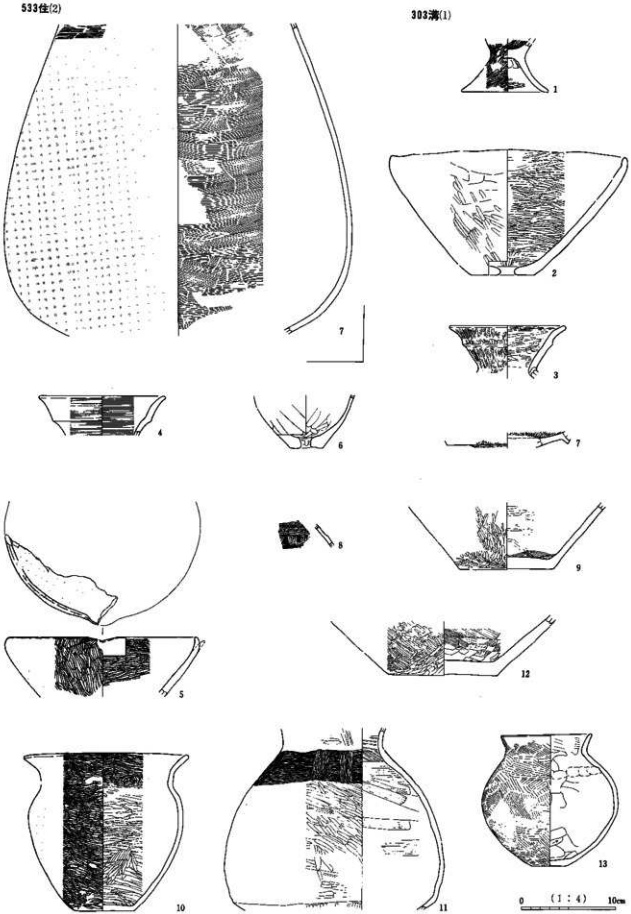


図219 土器（6）－弥生時代後期～古墳時代前期－

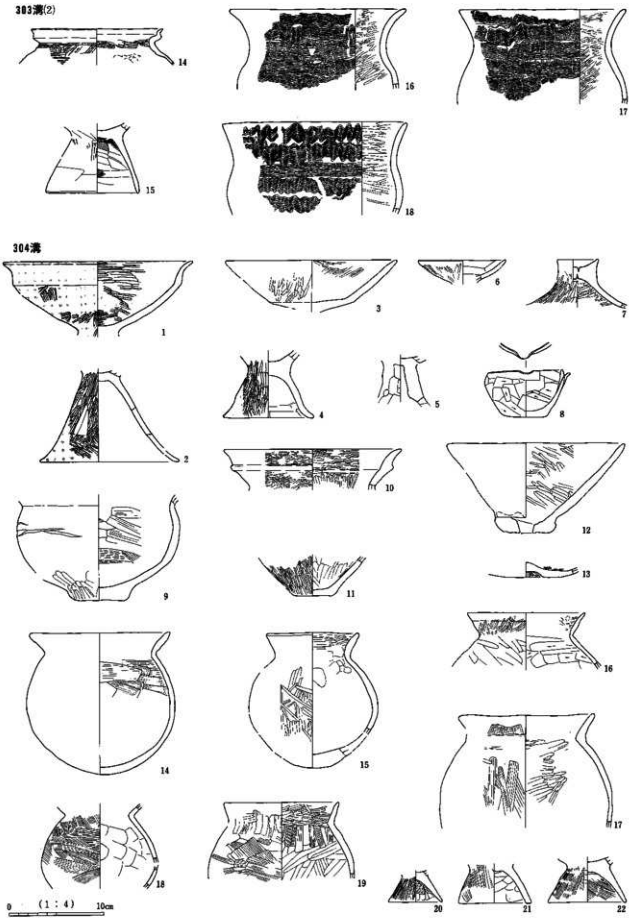


図220　土器（7）－弥生時代後期～古墳時代前期－

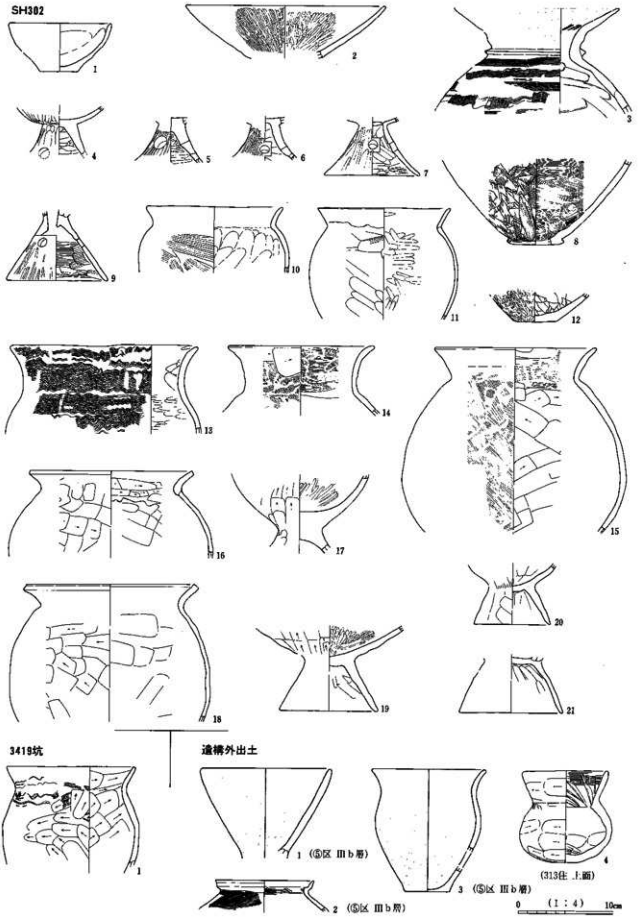


図221 土器(8)－弥生時代後期～古墳時代前期－

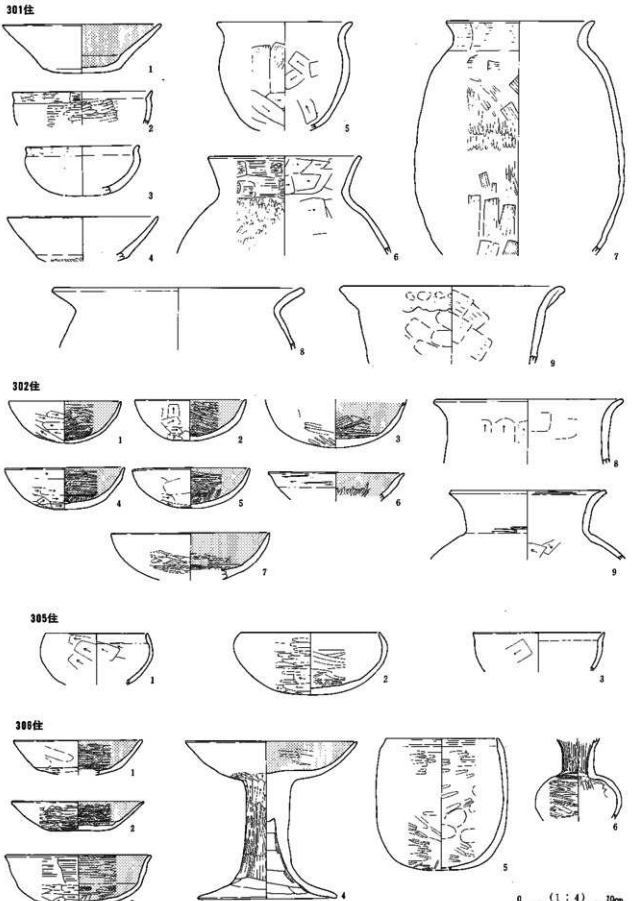


図222　土器（９）－古墳時代中期～平安時代－

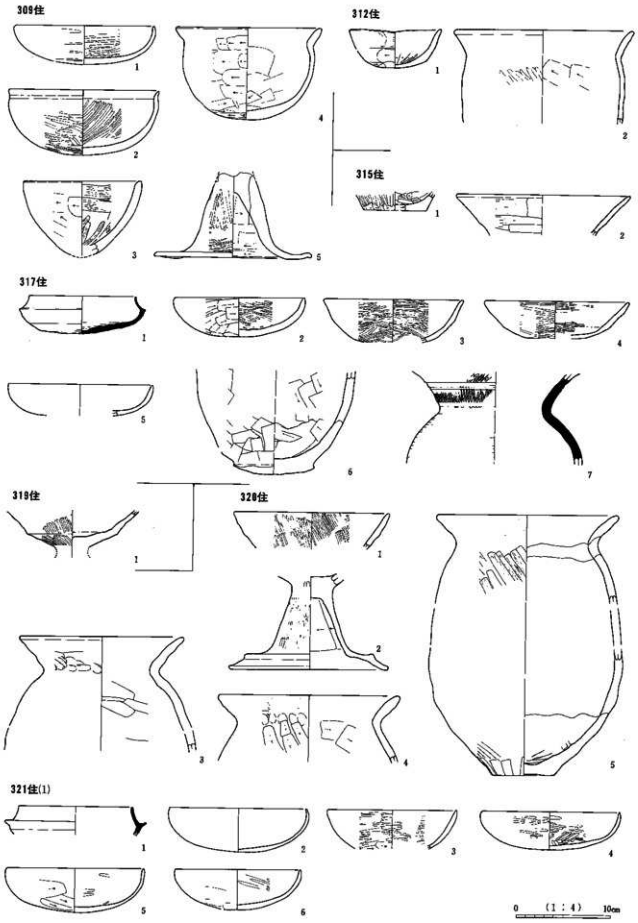


図223 土器 (10) －古墳時代中期～平安時代－

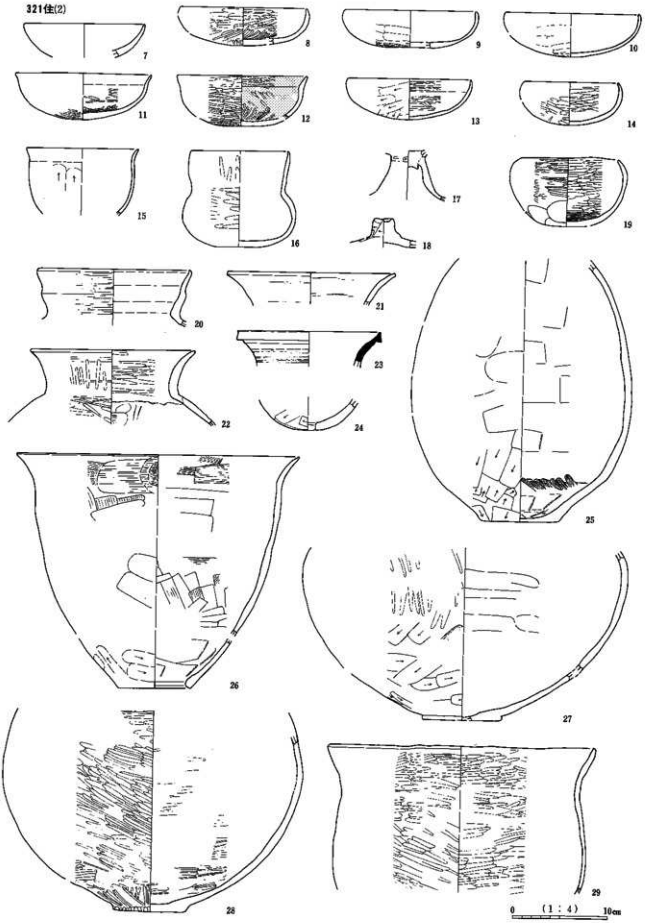
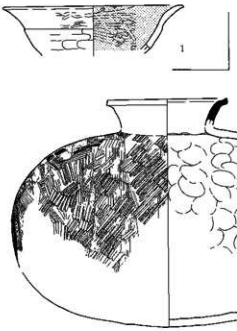
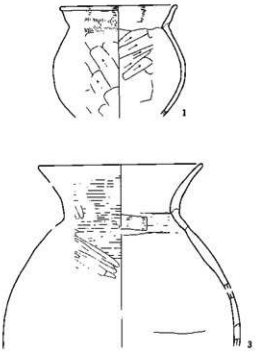


図224　土器（11）－古墳時代中期～平安時代－

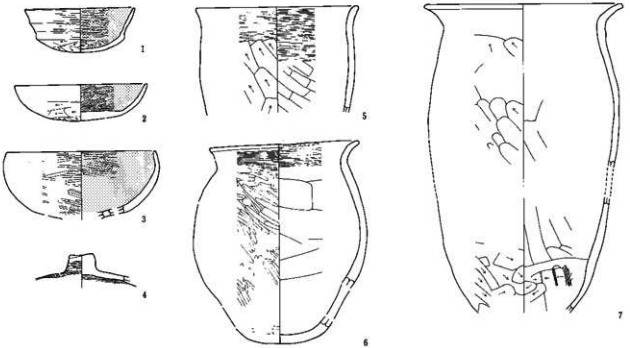
323住



325住



326住



327住(1)

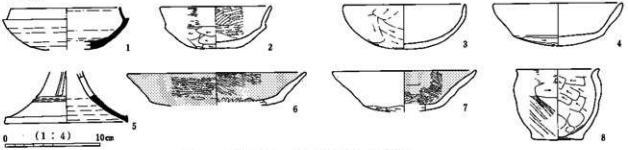
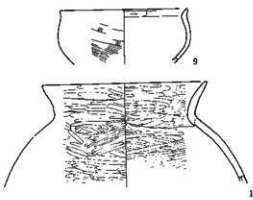
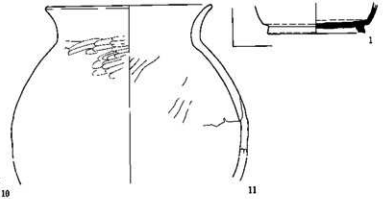


図225 土器（12）－古墳時代中期～平安時代－

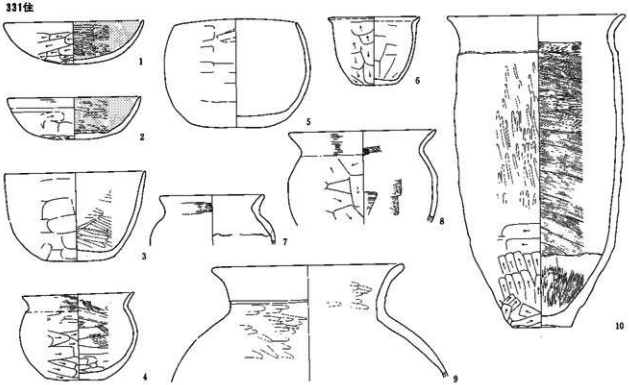
327住(2)



328住



331住



334住

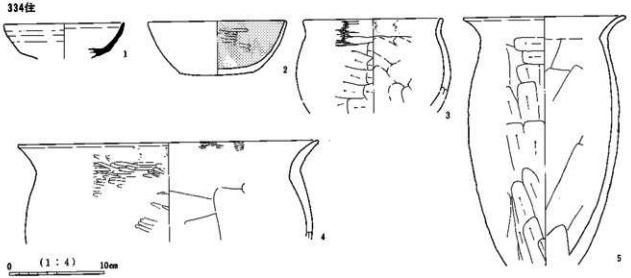
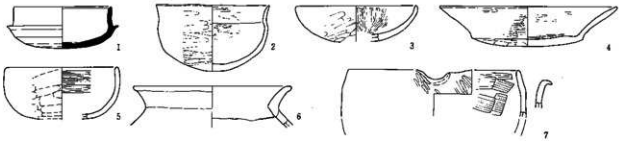
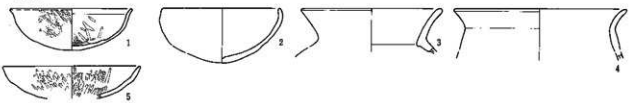


図226　土器（13）－古墳時代中期～平安時代－

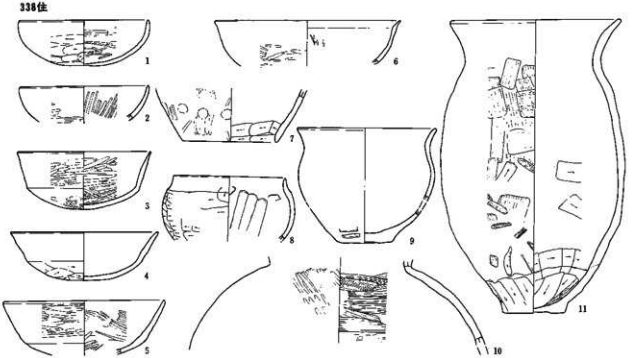
336住



337住



338住



339住(1)

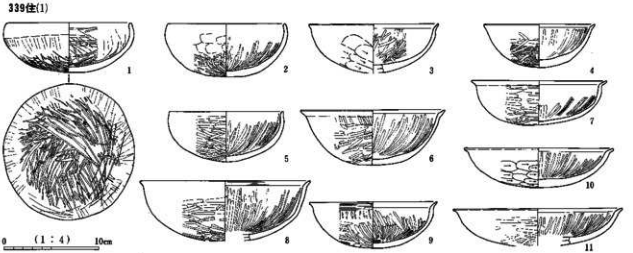


図227 土器（14）－古墳時代中期～平安時代－

339住(2)

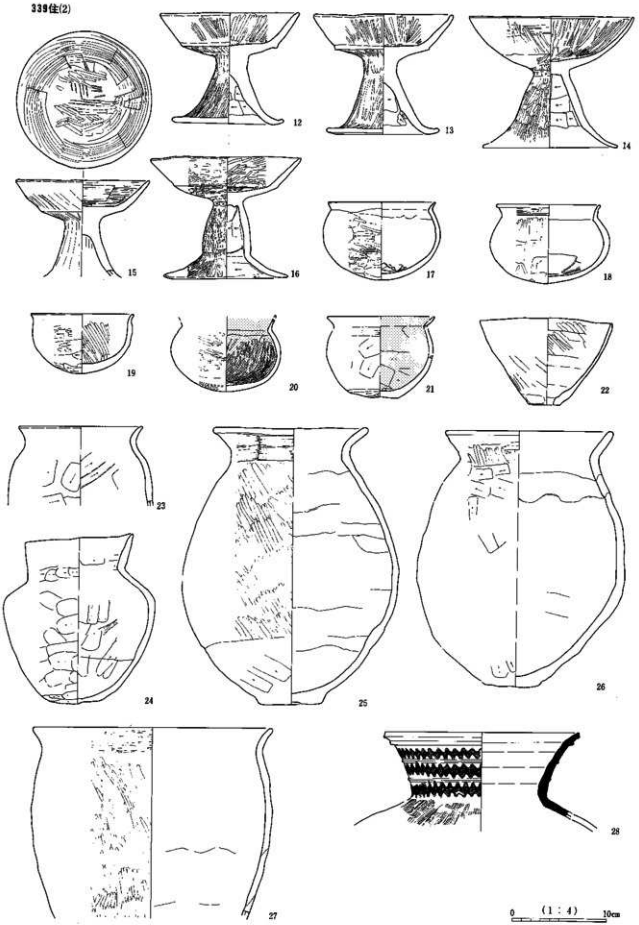


図228　土器（15）－古墳時代中期～平安時代－

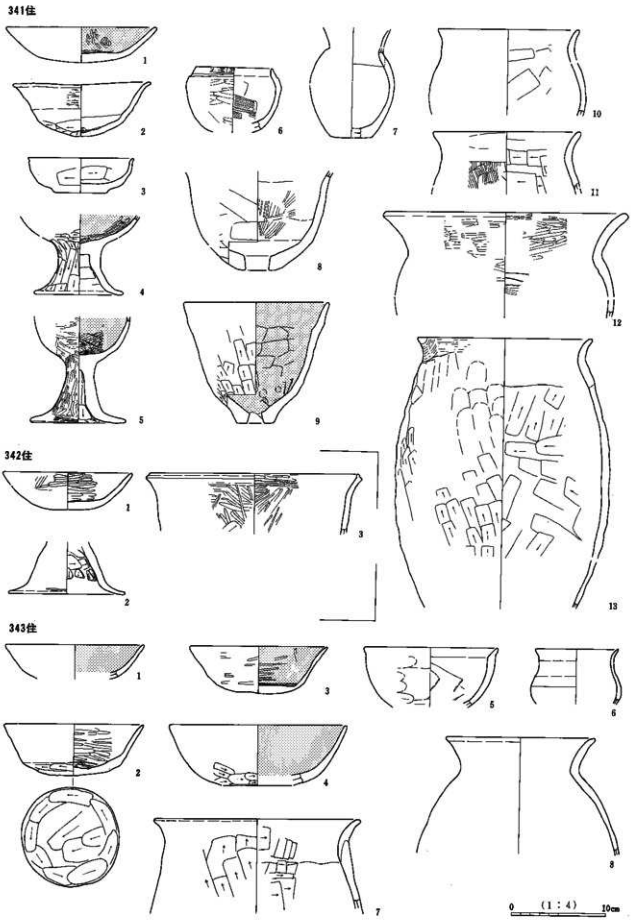


図229 土器 (16) －古墳時代中期～平安時代－

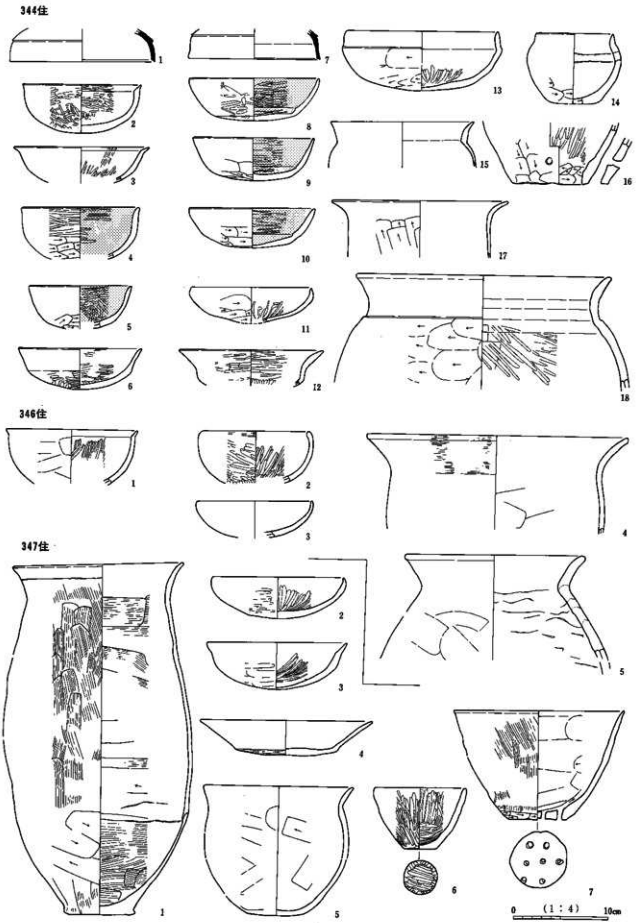
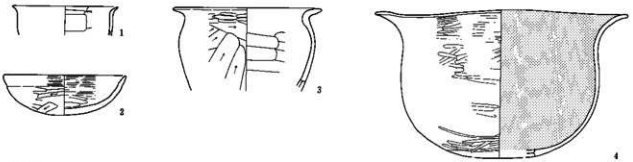


図230　土器（17）－古墳時代中期～平安時代－

350住



351住

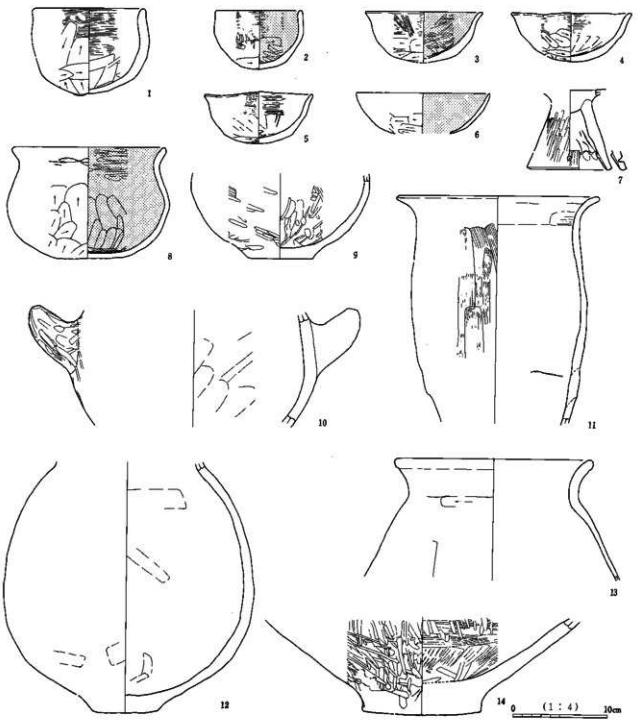


図231 土器（18）－古墳時代中期～平安時代－

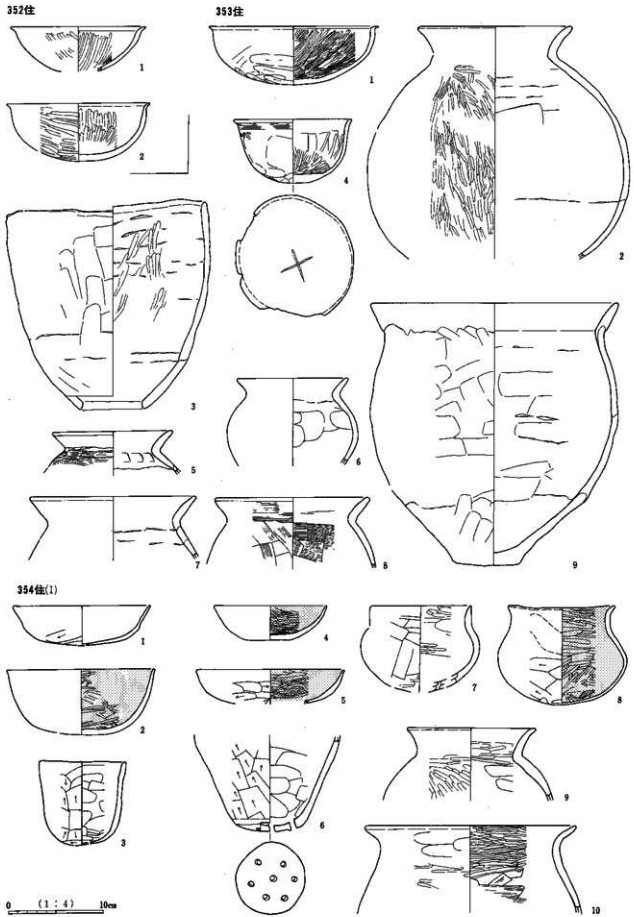


図232　土器（19）－古墳時代中期～平安時代－

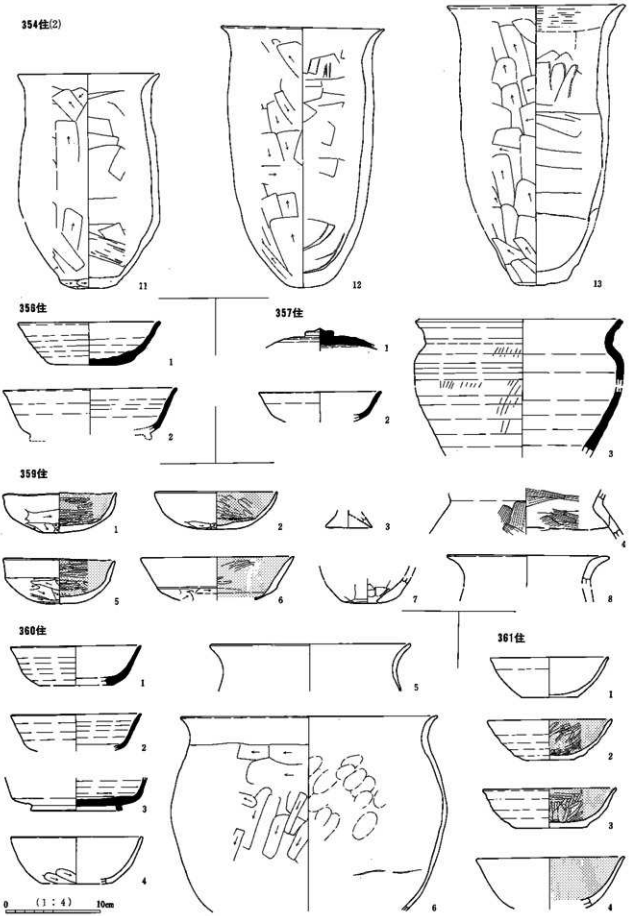


図233 土器（20）－古墳時代中期～平安時代－

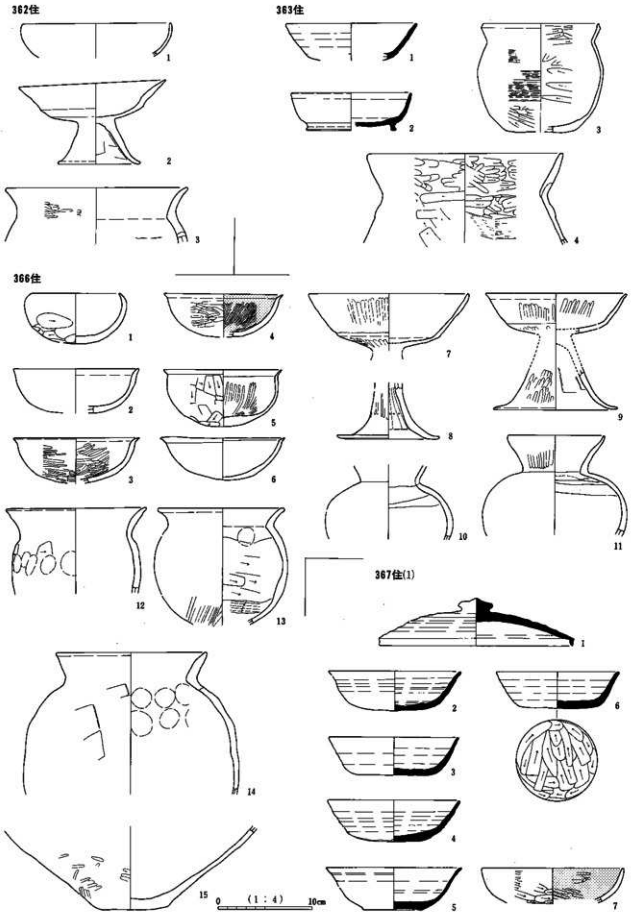
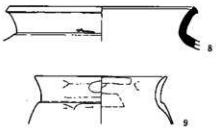


図234　土器（21）－古墳時代中期～平安時代－

367住(2)



368住(1)

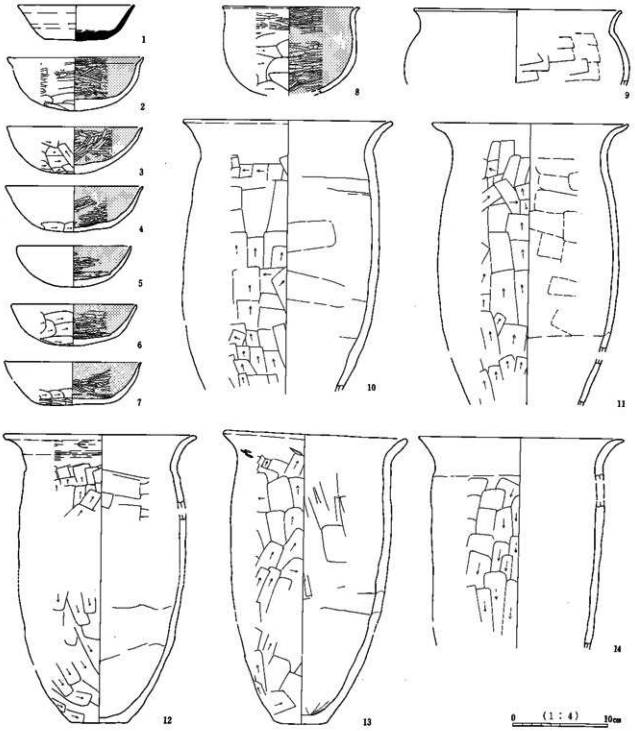


図235 土器（22）－古墳時代中期～平安時代－

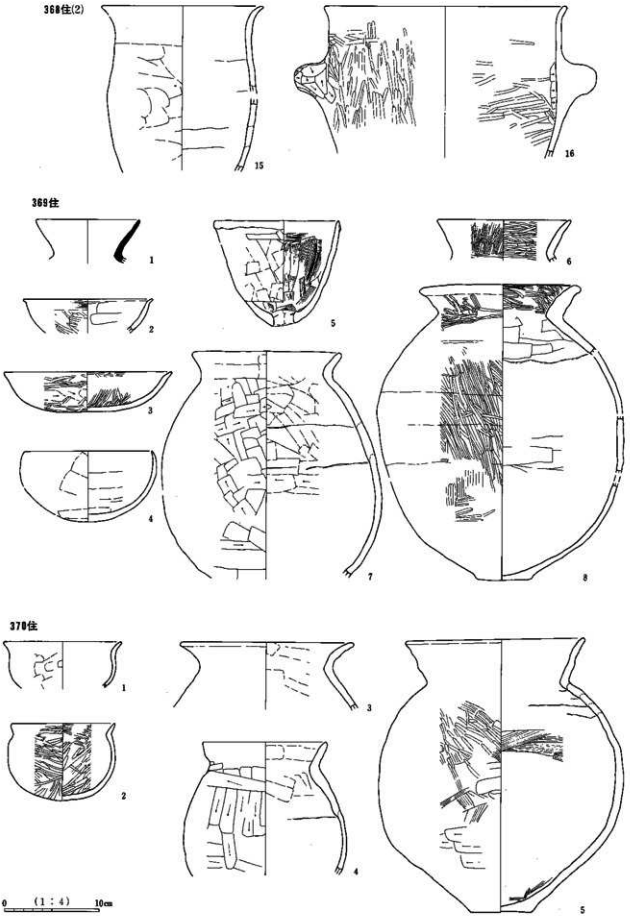


図236　土器（23）－古墳時代中期～平安時代－

371住

372住

373住

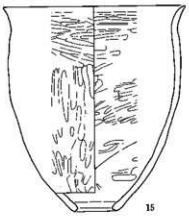
374住

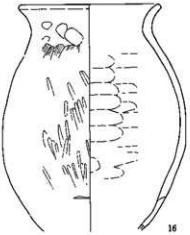
375住(1)

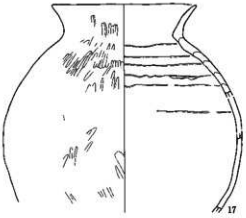
0 (1：4) 10cm

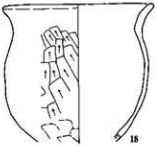
図237 土器（24）－古墳時代中期～平安時代－

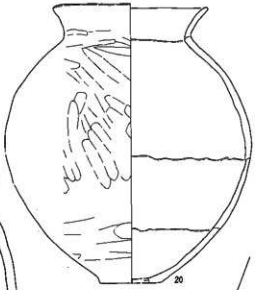
375住(2)



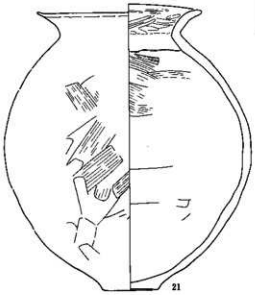


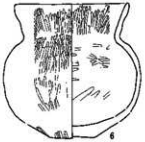


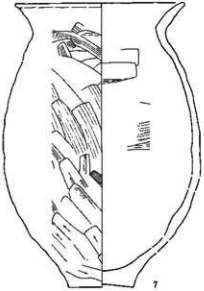




376住



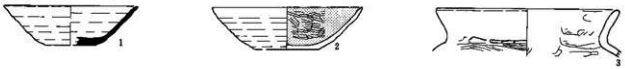




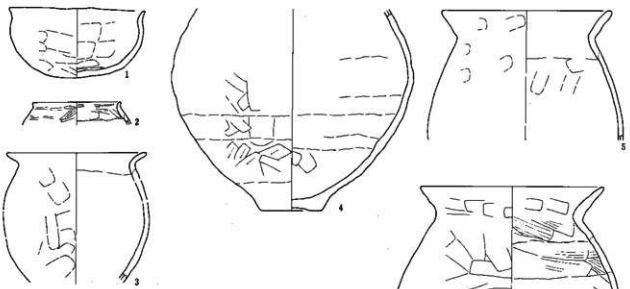
0　(1：4)　10cm

図238　土器（25）－古墳時代中期～平安時代－

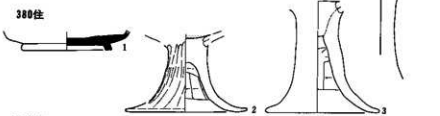
378住



379住



380住



383住(1)

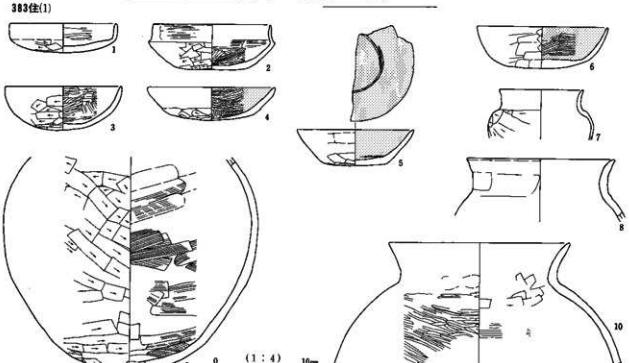


図239 土器（26）－古墳時代中期～平安時代－

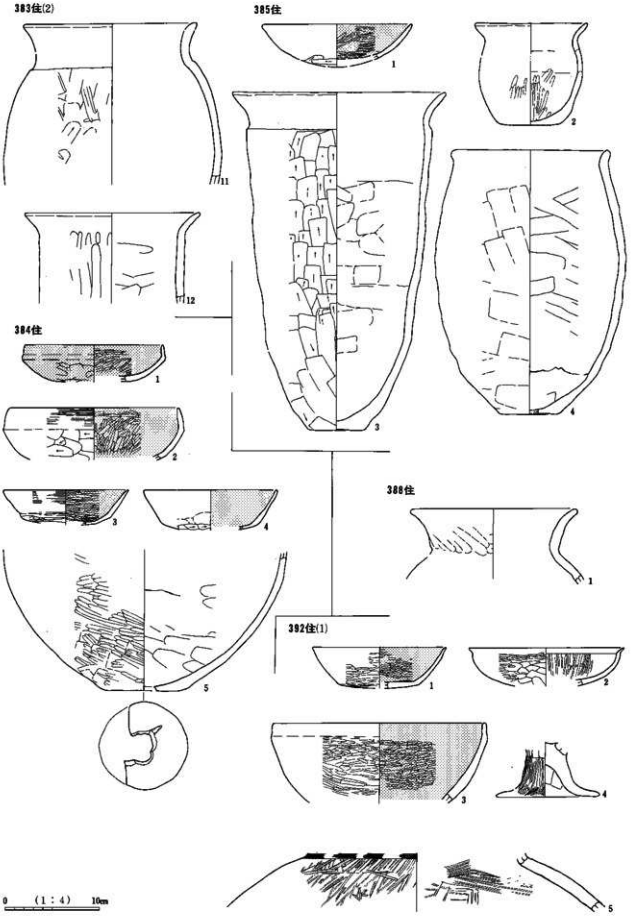


図240　土器（27）－古墳時代中期～平安時代－

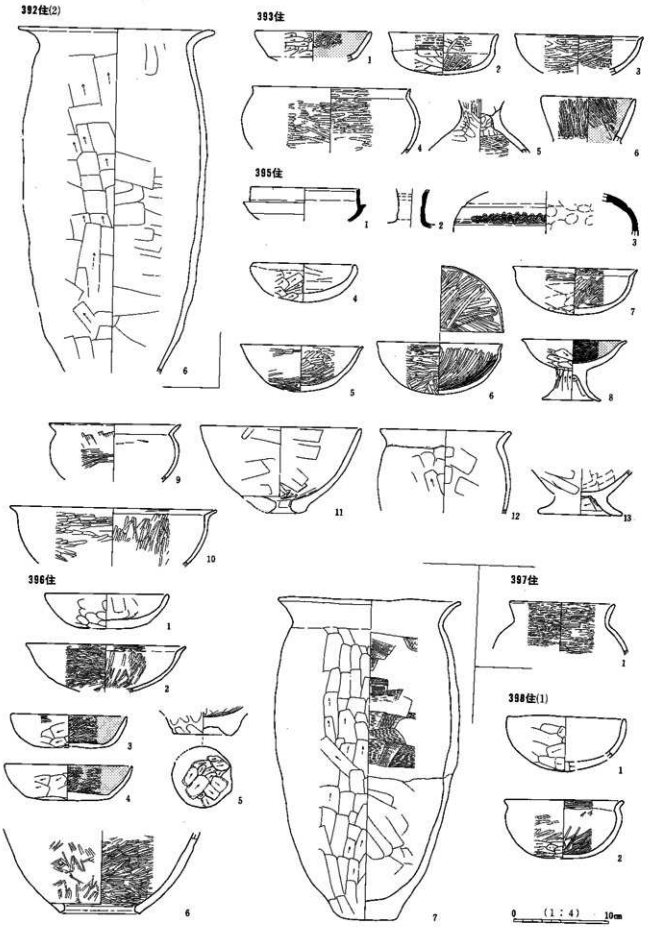


図241 土器（28）－古墳時代中期～平安時代－

398住(2)

3400住(1)

0　(1：4)　10cm

図242　土器（29）－古墳時代中期～平安時代－

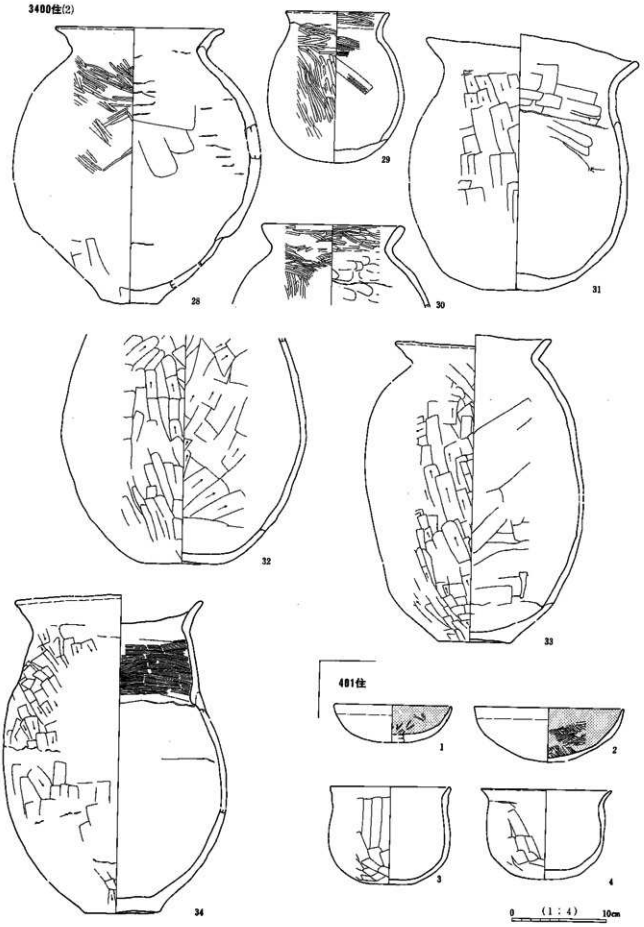


図243 土器（30）－古墳時代中期～平安時代－

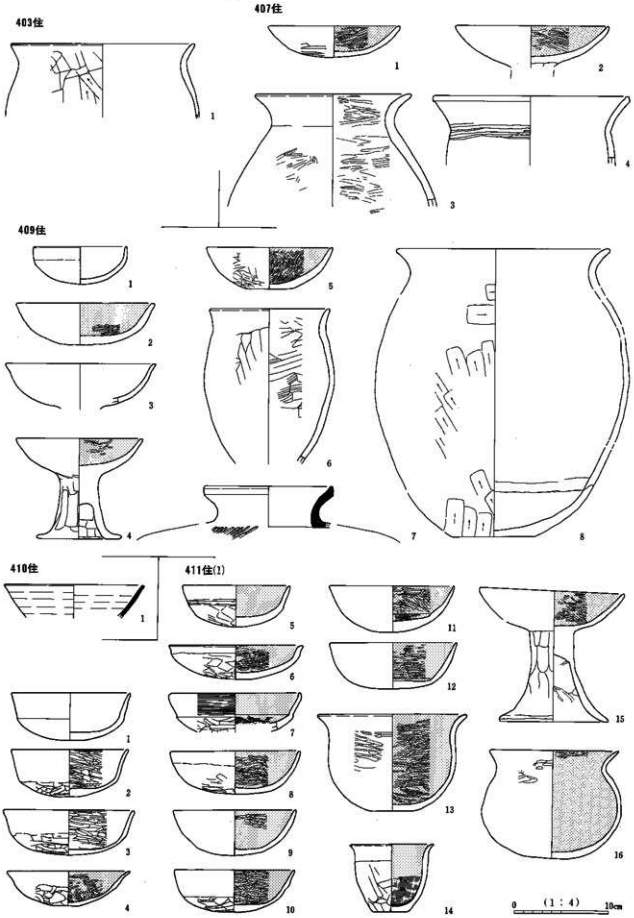


図244　土器（31）－古墳時代中期～平安時代－

411住(2)

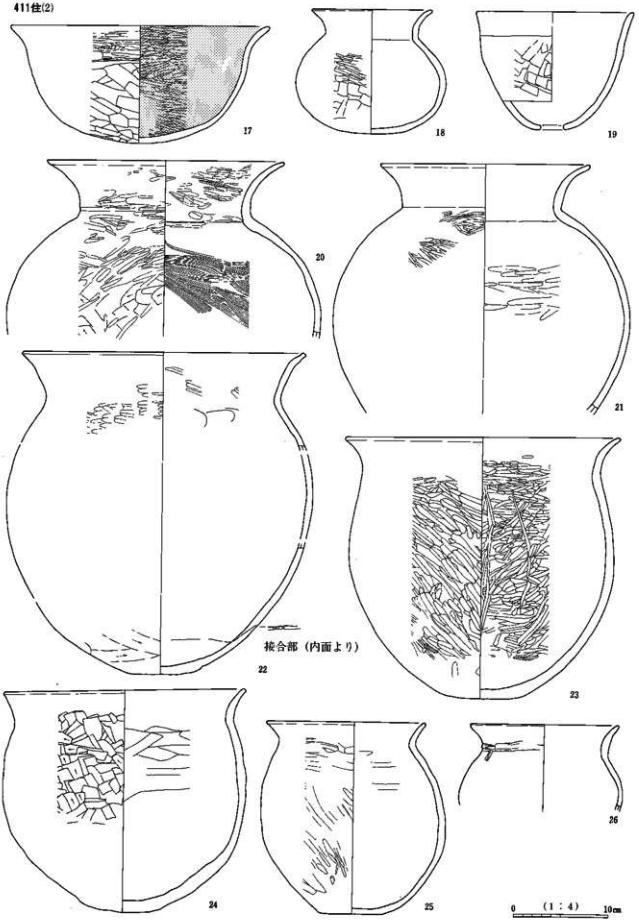
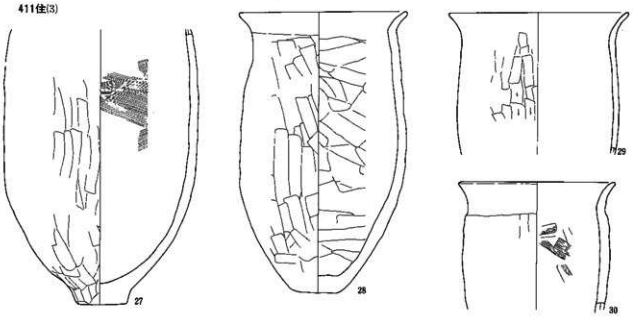
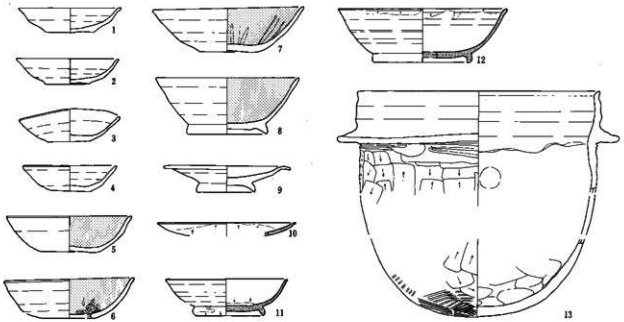


図245 土器（32）－古墳時代中期～平安時代－

411住(3)



412住



413住(1)

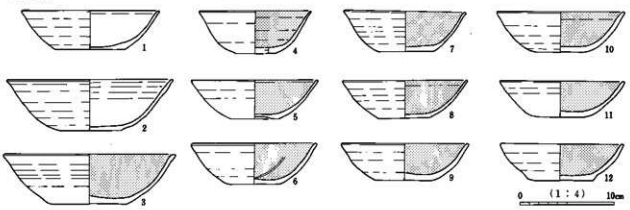


図246　土器（33）－古墳時代中期～平安時代－

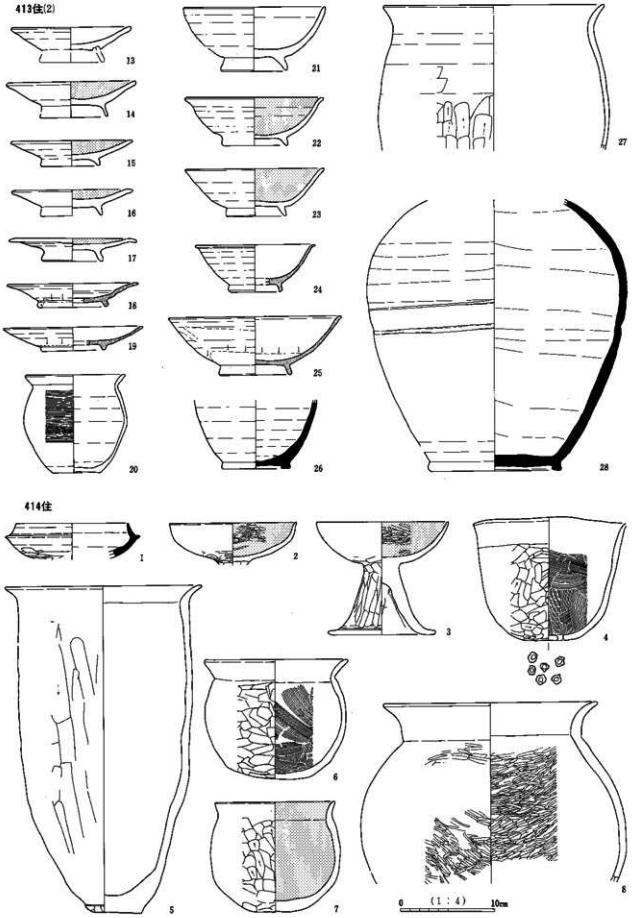


図247 土器（34）－古墳時代中期～平安時代－

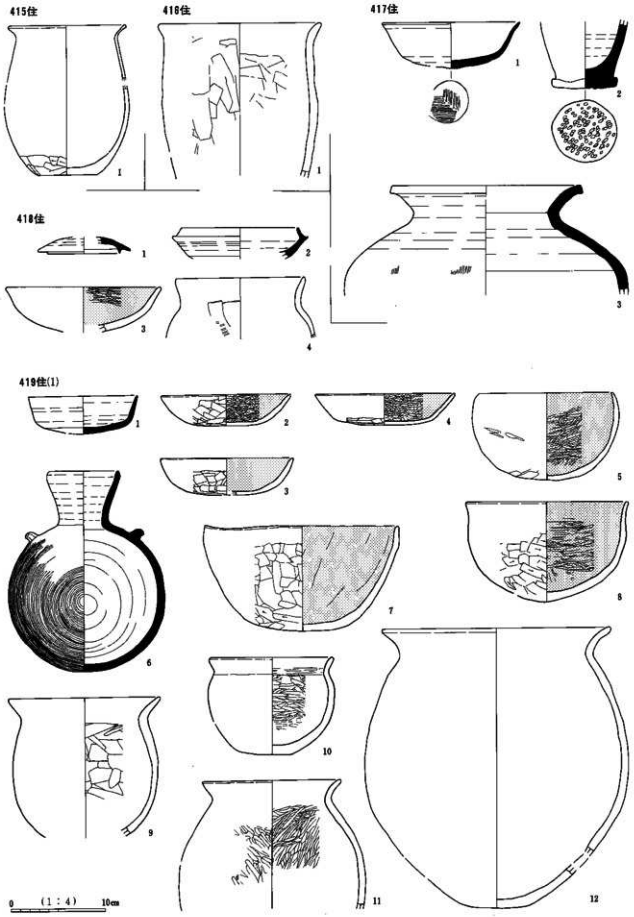


図248　土器（35）－古墳時代中期～平安時代－

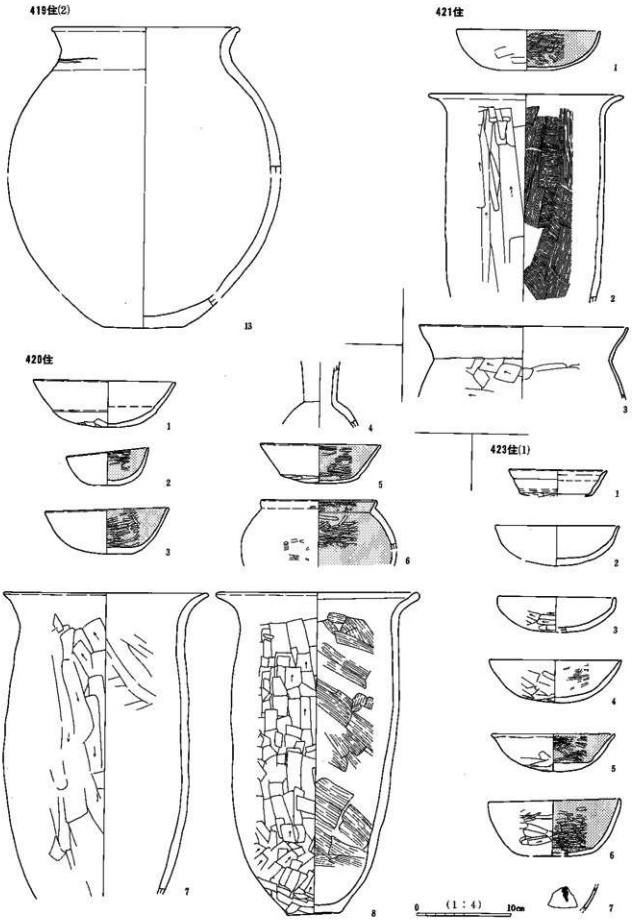


図249 土器（36）－古墳時代中期～平安時代－

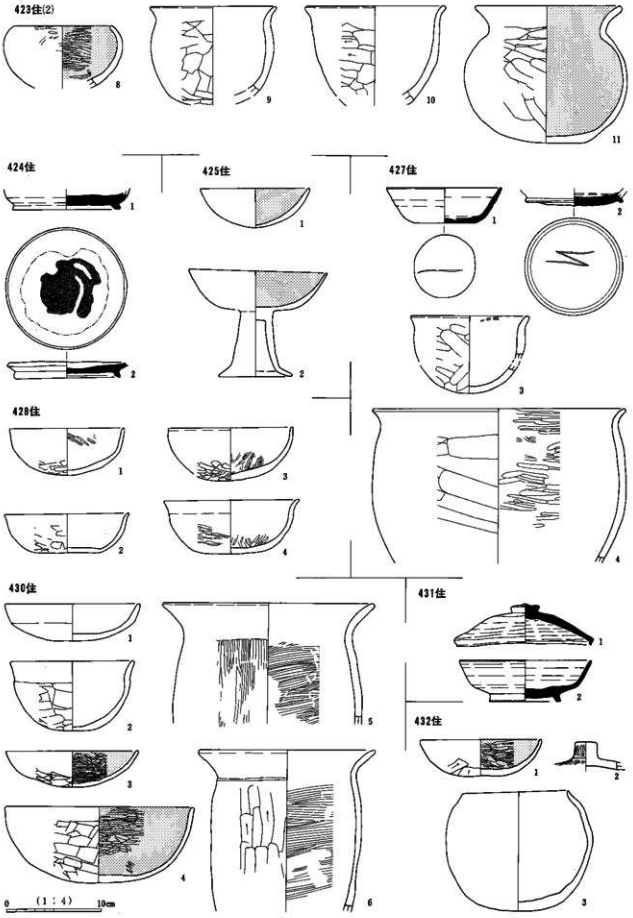


図250　土器（37）－古墳時代中期～平安時代－

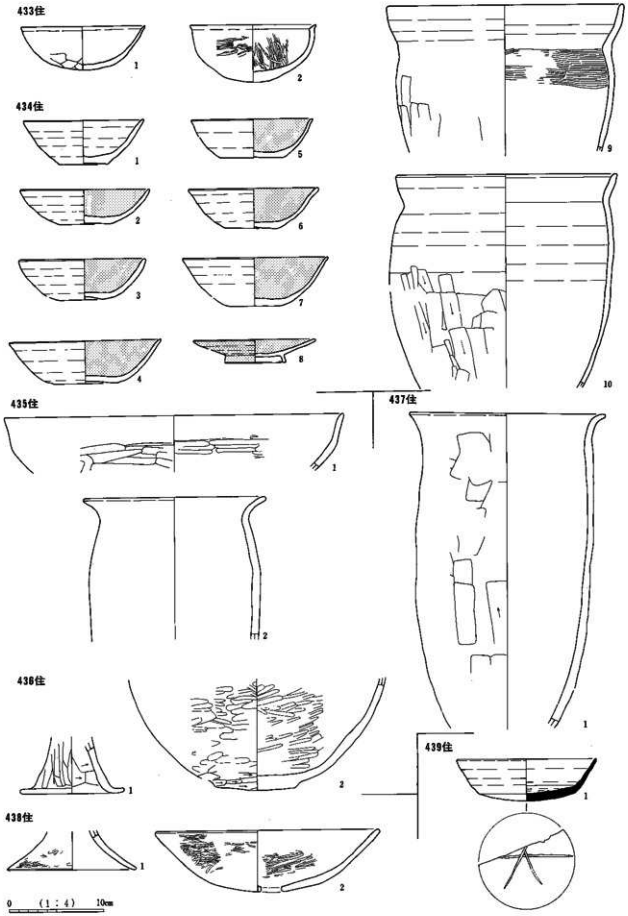


図251 土器（38）－古墳時代中期～平安時代－

441住

442住

443住

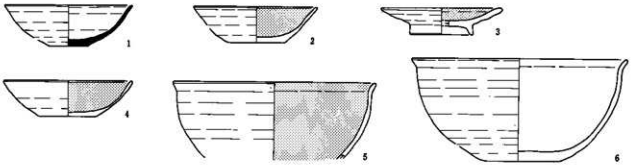
444住

445住

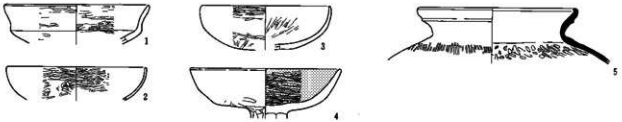
0　(1：4)　10cm

図252　土器（39）－古墳時代中期～平安時代－

446住



447住



448住

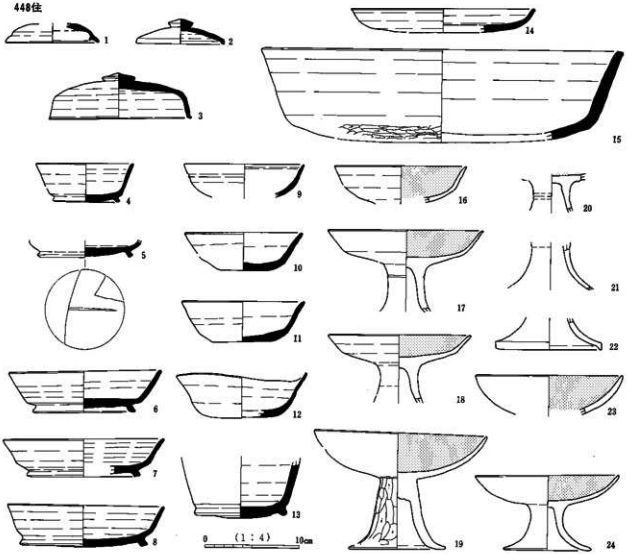


図253 土器（40）－古墳時代中期～平安時代－

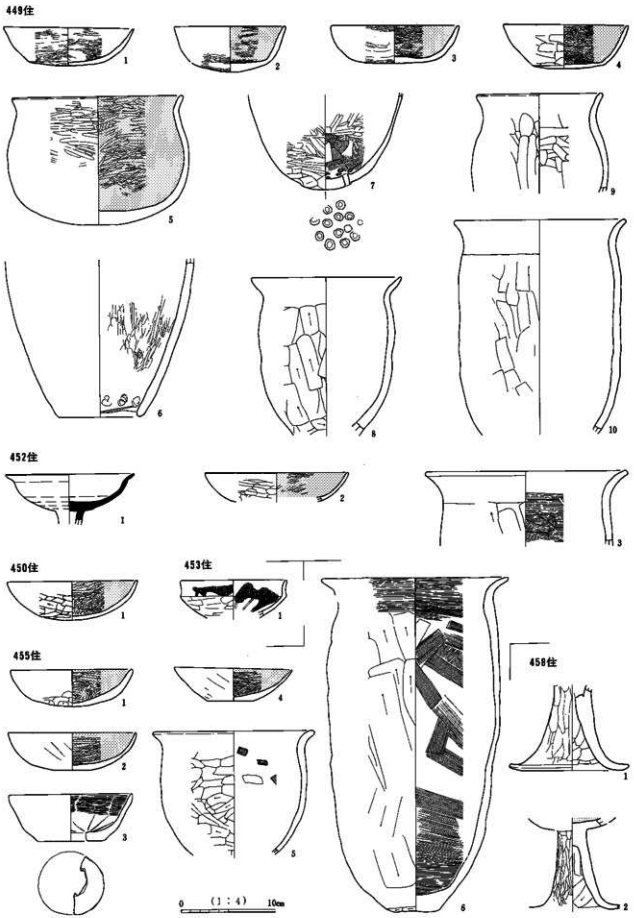


図254　土器（41）－古墳時代中期～平安時代－

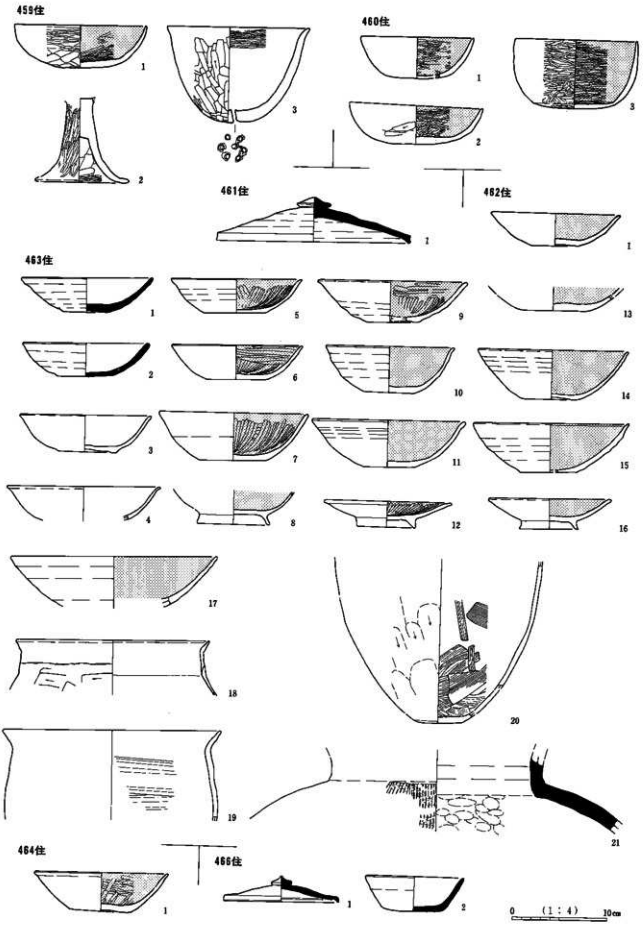


図255 土器（42）－古墳時代中期～平安時代－

468住

469住

470住

473住(1)

0　(1：4)　10cm

図256　土器（43）－古墳時代中期～平安時代－

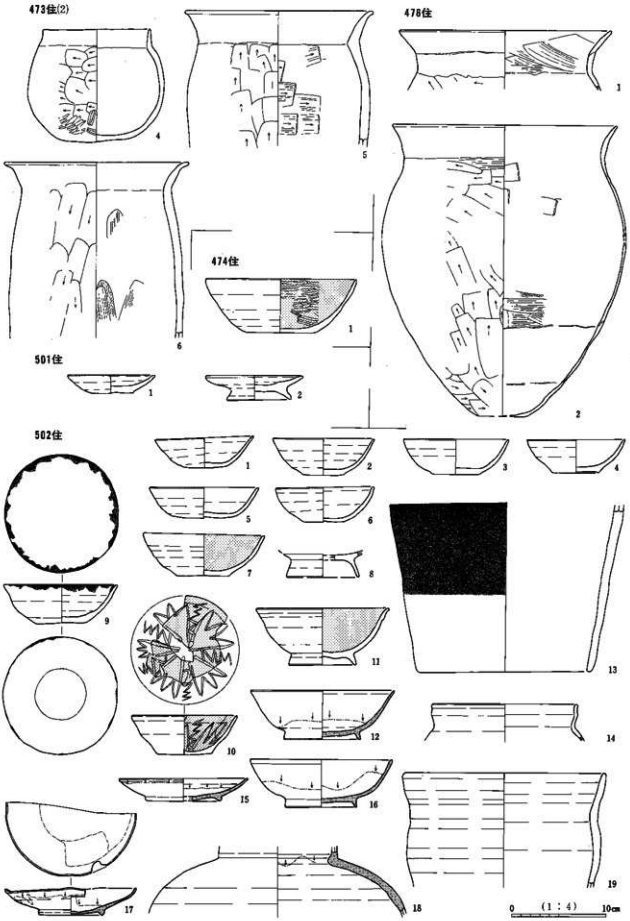
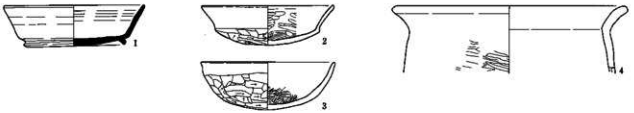
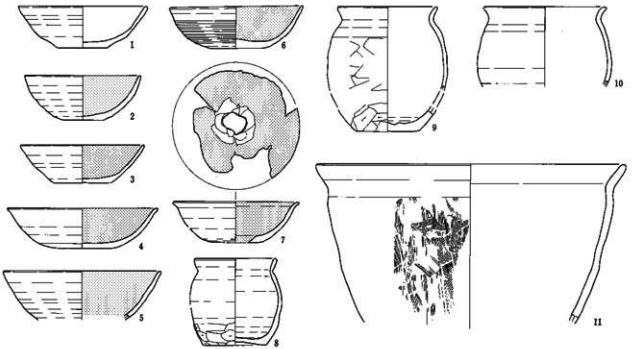


図257 土器（44）－古墳時代中期～平安時代－

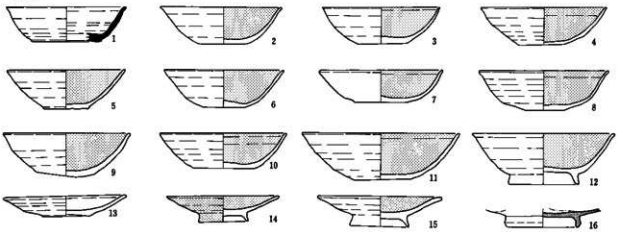
503住



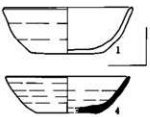
505住



506住



507住



508住(1)

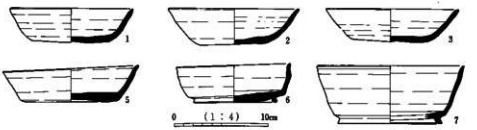
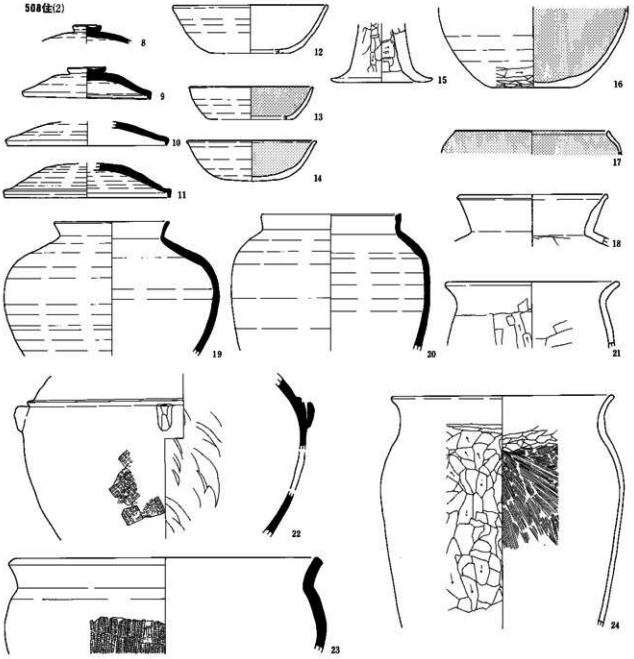


図258　土器（45）－古墳時代中期～平安時代－

508住(2)



509住

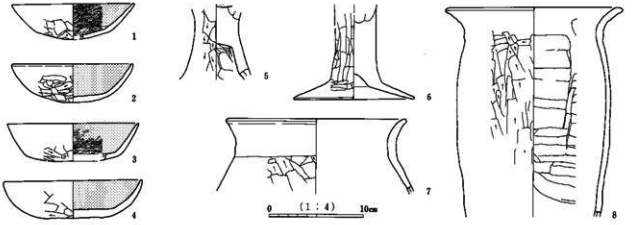


図259 土器（46）－古墳時代中期～平安時代－

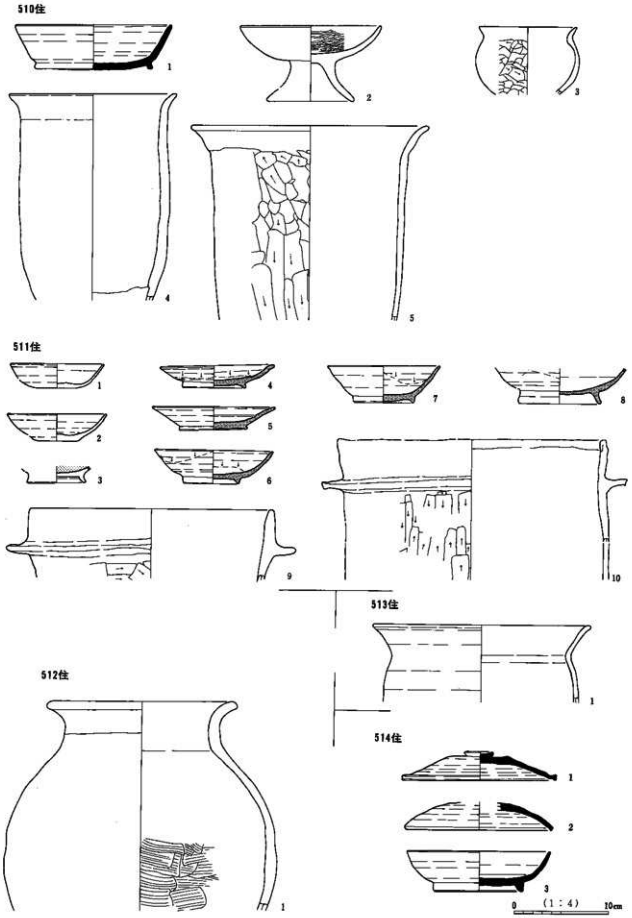


図260　土器（47）－古墳時代中期～平安時代－

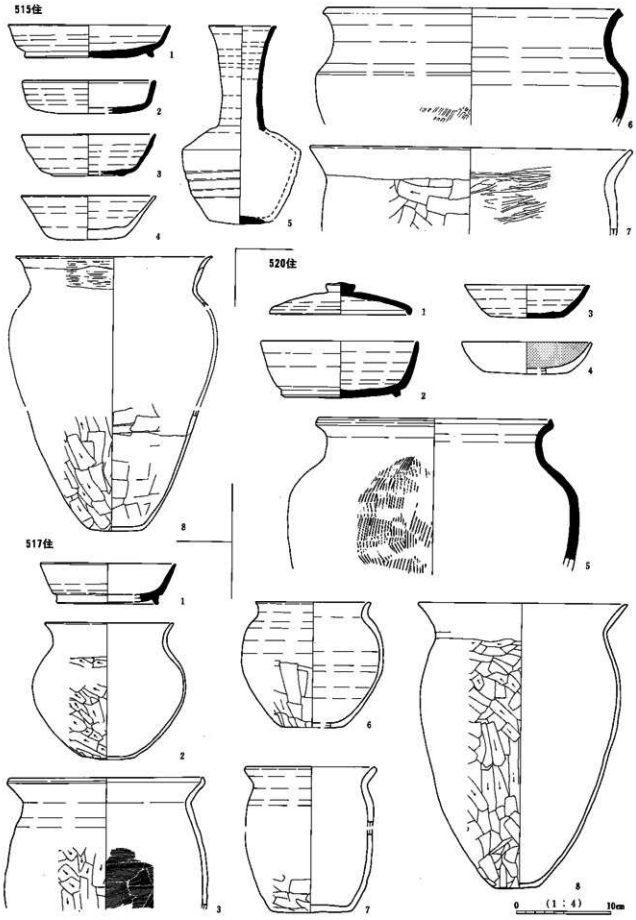


図261 土器（48）－古墳時代中期～平安時代－

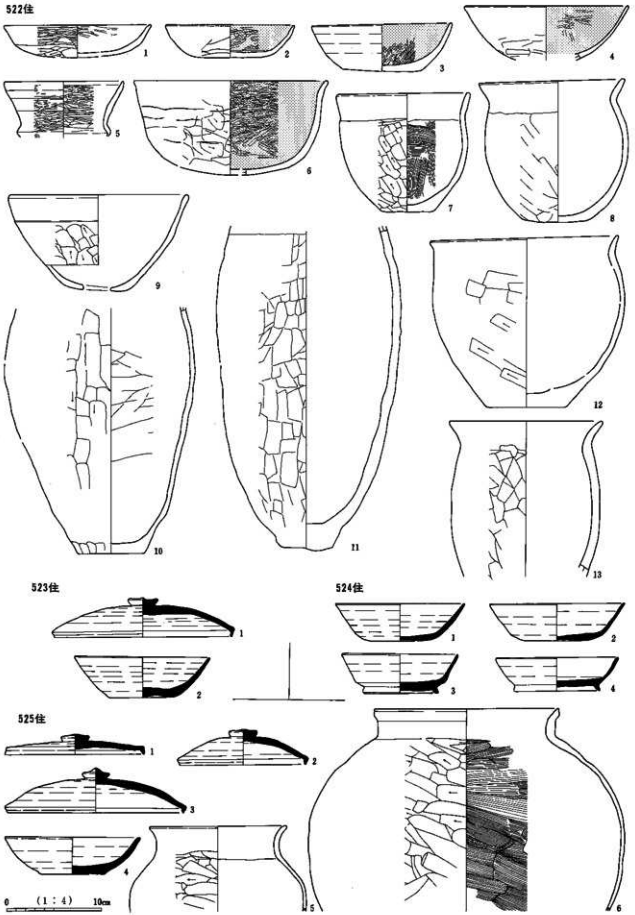


図262　土器（49）－古墳時代中期～平安時代－

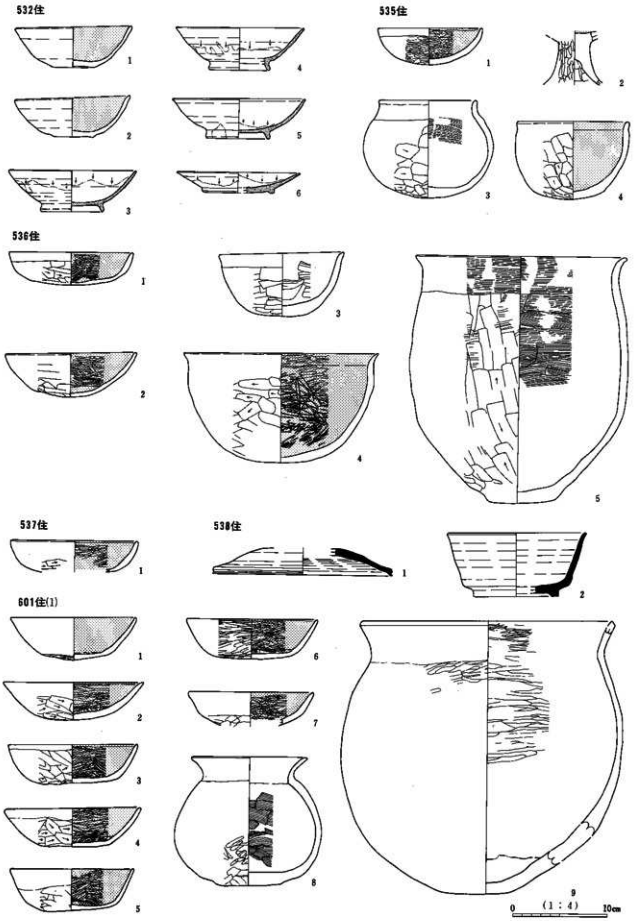


図263 土器（50）－古墳時代中期～平安時代－

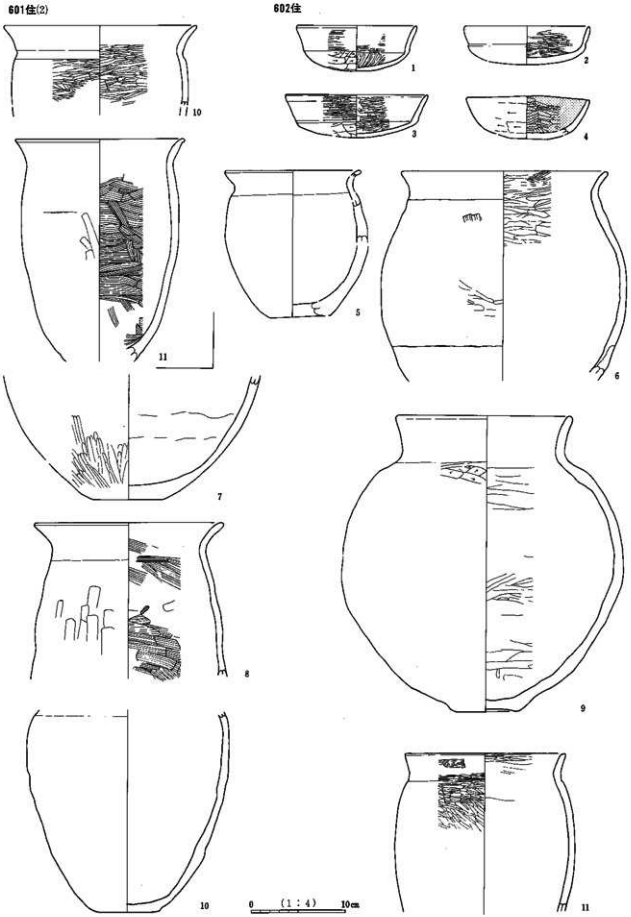


図264　土器（51）－古墳時代中期～平安時代－

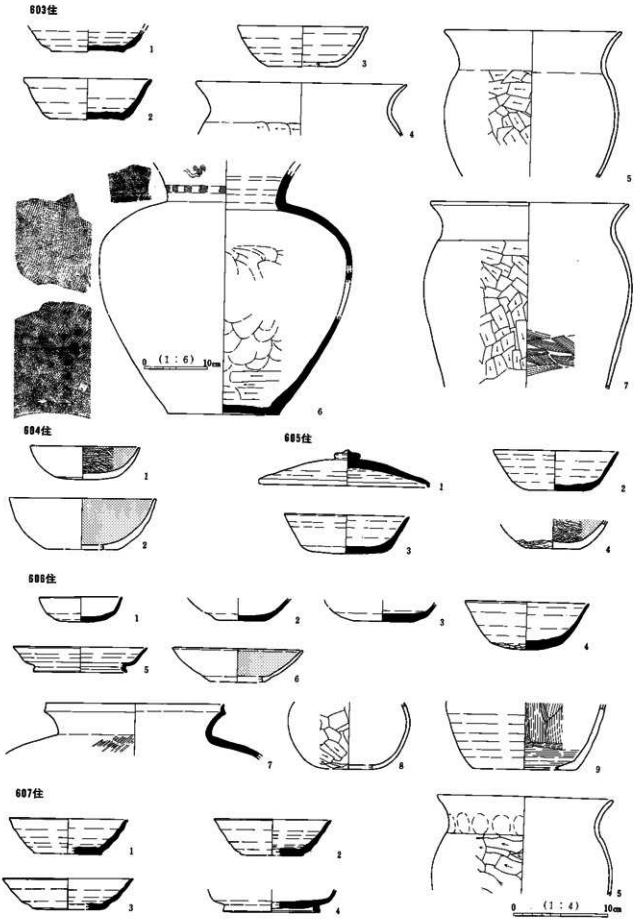


図265 土器（52）－古墳時代中期～平安時代－

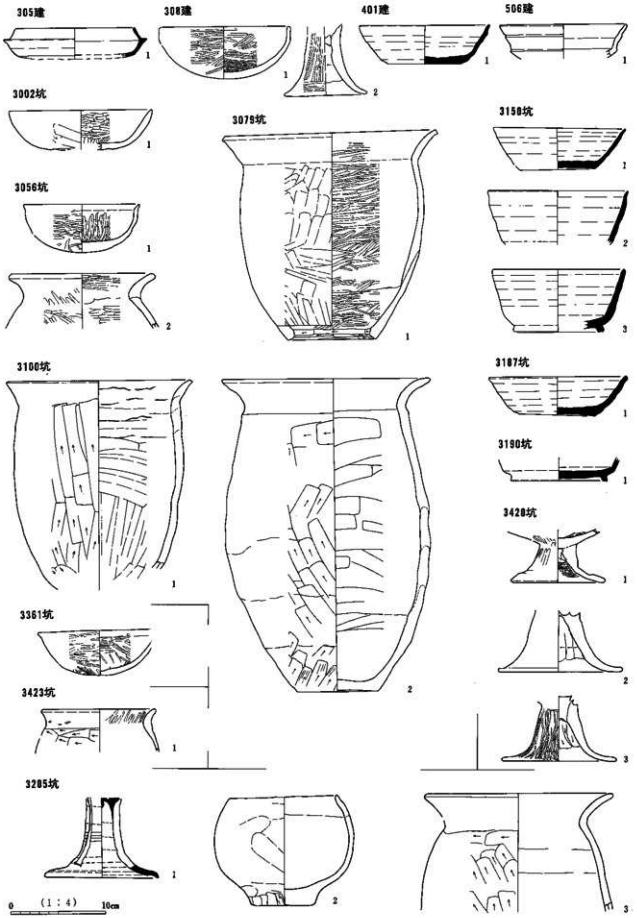


図266　土器（53）－古墳時代中期～平安時代－

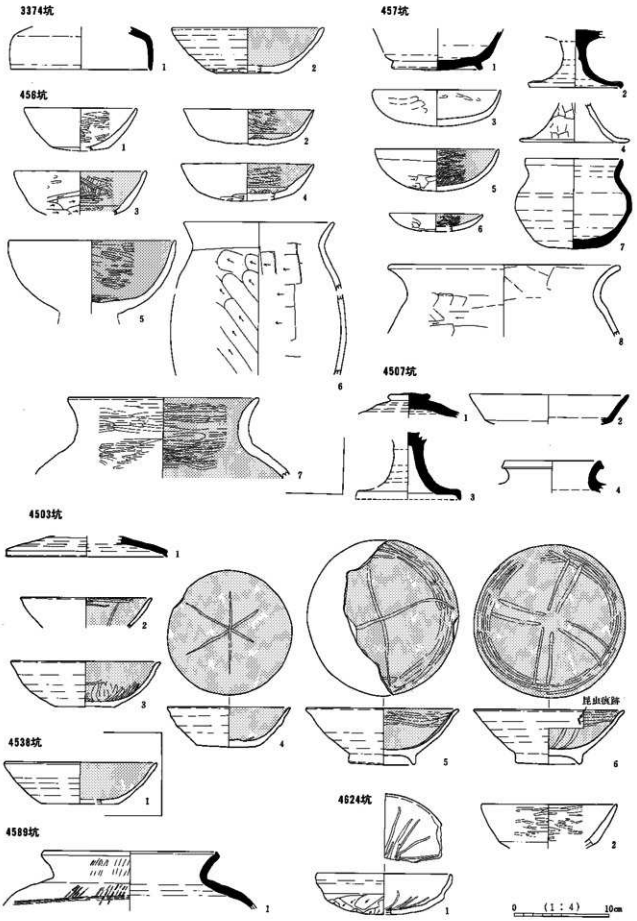


図267 土器 (54) －古墳時代中期～平安時代－

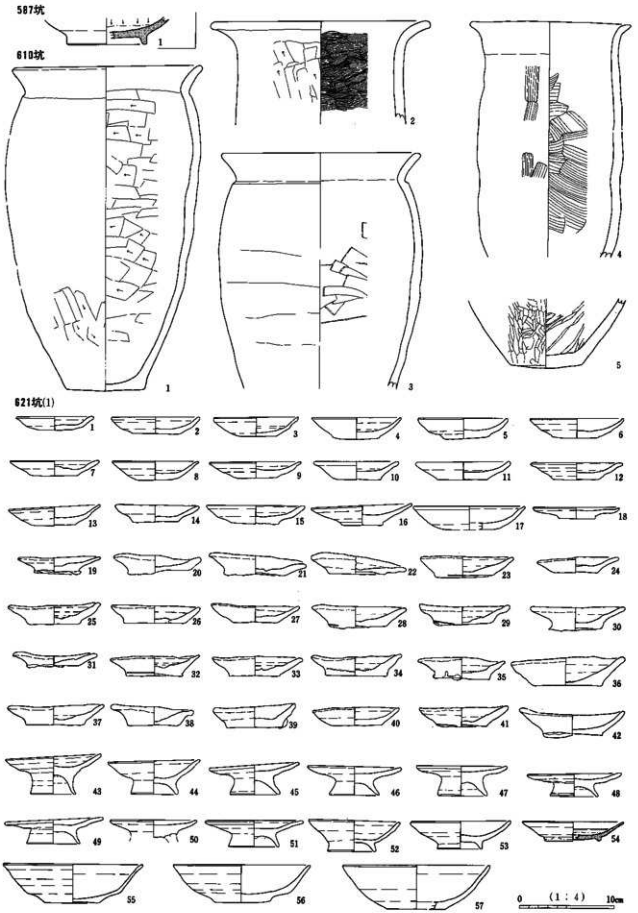


図268　土器（55）－古墳時代中期～平安時代－

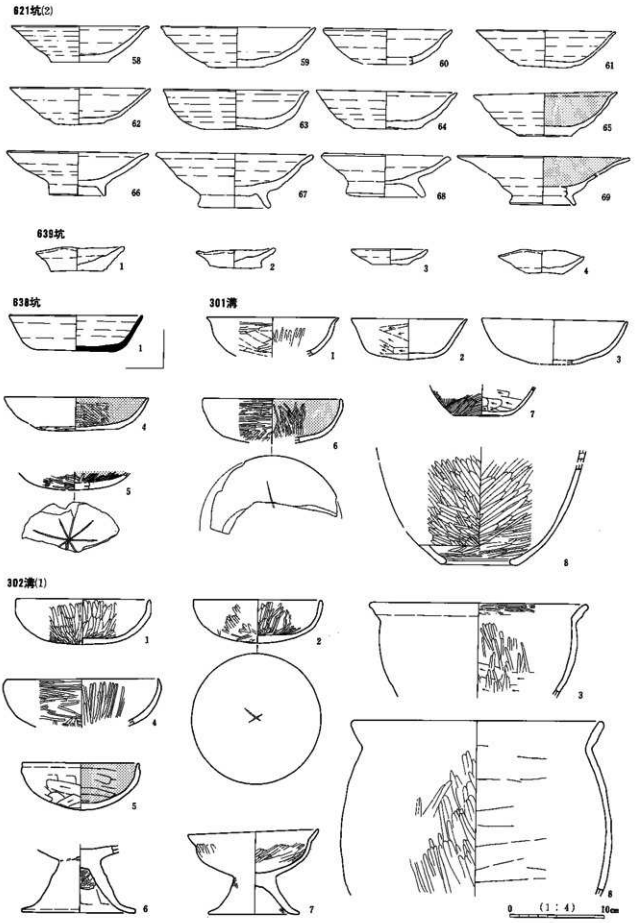


図269 土器（56）－古墳時代中期～平安時代－

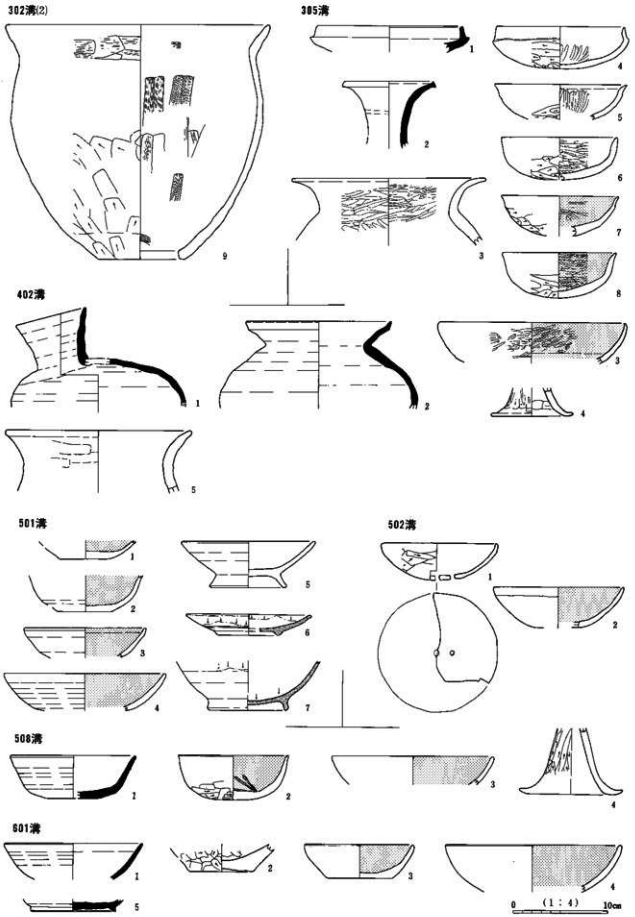


図270　土器（57）－古墳時代中期～平安時代－

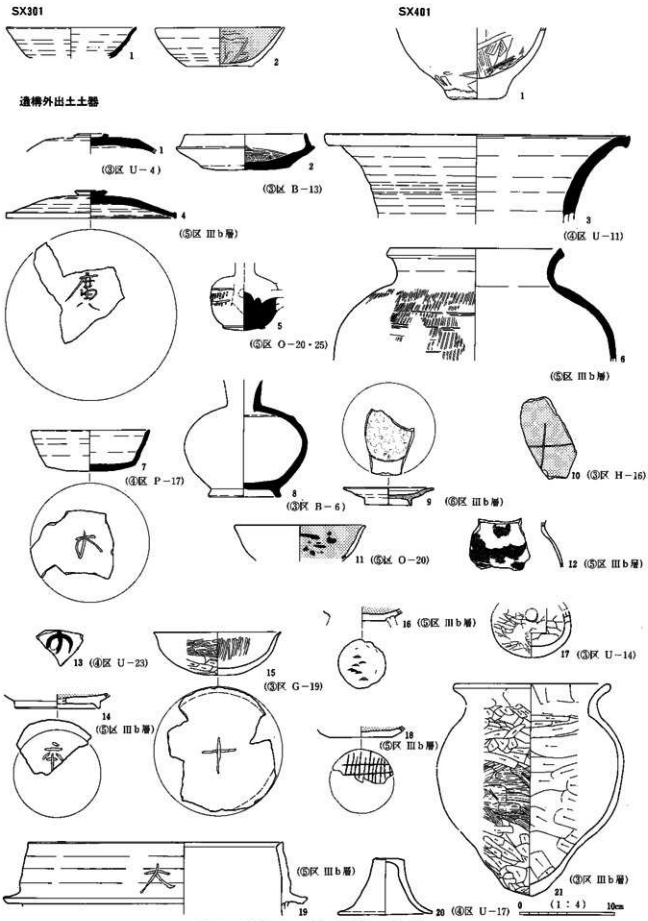


図271 土器（58）－古墳時代中期～平安時代－

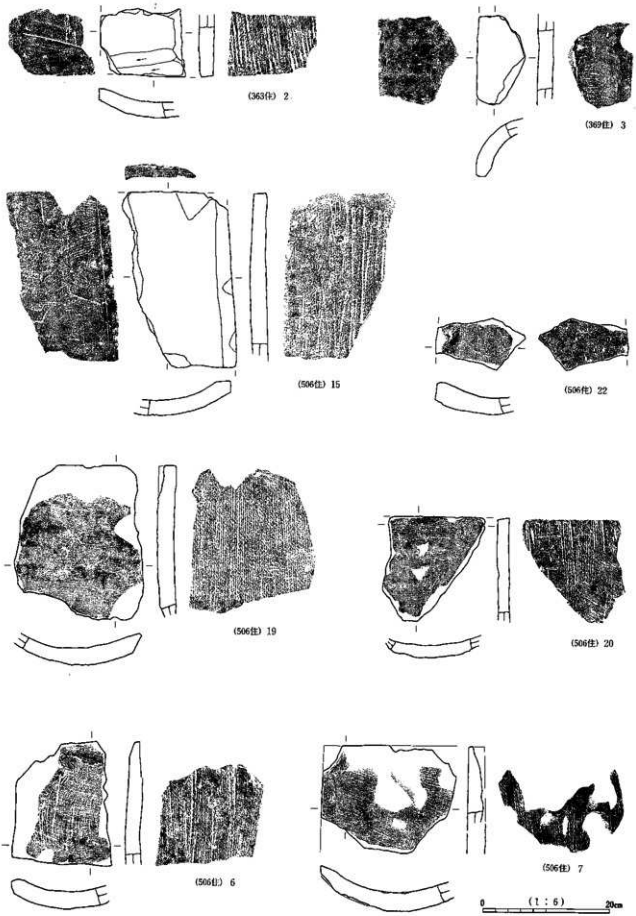

(363住) 2
(369住) 3
(506住) 15
(506住) 22
(506住) 19
(506住) 20
(506住) 6
(506住) 7
0
(1：6)
20cm

図272　瓦1

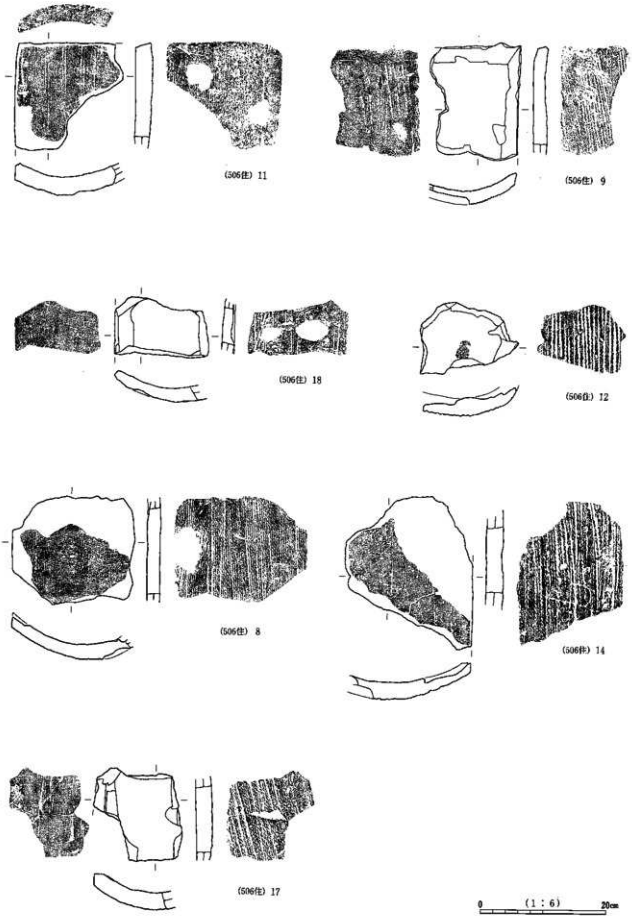
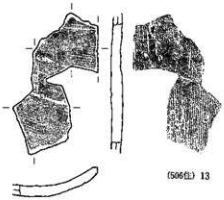
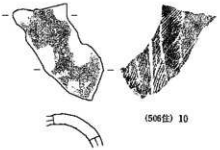


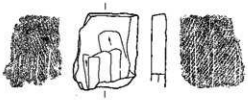
図273 瓦2



(506住) 13

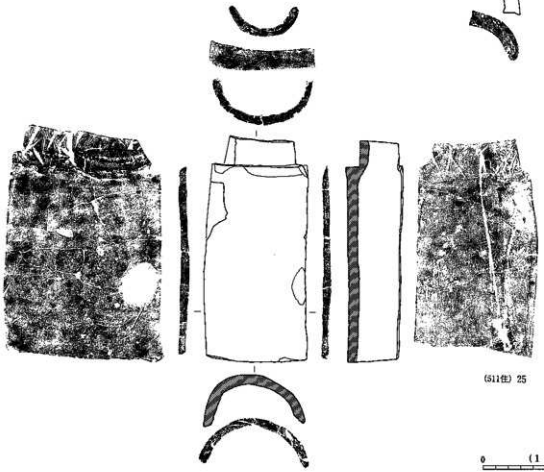


(506住) 10



(506住) 16

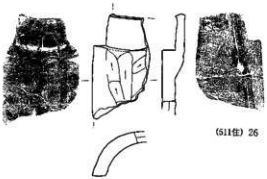
(506住) 21

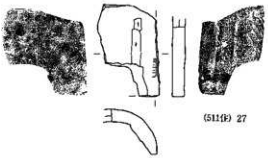


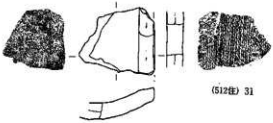
(511住) 25

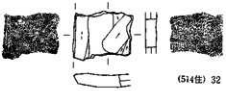
0　(1：6)　20cm

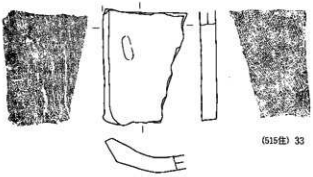
図274　瓦3

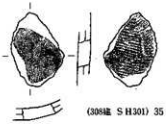

(511住) 26

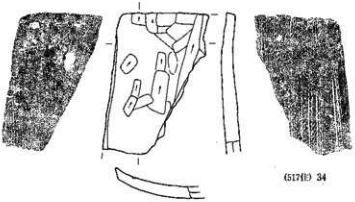

(511住) 27

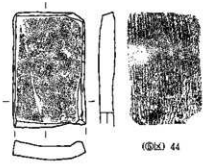

(512住) 31


(514住) 32


(515住) 33


(308遺 SH301) 35


(517住) 34


(⑥区) 44

0 (1:6) 20cm

図275 瓦4

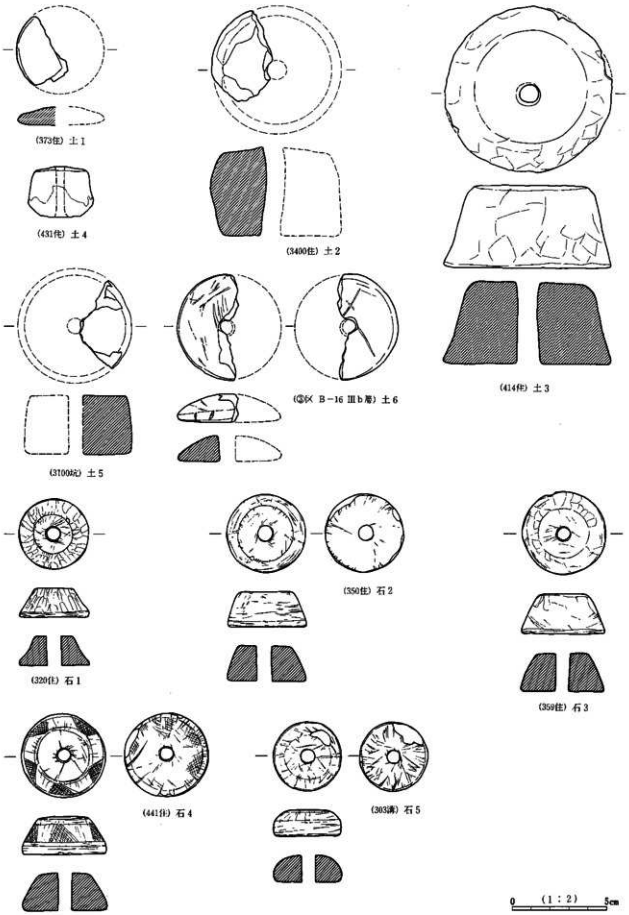


図276　土製品1、石器3（紡錘車）

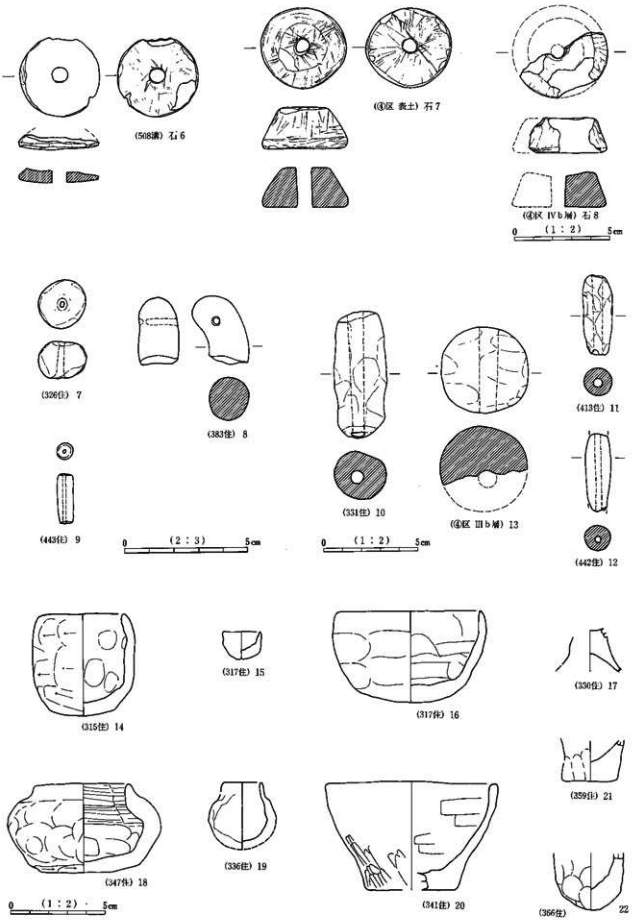


図277 石器4（紡錘車）、土製品2（玉、土錘、ミニチュア土器）

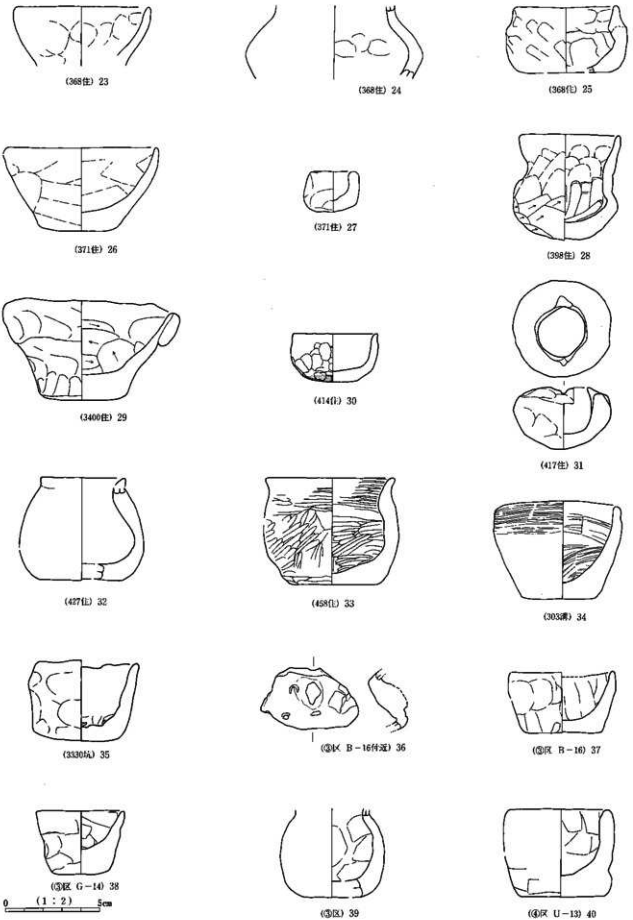


図278　土製品3（ミニチュア土器）

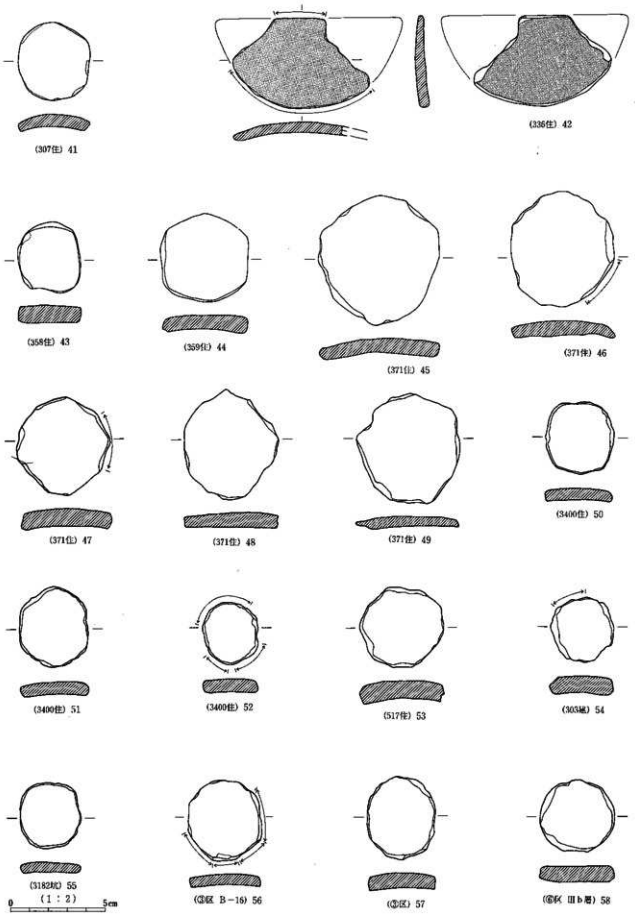
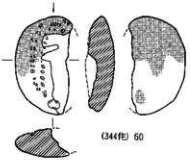
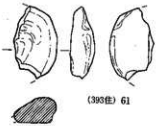


図279 土製品4（土器片板）

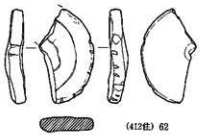
(317住) 59



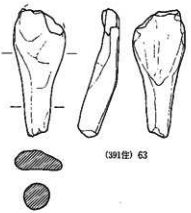
(344住) 60



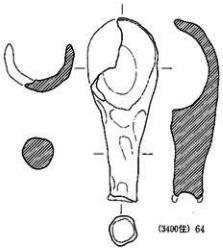
(393住) 61



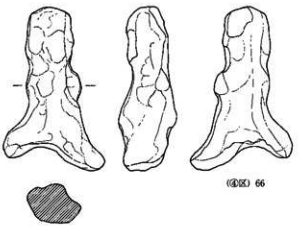
(412住) 62



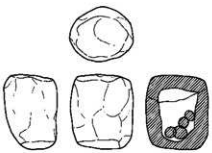
(391住) 63



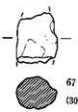
(340住) 64



(④区) 66



65
(③区 B～2)



67
(309住)

0　(1：2)　5cm

図280　土製品5

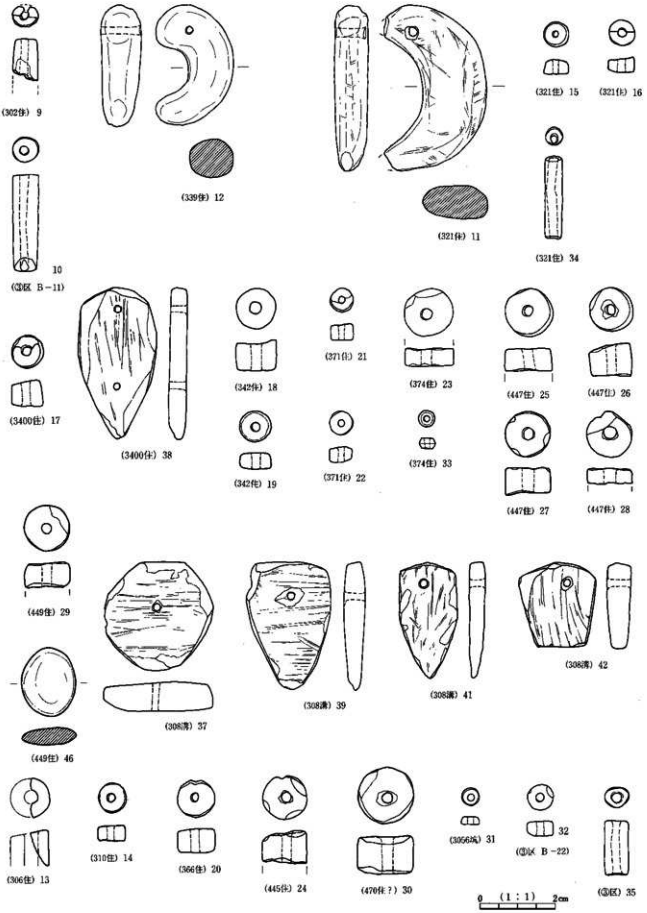
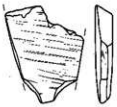
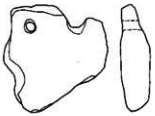
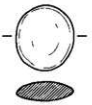


図281 石器5（玉、模造品）

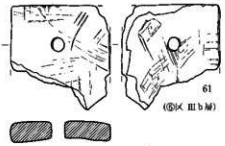
(320住) 36

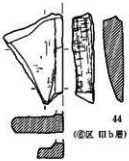

(302溝) 40


(Ⓖ区 P－12) 43

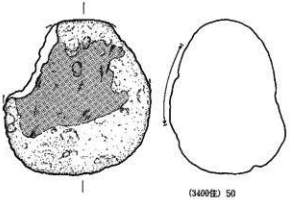

(448住) 45

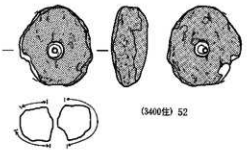
0 (1：1) 2cm

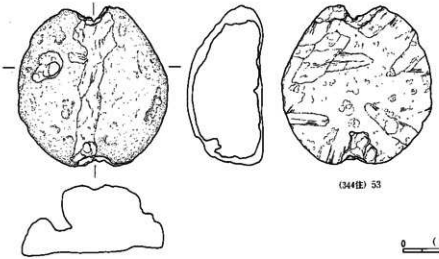

61
(Ⓖ区 Ⅲb層)


44
(Ⓖ区 Ⅲb層)

0 (1：2) 5cm


(3400住) 50


(3400住) 52


(344住) 53

0 (1：2) 5cm

図282　石器6（模造品、石鍋、砥、軽石製品）

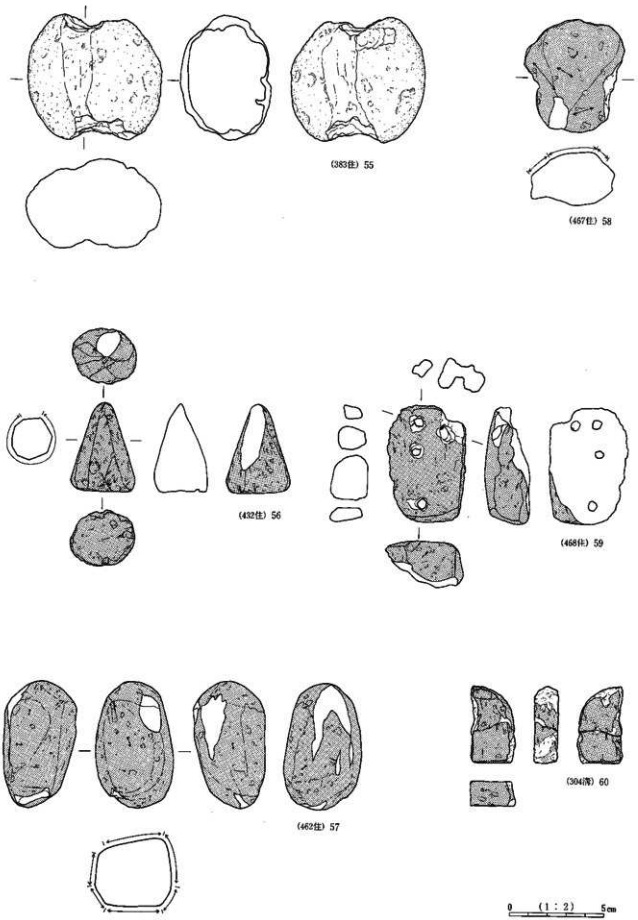


図283 石器7（軽石製品）

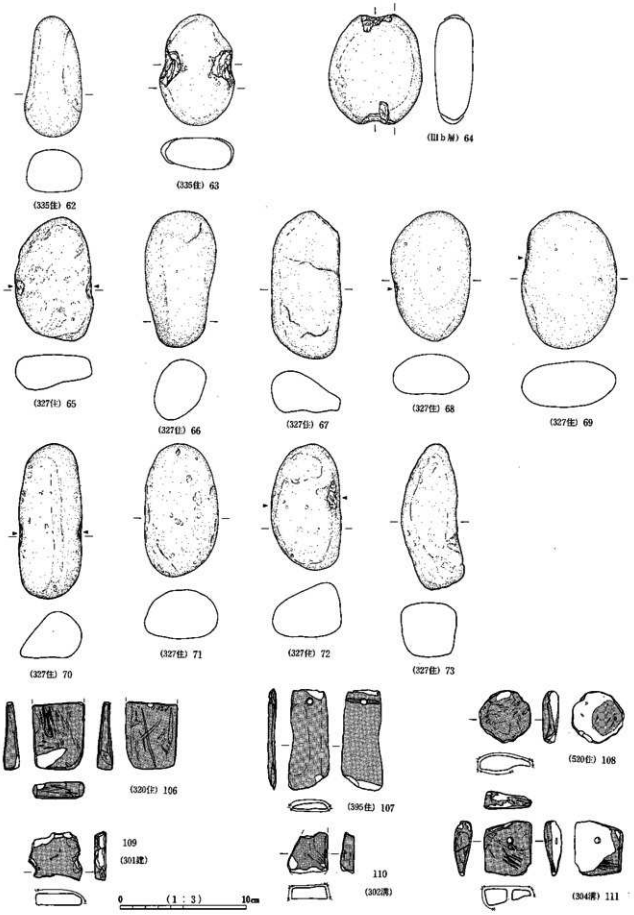


図284　石器8（石錘、砥石）

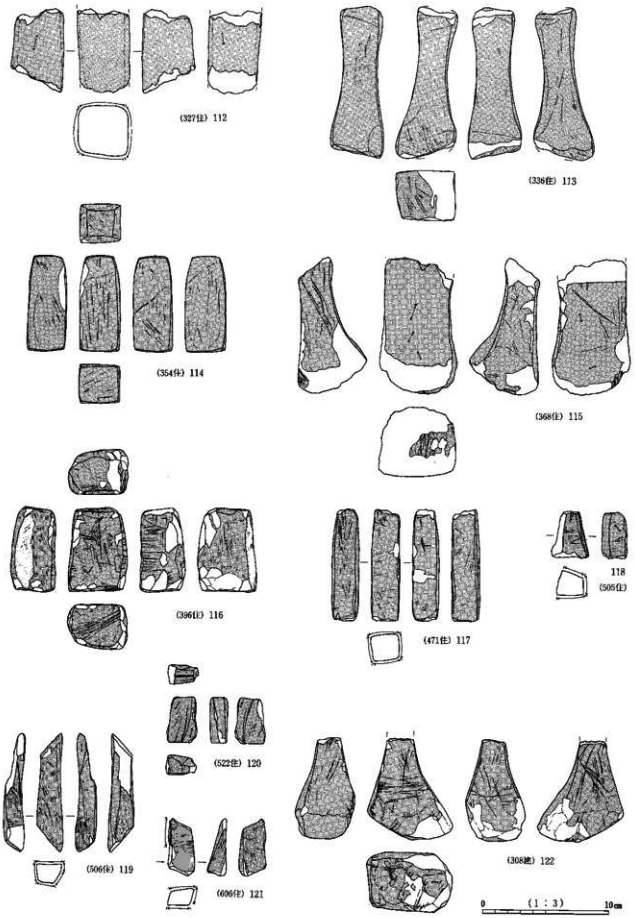

(327住) 112
(336住) 113
(354住) 114
(368住) 115
(396住) 116
(471住) 117
118
(505住)
(522住) 120
(506住) 119
(606住) 121
(308建) 122
0
(1 : 3)
10cm

図285 石器9（砥石）

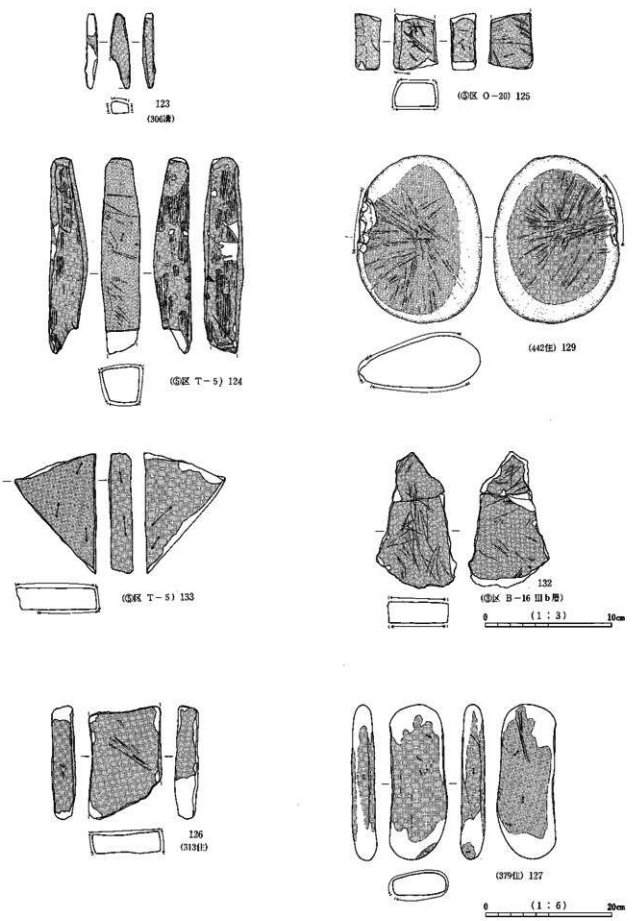
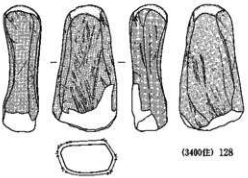
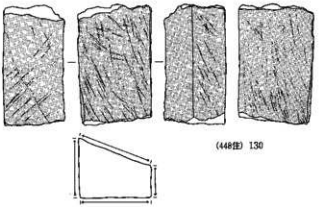

123
(306溝)
(Ⓢ区 O－20) 125
(Ⓢ区 T－5) 124
(442住) 129
(Ⓢ区 T－5) 133
132
(Ⓢ区 B－16 Ⅲb層)
0 (1：3) 10cm
126
(313住)
(379住) 127
0 (1：6) 20cm

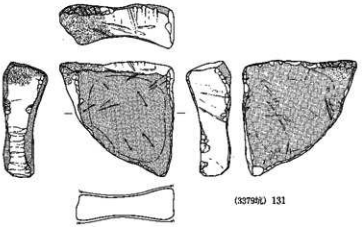
図286　石器10（砥石）



(3400住) 128

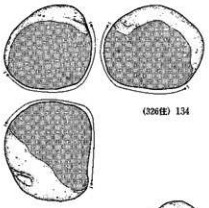


(448住) 130

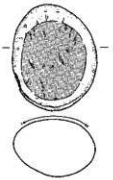


(337398L) 131

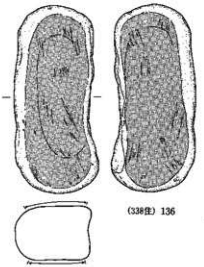
0 (1：6) 20cm



(326住) 134

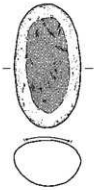


(326住) 135



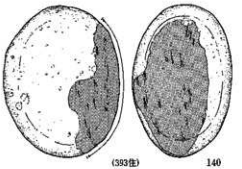
(338住) 136

(338住) 137



(338住) 138

(343住) 139



(393住) 140

0 (1：3) 10cm

図287 石器11（砥石、擦石）

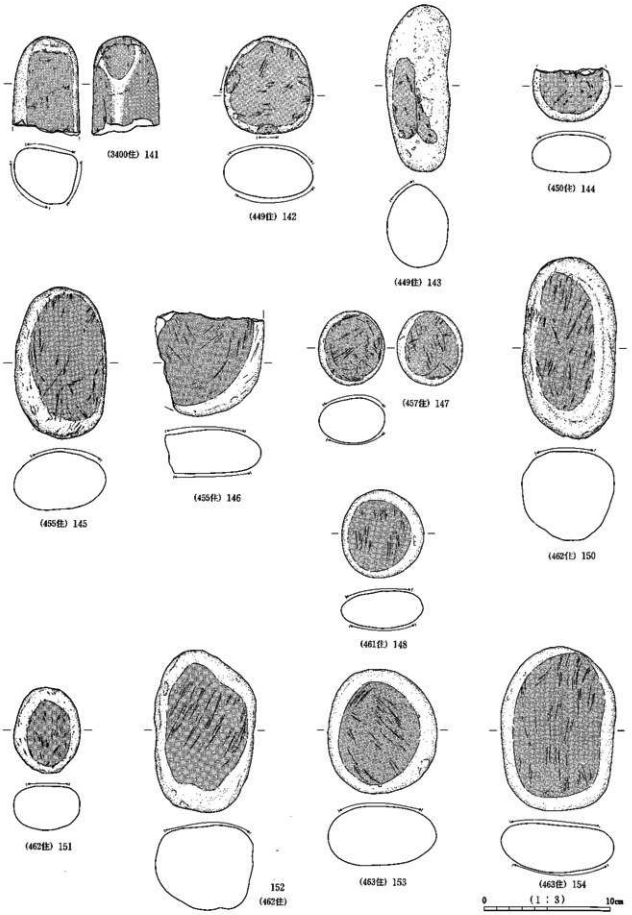

(3400住) 141
(449住) 142
(449住) 143
(450住) 144
(455住) 145
(455住) 146
(457住) 147
(461住) 148
(462住) 150
(462住) 151
152
(462住)
(463住) 153
(463住) 154
0
(1：3)
10cm

図288　石器12（擦石）

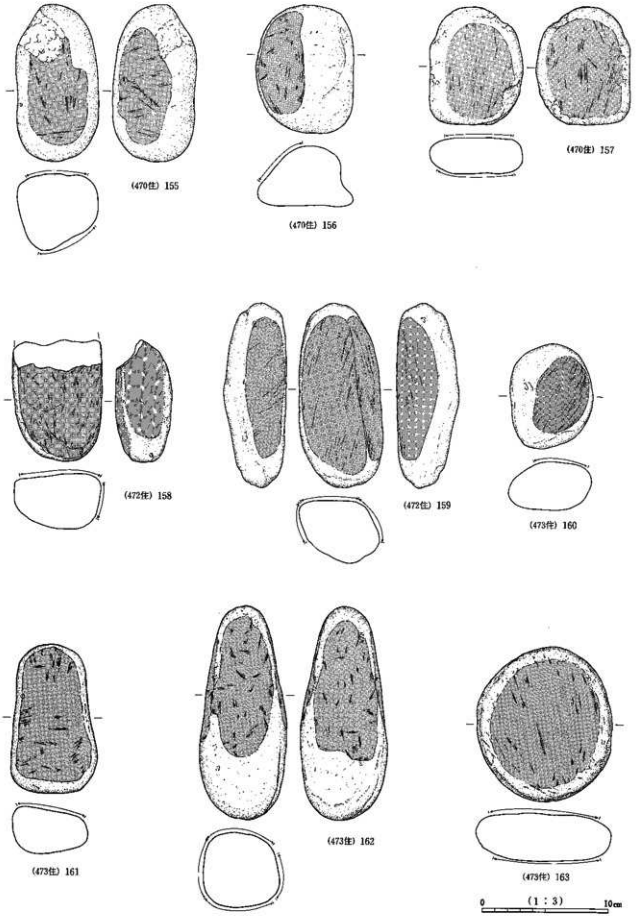
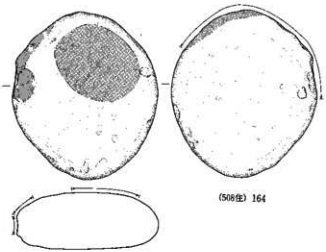
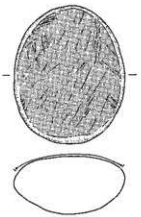

(470住) 155
(470住) 156
(470住) 157
(472住) 158
(472住) 159
(473住) 160
(473住) 161
(473住) 162
(473住) 163
0 (1：3) 10cm

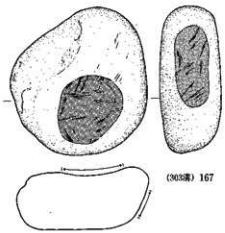
図289 石器13（擦石）



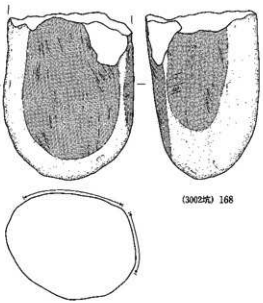
(508住) 164



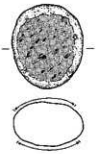
(522住) 166



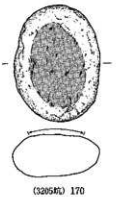
(303溝) 167



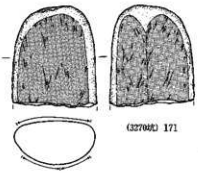
(3022坑) 168



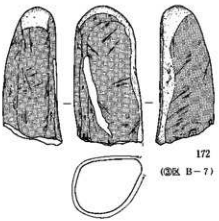
(3150坑) 169



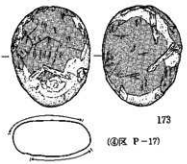
(3205坑) 170



(3270坑) 171



172
(③区 B－7)



173
(③区 P－17)

0　(1：3)　10cm

図290　石器14（擦石）

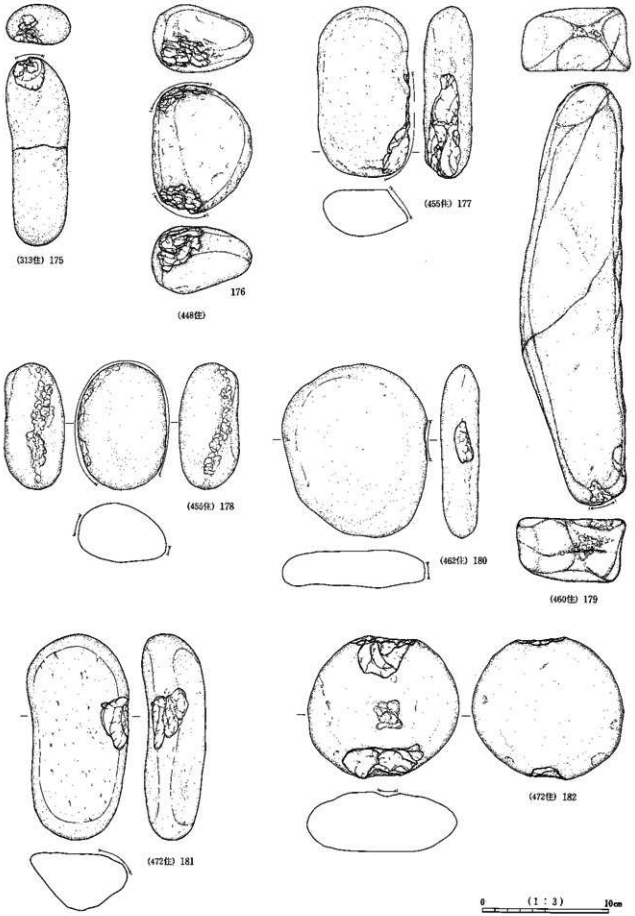
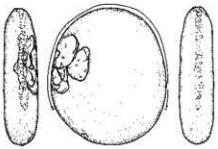
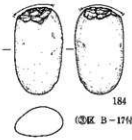

(313住) 175
176
(448住)
(455住) 177
(455住) 178
(462住) 180
(460住) 179
(472住) 181
(472住) 182
0 (1：3) 10cm

図291 石器15（敲石）

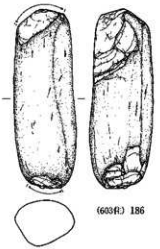


(③区 B－16) 183

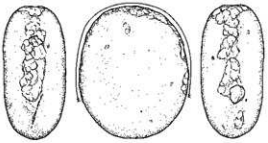


184

(③区 B－17付近)

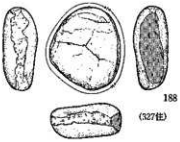


(603住) 186



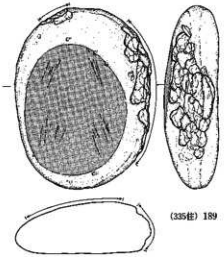
(④区 P－17) 185

(326住) 187

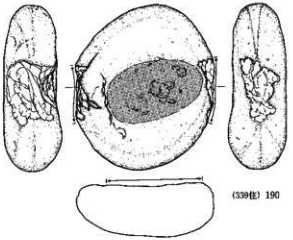


188

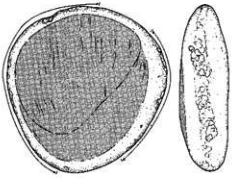
(327住)



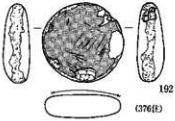
(335住) 189



(339住) 190



(354住) 191



192

(376住)

0　(1：3)　10cm

図292　石器16（敲石、擦・敲石）

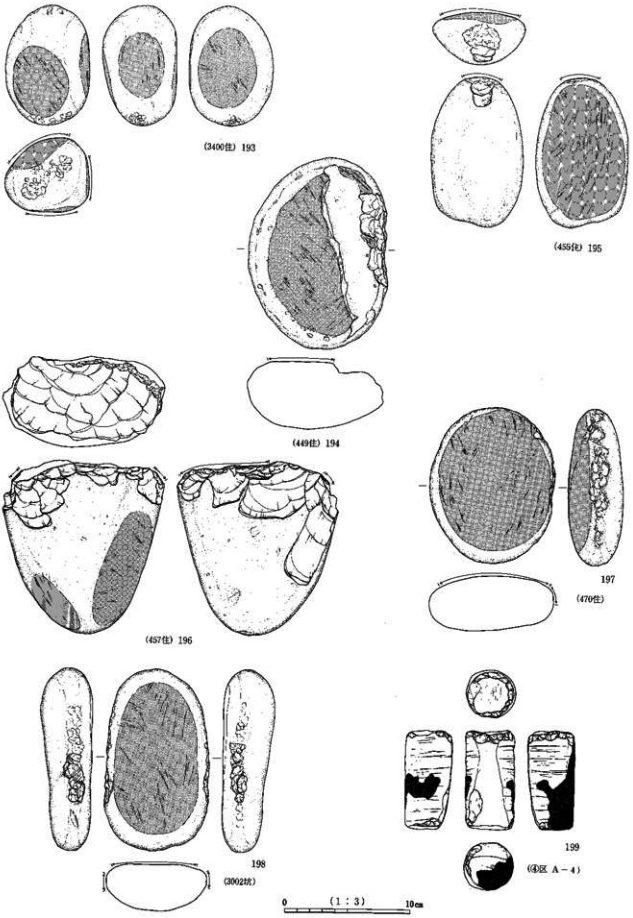


図293 石器17（擦・敲石）

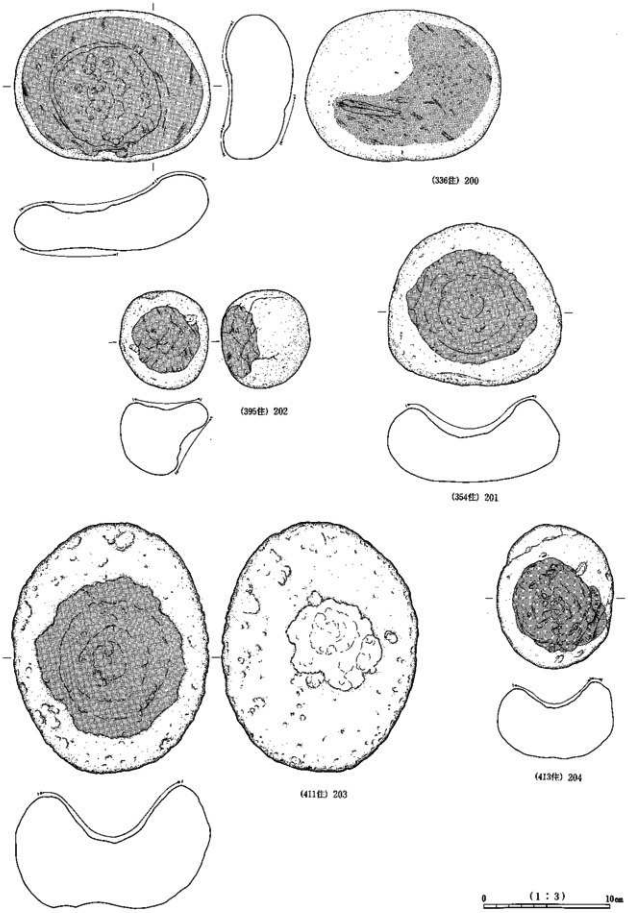
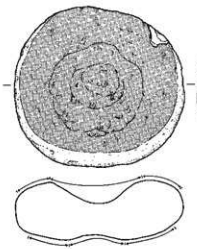
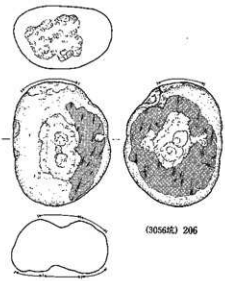


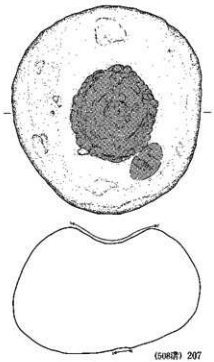
図294　石器18（凹石類）



(512住) 205

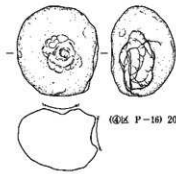


(3056坑) 206

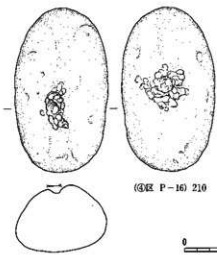


(508溝) 207

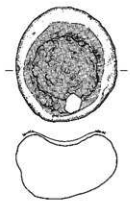
(③区 H－17) 208



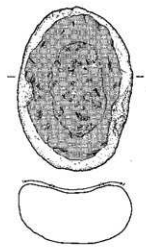
(④区 P－16) 209



(④区 P－16) 210



(④区 P－21) 211



(③区 O－20) 212

0 (1：3) 10cm

図295 石器19（凹石類）

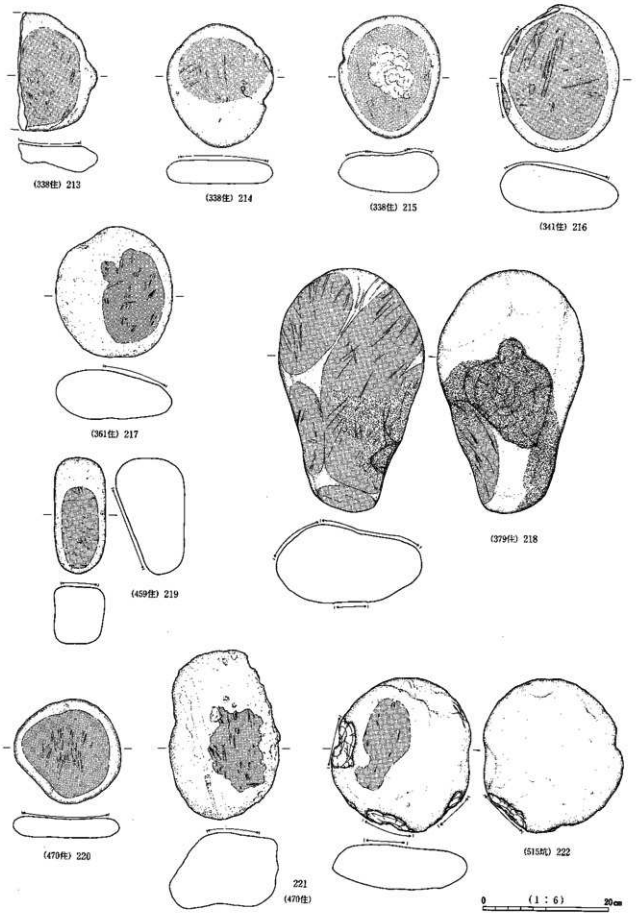

(338住) 213
(338住) 214
(338住) 215
(341住) 216
(361住) 217
(379住) 218
(459住) 219
(470住) 220
221
(470住)
(515住) 222
0
(1：6)
20cm

図296　石器20（台石）

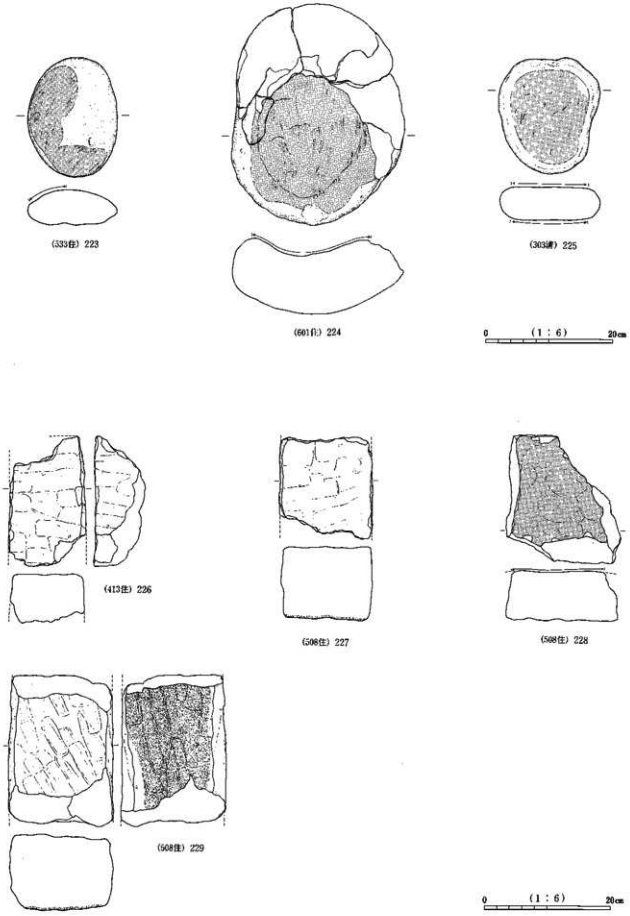


図297 石器21（台石、カマド材）

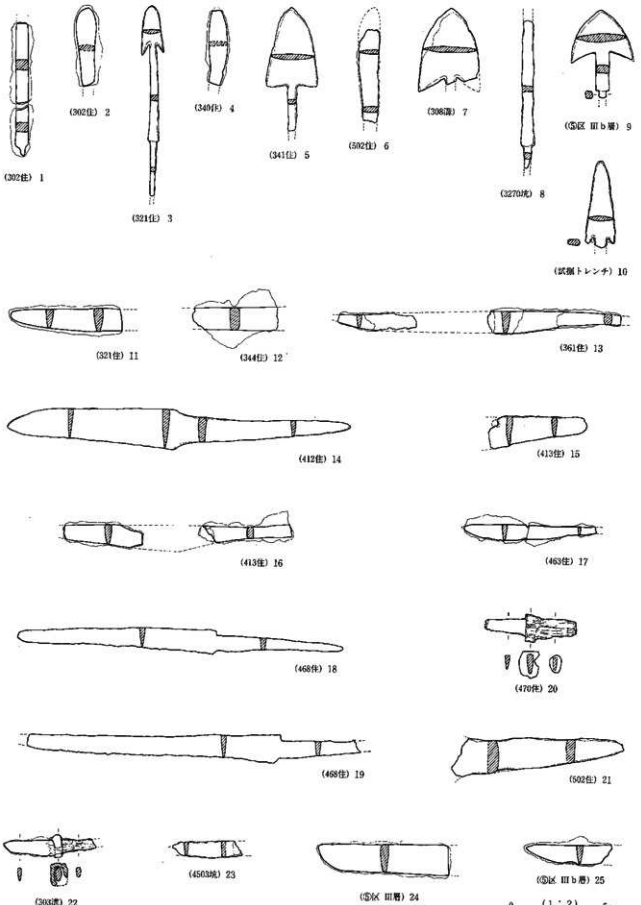

(302住) 1
(302住) 2
(321住) 3
(340住) 4
(341住) 5
(502住) 6
(306溝) 7
(3270尻) 8
(Ⓢ区 Ⅲb層) 9
(試掘トレンチ) 10
(321住) 11
(344住) 12
(361住) 13
(412住) 14
(413住) 15
(413住) 16
(463住) 17
(468住) 18
(470住) 20
(468住) 19
(502住) 21
(303溝) 22
(4503跡) 23
(Ⓢ区 Ⅲ層) 24
(Ⓢ区 Ⅲb層) 25
0 (1：2) 5cm

図298　金属製品1

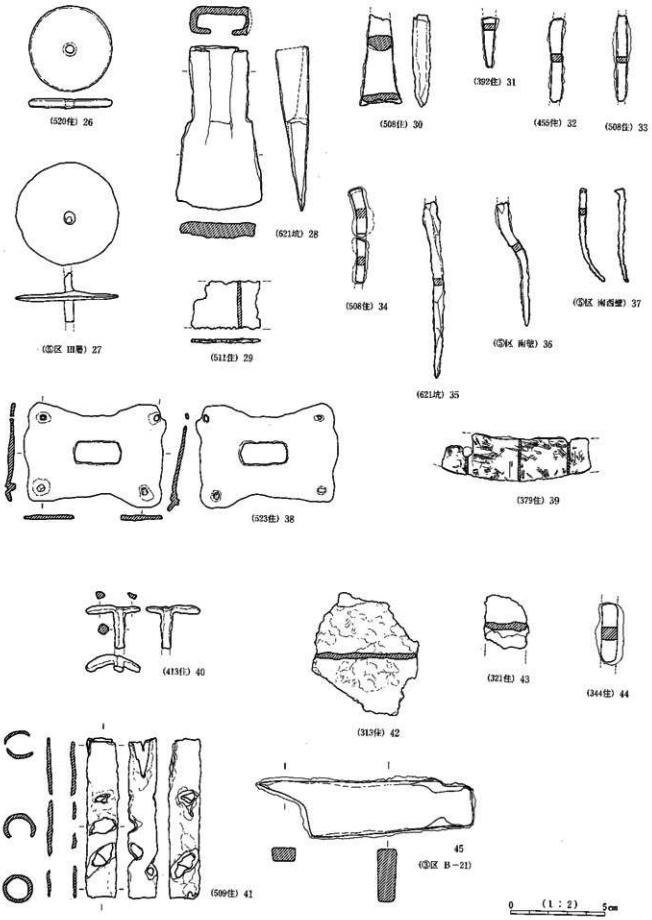

(520住) 26
(621坑) 28
(508住) 30
(392住) 31
(455住) 32
(508住) 33
(Ⓢ区 田巻) 27
(511住) 29
(508住) 34
(621坑) 35
(Ⓢ区 南壁) 36
(Ⓢ区 南西壁) 37
(523住) 38
(379住) 39
(413住) 40
(313住) 42
(321住) 43
(344住) 44
(509住) 41
45
(Ⓢ区 B－21)
0 (1：2) 5cm

図299 金属製品2

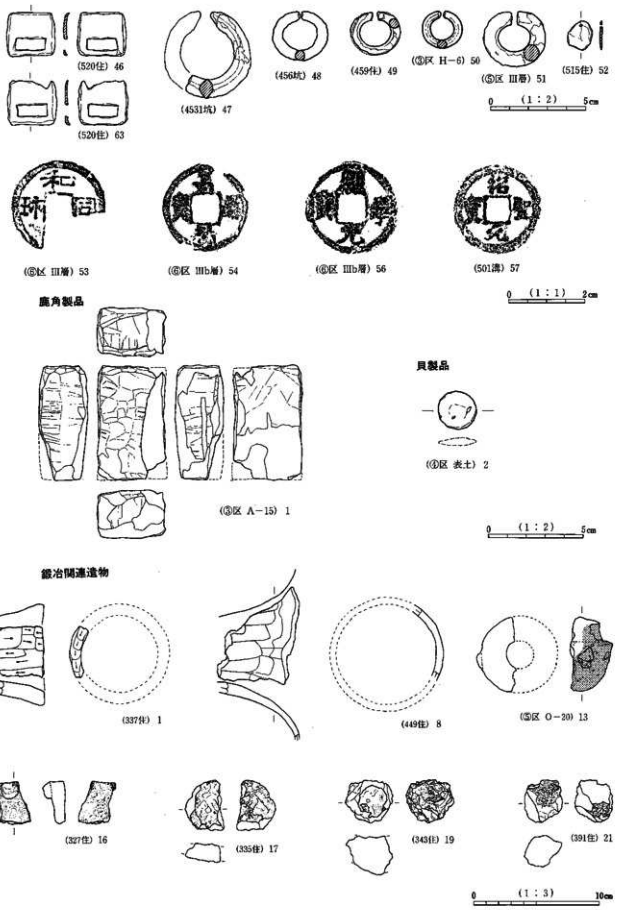


図300　金属製品3、鹿角、貝製品、鍛冶関連遺物1（羽口、鉄滓）

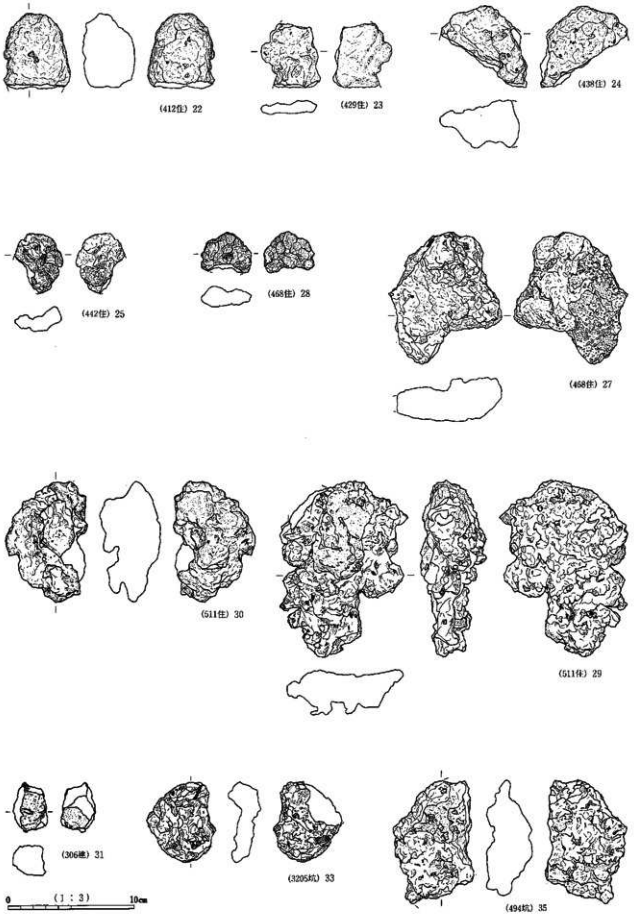


図301 鍛冶関連遺物2（鉄滓）

5　まとめ

本遺跡では住居跡を中心として、弥生時代から平安時代の遺構が、同一の調査面から濃密に重複して検出された。調査状況が不良な遺構も多く、各遺構の時期決定に苦慮したが、ここでは時期区分のできる遺構について、時代毎の分布を概観して、まとめとしたい。

縄文時代

今回の調査面直下に堆積するⅣ層土壌の植物化石分析では、遺跡の立地する段丘面はⅣ層形成時には離水して、ほとんど水の影響、すなわち千曲川や神川などの河川の流水の影響がない状況であったことが明らかになっている。

遺物包含層であるⅢb層中や新しい時代の遺構覆土から出土した縄文時代の遺物も、あまり摩滅や風化した状態ではないことから、縄文時代には安定した段丘面が形成されていて、ここを生活域として利用していたことが推測される。

とくに縄文時代中期後半から後期の土器片が多く出土したが、遺構の検出はない。しかし、同じ遺跡群の前田遺跡では、今回の調査面（段丘面）より一つ上位の段丘面において縄文時代中期から後期の住居跡が調査されている（第2章第2節参照）。両面の比高差は少ないことから、当段丘面上にも遺構が存在していた可能性があるだろう。

弥生時代

この遺跡で明らかに集落が展開するのは、弥生時代後期の箱清水式期である。

弥生時代後期には住居は③～⑤区内で、2、3軒程度の小さな3つのまとまりを持って分布している。そのうち③区では長軸8m以上ある大形住居（313住）と長軸4.5m程の小形住居（316・345住）の組み合わせがある。それらの住居はいずれもほぼ平面長方形で、長軸方向をほぼ北西－南東方向に取り、掘り込みが深く、床面高が同位であることなど、住居構築の共通性が考えられる。

またこの時期、調査地区南西隅には303溝が構築されている。この溝は断面台形で、南南東から北西方向に蛇行している。覆土の堆積状況から、少なくとも3回掘り直されていて、土壌の植物化石分析によると、若干の流水が認められるようである。両端部ともに地区外に出ているため、全体形は捉えられないが、濠のような滞水する構造は持っていなかったと思われる。

古墳時代

前期には304溝が構築される。今回は南西部分だけの調査であったが、平面形はコの字状を呈していて、全体形は方形の区画溝である可能性が極めて高い。覆土の堆積から少なくとも構築から埋没までに3回掘り直していることが分かっている。

また覆土中の植物化石分析では、この溝内には常に水域が存在していて、構築当初は僅かな流水もあったようであるが、大半の時期は滞水していて、その水質は汚濁した富栄養であったと考えられる。

このような所見をまとめれば、304溝は掘り直しを繰り返しながら、濠の役割を保っていた溝であると思われ、調査地区外北東にはこの溝に囲まれた施設が存在していたとする推測も困難ではないだろう。

中期は5世紀後半から本格的に集落が展開する。5世紀第3四半期頃には③区に住居が集中している。住居の平面形は方形または隅丸方形が主体で、主軸は北から北西を向くものが多く、住居の規模は6～7m程の大形（320・3400住）と5m程の中形（436・442・366住他）、4m程の小形（305・315・397住他）がある。カマドは全ての住居に確認できるわけではないが、河原礫を芯材とした非常に大形のカマドを持つ住居

(3400住) も存在している。

5世紀第4四半期から6世紀初頭の住居分布は、前段階よりやや南東にずれて、③区の最も南寄りまで広がる。住居の平面形は方形か隅丸方形が多く、カマド主軸は前段階と同じに北から北西を向いている。住居規模も同様の大形 (338・371住) と中形 (325・327住)、小形 (378・393住) に分かれるようである。小形住居はカマドを持たないことが多く、居住以外の役割も考えられる。

6世紀前葉から中葉には集落は③・④区に広がり、更に最も北限の⑥区に2軒の住居があることから、別の集落のまとまりが北側の地区外に存在する可能性がある。住居の平面形は方形で、カマド主軸は北から北北東の範囲に取ることが多くなっていて、住居規模もほとんどが4m前後の中形であることなど、前段階とやや異なる様相を示している。また住居の立地の間隔が広まり、集落全体の規模が拡大して来ているとも考えられる。

なお、この時期の集落範囲を区切るような位置にある402溝もこの時期に構築されていると思われる。この溝は覆土と底面高差によると、南南西から北北東の方向に流水していたと考えられる。

6世紀中葉から後葉には集落の中心は、再び③区南寄りに移るが、それ以外にも③区北から⑤区まで、非常に散漫ながら5軒程の住居が分布している。平面形は5m程の中形住居や6m以上ある大形住居では方形が主体で、4m以下の小形住居には方形と長方形がある。またカマド主軸はばらつきがあるものの、概ね北から北西を向いているようである。なお中・大形住居は南寄りに、小形住居が北寄りに分布する傾向が見られる。

6世紀後葉から末葉には非常に住居数が減少し、③区に4軒認められるだけである。住居の平面形は方形と長方形があり、規模は4m以下の小形 (359住) と5～6mの中形 (306・344住) に分かれる。カマド主軸はいずれも北から北西向きで、カマドの位置は北東壁のやや右寄りである。

7世紀初頭から前葉になると、また住居数は増加して、集落の分布も③・④区まで広がる。住居規模には6.5m程の大形 (441住) と3.5～4.5mの中形 (326・368・374・407住など) の他に、2.6m程の極めて小形 (396住) のものがあり、いずれもカマドを持っている。大形住居の平面形は方形で、カマド主軸はほぼ北を向いている。中形住居には方形と長方形があり、カマド主軸は北西から北東まで、一定していない。小形住居は長方形でカマド主軸は北西を向く。なおカマド位置は壁の中央が主体であるが、やや右寄りに設けられている住居もある。大小の住居の組み合わせなどといった特徴ははっきりしない。

7世紀中葉から8世紀初頭には、住居分布が④・⑤区に限定され、更に小さく2カ所に分かれると思われる。住居規模には5m前後の中大形と4m程の中形、3m程の小形があり、カマド主軸は主に北から北東を向くが、東方を向く住居もある。カマド位置は壁の中央右寄りが多い。

④区の分布と⑤区の分布の2つの小範囲内では、1軒の中大形住居 (445住と509住) の周囲に小～中形住居 (421・424・452住などと403・503・536・537住など) が分布する傾向が見られる。

また古墳時代後期と思われる掘立柱建物跡としては、③区に1カ所、④区に2カ所、⑤区に1カ所集中する部分がある。その主軸方向は、④区の北側の集中部分以外、長軸を北西－南東方向に近い方向に持っていて、④区の北側部分は比較的南北方向を意識しているようである。これらの建物跡の時期設定をする根拠は少ないが、この分布と軸方向から考えると、③～④区の3カ所は6世紀前葉から中葉の住居分布によく符合していて、住居軸線も③区側ではやや南傾していて、④区では北方を意識していることから、共通点が多い。また⑤区の集中地区には7世紀中葉から後半に住居の分布があり、関連性が想定される。

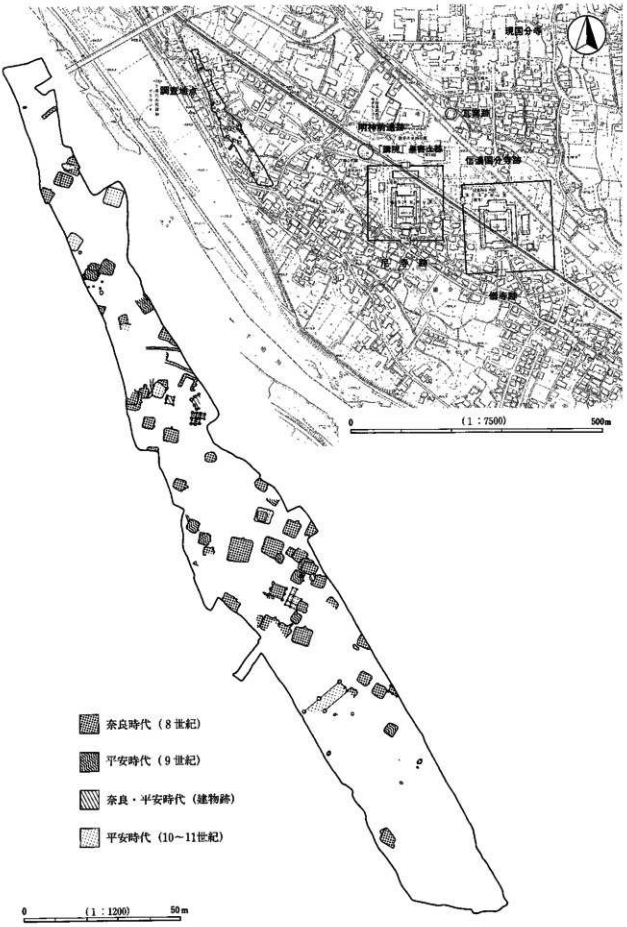


図302　信濃国分寺跡との位置と遺構分布（奈良・平安時代）

奈良時代

奈良時代には1つ上位の段丘面に信濃国分寺が建立される（図302）。その建立時期ははっきりと限定されないが、他国の国分寺とほぼ同じくすれば、伽藍地の完成は8世紀後葉以後と考えられる。

8世紀前葉の住居の分布は少ない。7mを越える大形住居（448住）と4m程の中形住居（427・510住ほか）が認められるだけで、それらの間隔は比較的広く散漫である。カマド主軸はほぼ北を向いていて、位置は壁の中央に設けられている。

8世紀前葉から中葉の住居も4軒と少ない。いずれも3m程度で隅丸長方形の小形住居であり、カマド主軸は一定していない。住居相互の間隔も広く散漫で、集落としての一つのまとまりを構成しているとはいい難い状況である。

8世紀中葉から後葉には再び住居数が増加する。分布は③区北から④区南の1カ所、⑤区の1カ所、⑥区の1カ所の3つに分かれている。住居規模には5m程の中形と4m以下の小形があり、小形住居が主体である。平面形は中形住居では正方形が多く、小形住居には正方形から長方形がある。カマド主軸は北から北東向きが大半であり、一部に東向きの住居も存在する。③区のまとまりには小形住居が多く、⑤区と⑥区では中形住居が多いようである。

平安時代

平安時代前半、信濃国分寺には僧寺と尼寺が建立されて、周囲にはその運営に関わる修理院などを設けた寺院地、さらにそれらを支える寺地の存在が想定されている。

8世紀末から9世紀初頭には、急激に住居が減少し、2軒を認めるだけである。それらも③区と⑥区に離れていて、一つの集落を構成するとは考えにくい。どちらの住居も規模4m以下のやや小形のもので、平面方形を呈している。

9世紀初頭から前葉の住居も少なく、全体で6軒を数えるに過ぎない。その分布は⑤区に3軒がややまとまっていて、残る1軒は④区南側に離れて立地している。いずれも4m以下の小形住居で、住居軸を東西南北に取ることで共通する。カマド主軸は北向き2軒、東向き1軒、西向き1軒と一定ではない。

9世紀中葉も僅かで、3軒の住居が認められる。それぞれの住居は③～④区に離れて立地するが、平面方形で規模は2.5～3.5m程の小形であり、カマドも南東壁右に設けられていることなど、共通点が多い。

9世紀中葉から後葉には④区と⑤区の2カ所に住居の分布が分かれている。検出状態が悪く、全体形が摑めない住居もあるが、カマド主軸は大半が東南東に共通していて、カマドが正反対の西北西を向く住居もあるが（505住）、これも住居主軸の方向としてみれば共通しているといえるだろう。平面形が方形で、規模4m以下の小形に統一されるつつあると思われる。またこの時期の506住のカマドには国分寺瓦が芯材として利用されている。他に④区には井戸（4503坑）が築かれる。

10世紀前半の住居は、⑤区に2軒認められる。住居間の距離は離れていて、いずれも規模は4m程の中形で、平面形はほぼ方形を呈している。

10世紀中葉から後葉の住居は、④区に1軒だけある。カマドは東壁の北東隅に設けられていて、主軸はほぼ東向きである。

11世紀前半の住居は⑤区に1軒（511住）認められる。それは4.5m程の中規模で不整長方形を呈し、カマドは東壁の北隅に設けられ、主軸は東南東を向いている。このカマドには河原礫と共に国分寺瓦が芯材に用いられている。

また、住居の覆土には、河原礫を多量に含むⅢa層が入り込んでいることから、廃絶後、埋没過程で南東方向から北西方向に流下した土石流（Ⅲa層）の流入があったと思われる。

11世紀後半には住居１軒（501住）と土器埋納土坑（621・639坑）が⑤・⑥区に確認できる。そのうち住居は検出状況が悪く、立ち上がりすら認められないが、Ⅲａ層と同一の構成物を覆土に持つ501溝に切られている。

このような11世紀代の住居の状況をみると、501溝を中心に広く遺跡上部を流下して埋積したと考えられるⅢａ層は、11世紀前半の住居覆土を構成し、11世紀後半の住居を切っていることから、その埋積時期を11世紀後半頃に求められるだろう。ただ、その時期に11世紀後半の住居が機能していたかどうかは不明であり、直接の「災害」として住居廃絶の要因となったかははっきりしていない。しかし、この時期以降、調査地区では中世に関わるような遺物や遺構は全く見つかっていない。

なお礎石建物跡と考えられる308建は、検出状況と掘り方覆土に国分寺瓦片が出土したことから、平安時代後半と推定される。また小ピットで構成される406建も、覆土にⅢａ層起因の礫が混入していることから、11世紀後半に構築されたと考えられる。

以上、主に住居跡の分布を中心にその変遷をとらえたが、本調査地点の傾向としては、遺構の構築されるピークは、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代中期から後期の５世紀後半から６世紀代、７世紀後半から８世紀初頭、奈良時代の８世紀後葉の５つにあり、とくに５世紀後半か６世紀代の遺構密度は非常に高く、集落分布も短期で変容していたようである。

また今回は信濃国分寺跡とは段丘で１つ低位にあるものの、尼寺伽藍地内の金堂から直線距離で300ｍ程しか離れていない地点の調査であるにも関わらず、奈良時代から平安時代の遺構をみると、明確に国分寺の造営と関連するような施設は検出されなかった。

ただ、国分寺の建立や運営される時期と集落の変容を合わせてみると、８世紀前半には住居が散漫であったものが、国分寺が建立される段階とされる８世紀後半には住居が極端に増加して、新たな集落が構成されていたことが明らかになっている。そして国分寺が完成し、管理運営され始める９世紀代にはその数が激減してしまうことがわかっている。

信濃国分寺跡では伽藍地周辺の調査があまり行われていないため、推測の域は脱しないが、このような集落の変容ぶりは、とくに信濃国分寺の建立という大工事に携わる人々の動向に関わるものとはいえないだろうか。そしてまた９世紀以降の遺構の希薄さは、当地が国分寺の運営施設のある「付属院地」にはあたらず、「伽藍地」と「付属院地」の周辺で栄えた集落「寺地」とする範囲からも外れているか、「寺地」であったとしても、その中心域から離れているものと考えたい。

また今回カマドの芯材に国分寺瓦を利用した住居が見つかっているが、そのうち９世紀後葉の住居では比較的破片となった平瓦を用いているに対して、11世紀前半の住居内にはほぼ完形の丸瓦が持ち込まれていることは、間接的ながら伽藍地内の施設の盛衰を示唆しているかもしれない。

引用・参考文献

青木一男　1993　「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70

赤塚次郎　1990　「廻間遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第10集

飯島哲也　1993　「本村東沖遺跡」『長野市の埋蔵文化財』第50集　長野市埋蔵文化財センター

石野博信他編　1990　『古墳時代の研究』2　集落と豪族居館　雄山閣出版

石野博信他編　1991　『古墳時代の研究』8　古墳Ⅱ副葬品　雄山閣出版

上田小県誌刊行会　1995　『上田小県誌』

宇賀神誠司　1989　「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2

白居直之　1993　「弥生時代終末から古墳時代前期の様相」『長野県考古学会誌』69・70

尾見智志　1995　「上小地方／弥生時代後期の土器と集落」『長野県考古学会誌』76

神奈川県立埋蔵文化財センター　1994　「神奈川県における墳墓出土の鉄鏃について」『神奈川の考古学の諸問題』

関東古瓦研究会　1994　『関東の国分寺』

倉澤正幸　1994　「信濃国分寺跡出土瓦の再検討」『中部高地の考古学Ⅳ』長野県考古学会

小平和夫　1990　「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4』㈶長野県埋蔵文化財センター

小林真寿　1987　「上小地方における様相」『長野県考古学会誌』55・56

信濃国分寺資料館　1988　『解説　信濃国分寺跡』

信濃国分寺資料館　1995　『東国の国分寺』

田口昭二　1982　「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』211

田中広明　1990　「律令時代の身分表象（1）」『土曜考古』第15号　土曜考古研究会

田中広明　1995　「官衙及び関連遺跡と瓦帯」『シンポジウム3　地方官衙とその周辺』日本考古学協会茨城大会

田辺昭三　1966　「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ

田辺昭三　1980　『須恵器大成』角川書店

堤　隆　1987　「佐久地方における様相」『長野県考古学会誌』55・56

鶴田典昭他　1997　「池田細窯跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』㈶長野県埋蔵文化財センター

寺島俊郎　1991　「栗毛板遺跡群C地区」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』㈶長野県埋蔵文化財センター

直井雅尚　1996　「信濃における奈良・平安時代の土師器甕について」『鋼と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム

中沢悟・春山秀幸・関口功一　1988　「古代布生産と在地社会」『群馬の考古学』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

長野県史刊行会　1988　「古代の土器」『長野県史　考古資料編　遺構・遺物』

㈶長野県埋蔵文化財センター　1993　「国分寺周辺遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報10』

㈶長野県埋蔵文化財センター　1994　「国分寺周辺遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報11』

㈶長野県埋蔵文化財センター　1995　「国分寺周辺遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報12』

㈶長野県埋蔵文化財センター　1997　「鐘ノ井遺跡群」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16』

花岡弘・西山克己　1995　「信州の6世紀・7世紀の土器様相」『東国土器研究』第4号　東国土器研究会

原明芳　1989　「長野県の9世紀後半から12世紀の食膳具の様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2

原明芳　1989　「長野県における「黒色土器」の出現とその背景」『東国土器研究』第2号　東国土器研究会

兵庫埋蔵銭調査会　1996　『日本出土銭総覧』

深沢敦仁他　1994　「行方春名社遺跡」『北陸新幹線地域埋蔵文化財発掘調査報告書1』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

森郁夫　1985　『瓦』考古学ライブラリー　43　ニュー・サイエンス社

森郁夫　1991　『日本の古代瓦』雄山閣出版

表７　住居跡一覧（弥生～古墳前期）

図版No.	遺構No.	位置	形態規模 平面形	形態規模 主軸方向	形態規模 規模 縦／横m	形態規模 床面積㎡	形態規模 深さm	形態規模 地表面からの深さm	炉 位置	炉 形状	炉 構築材	ピット	柱 数（柱穴）	柱 柱間m	周溝	張り出し	その他
20	313	IVG－8	隅丸方	N29°W	8.42/5.08	41.98	0.48	461.30	北北柱穴間中央	長方	河原礫3	18	4	2.04～5.52	人	－	入口施設に関わるピット
21	316	IVG－3	長方？	N29°W	－/3.20	－	0.68	461.74	－	－	－	5	3	2.32	－	－	
21	339	IVG－20	隅丸？	N63°W	(5.50)/(4.72)	－	0.16	461.79	－	－	－	3	－	－	自	－	
22	340	IVG－5	隅長	N 0°	3.46/(2.84)	(8.83)	0.46	461.30	－	－	－	1	1	－	－	－	
22	345	IVB－23	長方	N32°W	4.50/3.36	14.77	0.45	461.30	北北柱穴間中央	長方	－	4	4	1.68～2.98	人？		入口施設に関わる陥ち込み
	377	IVG－10	隅長方？	N38°E	(5.10)/(3.70)	--	0.14	461.50	－	－	－	4	2	1.79	－	－	
23	457	IIU 16	長方	N49°W	3.36/2.30	(7.95)	0.20	461.00	－	－	－	－	－	－	－	－	
	467	IIU－17	－	－	－	－	0.06	461.04	－	－	－	－	－	－		－	
138	527	IIO－14	－	－	－	－	0.12	461.10	－	－	－	－	－	－	－	－	
23	529	IIO－13	－	－	－	－	0.18	460.09	－	－	－	－	－	－	－	－	攪乱 範区外
24	530	IIO－15	－	－	－	－	0.15	460.96	－	－	－	－	－	・	－	－	
24	533	IIO－13		－	－	－	0.20	459.82	－	－	－	－	－	・	－	－	

表８　住居跡一覧（古墳中期～平安）

図版No.	遺構No.	位置	形態規模 平面形	形態規模 主軸方向	形態規模 規模 縦／横m	形態規模 床面積㎡	形態規模 深さm	形態規模 床面高m	カマド 位置	カマド 形状	カマド 構築材	カマド 火床（付設／対設）	カマド 支脚	カマド 煙道部 方向	カマド 煙道部 長さm	カマド 煙道部 傾き	カマド 煙道部 開口部幅m	ピット	柱 数（柱穴）	柱 柱間m	周溝	張り出し	その他
31	301	IVH－21	隅長	(N42°W)	5.76/5.18	28.28	0.12	461.72	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	4（2）	2.29～3.16	自		有
32	302	IVH－21	方	(N47°E)	4.76/4.82	(22.29)	0.17	461.70	北東壁中央	A	－	楕円	－	－	－	－	－	3	3	1.80～2.60	自		－
	303	IVH－17	方	(N37°W)	(5.04)/4.79	(23.63)	0.06	461.79	北壁やや右	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－		－
	304	IVH－11	長方	(N38°E)	(4.20)/3.30	(12.39)	0.04	461.83	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－		－
33	305	IVH－11	方	(N46°E)	(4.12)/(1.80)	(14.89)	0.04	461.78	－	－	－	－		－	－	－	－	1	－	－	－		攪乱
34	306	IVG－10	方	N28°E	5.30/5.14	25.77	0.28	461.55	北東壁中央	A	河原礫	中央・方	－	消角	0.62	3°	0.16	19	4（2）	2.92～3.16	自	有	入口部施設
	307	IVG－15	方？	－	－/5.52	－	0.10	461.79		－	－	－	－	－	－	－	－	2	2	3.40	－	－	
	308	IVG－15	隅方？	(N18°E)	5.18/5.30	(26.41)	0.02	461.80	北壁中央	－	－	中央・円	－	－	－	－	－	9	8	2.80～3.30 1.90～2.40	－	－	
35	309	IVG－13	隅方？	(N 0°)	(6.90)/7.35	－	0.11	461.60	北壁やや右	－	河原礫	－	－	－	－	－	－	6	3（1）	2.40～4.20	－	－	地区外 攪乱
	310	IVG－14	－	(N17°W)		－	0.09	461.72	－	－	－		－	－	－	－	－	4	－	－		－	攪乱
	311	IVG－18	D-BSI	(N22°W)	－	－	0.16	461.62	－	－	－		－	－	－		－	4	2	1.20	自	－	地区外 攪乱

図版No.	遺構No.	位置	形態規模 平面形	主軸方向	規模 縦/横m	東西幅m	深さm	床面高m	カマド 位置	形式	構築材	支脚 (位置/形状)	支脚	煙道部 方向	煙道部 長さm	煙道部 幅	煙道部 煙出口m	ピット	柱穴 数(柱痕)	柱穴 間m	遺物	撹乱	その他
36	312	IVG-7	隅方	(N40°E)	-/(5.88)	—	0.13	461.67	北東壁やや右	A	河原礫	中央	残	やや左傾	1.78	11°	—	3	2	4.40	人	有	撹乱
	314	欠 番																					
	315	IVG-3	方	(N23°W)	4.06/(4.20)	(17.25)	0.16	461.65	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	1(1)	—	人	—	撹乱
37	317	IVG-4	方	(N18°E)	(5.64)/(5.68)	(38.76)	0.14	461.74	北壁中央	A	河原礫	中央・方	—	—	—	—	—	6	4(1)	3.32~3.48	口	—	
	318	欠 番																					
38	319	IVG-4	方	(N40°W)	—	—	0.04	461.65	—	—	—		—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	周溝
39	320	IVG-4	方	(N43°W)	6.06/6.05	(35.78)	0.12	461.58	—	—	—	—	—	—	—	—	—	14	4(2)	2.68~2.80	口	有	撹乱
40	321	IVG-9	長方	(N35°E)	7.32/6.62	(48.52)	0.20	461.62	北東壁やや右	A	—	焚き口右円	—	—	—	—	—	18	3(1)	4.00~4.12	口		カマド下遺構の掘り込み 撹乱
	322	欠 番																					
41	323	IVG-4	長方	(N27°E)	(3.40)/3.60	—	0.04	461.70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	
	324	欠 番																					
42	325	IVG-10	方	N3°E	5.60/5.70	31.72	0.16	461.64	北東壁中央	B_1	—	礫隣中央	—	—	—	—	—	2	2	2.68	—	—	ピット内に礫
43	326	IVB-22	隅方	N5°W	4.70/4.48	19.70	0.20	461.50	北壁中央	C	河原礫	焚口中央円	残	—	—	—	—	4	4	2.00~2.20	巴	—	
44	327	IVG-2	方	N5°W	5.78/5.56	30.00	0.20	461.44	北西壁中央	A	—	焚口中央円	—	やや右傾	0.70	16°	0	23	4(3)	3.20~3.24	内	有	開出切り強酒 周溝
45	328	IVG-19	方	(N8°W)	—	—	0.16	461.65		—	—	—	—	—	—	—	—	8	3(3)	2.88~3.36	口	—	
45	329	IVG-19	方?	(N67°E)	—	—	0.08	461.65	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	内	—	撹乱
46	331	IVG-10	方	N3°E ~ N31°E	3.50/3.68	10.67	0.20	461.62	北東壁中央	A B₁ A	— 中央石 — 河原礫 — 焚口左		— — —	直角 直角 直角	1.63 0.84 0.38	0° 8° 8°	0.16 0.08 0.12	8	—	—	内	—	カマド3基
	332	IVG-24	—		—	—	0.06	461.62	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	撹乱
	333	IVG-25	—	—	—	—	0.08	461.60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	内	—	撹乱
47	334	IVH-6	—	N22°E		—	0.12	461.85	—	A	—	—	—	—		—	—	—	—	—	—	—	
48	335	IVG-5	長方	N6°W	3.36/3.80	11.70	0.40	461.42	北壁方	A	河原礫	—	—	やや右傾	1.50	—	0.20	7	2	1.76	口		周溝
49	336	IVB-23	方	N30°W	5.00/5.00	24.43	0.30	461.50	北西壁中央	A	河原礫	中央	—	—	—	—	—	8	4(2)	2.60~2.80	口	有	床下ピット3基
50	337	IVB-23	方	(N43°W)	5.74/5.86	(33.16)	0.08	461.69	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	4(2)	2.64~2.76	—	有	
51	338	IVB-25	方?	N47°W	(5.72)/—	—	0.50	461.38	北西壁	A	粘土	—	—	—	—	—	—	9	—	—	—	—	地区外
52	339	IVB-25	方	N12°E	5.64/(5.06)	(24.58)	0.08	461.50	東東壁やや右	A	河原礫	中央左円	—	—	—	—	—	10	4	2.40~2.80	—	—	
53	341	IVB-24	隅方	(N25°E)	(4.88)/(4.40)	(16.52)	0.22	461.60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	6	0.80~3.40	口	—	周溝
54	342	IVB-24	隅丸?	(N17°E)	(3.40)/(3.94)	(12.60)	0.18	461.50	北壁石	A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	巴	—	
55	343	IVB-18	方	N13°E	(4.12)/(4.16)	(16.40)	0.00	461.62	北東壁中央	A	—	焚口部左端	—	—	—	—	—	7	4	2.68~2.80	—	—	
55	344	IVB-22	隅方	N4°E	5.94/5.68	32.50	0.30	461.30	北壁やや右	A	粘土	焚き口中央	—	—	—	42°	—	10	4	3.08~3.20	—	有	

遺構番号	遺構名	位置	形態規模 平面形	主軸方向	規模 縦/横m	床面積㎡	深さm	床面高m	カマド 位置	形状	袖構築材	火床(炉床)形状	煙出	煙道部 方向	長さm	傾き	煙道口m	ピット	柱 数(柱穴)	柱間m	建物	掘り方	その他
56	346	IVG-20	隅方?	N36°E	−/4.30	−	0.10	461.60	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	撹乱
57	347	IVG-19	方	(N37°E)	6.60/6.30	(40.14)	0.20	461.70	−	−	−	−	−	−	−	−	−	7	3	3.72	−	−	
	348	IVH-1	方?	−	−	−	0.24	461.80	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	地区外
	349	欠番																					
58	350	IVG-5	方	(N24°E)	4.56/5.00	(22.71)	0.18	461.67	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5	3(1)	2.52	自	−	地区外
59	351	IVB-18	隅方	(N45°W)	5.00/5.20	(25.96)	0.20	461.40	−	A	−	−	−	−	−	−	−	11	4(3)	2.60～2.88	−	有	周溝
60	352	IVB-18	隅方?	(N37°W)	−	−	0.10	461.20	−	−	−	−	−	−	−	−	−	6	4	2.08～2.34	−	−	
60	353	IVB-19	−	−	−	−	0.20	461.50	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	
61	354	IVB-18	方	N27°E	3.76/3.60	12.72	0.20	461.50	北東壁やや右	A	河原礫	中央円	土師	直角	1.00	−	0.10	−	−	−	−	有	
	355	IVH-12	−	−	−	−	0.00	461.86	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	地区外
62	356	IVH-13	長方	N31°E	3.62/3.46	13.52	0.14	461.60	北東壁やや右	(A)	−	−	−	−	−	−	−	2	1(1)	−	自	·	
63	357	IVB-13	長方	N18°E	3.68/3.54	12.57	0.12	461.56	西東壁やや右	B_1	河原礫	焚き口中央偏円	煙出	−	·	·	−	3	1		−	−	
64	358	IVB-13	隅方	N51°E	2.92/2.98	7.97	0.26	461.37	北東壁やや右	A	河原礫	鼎脚部分残	板	−	−	−	−				·	有	
65	359	IVB-13	長方	N27°E	3.54/5.00	(16.16)	0.19	461.44	北東壁やや左	(A)	河原礫	−	·	·	−	−	−	3	1	−	−	有	撹乱
66	360	IVB-12	方	N43°E	−/2.64	−	0.10	461.37	北東壁やや右	B_1	河原礫	−	−	−	−	60°	−	1	−	−	−	−	
66	361	IIIU-26	隅方	N13°E	2.64/(3.22)	(8.08)	0.18	461.27	南東壁やや右	−		−	−	−	−	−	−	4	2	2.52	−	−	
67	362	IIIU-26	方	N13°E	3.96/(4.10)	−	0.14	461.30	南東壁やや右	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
68	363	IIIU-25	隅長方	N12°E	3.06/2.80	(8.28)	0.12	461.30	南東壁有	B_1	−	中央楕円	−	−	−	−	−	2	2	2.00	−	−	
	364	IIIV-17	方?	(N29°W)	3.40/−	−	0.23	461.31	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	カマド火床跡地区外
	365	IIIV-21	−	−	−	−	·	461.52	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	カマド火床跡残存
69	366	IVB-1	方	N60°E	4.74/4.52	(20.76)	0.16	461.36	北東壁やや右	B_2	河原礫	焚き口左	板	−	−	−	−	5	−	−	−	−	
70	367	IVA-5	方?	N18°E	(5.30)/5.46	(28.96)	0.14	461.36	北壁中央	B_1	−	−	−	−	−	−	−	5	1	−	−	−	
71	368	IIIV-21	方	N33°E	4.10/4.32	16.86	0.30	461.23	北東壁やや右	B_1	河原礫	中央円	−	−	−	−		6	4	2.08～2.28	·	·	
72	369	IIIV-21	隅方	N29°E	4.44/·	−	0.29	461.14	北東壁中央	B_2	角礫河原礫	−	−	−	−	−	·	1	−			·	
73	370	IVB-2	長方	N25°E	4.46/5.80	(25.88)	0.28	461.35	北東壁やや右	B_1	−	−	−	−	−	−	−	8	·	·	−	−	
73	371	IIIV-22	隅方?	(N31°E)	6.50/−	−	0.22	461.34	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	
74	372	IVA-5	長方?	N42°E	−/(4.00)	−	0.24	461.00	北東壁やや左	C	−	−	−	直角	1.16	−	0.20	1	−	−	−	−	撹乱

図版番号	遺構番号	位置	形態規模 平面形	主軸方向	規模 長軸×短軸m	床面積 ㎡	深さm	底面高m	カマド 位置	形状	構築材	支脚	煙出し 形状	煙出部 方向	長さm	傾き	煙道部 高さ×幅m	ピット	柱 数(柱穴)	柱間m	壁溝	焼土	焼力	その他
75	373	ⅣA 5	方？	N45°E	—	—	0.18	461.10	北東壁中央	A	—	—	中央	—	直角	1.66	0°	0.00	2	1	—	—	—	
76	374	ⅣB-6	長方	N56°E	3.76/3.32	12.39	0.28	461.14	北東壁中央	H_1	—	—	中央	—	やや左傾	0.98	—	0.14	3	3	2.00	—	—	
77	375	ⅣM-6	隅方	N38°W	4.44/4.36	17.88	0.20	461.17	北西壁中央	B_1	角礫 河原礫	—	曲	—	—	—	—	—	5	2	3.40	—	有	カマドで遺状遺構あり
78	376	ⅣG-15	方	N32°W	4.80/4.84	(21.60)	0.27	461.45	北西壁中央	B_1	粘土	焼きロ中央箱円	底	—	—	—	—	—	9	2	3.44	—	—	
78	378	ⅣB-24	方	(N12°E)	(3.56)/3.56	(11.10)	0.12	461.58	南東壁やや右	A	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	カマド火床跡
79	379	ⅣB-8	長方？	N42°W	3.14/—	—	0.22	461.56	北西壁やや右	A	—	—	—	直角	0.18	24°	0.08	3	2	1.40	共	有		
80	380	ⅣB-3	隅方？	(N65°W)	—	—	0.32	461.39	北西壁やや右	—	—	—	曲	—	—	—	—	—	2	1	—	—	有	カマド跡あり
	381	ⅣB-2	方？	—	—	—	0.20	461.40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	有	—	地区外
81	382	ⅣB 7	隅長？	N86°W	—	—	0.37	461.17	北西壁中央	A	—	—	袋地部全面箱円	—	直角	1.44	0°	0.18	1	—	—	—	—	周溝
82	383	ⅣB 7	方	N15°E	5.90/5.72	(33.69)	0.34	461.34	北壁中央	A	角礫 河原礫	焼きロ中央箱円	—	直角	現存0.18	0°	0.18	10	—	—	—	有		
83	384	ⅣB-8	隅方？	—	—	—	0.16	461.40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	大	有	地区外
84	385	ⅣB-2	隅長方	(N66°W)	4.00/2.40	(9.16)	0.20	461.38	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	白	—	
	386	欠 番																						
69	387	ⅣB-1	方？	—	—	—	0.18	461.34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	388	ⅢV 22	方？	(N34°E)	—	—	0.19	461.27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	389	欠 番																						
	390	欠 番																						
85	391	ⅣB-17	—	—	—	—	0.00	461.61	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	カマド火床跡
86	392	ⅣH-17	方	N38°E	3.06/3.28	(9.86)	0.17	461.28	北東壁中央	B_1	—	中央	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	有	周溝
86	393	ⅣH-16	方	(N30°E)	(3.88)/3.84	12.62	0.11	461.38	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20	—	—	—	—	周溝
87	394	ⅣB-16	隅方？	—	—	—	0.04	461.50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	
88	395	ⅣB-7	長方	N31°W	5.26/4.78	23.41	0.30	461.22	北西壁やや右	A	河原礫	焼きロ中央	—	やや右傾	0.50	0°	0.30	6	4	2.48~2.88	—	—		
89	396	ⅣB-7	長方	N53°W	2.66/2.50	5.98	0.40	461.14	北西壁中央	A	河原礫 粘土	焼きロ中央箱円	曲	直角	0.16	0°	0.20	1	1	—	—	有		
89	397	ⅣB-11	長方	(N32°E)	4.10/3.92	(14.22)	0.06	461.40	—	A	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3	1.84~2.00	—	有	
87	398	ⅣB 11	隅方	(N4°W)	5.60/(5.66)	—	0.10	461.36	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	3	3.12~3.16	—	—	地床か
	399	欠 番																						
90 91	3400	ⅣB-12	方	N6°	7.20/(7.14)	(50.25)	0.30	461.30	北壁やや右	B_1	河原礫	—	曲	直角	1.14	—	0.18	15	4(3)	3.60~4.08	—	有		
92	401	ⅢP-17	—	(N27°W)	3.08/—	—	0.30	460.68	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	—	—	—	地区外 カマド跡
92	402	ⅢP-18	隅方？	N16°W	—/(3.44)	—	0.14	460.86	南壁やや右	A	—	—	—	やや左傾	0.84	6°	—	—	—	—	—	—	—	地区外

周堤部	遺構番号	位置	形態概略 平面形	主軸方向	規模 縦／横m	床面積㎡	深さm	床面高m	カマド 位置	焚口	形状	構築材	煙出 位置（位置／形状）	支脚	煙道部 方向	長さm	幅m	傾斜角度	ピット 数（柱穴）	柱 柱間m	時期	重複関係	その他
93	403	ⅢP-21	隅丸方	N10°E N13°E	3.40/3.10	9.63	0.20	460.66	南東壁中央やや右	A A	一 河原礫	一 焚き口中央	一	瓶	やや左傾 東角	1.00 0.34	10° 24°	0.18 0.20	—	—	—	—	カマドⅡ類
94	404	ⅢP-18	長方	(N45°W)	6.00/—	—	0.24	460.88	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	2	2.88	—	有	地区外
	405	欠番																					
	406	欠番																					
95	407	ⅢP-21	隅長方	N40°E	4.60/3.70	16.56	0.32	460.70	北東壁中央	A	粘土 河原礫	中央・別口	—	両角	東角	1.66	0°	0.12	5	—	—	—	間壁
	408	欠番																					
96	409	ⅢU-1	隅長方	N26°E	3.88/(3.36)	(12.21)	0.20	460.96	北東壁やや左	A	河原礫	焚き口中央円	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	
97	410	ⅢU-2	隅長方	N26°E	5.32/4.72	(26.70)	0.14	461.02	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
98	411	ⅢU-4	長方	N5°E	4.02/4.84	19.16	0.20	460.98	北壁中央	A	粘土 河原礫	焚き口中央円	瓶	直角	0.90	0°	0.18	5	4	2.32～2.80	白	—	
99	412	ⅢU-4	長方	N34°E	4.88/4.20	20.72	0.29	461.10	北東壁コーナー	—	河原礫	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—
100	413	ⅢU-4	—	N123°E	—	—	0.20	461.26	南東壁右寄り	B_1	角礫 河原礫	中央	瓶	—	—	—			1	—	—	—	地区外 隣平
101	414	ⅢU-8	長方	N0°	3.80/3.60	12.36	0.28	461.04	北壁右寄り	A	河原礫	—	—	一	東角	0.90	4°	0.12	—	—	—	白	—
	415	ⅢP-24	—	—	—	—	0.12	461.06	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	— カマド跡 地区外
	416	ⅢU-1	—	(N13°E)	—/(5.24)	—	0.07	460.93	北壁右寄り	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	2	4.12	—	—
102	417	ⅢU-9	方	N19°E	5.72/6.20	33.22	0.14	461.10	北壁中央	A	—	中央・円	—	左傾	0.64	14°	0.00	8	5	3.80～4.60	—	—	
103	418	ⅢU-2	長方	N16°E	4.04/4.54	17.92	0.40	460.88	北壁中央	A	—	中央	—	左傾	1.20	0°	0.12	6	2	2.84	白	有	
104	419	ⅢU-2	隅方	N9°E	4.36/4.36	18.80	0.30	460.78	北壁やや右	A	—	中央	—	やや左傾	0.52	6°	0.22	6	4	1.28～2.08	人＋白	—	
105	420	ⅢU-9	長方	N6°	4.60/5.04	22.08	0.30	461.04	北壁中央	A	河原礫	中央左	—	直角	0.82	4°	0.14	5	4	2.40～2.56	人	—	
106	421	ⅢU-10	方	N37°E	4.52/4.46	19.40	0.12	461.20	北東壁右	B_1	河原礫	焚き口中央	—	直角	0.56	0°	—	3	3	2.96～3.52	白	—	
	422	ⅢV-6	—	N27°E	—	—	0.10	461.30	—	—	—	—	—				—	—	—	—	—	—	地区外
107	423	ⅢU-10	方	N17°W	5.28/5.86	28.94	0.30	461.08	北壁中央	A	—	中央・円	—	—	—		—	7	4	3.04～3.36	白	—	
108	424	ⅢV-11	長方	N39°E	3.36/(4.64)	(14.88)	0.17	461.36	北東壁やや右	B_1	—	中央・方	—	—	—		—	—	—	—	白	—	カマドも原跡
109	425	ⅢV-11	方	N26°E	4.04/4.24	15.55	0.10	461.18	北壁中央	A	河原礫	粗焼成小礫	瓶	左傾	0.44	0°	0.16	4	4	1.76～1.96	白	有	
110	426	ⅢV-11	方	N46°E	(4.46)/4.36	(19.21)	0.36	461.08	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	2	1.80	—	— 地区外
111	427	ⅢU-15	方	N40°E	3.84/(3.96)	(14.22)	0.15	461.22	北東壁中央	A	河原礫	中央左	—	—	—	—	—	—	5	4	1.92～2.00	—	—
112	428	ⅢV-11	—	(N13°E)	(5.10)/—	—	0.20	461.18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	2	2.60	—	— 地区外 間壁
113	429	ⅢU-15	方	(N60°W)	(3.00/2.50	—	0.10	461.13				—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
113	430	ⅢU-15	方	(N31°W)	(5.30/5.44	—	0.30	461.05				—	—	—	—	—	—	4	3	2.28～2.32		有	

図版番号	遺構番号	位置	形態規模 平面形	主軸方向	規模 横/縦m	深度 現存m	幅 cm	深度 m	カマド位置	形状	構築材	袖 (位置/形状)	支脚	煙道部 方向	長さm	掘り方	焚口幅m	ピット	数 (柱穴)	柱間 m	機能	掘り方	その他
114	431	ⅢV-16	広方	N18°E	3.50/(4.10)	(14.30)	0.30	461.14	北壁中央	B_1	河原礫	中央	—	—	—	—	—	6	(4)	—	—	—	
115	432	ⅢV 16	方	(N 4°E)	6.00/6.44	(26.15)	0.24	461.18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	(3)	3.00	—	—	周溝
115	433	ⅢU-25	—	(N12°E)	—/4.26	· ·	0.08	461.31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	
116	434	ⅢU-20	方	N15°E	3.40/3.50	11.10	0.18	461.20	南東隅やや右	A	河原礫	焼き口中央	横	直角	0.55	0°	0.20	6	4	1.64~2.32	—	—	周溝
117	435	ⅢP-24	(方)	(N10°E)	—	—	0.24	460.98	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	(2)	—	—	—	地区外
118	436	ⅢU-14	長方	N25°E	(4.30/5.24)	(22.90)	0.04	461.20	北東隅中央	A	—	—	—	—	—	—	—	9	4	1.92~2.56	—	有	
119	437	ⅢU-8	方	N 4°W	3.28/3.12	9.50	0.15	460.85	北壁中央	A	—	·		·		—	—	1		· ·	人?	—	434住に切られる
120	438	ⅢU-4	方	N13°E	3.68/3.88	12.69	0.32	461.06	北東隅やや右	A		—	—	—	—	—	—	1	—	—		有	周溝
120	439	ⅢU-4	方	(N12°E)	2.80/3.00	(8.26)	0.14	460.96	北西コーナー	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	有	カマド火床跡
120	440	ⅢP 24	—	(N12°E)	—	—	0.08	460.90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	—	—	—	—	地区外 周溝
121	441	ⅢU 13	方	(N 6°W)	6.64/(6.64)	(44.87)	0.18	461.00	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	—	—	自	有	焼失
122	442	ⅢU-24	長方	N37°E	5.00/5.40	(24.85)	0.18	461.12	北東隅やや右	A	河原礫	焼き口中央月	石	直角	0.28	0°	0.24	5	2	3.40	自	有	焼乱
123	443	ⅢU-18	方	N25°E	3.98/3.90	14.08	0.54	460.76	北東隅中央やや右	A A	河原礫	粘板岩全面	—	直角 鋭角	0.74 1.40	2° 7°	0.06 0.24	9	3	1.68~2.00	人・自	有	カマド2基
124	444	ⅢU-24	方?	N20°E	—	—	0.15	461.12	北東隅 —	—	—	—	—	右傾	0.40	25°	0.05	—	—	—	—	—	焼乱
125	445	ⅢU-24	方	(N20°W)	5.32/5.34	(30.16)	0.20	461.30	—	B_2	—	—	—	· ·	—	—	—	3	3	3.26~3.32	—	右	
126	446	ⅢU-19	方?	—	—	—	0.08	461.29	西東隅コーナー	—	—		·					2		· ·		有	コーナーにカマド跡
127	447	ⅢU-19	長方	(N80°W)	(3.20/3.85)	(18.60)	0.12	461.10	—	—		—	—	—	—	—	—	7	2	—	—	—	焼失 周溝
128 129	448	ⅢU-8	方	N12°E	7.28/6.80	68.23	0.20	460.88	北壁中央	A	—	焼き口中央月	横	やや左傾	0.58	9°	0.30	6	4	3.48~3.80	—	有	
130	449	ⅢU 7	方	N42°W	4.86/4.90	(24.07)	0.40	460.88	北西壁中央	A	—	—	—	直角	3.00	12°	—	5	4	—	自	有	間仕切溝? 周溝
131	450	ⅣA-8	方	N30°W	—	—	0.08	461.32	北西隅 —	A	河原礫	中央	横	—	—	—	—	1	1	—	自	有	地区外 カマド掘り残し?
	451	ⅣA-8	—	—	—		0.05	461.33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	自	有	地区外
132	452	ⅣA-4	方	N62°E	3.94/· ·	—	0.10	461.26	北東隅 —	A	河原礫	—	—	—	—	—	—	—	—	—	自	有	地区外 カマド火床跡
132	453	ⅣA-4	方	N20°E	(3.60/(3.40)	—	0.20	461.20	北東隅 —	A	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	自	—	カマド火床跡 貯蔵穴
	454	欠 番																					
133	455	ⅢU-17	方	N37°E	(3.28)/3.28	(25.70)	0.16	461.16	北東隅やや右	A	粘土	粘板岩全面	—	—	—	—	—	3	3	2.88~3.16	—	—	地区外
	456	ⅢU-22	方	(N32°E)	/3.92	—	0.10	461.02	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	地区外 焼乱
134	458	ⅢU-17	(長方)	(N35°E)	/3.12	—	0.24	460.98	北東隅中央付近	—	—	—	—	—	—	—	—	7	(3)	—	—	—	焼乱

図版No.	遺構No.	位置	形態規模 平面形	主軸方向	長軸 短／幅m	床面積㎡	深さm	床面高m	カマド 位置	形状	構築材	赤焼(位置/形状)	支脚	煙道部 方向	長さm	傾き	部径m	ピット (径/深)	柱 数	柱間m	焼	焚き方	その他
135	459	IIIU-17	－	(N85°W)	－	－	0.10	461.04	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	攪乱
136	460	IIIU-13	－	(N0°)	－	－	0.15	461.00	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	攪乱
136	461	IIIU-12	長方	(N97°E)	3.36/2.52	(8.16)	0.18	461.07	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	3	1.88～2.32	－	－	
137	462	IIIU-6	方	N16°E	3.36/3.56	10.85	0.21	461.04	東壁やや右	B_1	－	－	－	－	－	－	－	4	4	1.84～2.88	－	－	ウマ骨出土
137	463	IIIU-6	方	N11°E	3.24/3.50	10.84	0.20	461.01	東北壁やや右	B_1	河原礫	－	－	右傾	0.58	0°	0.10	8	4	－	－	－	
	464	IIIU-6	－	－	－	－	－	461.16	－	－	河原礫	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	カマド一部残存
	465	IVA-9	－	－	－	－	0.30	461.17	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	地区外
	466	IIIU-17	－	－	－	－	－	461.10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	カマド火床跡
138	468	IIIU-24	方	N54°W	－/4.30	－	0.18	461.39	北西壁中央	B_1	－	中央	－	－	0.20	32.5	0.00	1	1	－	内	－	
	469	IIIU-24	－	(N22°E)	－	－	0.18	461.08	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	内	－	攪乱
139	470	IIIU-7	方？	(N19°W)	－/4.72	－	0.18	461.08	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	471	IIIU-23	－	－	－	－	0.06	461.08	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	攪乱 地区外
140	472	IIIU-12	方	(N11°E)	－	－	0.16	461.06	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	(3)	－	袋	－	
141	473	IIIU-12	－	(N3°E)	(4.80)/－	－	0.15	461.06	－	－	－		－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	攪乱
	474	IVA-4		－	－	－	0.15	461.05	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	西	－	一部床面残存
138	475	IIIU-24	－	－	－	－	0.30	461.18	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
	476	IIIU-11	－	－	－	－	－	461.05	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	焼土 カマド跡
	477	IIIU-12	－	(N12°E)	－	－	0.12	461.02	－	－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	
	478	IIIU-7	－	(N39°W)	(3.60/(4.72)	(17.36)	3.48	459.83	－	－	－	－	－	－	－	－	－			－	－	－	カマド火床跡
142	501	IIJ-13	方？	N22°E	(5.54)/5.40	(30.96)	0.00	461.67	－	－	－	－	－	－	－	－	－	12	－	－	－	－	床面残存
143	502	IIJ-21	隅方	N41°E	(4.40)/4.08	(18.33)	0.14	461.53	北東壁やや右	B_1	角礫 河原礫	焚き口右	－	－	－	－	－	5	(3)		－	－	地区外
143	503	IIP-6	方	N5°E	3.60/2.96	(8.05)	0.24	460.50	北壁中央	B_1	河原礫	中央・円	長	やや右傾	1.26	0°	0.10	2	－	－	－	右	
144	504	IIO-2	隅丸方	(N100°E)	3.80/2.04	(7.47)	0.30	461.06	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9	8	1.56～3.24	－	－	鉄鏃 焼土外にピット
145	505	IIO-2	(方形)	(N62°W)	－	－	0.10	461.66	北西壁右	A		－	－	－	－	－	－	5	－	－	－	－	
146	506	IIO-3	方	N11°E	4.00/4.02	14.74	0.11	461.36	南東壁中央	A	河原礫 瓦	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	瓦出土
147	507	IIO-12	方	(N18°E)	－	－	0.08	461.36	北壁右	A	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	地区外

図版No.	遺構No.	位置	形態規模 平面形	主軸方向	規模 縦/横m	床面規模	深さm	底部高m	カマド 位置	形状	構築材	袖 (位置/形状)	支脚	煙道部 方向	長さm	幅	煙出し口m	ピット	柱 数(柱穴)	柱間m	焼成	伐採力	その他
147	508	ⅡO-8	長方	N16°E	3.46/4.90	(24.60)	0.35	461.22	北壁やや左	A	角礫河原礫	—	—	—	—	—	—	8	(2)	—	—	—	地区外
148	509	ⅡT-14	方・長方	N24°E	—/4.94	—	0.33	460.40	北壁やや右	C	—	焚き口中央 用石	—	直角	1.00	6°	0.20	—	—	—	—	—	
149	510	ⅡT-15	長方	N14°E	(4.40)/(4.40)	(16.16)	0.23	460.56	北壁中央	A	—	—	—	広角	0.80	3°	0.10	4	—	—	—	有	
150	511	ⅡT-5	長方	N16°E	3.60/4.46	14.64	0.14	460.56	東壁左	A	—	中央	—	左傾	0.24	18°	0.10	5	2	1.80	—	—	
151	512	ⅢP-6	長方	N32°E	(2.40)/(2.96)	(6.78)	0.26	460.58	北東隅中央	C	・・	・	—	—	—	—	—	2	—		—	有	
	513	ⅡJ-22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			カマド火床跡
152	514	ⅡT 9	方	N18°E	3.16/3.30	9.98	0.20	460.56	東隅右	B_2	河原礫	中央	—	—	—	—	—	2	—	—	人	—	
153	515	ⅡT-4	方?	N9°E	—/4.80	—	0.22	460.26	北壁中央	A	河原礫	焚き口中央	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	地区外
154	516	ⅢT-4	方	N2°E	2.60/(2.66)	(6.12)	0.42	460.28	北壁やや右	A	角礫	粗焼部全面	抵	直角	0.40	22°	0.22	—	—	—	—	—	
154	517	ⅡT-5	方	N12°E	2.80/2.96	7.38	0.38	460.38	北壁やや右	A	河原礫	粗焼部全面 焚口	抵	直角	0.14	27°	—	1	—	—	—	有	
	518	ⅡO-25	(方)	—	—	—	0.18	460.45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	撹乱
	519	ⅡO-20	(方)	—	—	—	0.12	460.59	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	地区外
155	520	ⅡO-20	(方)	N57W	—	—	0.20	460.63	北西壁中央	A	—	—	—	—	0.36	25°	0.16	1	1 7	—	—	—	地区外
	521	欠 番																					
156	522	ⅡO-19	方	(N8°)	4.60/4.70	(20.70)	0.20	460.84	北壁中央	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3	2.52~2.60	—	—	
156	523	ⅡO-13	長方	(N16W)	(3.10)/(2.60)	(8.01)	0.20	460.94	北壁中央	A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	有	—	
157	524	ⅡT-4	—	N10°E	4.00/—	—	0.42	460.06	北壁やや右	B_1	—	—	—	—	—	—	—	・	・	—	—	有	撹乱
158	525	ⅡO-9		—	—	—	—	461.62	—	—	—	・	—	・	—	・	—	—	—	—	炭	—	地区外
158	526	ⅡO-14	—	—	—	—	—	461.12	・・		・	—	—	—	—	—	—	2	—	・・	—	—	地区外
	528	ⅡO 13	—	—	—	—	0.18	461.10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	地区外 剥面のみ
	531	欠 番																					
159	532	ⅡO-18	—	—	—	—	—	460.72	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	撹乱 床張石
	534	ⅡO-19	—	(N7°W)	—	—	0.20	460.82	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	撹乱
160	535	ⅡT 9	(方)	(N9°W)	4.28/—	—	0.44	460.98	北壁中央付近	A	河原礫	焚き口中央 焚口	抵	—	—	30°	0.00	・・	・・		—	有	地区外
161	536	ⅢP-11	長方	N16°E	2.72/3.22	(8.24)	0.36	460.42	北東隅やや右	A	河原礫	中央・円	石	直角	0.50	2°	0.16	1	—	—	鼠	—	
162	537	ⅢP-16	方?	N2°E	—/(3.58)	・	0.30	460.74	北壁やや左	B_2	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	
	538	ⅡT-14	方	—	—/(3.46)	—	0.20	460.38	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	地区外
163	401	ⅡD-20	(方?)	N42W	—	—	0.30	461.10	北西隅中央付近	A	河原礫	焚き口右 用石	石	—	—	—	—	4	—	—	色	—	地区外

図版No.	遺構No.	位置	形態規模 平面形	主軸方向	規模 縦／横m	床面積㎡	柵さm	床面高m	カマド 位置	形状	構築材	火口(位置/形状)	袖	支脚	煙道部 方向	長さm	傾き	煙道高m	ピット	柱 数(柱痕)	柱間m	地山	掘り方	その他
164	602	II D-15	方	N28°E	4.80/5.00	21.48	0.44	460.78	北東隅中央	B_1	河原礫	中央	－	－	－	－	－	3	3	3	2.32～2.60	人	－	
165	603	II J-11	方	N69°W	3.66/3.72	12.27	0.30	461.30	北西隅中央	C	－	焚き口中央	瓶	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	
165	604	II J-12	－	(N64°W)	－	－	0.14	461.37	北西隅	B_1	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	地区外
166	605	II J-6	方	(N64°W)	4.74/4.60	(22.56)	0.22	461.40	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5	2	2.64	－	－	地区外	
167	606	II I-15	－	N39°E	4.22/－	－	0.08	461.32	北東隅やや北	B_1	－	焚き口左	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	有	
167	607	II J-11	方	N35°W	3.64/3.96	12.70	0.44	461.18	西壁やや北	C	－	焚き口中央付	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	

表9　建物跡一覧

図版No.	遺構No.	位置	主軸(梁方向)	構造 形態	構造 梁方	規模 桁行×梁行(間×間)	規模 桁行m	規模 梁行m	規模 面積㎡	規模 柱間(桁行/梁行) m	柱穴 掘方形	柱穴 柱痕	柱穴 規模	備考
168	301	IV G-26 H-16	N65°W	－	平掘	－	－	－	－	－	円	－	0.40～0.60	規模不明
169	302	IV B 23-24 G-3・4	N31°E	側柱	平掘	3×2	6.34	4.56	30.48	1.92～2.34 2.18～2.48	方	円	0.40～0.86	縁方有段形8基
169	303	IV B-14-19	N31°E	－	平掘	－	－	－	－	－	円	円	0.60～0.66	規模不明 縁方有段形3基
	304	欠番												
169	305	IV G-3	N36°W	側柱	平掘	2×1	3.38・3.90	2.74・3.32	11.38	1.66～2.10 2.74～3.14	円	円・方	0.36～0.60	縁方有段形3基
170	306	IV B-23 G-3	N48°W	側柱	平掘	3×2	4.34	3.90	17.71	1.30～1.64 1.68～2.04	方	円	0.52～1.10	強方有段形5基 縁跡石？
307	307	欠番												
169 309	308	IV A-11-19 18-17	N51°E	側柱？	平掘	－	(14.84)	(4.4)	－	－	方	－	0.96～1.40	礎石建物跡、SB301関連
171	309	IV G-9・10 15	N54°W	側柱	平掘	3×3	5.60	5.14	28.76	1.70～2.00 1.60～1.90	方	円	0.66～1.00	縁方有段形6基
172	401	III P-23	N 5°E	側柱	平掘	2×1	4.50・4.74	2.14・2.42	10.61	2.26～2.50 2.14～2.42	円	円	0.30～0.52	401坑と630坑が402跡と共通、縁で特定？
172	402	III P-23	N 7°E	側柱	平掘	2×2	4.30・4.40	2.24・2.54	10.76	2.14～2.24 1.10～1.60	円	－	0.26～0.52	
173	403	III P-22-23 U-2・3	N98°E	側柱	平掘	3×2	6.10	4.94	26.84	1.90～2.16 1.96～2.08	円・方	円	0.90～1.24	縁方有段形9基
174	404	III U-10-15	N27°E	側柱	平掘	1×2	3.42・3.80	3.58	12.62	3.42～3.80 1.76～1.82	円・方	円	0.98～1.20	縁方有段形5基
175	405	III U-19-20 24-25	N22°E	側柱	平掘	2×2	3.92	4.48	17.56	1.76～2.06 2.10～2.40	円・方	円	0.56～0.94	縁方有段形1基
176	406	III U-20-25	N24°E	総柱	平掘	4×2	6.10	4.10	(25.01)	1.50～2.32 1.66～2.56	円	－	0.22～0.36	礎土形確認 縁跡石6基、小ピット伴う
177	407	III U-16-17 21-22	N 1°W	総柱	平掘	2×3？	－	－	－	2.10～2.28 1.68～2.24	円	－	0.60～0.78	規模不明 強方有段形2基
177	408	III P-22	N12°W	側柱	平掘	1×2	4.72	3.44	15.79	4.40～4.72 1.48～1.96	円	－	0.56～0.90	縁方有段形1基
178	409	III P-16	N35°W	側柱	平掘	－	5.66	1.90	10.75	－ 1.90～1.96	円	－	0.46～0.80	縁方有段形1基
178	410	III P-22-23 U-3	N12°E	側柱	平掘	1×2	5.16	3.64・4.32	20.61	5.16 1.44～2.20	円	－	0.34～0.60	
178	411	III P-22-23 U-3	N15°E	側柱	平掘	－	4.32	3.64	15.72	－ －	円	－	0.36～0.70	
179	412	III U-10-15	N32°E	側柱	平掘	1×1	4.30	3.10	13.33	4.30 3.10	円・方	円	0.50～0.60	縁方有段形2基
180	501	III P-6・11	N97°E	総柱	平掘	3×2	4.14	3.62	(14.99)	1.30～1.44 1.68～1.82	円	円	0.56～0.80	縁方有段形5基 縁跡石？
181	502	II T-5・9 10	N55°W	側柱	平掘	1×2	3.12	2.96	9.24	3.00～3.12 1.36～1.64	円	－	0.40～0.70	縁方有段形2基
181	503	II T-5	N36°E	側柱	平掘	1×2	3.32	3.16	10.49	3.20～3.32 1.36～1.60	円	円	0.56～0.80	縁方有段形2基
181	504	II T-11-14	N18°E	側柱	平掘	－	－	－	－	1.92～2.04 1.58～1.82	円	－	0.30～0.90	規模不明 縁方有段形1基
182	505	III P 11-16 III T-15-20	N16°E	総柱	平掘	2×2	3.82	3.30	12.22	1.80～2.14 1.50～1.68	円	－	0.44～0.86	強方有段形7基
183	506	II T-19-15 III P-6-11	N112°E	側柱	平掘	2×2	4.40	3.16	(13.96)	2.20 1.52～1.66	円	－	0.40～0.76	縁方有段形1基
184	507	II T-5・10	N10°E	側柱	平掘	2×1	2.40	2.40	5.76	1.12～1.28 2.40	円	－	0.38～0.58	縁方有段形3基
184	508	III P-1・6	N34°W	側柱	平掘	2×2？	(3.44)	(3.06)	(10.53)	1.60～2.02 1.36～1.70	円	－	0.66～0.92	強方有段形2基

表10　土器観察表（縄文）

図版No.	地点名	土器No.	器種	時期	部位	色調	胎土（単位/mm）	焼成	調整・施文技法
212	510住	1	深鉢	前期後葉	胴	にぶい黄褐	0.5以下の石英、長石	良	外：櫛歯状工具、縦位施文
212	303溝下層	2	深鉢	前期後葉	胴	にぶい橙	9.5位の石英、雲母、長石、角閃石、褐色粒子	やや軟	外：半截竹管状工具による条線
212	510住	3	深鉢	前期後葉	胴	にぶい黄褐	0.5以下の石英、長石	良	外：櫛歯状工具による条線
212	522住	4	深鉢	前期?	胴	明赤褐	繊維0.5以下の黒色粒子、石英	並	縄文RL横位施文
212	442住	5	深鉢	中期	口縁	にぶい赤褐	0.5位の石英、角閃石、褐色粒子、長石	並	外：光沢あり
212	327住ピット	6	深鉢	中期	口縁	橙	0.5石英他、砂有	良	外：おそらく長の隆帯を貼り付け、その縁を沈線でおさえている　内：煤痕あり
212	遺構外IIb層	7	深鉢	中期後葉	口辺	明褐	0.5以下の石英、長石、褐色粒子	やや軟	口縁に沿って隆帯を貼り付け、その上を指頭で軟やかに刻む
212	303溝IIb層	8	深鉢	中期後葉	胴	にぶい褐	0.5位の石英、長石、角閃石、褐色粒子	やや軟	口縁に平行して隆帯を貼り付け、その上を指頭で刻む
212	591坑	9	深鉢	中期後葉	口辺	明赤褐	5.0位の石英、黒色粒子、褐色粒子、雲母	並	外：ヘラかき沈線、刻目隆帯
212	B-11	10	深鉢	中期後葉	胴	浅黄橙	0.5位の石英、褐色粒子	並	外：すだれ状工具？条線
212	B-11	11	深鉢	中期後葉	胴	明褐	5.0位の石英、褐色粒子、雲母	良	外：半截竹管状工具による条線
212	U-6	12	深鉢	中期後葉	口縁	暗褐	0.5位の石英、褐色粒子、長石	良	外：隆帯区画、縄文RL→凹線 内：ナデ→ミガキ
212	B-12	13	深鉢	中期後葉	口縁	橙	0.5以下の石英、褐色粒子、雲母	良	外：縄文RL→沈線
212	420住	14	深鉢	中期後葉	口縁	赤褐	0.5位の石英、長石、角閃石	軟	外：縄文RL横位
212	B-11	15	深鉢	中期後葉	口縁	明赤褐	0.5位の石英、長石含	並	外：凹線
212	B-11	16	深鉢	中期後葉	胴	明黄褐	0.5以下の石英、角閃石	並	外：浅い凹線
212	遺構外IIb層	17	深鉢	中期後葉	胴	橙	5.0位の石英、長石、黒色粒子、褐色粒子	良	外：縄文LR縦位→沈線　内：ヨコナデ
212	遺構外IIb層	18	深鉢	中期後葉	胴	明赤褐	0.5以下の石英、黒色粒子、褐色粒子	並	外：縄文RL横位
212	G-2	19	深鉢	中期後葉	胴	赤褐	0.5位の石英、褐色粒子、長石	良	外：縄文LR→微隆起線、ナデ消し
212	3045坑	20	深鉢	中期後葉	胴	浅黄橙	5.0位の石英、長石	良	外：縄文無節L斜位→沈線　内：ミガキ上位にハケナデ
212	303溝	21	深鉢	中期後葉	胴	外面にぶい褐 内面にぶい褐	5.0位の石英、角閃石、長石、褐色粒子	並	外：縄文RL横位
212	420住	22	深鉢	中期後葉	胴	赤褐	5.0位の石英、長石、角閃石	やや軟	外：縄文RL縦位→沈線
212	遺構外IIb層	23	深鉢	中期後葉	胴	褐	0.5以下の石英、褐色粒子	並	外：縄文LR撚位、整接→沈線
212	B-11	24	深鉢	中期後葉	胴	にぶい褐	0.5以下の石英、雲母、褐色粒子	並	外：縄文LR横位
212	U-6	25	深鉢	中期後葉	胴	橙	0.5以下の石英、褐色粒子、黒色粒子	良	外：縄文RL横位　内：ヨコナデ
212	330住	26	深鉢	中期後葉	胴	にぶい赤褐	0.5の長石多、角閃石、石英	並	外：縄文RL縦位
212	304溝	27	深鉢	中期後葉	胴	にぶい赤褐	0.5位の石英、長石、角閃石	やや軟	縄文RL縦位→沈線
212	331住	28	深鉢	中期後葉	胴	にぶい赤褐	1.0位の石英多、長石、角閃石	並	縄文L縦位？→沈線による梯閃区画
212	304溝	29	深鉢	中期後葉	胴	にぶい赤褐	0.5位の石英、長石、角閃石、褐色粒子	やや軟	外：縄文LR縦位→沈線
212	U-11	30	深鉢	中期後葉	胴	黄橙	0.5以下の石英、黒色粒子、長石	並	縄文RL縦位→凹線
212	520住	31	深鉢	中期後葉	胴	明赤褐	0.5以下の石英、黒色粒子、褐色粒子含	並	外：縄文LR縦位→沈線
212	331住	32	深鉢	中期後葉	?	にぶい赤褐	1.0位の石英、長石、角閃石	並	外：縄文LR縦位
212	U-6	33	深鉢	後期初頭	口縁	明赤褐	0.5以下の石英、褐色粒子、長石含	良	外：縄文LR円線　内：ミガキ　波状口縁
212	508穴	34	深鉢	後期初頭	口縁	明褐	0.5位の石英、長石、黒色粒子、褐色粒子含	並	外：かすかに初目隆帯貼付痕跡あり 内：光沢あり
212	P-22	35	深鉢	後期初頭	口辺	褐	5.0位の石英、長石、褐色粒子、角閃石含	並	外：縄文無節L→沈線
212	536住	36	深鉢	後期初頭	胴	褐	5.0位の石英、褐色粒子	やや軟	外：沈線　内：ミガキ
212	536住	37	深鉢	後期初頭	胴	褐	0.5以下の褐色粒子、砂粒	軟	外：沈線
212	B-6	38	深鉢	後期初頭	胴	褐	1.0位の石英、丸い砂粒(無鉱物の粘)を多く含む	良	外：ミガキ→沈線
212	625坑	39	深鉢	後期初頭	胴	にぶい褐	0.5以下の石英、褐色粒子含	並	外：縦ミガキ→沈線　内：ヨコミガキ
212	4547坑	40	鉢？	後期初頭	胴	橙	0.5以下の石英、長石、褐色粒子含	良	外：ミガキ縄文LR→沈線
212	402溝	41	深鉢	後期初頭	胴	明褐	0.5位の石英、長石、黒色粒子含	やや軟	外：沈線
212	401住	42	深鉢	後期初頭	胴	外面にぶい赤褐 内面赤褐	0.5位の石英、長石、角閃石、褐色粒子	やや軟	外：縄文Rの横位施文
212	遺構外IIb層	43	鉢？	後期	胴	黄褐	0.5以下の石英、長石、褐色粒子	やや軟	外：沈線、ナデ
212	533住	44	深鉢？	後期？	口辺	明褐	0.5以下の石英、長石、褐色粒子含	軟	外：太い沈線

図版No.	地点名	土器No.	器種	時　期	部位	色　調	胎　土（単位／mm）	焼成	調整・施文技法
212	遺構外出土層	45	深鉢？	後期？	胴	褐	0.5以下の石英、褐色粒子含	軟	外：縄文無節Ｒ？斜位？→沈線
212	508住	46	深鉢？	後期？	口辺	明褐	0.5以下の石英、黒色粒子、褐色粒子含	やや軟	外：ナデ、太い凹線
212	421住	47	鉢	後期前葉	口縁	にぶい橙	0.5以の丸い岩石、長石、石英、角閃石、褐色粒子	並	外：同心円状の単位文様か？
212	380住	48	鉢	後期前葉	口縁	灰赤	0.5位の長石、角閃石、石英、褐色粒子	やや軟	外：縄文ＬＲ横位→沈線
212	304溝	49	鉢	後期前葉	胴	黄橙	0.5の石英、角閃石、長石、褐色粒子	やや軟	外：縄文ＬＲ斜位→沈線
213	523住	50	鉢？	後期前葉	口辺	橙	0.5以下の石英、黒色粒子	並	外：縄文ＲＬ斜位→沈線
213	401住	51	鉢	後期前葉	胴	にぶい橙	0.5位の長石、石英、角閃石、褐色粒子	並	外：沈線
213	302住	52	鉢	後期前葉	胴	外面にぶい橙 内面灰褐	0.5位の丸い岩石、長石、角閃石、石英	並	外：沈線
213	354住	53	鉢？	後期前葉	胴	外面にぶい橙 内面灰褐	0.5位の長石、角閃石、石英、褐色粒子	並	外：沈線
213	3220坑	54	鉢	後期前葉	胴	外面にぶい黄橙 内面灰黄褐	0.5位の石英、長石、角閃石	並	外：縄文？縦位ＬＲ？→沈線
213	509住	55	深鉢	後期前葉	口縁	にぶい褐	0.5位の長石、黒色粒子、石英含	良	外：ミガキ沈線、縄文ＬＲ横位 内：ミガキ
213	4608坑	56	深鉢	後期前葉	口縁	にぶい黄褐	0.3位の石英、褐色粒子、長石含	並	外：沈線　内：ミガキに近いナデ
213	448住	57	鉢？	後期前葉	胴	外面橙 内面にぶい橙	0.5位の丸い岩石、石英、長石、角閃石	並	外：沈線
213	461住	58	深鉢	後期前葉	胴	にぶい黄橙	0.5以上の石英、長石、黒色粒子、褐色粒子	良	外：縄文ＬＲ→沈線→ミガキ（沈線内に条痕あり）
213	304溝	59	深鉢	後期前葉	胴	外面にぶい黄橙 内面にぶい橙	0.5位の長石、石英、角閃石、褐色粒子	並	外：縄文ＬＲ→沈線　内：ミガキ
213	P-21	60	深鉢	後期中葉	口縁	にぶい黄橙	0.5以下の石英、角閃石？褐色粒子	良	外：ゆるい波状口縁　内外：ミガキ
213	510住	61	深鉢	後期中葉	口辺	にぶい黄橙	0.5以下の石英、黒色粒子、長石、褐色粒子含	軟	外：沈線　内：沈線
213	509住	62	深鉢	後期中葉	口辺	にぶい橙	0.5以下の石英、黒色粒子、褐色粒子含	良	外：隆口縁、沈線（沈線内に条痕あり）
213	456坑	63	注口土器	後期前葉	把手	にぶい黄橙	0.5以下の長石、石英、褐色粒子含	良	外：ミガキ、擦合痕
213	520住	64	壺	中末～後初	把手	にぶい黄橙	0.5位の石英、黒色粒子、褐色粒子含	良	外：微隆起、篦状の把手　内：ミガキ
213	530住	65	深鉢？	？	胴	にぶい赤褐	0.5位の石英、雲母含	やや軟	外：条痕、原体？

表11　石鏃規察表

通し No.	図版No.	PL No.	出土位置	材　質	欠損部位	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	基部形態 茎	基部形態 形	脚部先端形	側辺部形態	備　考
230	214	52	327住	黒曜石	片脚・先	2.3	(1.1)	0.3	(0.42)	－	逆Ｖ字	尖	直線	中型で縦長、基部の抉りは深い
231	214	52	340住	チャート（黒灰）	茎と先	(2.8)	1.5	0.4	(1.34)	あり	爪形	尖	外湾	大型で縦長、側辺部調整は細かく規則的な鋸歯状
232	214	－	345住床	黒曜石	茎	(2.1)	(1.1)	0.3	(0.36)	不明	不明	不明	直線	中型で縦長
233	214	52	357住	黒曜石	茎	(1.3)	1.2	0.4	(0.28)	あり	爪形	丸	抉り中	小型で両側辺部に抉り、基部赤材痕
234	214	52	378住	黒曜石	完形	2.0	1.5	0.3	0.55	－	逆Ｕ字	丸	外湾	中型で縦長
235	214	52	③区U-4	黒曜石	完形	1.9	1.3	0.3	0.50	－	逆Ｖ字	丸	直線	中型で縦長、側辺部調整はやや鋸歯状
236	214	52	③区B-23	黒曜石	完形	2.1	1.6	0.3	0.50	－	逆Ｖ字	丸	直線	中型で基部抉りが大きい
237	214	52	③区II-17	黒曜石	片脚・先	2.9	(1.4)	0.5	(1.46)	－	不明	不明	直線	大型で縦長
238	214	－	④区P-18	黒曜石	基部・先	(1.5)	(1.6)	0.3	(0.24)	－	不明	不明	直線	やや小型で、縦長
239	214	－	420住	黒曜石	先・基・側	(2.4)	(1.6)	0.3	(1.07)	－	逆Ｖ字	丸	外湾	やや大型
240	214	－	445住	黒曜石	先・基	(1.6)	(1.2)	0.3	(0.38)	－	逆Ｕ字	不明	外湾	やや小型で縦長
241	214	－	3416坑	黒曜石	側辺・基・先	(1.9)	(1.3)	0.3	(0.42)	－	爪形	不明	直線	中型で縦長
242	214	52	403建ピット	黒曜石	茎・先	(2.1)	1.5	0.3	(0.56)	あり	爪形	丸	外湾	やや小型で正三角形に近い
243	214	52	④区P-17	チャート（黄灰～青灰）	はば完形	2.8	1.4	0.4	1.17	あり	浅Ｕ字	丸	外湾	太の重状の本体に基部が残く
244	214	52	③区IIIb層	チャート（赤）	完形	2.7	1.6	0.5	1.41	－	逆Ｖ字	丸・尖	外湾	大型で縦長、一番中央に突起を残す
245	214	－	510住床下	黒曜石	先・片脚	(2.1)	(1.7)	0.3	(0.76)	－	逆Ｕ字	尖	直線	やや大型で縦長、比較的抉りが発達している
246	214	－	⑤区O-19	黒曜石	先・脚・両隅端部	(1.7)	1.6	0.3	(0.82)	－	逆Ｕ字	丸	外湾	やや大型で縦長、抉りはやや広い
247	214	52	⑤区IIIb層	黒曜石	片脚・片隅	(2.1)	(1.5)	0.4	(0.64)	－	逆Ｖ字	不明	外湾	中型で縦長、抉り発達した Ｖ字状
248	214	52	⑤区IIIb層	チャート（赤）	完形	2.5	1.5	0.3	0.74	－	逆Ｕ字	尖	直線・	中型で縦長、両側辺部抉りはやや曖
249	214	52	⑤区IIIb層	黒曜石	片脚	1.9	(1.4)	0.3	(0.52)	－	逆Ｖ字	丸	外湾	中型で縦長、抉りが深（さつい

通L.No.	図版No.	PL No.	出土位置	材質	欠損部位	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	基部形態 茎	基部形態 形	脚部先端形	側辺部形態	備考
250	214	−	⑤区IIIb層	黒曜石	茎部全体	(1.4)	(0.8)	(0.3)	(0.21)	不明	不明	不明	直線	中型で縦長か
251	214	52	601住	黒曜石	片脚	2.0	(1.2)	0.4	(0.61)	−	爪形	尖	外湾	中型で縦長、やや厚い
252	214	52	⑥区IIIb層	黒曜石	先	(2.4)	2.0	0.4	(1.30)	あり	爪形	丸	直線	中型で、やや幅広で厚い
253	214	52	③区U-4	粘板岩(灰)	先端と茎部	(2.5)	(1.6)	(0.4)	(1.73)	不明	不明	不明	外湾	弥生時代の磨製石鏃、両面中央長軸に接い続、両面穿孔

表12 刃器観察表

通L.No.	図版No.	PL.No.	出土位置	材質	色調	状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
279	214	52	③区B-2	千枚質粘板岩	黒褐色	周縁部2ケ所欠損	(2.5)	(3.3)	0.4	(3.1)
280	214	52	417住	千枚質粘板岩	黒色	先端部欠損	(4.5)	(4.1)	0.9	(24.0)
281	214	52	④区U-1	変質したヒン岩	オリーブ灰色	周縁部2ケ所欠損	(6.4)	(9.4)	1.4	(90.0)

表13 打製石斧観察表

通L.No.	図版No.	PL.No.	出土位置	材質	色調	状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
254	−	−	306住	千枚岩質粘板岩	黒色	刃部欠損	(5.4)	(4.3)	(0.8)	(25)
255	−	−	342住	千枚岩質粘板岩	灰色	刃部側部欠損	(12.2)	(5.4)	(1.5)	(122)
256	−	−	343住	千枚岩質粘板岩	暗灰色	頭部、刃部欠損	(6.7)	(5.4)	(1.5)	(122)
257	−	−	349住	千枚岩質粘板岩	黄灰色	頭部、刃部欠損	(8.7)	(2.9)	(1.7)	(36)
258	214	52	383住	千枚岩質粘板岩	灰色	刃部欠損	(7.6)	(4.8)	(1.7)	(65)
259	215	52	384住	千枚岩質粘板岩	灰オリーブ色	ほぼ完形	11.6	5.0	1.8	(96)
260	−	−	393住敲床	千枚岩質粘板岩	黒色	頭部、刃部欠損	(6.2)	(4.6)	(2.3)	(70)
261	215	52	372住	千枚岩質粘板岩	灰色	完形	17.9	9.9	4.0	720
262	215	52	302溝	千枚岩質粘板岩	灰オリーブ色	刃部欠損	(9.2)	(5.8)	(2.3)	(112)
263	215	52	304溝	千枚岩質粘板岩	にぶい黄色	ほぼ完形	14.9	6.1	2.2	(220)
264	214	52	③区U-10	千枚岩質粘板岩	暗灰色	頭部欠損?	(8.6)	5.5	1.3	(65)
265	214	52	③区G-5 I層	千枚岩質粘板岩	黄灰色	頭部、刃部欠損	(8.0)	(4.8)	(1.4)	(58)
266	214	52	435住	千枚岩質粘板岩	暗灰色	刃部欠損	(8.0)	(5.8)	(1.6)	(86)
267	−	−	439住付近	千枚岩質粘板岩	灰オリーブ色	刃部?	(6.5)	(5.1)	(1.3)	(43)
268	215	52	441住	千枚岩質粘板岩	灰オリーブ色	刃部欠損	(10.5)	4.5	1.8	(78)
269	−	−	303溝	千枚岩質粘板岩	黒色	両端部欠損	(13.6)	(6.4)	(1.9)	(140)
270	215	52	④区P-12	千枚岩質粘板岩	暗灰色	刃部一部欠損	(10.1)	(5.1)	(2.1)	(130)
271	215	52	④区U-19	千枚岩質粘板岩	明灰色	転石素材	15.2	4.8	3.0	316
272	215	52	505住	千枚岩質粘板岩	黒褐色	刃部一部、基部欠損	(9.5)	(5.1)	(1.9)	(112)
273	214	52	508住	千枚岩質粘板岩	灰色	完形	11.4	4.5	1.5	85
274	215	52	⑤区O-20	千枚岩質粘板岩	黄灰色	完形	12.1	7.5	2.6	208
275	214	52	⑤区	千枚岩質粘板岩	灰黄色	刃部一部、頭部欠損	(5.1)	(3.8)	(1.0)	(20)
276	−	−	⑤区	千枚岩質粘板岩	黒色	頭部、刃部欠損	(3.0)	(5.1)	(1.0)	(18)
277	−	−	⑥区IIIb層	千枚岩質粘板岩	暗灰色	転石素材、先端部欠損	(7.1)	(3.3)	(1.6)	(45)
278	−	−	⑥区IIIa層	千枚岩質粘板岩	黒褐色	転石素材、先端部欠損	(6.7)	(5.6)	(2.6)	(194)

表14　土器観察表（弥生～古墳前期）

図版No.	地点名	土層No.	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
216	313住	1	赤彩壺	2/5	－	11.8	(5.8)	赤	砂2.3 白色砂子	良好	口縁部：ナデ　底：ナデ　胴部：ケズリ	口縁部：ナデ　底：ナデ　胴部：ヨコナデ	図示
216	〃	2	甕	完形	16.4	4.4	9.7	橙	砂2～0.5 石英	良好	口～胴：ナデ　底：ケズリ	口～胴：ナデ　底：ヨコナデ　胴：ケズリ（指）	〃
216	〃	3	小型台付甕	完形	12.2	7.8	16.5	明赤褐	砂2.5 石英、雲母、長石	ほぼ良好	口：ハケナデ　底上：横位連続ヘラ（2条）　底下～胴：ナデ　ミガキ　胴：ケズリ　ハケ	口～胴：ヨコナデ　底上：ナデ　底下：ハケ　ヨコナデ　ハケ	〃
216	〃	4	小型台付甕	1/5	12.5	－	(12.4)	明赤褐	砂2～1.5 石英、片岩、長石	やや不良	口～胴上：横位連続ヘラ（5条）　胴下：ケズリ	ヨコナデ　ミガキ	〃
216	〃	5	壺	口縁	(25.2)	－	(4.5)	橙	砂2～0.5 長石、石英、雲母	良好	口縁：横取焦痕のヨコナデ、ヘラ切り底のハケ　ミガキ	口縁：ヨコナデ　ミガキ	〃
216	〃	6	小型壺	ほぼ完形	14.0	5.8	18.1	橙	砂1～0.5 長石、雲母、黒鉱、赤鉱	ほぼ良好	口：横位連続ヘラ（5条）　胴：横位連続ヘラ（5条）　底下：ケズリ　胴～胴下部：ハケ調整	口：ヨコナデ　底：ナデ　胴：ヨコナデ　胴下部：ハケ調整	〃
216	〃	7	小型壺	ほぼ完形	14.1	6.5	17.1	にぶい褐	砂1～0.5 石英、雲母、黒鉱、赤鉱	良好	口～胴上：ナデ　ハケ（指圧）　口～胴上：横位連続ヘラ（5～7条）　胴：横位連続ヘラ（6条）　胴下：ケズリ　ナデ　底：ヘラ切り　ナデ	ヨコナデ　ミガキ　体中：ヨコナデ　ミガキ　底：ナデ	〃
216	〃	8	大型壺	完形	20.0	14.4	53.0	暗褐	砂0.5 長石、石英	ほぼ良好	口～底上：ナデ　ハケ（指圧）　横位連続ヘラ（8～7条）　胴下：ケズリ　ミガキ　底：ナデ	口～底上：ヨコナデ　ミガキ　体～底下：ヨコナデ　ヘラ　ヨコナデ	〃
216	〃	9	小型壺	2/5体上半	15.6	－	(10.4)	黒褐	砂0.5 長石、石英、角閃石	やや不良	口～底上：横位連続ヘラ（5条）　ヨコナデ　ミガキ	ヨコナデ　ミガキ	図示 外面剥落
216	〃	10	小型壺	2/5	(18.4)	－	(11.5)	明赤褐	砂0.5 長石、石英	良好	口～底上：横位連続ヘラ（6）　胴～胴下部：ナデ　ミガキ	口～胴：ヨコナデ　胴下：ヨコナデ　ミガキ	図示
216	〃	11	台付壺	2/5体上半	15.6	－	(7.8)	灰黄褐	砂0.3～0.5 長石	良好	口：ヨコナデ　体：ナデ　ハケ	口：ヨコナデ　体：ハケ	〃
216	〃	12	赤彩大型壺	2/5体上半	－	－	(40.0)	橙（赤彩）赤	砂0.5 石英、角閃石	良好	口縁：口～胴　胴：ヨコナデ　ナデ　胴下部：ケズリ　胴上～中：ナデ　底：ヘラ切り　ナデ	口縁：口～胴　胴中：ヨコナデ	図示 刺羽調整
217	316住	1	高坏	1/4全並	(22.4)	(11.8)	14.0	にぶい橙	砂2～1.0 長石、石英	良好	杯：ナデ　ミガキ　脚下：ヨコナデ　脚下：ナデ　ミガキ	杯：ヨコナデ　ミガキ　脚上：スカシ孔　脚下：ヨコナデ	図示
217	〃	2	坏	1/8口～体	(10.4)	－	(3.4)	赤褐	砂0.2～0.5 角閃石、石英	良好	口：ヨコナデ　体：ヨコナデ　ミガキ	口：ヨコナデ　体：ナデ　ミガキ	〃
217	〃	3	台付壺	1/10 共部の一部	－	－	(3.3)	明赤褐	砂、雲0.5 長石	ほぼ良好	共：クシナデ　メケズリ	底：ナデ？　台：不明	〃
217	〃	4	台付壺	1/10 台部の一部	－	－	(3.6)	明赤褐	砂0.5～0.5 雲母、石英	良好	台：ミガキ、ナデ	台：ヨコハケ	〃
217	〃	5	小型壺	1/5口～体	(11.0)	－	(7.6)	明赤褐	砂0.5 長石	良好	口～胴下：ハケ　体：横位連続ヘラ（5～6条）	ヨコナデ	〃
217	〃	6	台付壺	1/10台部	－	－	(9.8)	(3.4)	にぶい赤褐	雲0.1～0.3 長石	良好	台：ナデ　ケズリ	台：ハケ　脚下端：横取焦痕	図示
217	〃	7	小型壺	1/5口～体	(10.8)	－	(11.4)	赤褐	砂0.2～0.5 長石	良好	口～胴中：横位連続ヘラ（5～6条）　胴下：ナデ　ミガキ	ヨコナデ	〃
217	330住	1	有段口縁小型壺	1/4以縁	(9.0)	－	(1.9)	にぶい赤褐	砂0.2～0.5 長石、石英	良好	ケズリ　ナデ	ミガキ	〃
217	〃	2	壺	1/5口頸	(13.2)	－	(3.8)	橙	砂0.2～0.5 長石、雲	良好	ナデ　ミガキ	ヨコナデ	図示
217	〃	3	高坏	1/5坏部	16.0	－	(3.3)	浅黄橙	砂0.2 長石	良好	ナデ	ヨコハケ	〃
217	〃	4	壺	1/8口～体	11.4	－	(18.5)	明赤褐	砂0.2～1.0 石英、白雲	良好	口：ヨコナデ　頸：ヨコハケ　ヘラ　ナデ　ケズリ　ミガキ	口：ヨコナデ　体上：ユビオサエ　体下：ハケ	図示
217	〃	5	小型壺	1/4口～体	(15.2)	－	(9.8)	赤褐	砂0.2～0.5 長石、雲母	良好	口：ヨコナデ　体：ケズリ（指）	ナデ	〃
217	〃	6	台付壺	1/2台部	－	(9.8)	(6.1)	橙	砂0.2～1.0 赤色砂	良好	台：ヘラケズリ	台：ナデ　ケズリ　台下端：斜面	〃
217	340住	1	高坏	1/5坏部	(17.9)	－	(4.3)	橙	砂1～0.2 長石、白雲、赤鉱	良好	坏：ナデ	ナデ　ミガキ	〃
217	〃	2	甕	1/5 ツマミ～天井	－	－	(2.9)	橙	砂0.1～1.5 長石、白雲	良好	ナデ	ツマミ：ナデ　天井：ハケ　ナデ中央部ハケ　ケズリ	〃
217	345住	1	赤彩鉢	完形	14.8	3.8	7.1	赤	砂0.2～1.0 赤色砂子	ほぼ良好	口：ヨコナデ　体：赤彩ナデ　ミガキ　底：ヘラ調整ナデ	ヨコナデ　ミガキ　赤彩	図示
217	457住	1	鉢	口縁のみ	(25.8)	－	(3.3)	明赤褐	砂0.2～1.0 石英、長石	良好	ヨコナデ　指ナデ　ミガキ	ヨコハケ	〃
217	〃	2	小型壺	完形	12.2	5.0	13.2	にぶい赤褐	砂0.5～1.0 長石、石英	良好	口～胴上：横位連続ヘラ（5条）　胴：横位連続ヘラ　胴下：ケズリ　ナデ	ヨコナデ　ミガキ	〃
217	467住	1	赤彩鉢	1/10口縁と底	(19.2)	(5.8)	(7.4)	赤	砂0.2～1.0 石英	良好	全面赤彩　一部ヘラ　ナデ　ケズリ　ミガキ	全面赤彩　ヨコナデ　ミガキ	〃
217	〃	2	壺	1/5口～体	(15.0)	－	(9.8)	赤褐	砂～0.5 石英	良好 （焦跡有）	口～胴：ヨコナデ　ミガキ　体：横位連続ヘラ	ヘラヨコナデ	〃
217	〃	3	壺	1/3 口～体上半用	16.6	－	(13.3)	にぶい赤褐	砂1.0 白色砂	ほぼ良好 （やや軟質）	頸部：横位連続ヘラ（9条、8～10条）　胴：ヨコ、ユコナデ　ミガキ　胴下：ナデ　ケズリ　ミガキ	口：ヨコナデ　ヘラ　ヨコナデ　ミガキ　胴下：ナデ　ユビオサエ	〃
217	〃	4	壺	1/3体下～底	－	5.9	(7.5)	明赤褐	砂0.1～1.0 石英	良好	胴中：横位連続ヘラ（9条、7条）　胴下：ヘラ　ケズリ　ナデ　ミガキ　底：ヘラ　ケズリ	胴：ヨコナデ　ヘラ　ナデ　ミガキ　底：ユビオサエ	〃
217	529住	1	赤彩鉢	1/5体下～底	－	(5.0)	－	赤褐	砂1～1.0 石英	良好	全面赤彩　胴下：ケズリ　ナデ　底：ミガキ	全面赤彩	〃
217	〃	2	壺	1/5 ツマミ～天井	－	－	－	明赤褐	砂0.1～1.5 角閃	良好	ナデ	ツマミ：ナデ　天井：ナデ	側穴 ナデに孔あり
217	〃	3	壺	2/5口～体	(11.9)	－	－	にぶい赤褐	砂0.1～1.0 長石、白雲	良好	横位連続ヘラ（5条）	口：ヘラミガキ　体：ナデ	〃
217	〃	4	壺	2/5体～底	－	－	(9.0)	にぶい赤褐	砂0.1～1.0 長石	良好	胴：横位連続ヘラ（7条）　胴：横取焦痕ヘラ　底上：横位連続ヘラ	ナデ　ミガキ	〃
217	530住	1	赤彩高坏	完形	(15.8)	－	14.6	明赤褐	砂0.1～1.0 長石	良好	全面赤彩　ナデ　ミガキ	坏、脚柱：赤彩　ヨコナデ　ミガキ	図示 三角スカシ4
217	〃	2	蓋	1/5	5.7	－	(8.8)	明赤褐	砂0.1～1.0 長石	良好	ツマミ：ナデ　ケズリ　天井：ナデ　ミガキ	ツマミ：ヨコナデ　天井：ナデ　ミガキ	図示
218	〃	3	赤彩壺	3/5口～体	17.5	－	(9.6)	赤	砂0.1～1.0 長石	良好	全面赤彩　ヨコナデ　ミガキ	全面赤彩　ヨコナデ　ミガキ	〃
218	〃	4	赤彩壺	1/5口頸	24.8	－	－	明赤褐	砂0.1～1.0 長石	良好	口：赤彩　ナデ　ミガキ　頸：横位下ナデ	ヨコナデ　ミガキ	〃
218	〃	5	赤彩壺	2/5胴～体	－	－	(21.5)	明赤褐	砂0.1～1.0 長石、雲母等　赤色砂子	良好	横取焦痕赤彩　胴：横位下ナデ　円形線文	ナデ　ハケ	〃
218	〃	6	壺	2/5体下～底	－	12.3	(15.2)	橙	砂0.1～1.0 長石、白雲母等	良好	ミガキ（指）	ナデ　ハケ　体上～中：ヨコミガキ　体下：ナデ　ケズリ	〃
218	〃	7	壺	ほぼ完形	(14.6)	－	－	にぶい橙	砂0.1～1.0 長石	やや不良	口：ヨコナデ　体：ハケ	口：ヨコナデ　体上～中：ヨコミガキ　体下：ナデ	図示 口：内面も1段

図版No.	地点名	土器No.	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
218	530住	8	甕	2/3口～体上	(30.6)	－	－	明赤褐	雲母、1～2㎜長石、岩英	良好	口～体上：櫛描直線文 頸：櫛描重弧文	ヨコミガキ	図示
218	533住	1	赤彩高坏	完形	(13.6)	－	13.7	赤	雲母、1～1.0㎜長石	良好	全面赤彩、坏：タテミガキ 脚：タテミガキ(縦)	坏：櫛描：斜格子文、ヨコミガキ ハケメ	
218	〃	2	台付甕	3/5体下～台	－	8.8	－	明赤褐	多し0.5㎜長石	やや不良	体中：櫛描斜格文、体下：タテミガキ 台：タテミガキ	底下：タテナデ、ヨコミガキ 底上：ナデ、指ナデ、ヨコハケ	図示
218	〃	3	赤彩鉢	2/3口～体	(23.1)	－	－	赤	雲母、1～1.0㎜長石、岩英	良好	全面赤彩：タテミガキ	全面赤彩：ヨコミガキ	
218	〃	4	赤彩壺	1/5口縁	31.0	－	－	赤	多し1～1.0㎜石英	良好	口縁：赤彩、タテミガキ後ヨコミガキ、脚：櫛描ナデ文	口：赤彩、ヨコミガキ 頸：ヨコミガキ	
218	〃	5	赤彩壺	1/5頸～体上	－	－	(10.5)	暗赤	雲母、1～1.0㎜長石	良好	頸：櫛描「字文 体上：櫛描、ミガキ	ヨコハケ	
218	〃	6	赤彩壺	2/3頸～体上	－	－	(15.6)	暗赤	雲母、1～2.0㎜石英、雲母	良好	口～体上：赤彩、口縁：ヨコミガキ、タテミガキ後「字櫛描	口～体上：横：ヨコミガキ 体上：ヘラヨコナデ	
219	〃	7	赤彩壺	2/3体部	－	－	(22.0)	赤	多し1～2㎜長石、小礫	良好	体：赤彩、横：ヨコ櫛描状文、タテミガキ	ハケ	
219	303溝	1	赤彩高坏	1/3脚部	－	(9.3)	(5.7)	赤褐	やや多し1～1.5㎜長石、多白石	良好	赤彩：タテハケ	脚裾：赤彩：ミガキ、脚上：ハケ、脚下：ヨコミガキ	
219	〃	2	鉢	3/4全位	25.2	(5.6)	13.3	明赤褐	雲母、1～1.0㎜長石、岩英	良好	ヨコナデ後タテナデ＋ケズリ	下端：タテミガキ、ナデ、横：ヨコミガキ	図示
219	〃	3	有孔口縁壺	1/10口縁部	(22.4)	－	(5.6)	にぶい黄橙	多し1～0.5㎜長石	良好	口：タテミガキ(横)、ヨコミガキ	ヨコミガキ	
219	〃	4	有孔口縁壺	1/10口縁部	(15.6)	－	(4.2)	にぶい褐	雲母、1～2.0㎜長石、石英	良好	ヨコハケ(横)	ヨコハケ(横)	
219	〃	5	赤彩片口鉢	1/4口～体	(20.7)	－	(6.3)	赤	多し1～0.5㎜長石	良好	全面赤彩、タテミガキ	全面赤彩、ヨコミガキ	
219	〃	6	甑	1/5底部付近	－	3.6	(5.6)	橙	多し1～1.0㎜長石	良好	タテナデケズリ	ハケ	
219	〃	7	裳付壺台	1/10底部	－	－	(1.7)	橙	雲母、1～1.0㎜長石、岩英	良好	体：タテミガキ	タテナデ＋ミガキ	
219	〃	8	壺	－	－	－	(2.5)	明赤褐	雲母、1～1.0㎜長石、岩英	良好	体上：櫛描文(U字状後箱状)	ナデ	
219	〃	9	壺	1/10底部	－	10.1	(7.1)	橙	多し1～1.5㎜長石、多白石、雲母、赤色粒	良好	体下：タテミガキ、体下端：ヨコミガキ、底：ミガキ	ハケ＋タテケズリ後ヨコミガキ	
219	〃	10	赤彩広口壺	ほぼ完形	(17.6)	6.5	16.5	赤褐	雲母、1～0.5㎜長石	良好	全面赤彩、ヨコミガキ、底：櫛刷毛、ヘラミガキ	頸：赤彩、ヨコミガキ、頸下：タテミガキ、体：ヨコミガキ後タテミガキ	
219	〃	11	壺	2/3頸～体下	－	－	(19.1)	明赤褐	多し1～0.5㎜長石、多白石英	良好	頸：「字状、体：櫛描「字文(10段)、体中～下：ヘラナデ＋ケズリ、タテミガキ	ハケ＋ナデ	
219	〃	12	壺	1/5底部	－	11.4	5.8 復	明赤褐	雲母、1～2㎜長石、多白石	良好	上ミガキ(横箒)	ハケ＋ナデ	
219	〃	13	甕	ほぼ完形	(9.8)	3.8	13.9 復	灰褐	雲母、1～1.0㎜長石	やや不良	口：ヨコナデ、横：ヨコミガキ、体：タテミガキ	口：ハケ、横：ケズリ、体：ヘラミガキ＋ナデ	
220	〃	14	S字口縁台付鉢	1/4口縁	(14.0)	－	(3.4)	にぶい黄橙	多し1～1.5㎜長石、岩英、多白石	良好	口：ヨコナデ、横：櫛描(2条、5条)、ヨコミガキ	口：ヨコナデ、横：櫛描(2条、5条)、ヨコミガキ、ヨコハケ	図示
220	〃	15	台付甕	1/10台部	－	(10.0)	(7.4)	橙	多し1～1.0㎜長石、小礫	良好	体上：ハケ(横)、台下：ヨコナデ	底：ナデ、体：ハケ(横)、台下端：ヨコナデ	
220	〃	16	甕	1/5口～体	(18.6)	－	(8.4)	にぶい赤褐	多白石1～0.5㎜長石	良好	タテハケ(縦)、体：櫛描直線文(12段)	ヨコナデ＋ミガキ	
220	〃	17	甕	1/5口～体	(17.5)	－	(18.0)	にぶい赤褐	多し1～1.0㎜長石、多白石	良好	頸：タテハケ、口～体上：櫛描直線文、横位文(3段)	ヨコミガキ、ヨコナデ＋ミガキ	
220	〃	18	甕	1/4口～体	(19.6)	－	(9.8)	にぶい赤褐	多し1～1.5㎜長石、多白石英	ほぼ良好	口～頸上：櫛描直線文(9条)、頸：櫛描直線文(9条)	ヨコミガキ	
220	304溝	1	赤彩高坏	1/2坏部	20.2	－	(7.6)	明赤褐	多し1～1.5㎜長石、小礫	良好	全面赤彩、口：ヨコナデ、坏：タテナデ＋ケズリ	口～体：赤彩、口：ヨコナデ、坏：ヨコミガキ(横箒)	G 5
220	〃	2	赤彩高坏	脚裾完形	－	－	14.8	明赤褐	多し1～1.5㎜長石、多白石英	良好	全面赤彩、口：ヨコナデ、坏：タテナデ＋ミガキ、脚：タテミガキ	ヨコハケナデ	図示 二角スカシ3
220	〃	3	高坏	坏部ほぼ完形	18.3	－	(5.5)	橙	多し1～1.5㎜長石、多白石英	良好	タテミガキ	凹線：ヨコミガキ、坏：放射ミガキ	B-19
220	〃	4	赤彩高坏	脚裾完形	－	9.6	(3.6)	赤	雲母、1～0.2㎜長石	良好	赤彩タテミガキ	裾：赤彩ミガキ、脚：ヨコナデ	図示
220	〃	5	高坏	1/2脚部	－	－	(5.6)	橙	多し1～2.0㎜長石、石英	良好	ヨコナデ	ナデ	G-5 円形スカシ3
220	〃	6	器台	4/5器台	9.4	－	(2.6)	明赤褐	やや多し1～1.5㎜長石、多白石、小礫	良好	タテミガキ	ヨコナデ	G-5
220	〃	7	壺	1/3中央付近	－	－	(5.1)	橙	多し1～0.5㎜長石、小礫	良好	ツヤ：ヨコナデ 天：タテミガキ(縦箒)	ツヤ：ヨコナデ 天：ヨコミガキ	B-24
220	〃	8	小型片口鉢	ほぼ完形	8.0	4.7	5.0	明赤褐	多し1～1.0㎜長石、石英	良好	ヨコナデ＋ノンケズリ 底：ヘラケズリ	ヨコナデ	G-5
220	〃	9	鉢	1/3口縁全位	－	6.0	(11.2)	明赤褐	多し1～1.5㎜長石、多白石、石英	良好	体上：ヨコナデ(3条)後箒目、底：ヘラケズリ	体上：ヨコナデ＋ハケ 底：箒目	B-18
220	〃	10	壺	1/4口縁部	18.9	－	(4.3)	にぶい褐	多し1～1.5㎜長石、多白石	ほぼ良好	ヨコミガキ	ヨコミガキ、タテミガキ	B-24
220	〃	11	壺	1/10底部のみ	－	4.4	(4.3)	橙	雲母、1～1.0㎜長石、石英	良好	タテミガキ(縦) 底：ケズリ後ミガキ	タテミガキ(太)	B-19
220	〃	12	甑	3/5全位	18.9	5.4	9.5	橙	雲母、1～2㎜長石、石英	やや不良	ヨコナデ	体：ナデ＋ケズリ、ミガキ 体下端：ヨコナデ	〃
220	〃	13	(ヒサゴ)壺	1/5底部	－	－	(1.6)	明赤褐	多し1～1.5㎜長石、多白石	良好	ナデ、ミガキ 底：ヨコミガキ	ヨコハケ	B-24
220	〃	14	小型壺	ほぼ完形	15.0	－	15.0	明赤褐	多し1～1.0㎜長石	良好	ヨコナデ	口：ヨコナデ、体上：ヨコハケ、体下：ヨコナデ	B-19
220	〃	15	小型壺	ほぼ完形	10.0	3.9	14.3	橙	多し1～1.5㎜長石、多白石	ほぼ良好	口：ヨコナデ、体：タテミガキ＋ノンケズリ、底：ヘラ調整	口：ヨコナデ、体上：ユビオサエ、体下：ナデ	G 5
220	〃	16	壺	1/5口～体	12.6	－	(6.0)	明褐	多し1～1.0㎜長石、多白石	やや不良	口：タテナデ＋ミガキ、体上：ヨコナデ、ナデ	口：ヨコミガキ、体上：ヨコハケ	〃
220	〃	17	壺	1/3口～体	14.6	－	(12.0)	明赤褐	多し1～1.5㎜長石	ほぼ良好	口：ヨコナデ後ダンパ、体：タテハケ	口：ヨコハケ、体：ヨコミガキ	B-13
220	〃	18	小型台付壺	1/3口縁～底下	－	－	(9.2)	褐	多し1～0.5㎜長石	やや不良	ヨコハケ	ヨコハケ	G 5
220	〃	19	小型壺	1/5口～体	12.4	－	(6.0)	灰褐	雲母、1～2.0㎜長石、石英	やや不良	口：タテミガキ後ヨコミガキ、体上：ナデ＋ハケ	口：ヨコミガキ、体上：ナデ、ヨコナデ、横箒：ナデ(2段)、ヨコミガキ(10段)	B-19-24
220	〃	20	台付甕	1/5台部	－	3.8	(3.4)	橙	雲母、1～1.0㎜長石	良好	ハケ	台上：ヨコハケ 台下：ヘラナデ	G-10
220	〃	21	台付甕	1/5台部	－	7.9	(4.3)	明赤褐	雲母、1～0.5㎜長石	良好	ハケ	ナデケズリ	G-5

図版No.	地点名	土器No.	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
220	304溝	22	台付甕	1/5台部	－	8.4	(4.8)	明褐	密6.1～7.0 長石,雲母,角閃石	良好	ハケ	ナデ＋ハケ	B-19
221	SI1302	1	小型鉢	1/3全位	(10.9)	(4.1)	5.2	黒褐	密6.1～7.0 長石,角閃石	ほぼ良好	ヨコナデ　底：ヘラ調整	ヨコナデ	
221	〃	2	高坏	1/4脚部	21.1	－	(5.6)	浅黄橙	粗6.1～7.0 長石	良好	ナデ後刷毛目ガキ	ナデ後刷毛目ガキ	
221	〃	3	赤彩壺	1/4口～体	17.4	－	(11.2)	明赤褐	粗6.1～7.0 長石,雲母	良好	口～頸：赤彩　ヘラオサエ　体：ヘラナデ	口～頸：赤彩　ヘラオサエ	パレス遺跡？
221	〃	4	高坏	1/10脚部	－	－	(5.2)	にぶい赤褐	粗6.1～7.0 長石,雲母,角閃石	ほぼ良好	外：ナデ後ガキ　底：ヨコナデ後ガキ　脚：ナデ後ガキ	杯：ナデ後ガキ　脚：ヘラ＋ヨコナデ	円形スカシ3
221	〃	5	高坏	1/10脚部	－	－	(4.8)	にぶい赤褐	粗6.1～7.0 長石	ほぼ良好	ナデ後ガキ	ヨコナデ後ガキ	円形スカシ3
221	〃	6	高坏	1/5脚部	－	－	(4.6)	明赤褐	粗6.1～7.0 長石,雲母,角閃石	良好	脚部：ナデ後ガキ　脚柱：ナデ後ガキ	円形スカシ4	円形スカシ4
221	〃	7	高坏	1/4脚部	－	(10.2)	(6.2)	橙	密7.1～8.0 長石,石英,金属	良好	ナデ後ガキ	脚上：ナデ＋ハケ　脚下：ヨコナデ後ガキ	円形スカシ（ナデ）4
221	〃	8	壺	1/4底部	－	(6.1)	(9.6)	にぶい黄橙	密7.1～8.0 長石,金色雲母	良好	ナデ後ガキ	ナデ＋ナデ＋ハケ　底：ヘラナデ（ケズリ）	ヨコハケ
221	〃	9	器台	2/5脚部全位	－	10.8	(7.5)	橙	密6.1～7.0 長石	良好	ナデ後ガキ	杯上：ヨコナデ　杯下：ヨコハケ	円形スカシ3
221	〃	10	小型甕	1/4口～体	(14.5)	－	(7.0)	(外)赤褐　(内)にぶい赤褐	中密6.1～7.0 長石,石英	やや不良	口：ヨコナデ　体上：ナデ＋ケズリ＋ナデ	口：ヨコナデ　体上：ナデ＋ケズリ＋ナデ	
221	〃	11	小型壺	1/5口～体	(14.1)	－	(11.8)	(内)橙　(内)にぶい赤褐	密6.1～7.0 長石	良好	口：ヨコナデ　体：ヨコナデ＋ケズリ＋ナデ	口～体中：ヨコナデ後ガキ(ス)　体下：ナデ＋ケズリ＋ナデ	
221	〃	12	壺	1/10底部	－	4.5	(3.1)	にぶい褐	粗6.1～7.0 長石,金色雲母	良好	ナデ後ガキ　底：ヘラ調整	ヘラケズリ	
221	〃	13	甕	1/2口～目	(30.0)	－	(9.3)	にぶい褐	粗6.1～7.0 長石,石英,角閃石	良好	胴部強度ケズリ(ヨコ)	口：ナデ　体上：ヨコ＋ナデ後ガキ(ス)	
221	〃	14	甕	1/4口～体	(35.5)	－	(7.4)	にぶい橙	密7.1～8.0 長石,金色雲母	良好	口：ヨコナデ　頸：ナデ＋ハケ　体上：ナデ	口：ヨコハケ、ナデ＋ハケ　体上：ナデ	図示
221	〃	15	甕	1/4口～体	(17.2)	－	(19.7)	にぶい黄橙	粗6.1～7.0 長石,金色雲母	ほぼ良好	口：ヨコナデ　体：ナデ＋ハケ	口：ヨコハケ　体：ナデ＋ヘラケズリ	
221	〃	16	甕	1/4口～体	(17.9)	－	(9.2)	橙	密6.1～7.0 長石,石英	良好	口縁：回転ヨコ　口：ヨコナデ　頸：ヨコナデ後ガキ　体：ヨコ＋ケズリ	口：ヨコナデ　頸：ヨコナデ　体上：ナデ＋ナデ	図示
221	〃	17	台付甕	1/10底部	－	－	(8.4)	にぶい橙	粗6.1～7.0 長石,石英	ほぼ良好	ナデ後ケズリ後ナデ	体下：ナデ＋ケズリ後ガキ　底：ヨコナデ	
221	〃	18	甕	1/6口～体	18.5	－	(14.5)	橙	密6.1～7.0 長石,金色雲母	良好	口：ヨコナデ　体：ヨコナデ＋ケズリ	口：ヨコナデ　体：ヨコナデ＋ケズリ	
221	〃	19	台付甕	1/5脚～底部	－	10.5	(9.1)	にぶい橙	密6.1～7.0 長石,金色雲母	良好	底：ケズリ後ナデ　脚：ヨコナデ	底：ミガキ　脚：ヨコ＋ヘラナデ	
221	〃	20	台付甕	1/10脚部	－	8.2	(6.5)	にぶい褐	密6.1～7.0 長石,金色雲母	良好	底：ハケ　脚：ナナメナデ	底：ヘラナデ　脚：ナデ＋ナデ	
221	〃	21	台付甕	1/2脚部	－	11.1	(5.9)	明褐色	密6.2～7.0 長石,石英	やや不良	ヨコナデ	ヘラナデ(ス)＋ミガキ	
221	3419坑	1	甕	1/3口～体	(13.7)	－	(11.3)	にぶい赤褐	密6.1～7.0 長石,石英	やや不良	口～頸：横位密ナデ(ヨ)、底：縦位ヘラケズリ、ナデ＋ケズリ後ガキ	ヨコケズリ、ヨコナデ＋ケズリ	図示
221	遺構外	1	赤彩高坏	1/5杯部	14.0	－	－	暗赤	粗6.1～7.0 長石	良好	全面赤彩、ミガキ	全面赤彩、ナデ後ガキ	⑥区Ⅲb層
221	〃	2	甕(S字)	1/4口縁部	10.6	－	－	黒褐	密6.1～7.0 長石	不良	口：ヨコナデ　体：ハケ	口縁：ナデ　頸：ヨコハケ　体上：ナデ	〃
221	〃	3	赤彩小型鉢	4/5全位	12.2	－	13.0	暗赤	密6.1～7.0 小礫,長石	良好	全面赤彩、ナデ後ガキ	全面赤彩、ヨコ＋ナデ 〃	
221	〃	4	小型丸底鉢	完形	9.1	2.6	9.7	にぶい橙	粗6.0～7.0 小礫,長石,金色雲母,角閃石	良好	口：ナデケズリ　頸：ヨオサエ　体上～中：ナデケズリ　体下～底：ナズリ	口：ヨコナデ後ヘラオサエ　頸部横位：ヨコオサエ　体下：ヘラオサエ	G 7層b層

表15　土器観察表（古墳中期～平安）

図版No.	地点名	土器No.	器種	残存率	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	備考
222	301住	1	内黒坏	1/5全位	(16.8)	－	5.1	橙	密6.1～6.2 長石,角閃石	良好	ナデ	ミガキ	
222	〃	2	坏	1/3口～体	(14.8)	－	(3.5)	橙	密6.1～7.0 長石,小礫	良好	口：ヨコハケ　体：ヨコミガキ	口：ナデ＋ミガキ　体：ヨコミガキ	床下
222	〃	3	坏	1/4口～体	(12.0)	－	(5.2)	明赤褐	粗6.1～7.0 長石,雲母 0.5～1.5cf.黒	良好	口：ヨコハケ　体：ナデ	ナデ　〃	〃
222	〃	4	高坏	1/4口～体	(16.0)	－	(4.7)	橙	密6.1～7.0 長石	良好	体：ナデ　脚下：ナデ＋ミガキ	ナデ	
222	〃	5	小型壺	1/3口～体	(14.4)	－	(11.5)	赤褐	粗6.2～7.0 石英,雲母	良好	口：ナデ　体：ナデ後ケズリ後ナデ＋ハケ	口：ナデ　体：ケズリ	床下
222	〃	6	壺	1/4口～体	(16.3)	－	(18.4)	にぶい赤褐	粗6.1～7.0 石英,雲母,長石	良好	口：ヨコハケ＋ナデ　体：ナデ後ガキ	口：横ハケ＋ヨコケズリ　体：ナデ後ガキ	ピット5
222	〃	7	甕	1/2口～体	15.7	－	(24.8)	赤褐	密6.2～6.4 長石	良好	口：ヨコハケ　頸上：ハケ＋ミガキ、ミガキ　頸下：ナデ＋ハケ	ナデ	図示
222	〃	8	甕	1/4口～底	(26.8)	－	(6.5)	にぶい橙	密6.3～6.5 長石,石英	良好	口：ナデ	口：ナデ	
222	〃	9	甑	1/6口～体	(24.0)	－	(8.2)	橙	粗6.1～6.3 長石	良好	口：ハケ＋ヨコナデ＋オサエ　体：ナデ＋ケズリ	口：ヨコナデ　体：ナデ＋ケズリ	ピット5 貯蔵穴群
222	302住	1	内黒坏	完形	12.0	－	4.5	にぶい橙	粗6.0～7.0 長石	良好	口：ナデ　体：手持ケズリ	ヨコミガキ	カマド図示
222	〃	2	内黒坏	完形	11.9	－	4.4	浅黄橙	密6.2～7.0 長石	ほぼ良好	口：ヨコハケ　体：ヘラケズリ	ヨコミガキ	図示
222	〃	3	内黒坏	1/3全位	－	－	(5.5)	浅黄橙	粗6.2～6.3 長石,金色雲母	良好	体：ミガキ（ナナメメナデ）	ヨコナデ	〃
222	〃	4	内黒坏	完形	12.8	－	4.5	にぶい黄橙	密6.0～7.0 石英,長石	ほぼ良好	口：ヨコナデケズリ　体：粗方指のヨコナデケズリ	口：ヨコナデ　体：ミガキ	〃
222	〃	5	内黒坏	ほぼ完形	12.6	－	4.3	橙	密6.2～6.5 長石	ほぼ良好	ケズリ後ナデ	体部ヨコミガキ後部部ナデ　ミガキ	〃
222	〃	6	黒色坏	1/6口～体	(12.6)	－	(3.0)	黒	密6.2 長石	良好	口：ヨコハケ　体上：ケズリ後ナデ	口：ヨコミガキ　体上：ナデ後ガキ	床下
222	〃	7	内黒坏	1/5全位	(17.0)	－	(4.95)	浅黄橙	密6.1～7.0 角礫	良好	ヨコミガキ	ヨコミガキ	図示 外面刷毛痕
222	〃	8	甕	口縁部全周	30.2	－	(6.8)	橙	密6.2～7.0 長石,小礫	良好	口：ヨコナデ　体上：ナデ後ケズリ	ヨコナデ	カマド図示